薔薇のマリア

13.罪と悪よ悲しみに沈め

十文字青 Ao Jyumonji

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

角川スニーカー文庫

マリアローズは今、自分の足で走っていない。
それどころか、マリアローズの足は地面を踏んでさえいない。
それなのに、マリアローズの身体は移動している。しかも、すごい速さだ。
「え？　え？　ええええ⁉　えーっ……⁉」

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

13.罪と悪よ悲しみに沈め


「ＳＩＸ」とトマトクンは言ったのだろう。
でも、そうは聞こえなかった。マリアローズの耳には
「シィィィィーックス」と聞こえた。
低い、地鳴りのような声だった。
「──貴様、何を企みくさってやがる」


視線を感じる。それも、すごい数だ。
数人じゃない。数十人、ひょっとしたら
数百人かもしれない。何これ。どういう状況？
意味わかんないんだけど。汗が。心臓が。熱が。
マリアローズは下を向いた。
『あの……か、解説の……
マリアローズ、です。よろしく』

薔薇のマリア

13．罪と悪よ悲しみに沈め

十文字　青



角川スニーカー文庫



A BRAVE HEART OF RED ROSE 13

Sin and evil, sink beneath your sorrow

Ao Jyumonji

First published 2010 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.



illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

13

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

13

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時（ランチタイム）》の頭領（マスター）。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者（アッサシン）。



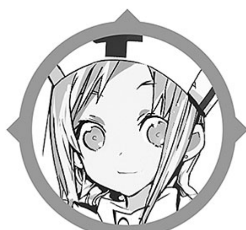
Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長（マスター）。



Lucy
ルーシー

ニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人》(モラル・キーパーズ)の副長。



Rasa
羅刹(ラサ)

《秩序の番人》(モラル・キーパーズ)の総長。



SIX
シックス

秩序破壊者。扇動者。



Molly Lips
モリー・リップス

アサイラムの医術士。



Beatrice
ベアトリーチェ

《秩序の番人》(モラル・キーパーズ)に属していた。



Fall
琺瑠(フォール)

《秩序の番人》(モラル・キーパーズ)の副長。

and the others

Agna Kurtiba
アーニャ・クルチバ

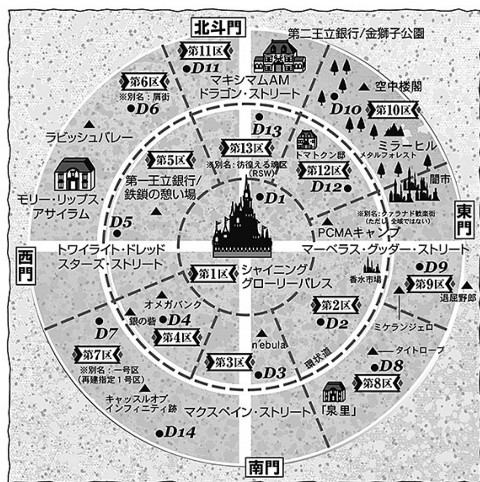
Fei Yang
飛燕

"Moral Keepers"
秩序の番人

and etc.

The World of “A BRAVE HEART OF RED ROSE”





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics



prologue

“Les Confessions”

今日はちょっぴり我わが輩はいの話をしよう。我輩ともあろう者が、もしかしたらちぃっとばっかりセンチになっちまうかもしれないが、そのあたりはどうか勘かん弁べんしてほしい。今日はとっておきの、我輩の話をしよう。

諸君も当然、聞きたいだろうしねえ。我輩としちゃあ期待には応こたえてやりたい。何しろ我輩、押しも押されもしない、どこに出しても恥はずかしくない、素す晴ばらしい、嗚あ呼あ素晴らしい素晴らしい、唯ゆいーいつ無二のスゥーパ・スタアだろう？　スタアたる者、臭くせえケツ毛みてえな紳しん士し淑しゆく女じよどもの夢を叶かなえてやらなきゃねえ。そいつが我輩の役目なのさ。わかってるよ。もちろんわかってるとも。我輩ときたら、自分でもいやんなっちまうくらい才能豊かすぎる天性のエンタテイナァだからねえ。

てなわけで、さあ、そろそろ我輩の話をしよう。

我輩のちょっぴり切なくてむちゃくちゃ面おも白しろ可お笑かしい話をしよう。

こいつはぜんぶ混じりっけのない事実で構成されているノンフィクションなわけだが、信じる信じないは諸君に任せるよ。

我輩はただ打ち明けよう。

ありのままの真実を。

むかァーしむかァーし……、あーるところにィィィィ……――

おＺＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹサンとおＢＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡサンはァァァァ……――

この物語にゃあこれっぽっちも出てきやしないんだねえ。残念ながら。

山奥の寒村とも呼べないようなちっぽけな集落から、我輩の物語は始まる。

　そのころ我輩は、まだ我輩にふさわしい真の名で呼ばれちゃいなかった。当時の名は我輩、感傷とともに捨てた。完全に捨て去った。もはや覚えちゃいないから、シンシアだろうがシズニーだろうがシモンだろうがサイモンだろうがシンノスケだろうが正直、何だっていいんだが、とりあえずここはシブヤってことにでもしておこうか。シブヤ（仮名）ってことになるが、うざったいからただのシブヤでいいだろう。

　シブヤは集落の小さな掘ほっ立て小屋の隅すみで、寒さと飢うえと渇かわきと恐きよう怖ふに震ふるえていた。集落はとてもとてもとても貧しかった。なぜならそこは逃とう亡ぼう者たちの集落だった。敗残者の群れが身を寄せあい、襲しゆう撃げき者どもの来襲に備えることもろくすっぽできずに、ただ今日の無事を祈いのるだけで日が暮れる。そんな先のない避ひ難なん所じよだった。かわいそうなシブヤは掘っ立て小屋の隅っこで小さくなり、小さな小さな声で不平不満ばかり言っていた。

　聞いてない。聞いてない。聞いてないよ。こんなのおかしい。聞いてない。こんなはずじゃなかった。聞いてない。おかしいじゃないか。聞いてない。なぜ。どうして。弱い者は生きることさえ許されないなんて。奪うばわれるだけなんて。殺されるしかないなんて。おかしい。本当におかしい。完全におかしい。こんな世界は間ま違ちがってる。おかしい。こんなはずじゃなかった。違ったはずだ。こんな目に遭あいたくてここにきたんじゃない。集落の住人たちはバッタバタと倒たおれてゆく。初めのうちはシブヤにも知った顔が二、三、否いな、否、それ以上あったが、間もなく見知らぬ者ばかりに成り果てた。たまに集落に逃にげこんでくる者がある。たいてい白い眼めで見られるが、追いだされることはまずない。ぶん殴なぐって追いだそうにも、一対一だとまかり間違えばやられっちまうかもしれないんだ。団結して事にあたろうにも、誰だれが信しん頼らいできて誰が信用できないのかわかりゃしない。そもそもみぃーんな、そんな元気がない。外の事情を知りたい気持ちはあっても、情報交こう換かんをする余よ裕ゆうがない。いったい何がどうなっているのか、シブヤにはわからない。何もわからない。それが一番恐おそろしい。なんとなぁーく、くたばっちまったらお終しまいのような気がしてしょうがない。ひょっとしたら、一巻の終わりなんじゃないか。怖こわい。怖い。おっかないよう。誰か助けて。助けて誰か。誰かって誰？　だぁーれもいない。いやしない。集落には百人からの人間がいるはずなのに、シブヤは一人ぼっちだった。誰も彼も、そこでは孤こ立りつしていた。孤独だった。

そんなクソ同然どころか馬マ糞グソより遥はるかに役に立たねえ、塵ごみ溜ためよりずいぶんひでえ、ろくなもんじゃねえ集落に、魔まの手が迫せまっていた。ごくごくありふれた襲撃者どもだ。

この世には二種類の人間がいる。奪おうとする者と分けあおうとする者だ。どっちも生存のための戦略だが、分けあうためにはモノがなけりゃあいけない。ないモノは奪うしかないんだ。覚えとけ。種があれば、土を耕し、そいつを蒔まいて、実りの季節を待つって手もあるが、いつも種があるとはかぎらない。むしろ、種なんてモノ、かぎられたやつしか持ってやしないのさ。大多数は持たざる者だ。持たざる者は結局、持ってる者から奪うしかないんだよ。

襲撃者どもは、奪うことで腹を満たし、女を犯おかし、寝ね床どこを確保する。

我がちっぽけな集落に襲おそいかかって、彼らがまず何をしたか。こう叫さけんだのさ。「我々に与くみする者はいるか！　いるならば隣りん人じんを殺せ！　その肉を我々に献けん上じようせよ！　さすれば、我々はその肉の欠片かけらを汝なんじに与あたえん！」とね。シブヤはどうしたかって？　そんなことは言うまでもないだろう？

逃げようとしたんだよ。

やつらに与したほうがいいかもしれない──もちろん、そんなふうにシブヤだって思ったさ。でもねえ。ろくすっぽ口をきかなかったとはいえ、顔くらいは知ってる。それに、本当の、ほんとのことを言うとねえ。まったく、これっぽっちも、一言も喋しやべらなかったのか。いやいや、そんなことはなかったんだよ。たまにはね。話くらいした。裏手の沢さわに水を汲くみに行ったとき、たまたま一いつ緒しよになったりするとねえ。そりゃあ挨あい拶さつしたり、いやあ喉のどが渇くねえとか、腹が減って仕方ないねえとか、その程度のことは誰だって言うものさ。親しいとまではいかないが、行動パターンが似通っていて、なぜか行く先々で顔をあわせるやつなんてのもいて、友だちとは呼べないまでも、それこそ「隣人」って意識は持ってたりする。殺せない、とシブヤは思った。そういうやつらを殺したりなんか、できっこない。それで、小屋から飛びだした。集落の外に出ようとしたら、さっと視界に飛びこんできた者がある。その「隣人」ってやつだった。名前は、もう忘れっちまったが、そうだねえ──タマチってことにでもしておこうか。

　タマチはぶっとい木の枝を持っていた。いきなりシブヤに飛びかかってきたんだ。タマチはシブヤに馬乗りになって木の枝を振ふりあげた。シブヤは叫んだ。「タマチ！　何を⁉」タマチは悪あつ鬼きのごとき形相で叫び返した。「うるさい！　死ね！」そうしてタマチはシブヤめがけて木の枝を振りおろした。シブヤはとっさに両りよう腕うでを顔の前で交差させてこれを受け止めた。タマチは何度も何度もシブヤの腕を木の枝で殴った。「死ね！」「死ね！」「死ね！」と叫びながらねえ。ところが、いくら太かろうと、所しょ詮せん、単なる木の枝だ。人間をぶっ殺すために作られた武器とは違う。とはいえ、ぶん殴られりゃあ痛かったが、シブヤはだんだん冷静になってきた。タマチが持ってる棒っきれなんかじゃあ、そう簡単には人間を殺せやしない。つまり、シブヤは死なない。そうはいっても、痛いてえ。痛えぞ、こんちくしょう。シブヤは腹が立ってきた。何だ、このタマチめ、隣人気分でいたのにぶち壊こわして、あまつさえ両りよう腕うでをぶち殺そうとしやがるなんて、とんでもねえ。なんて野や郎ろうだ。この人でなしめ。

　シブヤは渾こん身しんの力を振りしぼってタマチを撥はねのけると、まずその股こ間かんを踏ふみつけた。タマチが悲鳴をあげて悶もだえ苦しんでいるうちに、今度は顔面だ。蹴けって、蹴って、蹴りまくった。それから、タマチが取り落とした木の枝を拾った。それでもって、タマチの頭といわず腕といわず脚あしといわず腹といわず、打って打って打ちまくった。木の枝が折れるまで打った。それでもタマチはぴくぴくしてやがったもんだから、とどめとばかりに両手で首をぎゅうぎゅう絞しめた。正直、シブヤは怖かったのさ。もとはといえばタマチのせいだ。でも、そこまでやっちまった自分が恐ろしかったし、こうなったらタマチには死んでもらうしかなかった。もしタマチが生きのびたら。そう考えるとおっかなくて仕方なかった。シブヤはタマチが動かなくなるまで首を絞めつづけた。完全に事切れたことを確かく認にんすると、もう他ほかに手がなかった。

　シブヤは襲しゅう撃げき者どもに加わることにした。襲撃者どもはシブヤに肉を分けてくれた。タマチの腿もも肉にくを。それを、生のまま、自分たちの前で食えとシブヤに要求した。そうしたら、仲間に入れてやると。言うことを聞かなければ、やつらはシブヤを殺しただろう。シブヤは死にたくなかったから、夢中でタマチの腿肉を食くらった。どうにかのみこんだが、嘔おう吐としちまった。もう終わりだとシブヤは思った。そうはならなかった。連中はグワッハッハと大笑いして許してくれた。シブヤは襲撃者に、奪う者

になった。生きるためだった。

　シブヤはそれから出世した。気づいてなかったんだが、おそらく才能があったんだろうねえ。奪う者としての資質が。それに、タマチの件でシブヤは学んだのさ。人間なんてものはようするに、いざとなりゃあテメエのために平気で他人を犠ぎ牲せいにする。むろん、全員が全員そうだってわけじゃない。だがねえ。シブヤはタマチをわりと気のいいやつだと思っていたんだ。あのみじめな集落の住人の中じゃあ、わりと陽気だし、話せるし、マシなやつだってね。ところが、一皮剝むけばあのザマさ。何かあったとき狼おおかみみたいに襲いかかってくるか、さあおいで安心おしと母親みたいに背中を撫なでてくれるのか、羊みたいにメェーメェー鳴いて震ふるえてるだけか、そんなことは何かあってからじゃないとわからない。そのときになってみなけりゃねえ。てことは、信用なんかしちゃ駄だ目めだってことだ。気を抜ぬくな！　油断したら殺やられるぞ！　裏切られるくらいなら、その前に裏切れ！　タマチがシブヤにそう教えてくれたのさ。

　シブヤは数年のうちに五十人の襲撃者を率いる部隊長になった。手下はみぃーんなろくでなしだ。どいつもこいつも利には聡さとい。腕っ節はそれなり。頭はよくない。そんな連中をうまく使うコツは簡単だ。満足させてやるんだ。奪うばわせて、食わせ、犯させてやる。そうすりゃあ連中は文句を言わない。寝首を掻かくような真ま似ねはしない。不満を抱いだかせたらやばい。連中は豚ぶただ。餌えささえ十分に与えてりゃあブヒブヒ言いながらクソ垂れて寝る。シブヤは五十頭の豚を引き連れて逃とう亡ぼう者たちの集落を襲う襲撃者の部隊長になった。豚の隊長、豚長ってわけだ。

　シブヤはその暮らしにそこそこ満足していた。とどのつまり、シブヤも豚だったんだ。しかしながら、襲撃者が増えすぎて、襲う集落に不足するなんていう戯たわけた状じよう況きように陥おちいった。襲撃者たちは獲え物ものを求めてさすらうか、それかもう一つ、別の方法をとるしかなくなった。

　襲撃者が襲撃者を狩かる。こうなったらもう略りやく奪だつじゃない。戦争だ。

　シブヤとしては、戦争なんかやったって、勝てりゃあいいが、必ずしもそう事がうまく運ぶわけじゃないだろうから、正直、ちょっと厭いやだった。でも、豚長シブヤは千人ほどからなる襲撃者集団の末まつ端たん、一部隊長にすぎなかったんだ。上の方針には従わ

ざるをえない。他の襲撃者集団と同じように、シブヤが属していた襲撃者集団も戦争の道を選んだ。

それは長い、長い戦争だった。敵にも味方にも大勢の死者が出た。凄せい絶ぜつな死し闘とうだった。その戦いに負傷者なんてものは存在しなかった。傷を負った者は足手まといだ。仲間に殺されて食われた。敵も味方も死体はぜんぶ食しよく糧りようになった。戦うと人が死んで、その死体を食うわけだから、戦っているかぎりは敵も味方も飢うえずにすんだ。たまに戦いが一息つくと、途と端たんに食い物に困って、ほどなく戦争するしかなくなった。生きるためには戦争だ。人が死ねば腹が一いつ杯ぱいになる。そうはいっても、味方よりは敵を食いたいものだ。効率よく敵を殺すためには、強い味方がいたほうがいい。強さこそが価値だ。絶対の、唯ゆい一いつの基準だ。もはや集団もへったくれもない。みんなこぞって強者につこうとした。ところが、そこに人間が集中すると、戦いが起こらない。飢える者が出る。そこで強者は部隊同士に殺しあいをさせた。なんてひでえやつだ奸かん物ぶつだ極ごく道どうだということになって、離り反はんする部隊が続出した。そいつら同士が手を組んで強者をぶっ殺して食った。だが、昨日の味方は今日の敵だ。食うためには誰だれかを殺すしかない。

本当はねえ。それ以外にも方法はいくらでもあったんだろうが、もうシブヤたちはおかしくなっちまってたのさ。それに、味方にしろ敵にしろ、誰も、誰のことも、信じるなんて無理だった。気を抜いたら誰かに殺される。四六時中敵と戦ってたほうが、いっそ楽なくらいだった。だって、敵はシブヤを殺そうとするし、シブヤは敵を殺さなきゃならない。じつにはっきりしてるからねえ。戦ってる間は敵に集中してりゃいい。でも、平へい穏おんが訪おとずれると、途端に何もかもが怖こわくなる。いつ敵が奇き襲しゅうをかけてくるかわからない。味方に騙だまし討うちされるかもしれない。もう戦ってたほうがいい。ひたすら戦ってたほうが。そしてシブヤにもそのときがきた。

誰もね。いなかったんだ。誰一人としてね。勝利しつづけた者はひとぉーりもいなかった。勝者もいつか必ず負けて殺されて食われる。それが宿命さだめだった。シブヤの部隊もとうとうある戦場で敗北した。シブヤは、でも、諦あきらめが悪かった。手下どもを見捨てて、それどころか犠牲にして逃にげた。逃げて、逃げて、逃げた。途中で雨が降りだした。もともと風が強かった。雷かみなりが鳴った。嵐あらしだった。天の助けだ。天てん佑ゆうってやつだ。

天にはただ空があるだけで、誰のことも助けてくれやしないってのに、シブヤはそんなことを思って狂きよう喜きした。ずぶ濡ぬれになって大笑いしながら原野を駆かけた。駆けつづけた。

いいかげん疲つかれて、振ふり返っても追っ手の姿なんて影かげも形もなかったから、シブヤは一休みしたくなった。といっても、この嵐だ。そのへんに寝ね転ころがるってわけにもゆかない。どこかいい場所はないか。シブヤは雨風をしのげそうな洞どう窟くつを山やま裾すそに見つけた。こいつはいいってな具合で洞窟に入りこみ、一息ついた。身につけていた物をぜんぶ脱ぬいでぎゅうぎゅう搾しぼり、放ほうっておきゃあそのうち乾かわくだろうと思いながら、つめたくってゴツゴツしまくっている岩いわ肌はだに身を横たえて、シブヤは眠ねむることにした。そうとうくたびれてたんだねえ。すぐに瞼まぶたが重くなって、ぼんやりしてきて──ハッと目が覚めた。

音がしたんだ。奇き妙みような音だった。ぴちゃぴちゃ。違ちがう。ぴとぴと。これも違う。ひとひと。そんなかんじだった。洞窟の外は相変わらず嵐だ。それなのに、その音でシブヤは目覚めた。てことは？　そう。その音は近くでしたんだ。洞窟の中で、全ぜん裸らで、いぎたなく眠りこけていたシブヤの耳みみ許もとでねえ。

シブヤは飛び起きて、今の今まで自分が寝そべっていた場所を見た。目を凝こらしてよぉーく見てみた。洞窟の中は暗かったが、夜じゃあないみたいで、真っ暗ってほどでもなかった。これはいったい何だ……？　びしょ濡れだったシブヤの髪かみの毛や肌からしたたり落ちた雨水だろうか。いや、違う。そうじゃない。というよりも、それもあったが、それだけじゃない。雨水に混じって、そいつは蠢うごめいていた。蠢く水なんてあるはずがない。水じゃあないってことだ。液体ですらない。

蛆うじ虫むしってのがいるだろう。蠅はえの幼虫だよ。あれはたいてい白っぽいけどね。そいつの色はものすごく濃こい青、それか紫むらさき、そんな色なんだ。で、一いつ匹ぴきじゃない。数匹でもない。十匹とか二十匹、いや、それ以上──というか、単位が違う。ああいうのはもう、数より量で見るべきだろうね。とりあえず、どうにか両手にのるくらいだ。シブヤが寝ていた、頭を置いていた場所の、すぐそばにそいつらがいたんだ。そうさ。いたんだよ。そいつらは蠢いていた。生きてやがる。一匹一匹が、と言いたいところだが、ちょっと変なんだ。シブヤは驚おどろいて、怯おびえながらも、じっくり観察してみたんだけどね。そいつらは、なん

というか——一匹一匹が別々のようにも見えるんだが、ちょっとネバネバ、どろどろっとしていて、互たがいに繋つながっているようでもある。それでいて、一匹だけつまみだそうと思えば、できそうだ。

　さっきのひとひと音の源は間違いなくそいつらだった。そいつらは、でも、シブヤが頭を置いていた場所のすぐそばだけじゃない。そこから細く、だらだらと、洞窟の奥のほうへと連なっていた。シブヤはこう考えた。そいつらは洞窟の奥からひとひと音を立てながらここまでやってきたんじゃないか。べつだん突とつ飛ぴな発想じゃないだろう？　誰だって同じことを考えそうだ。ただ、次にシブヤが思ったことについてはどうだろうねえ。共感をえられるかどうか。シブヤはこう思ったのさ。こいつは食えるのかな……？　どれだけ眠ってたのかわからないが、シブヤは腹ペコだったんだよ。それに、シブヤにかぎらず、人間たちはみんな、たいてい常に飢えていた。空腹じゃなくたって、食い物が手に入ったら即そく食う。だって、いま食わなきゃあ、いつ食えるか知れないんだ。本当に飢えると、誰だってそうなるものさ。かなりシビアに飢えていたシブヤは、次にこう思った。もしこいつが食えるんなら、最高だ。

　ここで一つ説明しておかなきゃならない。当時、シブヤたちは共食いをもっぱらにしていたわけだが、何もシブヤたちだって、やりたくてやっていたんじゃない。他ほかに食える物があれば、それに越こしたことはないよ。だがねえ。なかったんだ。動物も、植物も、いかにも食べられそうな物は、何もかも食いつくされてた。人間だけが食ったんじゃない。シブヤたちが暮らしていた土地には、大型の肉にく食しよく獣じゆうがいたんだ。

　今から思えば、やつらは亜あ竜りゆうだった。当時はびっくり怪かい獣じゆう——嘘うそ、嘘だよ。いくらなんでも、そんな呼び方はしてなかった。「でけえの」とか「やべえの」とか呼ばれることが多かったねえ。あとは、それぞれに名前がつけられてた。「クロデカ」だの「アカヤバ」だのって具合さ。とにかく連中の正体は亜竜——竜界ドラガンドのはみ出し者たちだった。本来、竜は竜を食くらうんだが、やつらは違った。竜以外は何でも食った。ただし、亜竜には活動期と休きゆう眠みん期があって、活動期でも行動パターンはおおよそ決まっていた。不毛な場所には近づかないから、注意を払はらってさえいれば、亜竜をさけることはできたんだ。だけど、やつらの食欲は人間からまともな食しよく糧りようを奪うばった。人間は共食いするしかないところまで追いこまれていたのさ。亜竜

をぶち殺そうとした者もいたんだが、当時のシブヤたちは石器に毛が生えた程度の武器しか持ってなかったからねえ。亜竜はでかいし、飛ぶしで、とても勝てる相手じゃなかったんだ。

　そんなわけで、シブヤは思ったわけさ。こいつが食えるんなら、最高だってね。同類を食うことにはとっくに慣れきっていて、人間をおいしくいただく方法は熟知していたけど、シブヤだってべつに人の肉だの内臓だのが好きで好きでしょうがないってわけじゃあなかった。だいたいねえ。何だってそうだが、同じものばかり食ってると飽あきるんだよ。

　シブヤは試ためしてみることにした。こういうことはためらっちゃいけない。蛆虫みたいなやつをさっとつまみ、素す早ばやく口に入れた。噛かむと甘かった。「うめえ」とシブヤは呟つぶやいた。そうしてもうひとつまみ、ふたつまみ──お口に放りこんでクチャクチャ咀そ嚼しやくすると、間違いじゃない。たしかに甘い。こんな甘いものを食ったのはじつに、じつに久しぶりだ。シブヤは両手にのるくらいの蛆虫みたいなやつを、夢中になってあっという間に平らげた。そうして、ふらふらと洞窟の奥へ奥へと歩いていったんだ。なぜかって？　蛆虫みたいなやつはだらだらと連なり、つづいていた。シブヤはこう予想していたのさ。きっとこの洞窟は蛆虫みたいなやつの生息地なんだ。そうに違いない。色といい、とろぷちっとした食感といい、あまぁーい味といい、まったくわけのわからない蛆虫モドキだが、亜竜をはじめ、おぞましい生き物とはたくさん出会ってきた。ここじゃあ何があったって不思議じゃない。蛆虫モドキの巣を発見できたら、とりあえず食い物には困らない。飽きて、飽きて、気が狂くるいそうになるまでは、ここで暮らせばいい。英気を養って、裸はだか一いつ貫かんから出なおそう。力を蓄たくわえて、手下を集めて、軍団を作ろう。そうしてどうしようなんてあてもなく、シブヤはときおり蛆虫モドキを口に入れながら洞どう窟くつの奥底を目指した。もう完全に真っ暗だったが、道は開けていた。最初は気づかなかったんだけどねえ。蛆虫モドキは微かすかに、本当にぼんやり、うっすらと、発光していたんだ。蛆虫モドキはシブヤの食糧で、道しるべでもあったのさ。

　シブヤは進んだ。吸いよせられるように進んだ。突つき進んだ。憑つかれたように進んだ。

　前方に光が見えた。蛆虫モドキの薄うすく光る線はその光のかたまりに向かってまっすぐのびていた。シブヤは確信した。やった。ついに見つけた。シブヤは笑った。その瞬しゆん間かんだった。

ここまで案内役を務めてくれた蛆虫モドキたちが、ほのかに光る線が、サァーッと消えちまった。散っていったんだ。シブヤは振ふり返った。ここまでたどってきた光る線も同じだった。シブヤは「おいおいおぉぉーい……」と呟いた。なんてこった。洞窟の中は真まっ暗くら闇やみだ。蛆虫モドキが導いてくれなきゃここまでこられなかったし、帰りだってそうだ。これじゃあ戻もどれない。なんてこった。

愕がく然ぜんとしながらも、シブヤはやっぱり進んだ。進むしかなかった。光のかたまりはもうすぐそこだ。こうなったら食って食って食いまくってやる。死ぬまで食ってやる。死んだらどうなっちまうのか。死にたくないから、かじりつくようにして、共食いまでして、何もかもを犠ぎ牲せいにして、今日まで生きてきた。そうだ。死んでたまるか。

シブヤはそこにたどりついた。それは光の壁かべだった。蛆虫モドキ一匹一匹の光は微び々びたるものだったが、これだけ集まるとすごい。どうもその向こうはかなり広い空間になっているみたいで、その中に想像を絶する数の、否いな、量の蛆虫モドキがひしめいているみたいだった。シブヤは「冗じよう談だんじゃないんだよ」と吐はき捨てて手をのばそうとした。「──あ……？」

変だ。胃のあたりが。ムズムズする。いや、そんな程度じゃない。内臓がブルブルブルッと震ふるえた。放ほうっといたら、ひっくり返っちまうんじゃないか。さりとて、どうすりゃいいのかわからない。シブヤは腹を押さえて膝ひざをついた。うえぇ。ぐえぇ。唸うなっていたら、ボッ──と、やっぱり胃のへんに火がともったように感じた。熱い。やけに熱い。熱いじゃないか。シブヤは「ひいい」と悲鳴をあげた。まずい。よくわからないが、本格的にやばい。逃にげたほうがいいんじゃないか。でも、どうやって？　洞窟は真っ暗なんだ。引き返せっこない。かといって、ここにいるのはよくない。胃が熱い。なんだかもう、ぐじゅぐじゅしてやがる。シブヤにはわかった。シブヤの胃はおそらく、すでに胃の体ていをなしていない。胃ばっかりじゃあない。食道も、腸も、おかしくなっちまおうとしている。シブヤは立ちあがった。猛もう烈れつな吐き気がした。強きよう烈れつな痛みに襲おそわれながら、シブヤは何かを吐いた。やばいものを吐いた。そんなふうに思えてならなかったが、かまわず逃げだそうとした。

光の壁が押しよせてきたのはそのときだった。

　シブヤはまたたく間に光にのみこまれた。つまり、無数の蛆虫モドキに。やつらは穴という穴からシブヤの中に進入してきた。どんなにあがいたって無む駄だだった。シブヤの外側は蛆虫モドキにすっぽり包まれた。シブヤの中は蛆虫モドキによって満たされた。ああ。あああ。ああああ。シブヤは途と方ほうもない苦痛と、そしてなぜか、味わったことのないような快感に溺おぼれた。シブヤの意識は何度も途切れそうになった。消えかけるだけで、完全に消えちまうことはなかったが、だんだん曖あい昧まいになっていった。今やありとあらゆるものが明確じゃなかった。こいつは苦痛なのか？　快感なのか？　これは身体からだの表面？　裏側？　俺はどこにいる？　ここにいるのは俺だ？　シブヤが俺か？　誰だれがシブヤだ？　俺は誰だ……？

「我わが輩はいはねえ、ヨハァァン。ヨハァァァァァン・サァァァァァンライズＵＵＵＵ……」

　落ちついたワインレッドが重じゅう厚こう感かんたっぷりで、ボタン留めや鋲びょう飾かざりがこの上なく粋ＣＯＯＬな総牛ぎゅう革かわ張ばりのソファーが、一糸纏まとわぬ彼の身体を優やさしく、なおかつしっかりと抱だきとめている。

　彼の左手には、一点の曇くもりもないクリスタルガラスの優美さと力強さを兼かね備えたモルトグラス──中身はもちろん、最高純度の特製蒸留酒スピリッツだ。

　彼が彼のためだけに造らせた彼の愛する酒「FIRE BALL」は、選えりすぐりのパドゥ・ニー芋いもとザンガラ麦を原料として、七十回も八十回も蒸留し、じつに九十六度という超ちよう高アルコール度数を実現している。当然のことながらたやすく引火するから、火気は厳禁だ。

　彼は何しろ酒に酔よわない。彼の肉体はあっという間にアルコールを分解してしまうし、彼は自らの存在以外、何物にも酔うことができない。そんなことは千年前からわかりすぎるほどにわかっているのだが、まあ、気分だ。気分は大事だ。いかにもそれっぽい雰ふん囲い気きを醸かもしだすためには、なるたけ強い、世界チャンピオンのフィニッシュブローよりも強烈な酒が、彼には必要だった。

演出。そう。演出が重要だ。演出次し第だいで、演劇は歴史に残る名作にも、どうしようもない駄だ作さくにもなる。誰だってどうせなら名作を鑑かん賞しようしたい。それが人情ってものだ。

「長ァーい……とても長ァーい時間を生きてきたんだよ、我輩はねえ……。今、お前に話して聞かせてやったのは、その最初のほうの物語さ。我輩の成り立ちを語る上で欠かすことのできない、始まりのストーリィってやつだよ」彼は彼の玩具おもちゃが流した血で赤く色づいた酒を口にふくみ、パンチのきいたその刺し激げきを少し味わってから胃の腑ふに流しこんだ。「──我輩、このことは誰にも話したことはなかったんだがねえ。今日はどういうわけかそんな気分だったのさ。ンン～……お前をだァーいぶ可愛かわいがったあとだからかな？　我輩、お前を愛しすぎて、すっかり親密になったような気になっちまってるのかもしれないよ。無論そんなもなァー錯さつ覚かくでしかない。我輩もわかっちゃいるんだがねえ。Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕ……」

　糞ふん尿によう臭くさい銀ぎん虱じらみども、愚ぐ劣れつ極きわまりない秩序のモラル・番人キーパーズの象しよう徴ちようたる「義の灯台」を頂く銀の砦シルバリイ・銀の砦ホールドは、陥かん落らくして堕だ落らくした。彼の率いるＧＥＮＯジエノＣｉＤシドの巣そう窟くつとなった。

　その名もズバァーリッ……──

　極ごく！　悪あく！　城じよう！

　何のひねりもありゃしねえ！　どうにもカスっぽすぎて、とんでもなくカッコ悪すぎて、ここまでくるとかえってイカスゥゥゥッ……！　ヒィィィィーハァァァァァァーッ……！

　ちょっと前までこの場所で、お行ぎよう儀ぎよく品行方正で規律正しい去勢された家か畜ちくみたいな暮らしを送っていた銀虱どもが今の光景を目にしたら、いったい何て言うだろう？　それはそれで興味がある。彼らは悲しむのか？　憤いきどおるか？　泣くのか？　いい声で？　存外、笑うかもしれない。もう笑うしかないってかんじで、腹を抱かかえて、目め尻じりに涙なみだを滲にじませて、大笑いするかもしれない。それか、羨うらやむか。その可能性だってある。絶対にないとは言いきれない。人間なんて一皮剝むけばーいつ緒しよだ。真性か、仮性か。どの程度、皮を被かぶっているのか。ようするに、差なんてそれだけだ。剝むき出しの本能はあ

まりに業ごう突つく張ばりで攻こう撃げき的で浅はかでいじましいから、誰も彼もが人間の皮を被って取り澄すましている。それがただの包皮だとも知らずに、ああ、それこそが人間であると無条件で思いこんでいる底そこ抜ぬけアホウどもの、げに愛らしいことよ！

　ともあれ、銀の砦は悪の根城となった。生まれ変わったのだ。

　秩ちつ序じよという名の光が失われたこの極悪城にも、だが、ルールがないわけじゃない。掟おきてはちゃんとある。たった一つだけの掟が。

　難しいことじゃない。城主たる彼に従うべし。以上だ。あとは何をやったっていい。中庭で酒盛りしてギャーギャー騒さわごうと、階段でドキドキしながら性交しようと、そのへんで乱交しようと、ちょっとハッスルしすぎて壁に大穴を空けようと、彼が「否ノー」と言わないかぎり、べつにかまわない。独裁者であるジェノシド総統、彼の逆げき鱗りんにふれさえしなければ自由だ。

　彼の手下どもは今のところ、その見せかけの自由を満まん喫きつしている。煙草たばこをふかして、酒を飲み、薬をキメて、女を抱だき、あるいは男を抱いて、三人でつがい、四人で楽しんで、五、六人で交合する。彼がときおり命令を下す。たとえば、壁かべを黒く塗ぬっちまえとか、銀虱の死体をきれいさっぱり解体して、防ぼう壁へきの上にしゃれこうべをずらっと並べろとか。手下どもは大おお慌あわてで陰いん部ぶから陰部を引き抜ぬき引き抜き彼に従う。よく訓練された飼い犬みたいに。それ以上に。欲よく望ぼうさえもねじ伏ふせて、彼の言うとおりに動く。

　そのとき連中は例外なく皮被りになっちまってる。

　してみれば、理性や理知の包皮とは、弱者が生き抜くための鎧よろいにすぎぬのではないか。

　彼はもう一口、酒を飲んで、灼しやく熱ねつの吐と息いきをついた。

「つまらんねえ……。じつにつまらん……。そうは思わないかい、ヨハン」

　ヨハン・サンライズは答えない。何を問おうと、意味のある返事らしい返事は一いつ切さいしない。徹てつ底ていして、一いつ貫か

んして、ずっとそうだ。

　今、ヨハン・サンライズは、彼の足あし許もとに転がっている。横向きになって、背を丸めて、まるで干ひからびちまいそうな芋虫みたいだ。両りよう肩かたの関節をスカッと外して、両足のアキレス腱けんをバッツリ切断してあるので、身動きすることはできても、移動するとなると骨だろう。ちなみに当然、可哀かわい想そうなヨハン坊ぼうは全ぜん裸らだ。これっぽっちの贅ぜい肉にくもついてやしない、鍛きたえ抜かれた筋肉の上に皮ひ膚ふが貼はりついているだけといった様子の愛らしいヒップは、それはもういろんなもので汚よごれに汚れて汚れまくっている。栄はえある秩序の番人の副長としては誠まことに情けない。みっともない。見るも無残だ。そう感ずる者はきっと多かろうが、彼の意見は違ちがう。まったく異なっている。

　彼は鬼おに火びの灯ともる双そう眼がんを細めて、生きる意思、生命への執しゆう着ちやくすらも放ほう棄きしているかのようなヨハン・サンライズにうっとりと見とれた。あらためて思わざるをえない。

　本当にこいつは掘ほり出し物だ。

　こんなに犯おかされて、ここまで侵おかされて、こんなふうに辱はずかしめられて、汚けがされ、奪うばわれ、貶おとしめられても、抵てい抗こうらしい抵抗をしない、獣けものみたいな苦痛の声しか出さないやつは、そうめったにいるものじゃない。

「世界がお前のように誇ほこり高い人間であふれてたら、我わが輩はいだってもうちょっと、この世界に希望を持てるかもしれないんだがねえ。かといって、絶望してるわけじゃあないよ。我輩がこれまで生きてきて学んだことがある。希望なんてものは結局、そこらに転がってやしないんだ。見つけられるものじゃない。それが欲しけりゃあ、創つくりだすしかないんだよ。生みだすんだ。自分自身の手でねえ」

　ヨハンは一見、無抵抗主義を貫つらぬいているかのようだ。すべてを諦あきらめているようにも見える。ところがどっこい、その態度が彼をどこまでも萎なえさせることを、ヨハンは間違いなく知っている。彼は泣き叫さけぶヨハンが見たい。どうか許してくれと懇こん願がんするヨハン。命いのち乞ごいをするヨハン。鼻はな汁じると涙で顔をびっしょりにして、助けてくれるのなら何でもすると

哀あい願がんするヨハン。苦労して作りあげてきた人格という名の包皮を破り捨てて、別の何かになっちまったヨハン。そんなヨハンを目の前にしたら、彼の胸は軋きしむような音を立てながらも、大いに躍おどるだろう。そうはさせまいとヨハンは頑がん張ばっている。

　ある意味、これ以上の反抗はない。わかっていても、やりたくても、できるものではない。それをヨハン・サンライズはやってのけている。その孤こ独どくな戦いに声せい援えんを送る者はいない。もし観客がいたとしたら、むしろ副長殿どのの無ぶ様ざまな姿に失望さえするかもしれない。誰だれも評価しない。おそらく誰にも望まれていない。勝利はない。敗北しか。それなのに、ただ絶望だけを友にして、ヨハンは一人きりで無む駄だな戦いを継けい続ぞくしている。

「なんて……」彼は低く喉のどを鳴らした。「お前ときたら、なんて可愛かわいらしいんだろう。アンビリーヴァボオオオォォォ。我輩は心の底から思うよ。始まりのころに、お前のような一いつ徹てつ者ものに出会っていればねえ。たとえば、タマチがお前みたいに純情で臍へそ曲まがりの意地っ張りだったらねえ。我輩が歩む道も少しは違ってたかもしれない。むろん、たらればの話だ。言っても詮せん無なきことさ。まあ、それくらい我輩はお前のことが気に入っちまったってことだよ。Ｎｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕ……」

　そうはいっても、掘り出し物の愛あい玩がん動物を愛めでてばかりもいられない。彼には彼のためになすべきことがある。練りに練った構想を実現すべく、彼は必要な手を打ってきた。これからもやらなければならないことはたくさんあるのだ。

「とりあえず――」彼は己おのれの右手を見た。正確に言えば、本来ならば己の右手があるべき場所に目をやった。「アァァァァジアン。あのファンキィーな暴あばれん坊にも困ったものさ。いくら我輩だって左ひだり腕うで一本じゃあ、これから大事を成し遂とげようってときに少々心許ないからねえ。クジオ……！」

　彼はかつての総長室、現在の総統室にいる。この部屋は完全なプライベートルームだ。彼の許可がないかぎり、誰も立ち入ることはできない――なんてことを言うと、どんな不思議の国が広がっているのかと想像する向きもあるだろうが、意外や意外、総統室は殺風景だ。もとからあった机だの何だのはすべて運びだし、彼が認めた高

品質のソファーとテーブル、ベッドを搬はん入にゅうさせて、あとは愛玩動物を愛してやるときに使う道具類だけをそろえた。飾かざりらしい飾りはない。実際のところ、まさしくこれが彼の心象風景なのだ。そう言ったところで、いったい誰が信じるだろう。

　総統室に無断で出入りすることは許されていないが、彼に呼ばれたらいつでも駆かけつけてこられるように、部屋のすぐ外でシックスナインズが━━連中にもいろいろ仕事があるから、順じゅん繰ぐり順繰り待機している。カズオ、ジロウ、サブ、シロウ、ゴスケ、ロク、ナナミ、ハチベエ、クジオ。彼がシャドウと呼んでいたスカル・エネムが例の披露宴レセプシヲンで囮おとりとなってまだ若い命を散らせたから、総勢九人。全員、まぎれもなく彼の血を引いている。ナナミだけは娘むすめだが、あとは息むす子こだ。

　クジオは間もなく扉とびらを開けて総統室に入ってきた。元M□S□R（手しゆ淫いんせよ、ねじこめ、犯やれ）のメインデザイナーにして、悪徳再生リヴアイスのリードデザイナー、リチャード・〝ディック〟・コックがデザインした彼専用のオールラウンドコンバットボディスーツ「STORM」の量産型を身につけたクジオは、父たる彼によく似ている。だが、瓜うり二ふたつとは言い難がたい。クジオはシックスナインズ中の最年少で、上背があるのでそうは見えないが、じつはまだ十三歳なのだ。年ねん齢れい相応とまではゆかないにしても、顔立ちに幼さが残っていて、性格にも子供らしいところがある。素す直なおに狡こう猾かつで、残ざん酷こくだ。彼の関心を引こうと、いつも必死で、頑張り屋さんという形容がこれほどしっくりくる者もめずらしい。

　クジオはあえてヨハンには一いち瞥べつもくれず、彼のそばに片かた膝ひざをついて頭こうべを垂れた。「━━お呼びに預かり、ただいまクジオが参上つかまつりました、お父さん」

「ウーム」彼は酒を一口飲んだ。「クジオ。愛するお前を呼んだのは他ほかでもない」

「はいっ……」クジオはさらに深く深く頭を下げた。もう地面に額がくっつきちまいそうだ。その顔面は真っ赤に染まっていることだろう。嬉うれしいのだ。父に、愛するお前、と呼びかけられることが、クジオにとっては歓かん喜き、快感以外の何物でもない。いかにもそんな子供を産み、せっせと育ててくれそうな女を見つける。女を懐かい柔じゆうして、惚ほれて惚れて惚れ抜ぬかせる。馬みたいに種付けをして、子をなす。こんな身体からだでも子孫を残すこ

とができる。その事実が判明してから、彼はそうやって世界中に己おのが種子をばらまいてきたのだ。

「クジオ。パパは今ねえ。とてつもなく不便なんだよ。なぜだかわかるかい」

「そ、それは……！」クジオは顔を上げ、慌あわてて伏ふせた。「右腕が！　み、右腕が……その、失われてしまったからなんじゃないかと──当然、お父さんはそれでも、世界最強で、誰よりも何よりも美しいんですけど！」

「Ｆｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……愛ういやつめ。愛らしいだけじゃあない。クジオ、お前は賢かしこいねえ。パパとしちゃあ鼻高々だよ、クジオ」

「そ、そんな……ぼ、僕……お父さんに、そんなこと言われたら、僕……」

「興奮しちゃうかい？　パパにかわいがってほしいんだろう？」

「で、でも、僕だけ、そんな……」

　クジオは末まっ弟ていだから、兄や姉に気を遣つかってみせる。もちろん、見せかけだけだ。本当は誰も彼も出し抜きたい。父の寵ちよう愛あいを一身に受けたい。父を独どく占せんしたい。きっとそう思っているのだろうが、態度には出さない。それがクジオの手だ。百ひやく戦せん錬れん磨まの父には見抜かれるに決まっている。そう考えないあたりが罪のないあどけなさで、食べてしまいたいくらい可愛らしい。

「クジオ。我が慢まんなんかしなくたっていい。パパは何でもお見通しさ」

「お……」クジオはちらっと上目遣いで彼を見た。その瞳ひとみは期待に濡ぬれ、欲よく望ぼうの火が頬ほおを赤く燃やしていた。「お父さん……僕……」

「いいんだよ、クジオ。最後にお前をめいっぱい可愛がってやろう。そのあとで、お前はパパと一体になる」

「お父さんと、僕が……？」

「そうさ、クジオ。パパはお前を食べることにした」

「え──」クジオが全身を凍こおりつかせた。

「言ったろう？」彼は左ひだり眼めを見開き、首を右に傾かしげてみせた。「パパはとてつもなく不便なんだ。黙だまってたら、右腕が生えてくるまでしばらくかかる。パパにはねえ。そんなに余よ裕ゆうぶっこいていられる時間はないんだよ。残念ながらねえ」

「そ、それで、僕を……？」

「ああ。そうだ。パパはお前を食べることにした。他の食い物とはぜんぜん違ちがって、お前たちはすぐパパに馴な染じんでくれる。文字どおり、パパの血となり肉となり骨となるんだ。パパと一体になるんだよ」

「ぼ、僕……」クジオは大輪の花を咲さかせるがごとく満面に笑えみをたたえた。「嬉しい！　お父さんの役に立てるんだよね！　そして、誰だれよりもお父さんのそばにいられる……！　ずっと一いつ緒しよに……！」

「そう」彼は目を細めてゆっくりとうなずいた。「一緒だよ。永遠にねえ」

　以前、左ひだり腕うで一本に成り果てちまったときはどうしようかと思ったよ。素人しろうとならねえ。そうだろうさ。ところが、こちとら玄人くろうとだ。我わが輩はいはもうずいぶん長い間、我輩をやってる。我輩が我輩としてあることのプロフェッショナルなんだ。備えあれば憂うれいなし。抜け目のない我輩は、ちゃんと万が一の事態を想定して用意してたってわけさ。

　左腕一本の状態から苦労して赤あかん坊ぼうみたいな姿にまで変身した我輩は、我輩の忠実な犬、オバカ・盆ボン暗クラァーノ・〝ハチ公〟・ジェイをお供に、諸国を漫まん遊ゆうした。

　目的はもちろん、アレだよ。

　我輩の子供たちさ。

いい具合に育った息むす子こだの娘むすめだのを喰くらい、血と肉と骨にして、我輩はできるだけ早く復活を遂とげねばならなかった。素質がある子供は、ただ喰らって終わりってのもいささかもったいないから、親衛隊として侍はべらせよう。そんなアイディアも我輩にはあった。まあ、その旅の間、だいぶいろいろあったんだが、そいつはまた別の機会に──。

ともあれ、我輩はこうして麗うるわしのエルデンに戻もどってきた。

たっぷり可愛かわいがってやったあとで、クジオをむしゃむしゃ食べていると、唐とう突とつにいくつかのイメージが立てつづけに頭をよぎった。「死ね！」「死ね！」「死ね！」と叫さけびながら木の棒を振ふりおろすタマチの形相。タマチを撥はねのけて、股こ間かんを踏ふみつけた。その瞬しゅん間かんのタマチのゆがんだ表情。首をぎゅうぎゅう絞しめられて、ついにぴくりともしなくなったタマチの顔。それから、タマチの腿もも肉にくをほとんど咀そ嚼しやくせずにのみくだし、すぐに吐はきだしてしまった哀あわれな男を見て、何がおかしいのか大笑いする襲しゅう撃げき者ども。我輩は、うめえ、うめえ、と声には出さずに繰くり返した。人肉は生にかぎる。そうだろう、タマチ。いや、お前は知らないんだった。何も知らないまま、お前は食われちまった。

あるいはそのほうが幸せだったのかもしれないなんて、我輩、断じて思わない。

そうだろう、シブヤ。

Omenage 899 6th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

chapter.1

好き嫌い好き

　銀の砦とりで陥かん落らくから十日経たった。モリー・リップス・アサイラムは平へい穏おん無事だ。中に入ってしまえば。外の様子はちょっと――いや、かなり違う。

　秩ちつ序じよの番人はさまざまな組織やら何やらと警護契けい約やくを結んで、人を常じよう駐ちゆうさせる代わりに金銭的な援えん助じよを受けていた。そのへんはとりあえず凍とう結けつするという決断を〝死神〟こと総長羅ラ叉サが下した。当然、契約を凍結している間は、どこからも援助を受けられない。仮に申し出があったとしても、これを断る。ただし、義を貫つらぬく番人として、一日に何回かの巡じゆん回かいだけは無む償しようでこれを行う。番人の意地だろう。ほとんど虚きよ勢せいに近い意地を張ってみせるしかないほど、状じよう況きようは厳しい。それでも、アサイラムだけは何がなんでも守り抜ぬかねばならぬ。

　こうして結成されたのがアサイラム守備隊で、銀色の鎧よろい兜かぶとに身を包み、モトロール刀と盾たてを携たずさえた番人たちが、アサイラムの外をがっちがちに固めている。マシュー・シュナイデル副長以下、たしか総勢百七十一名だったか。患かん者じやや関係者以外は、鼠ねずみ一いつ匹ぴき中に入れてたまるものか、という構えだ。ＳｍＣのときの一件があるので、番人の考えもわからないではない。アサイラムで保護されていた孤こ児じが、長じて秩序の番人に入団することも多いから、ここは彼らにとって聖地に似た場所で、弱点でもあるのだ。

　マリアローズの向かいで茶をすすっているくすんだ金きん髪ぱつの女性も、そうやって番人になった。そして、辞やめた。おそらく彼女には、番人の義よりもっと大切なものがあったのだろう。

　日暮れが迫せまりつつあるモリー・リップスの診しん察さつ室で、ベアトリーチェと二人きりなんて、なんだか変だ。

　ちょっと前までモリーもいたのだが、さっき呼ばれて出ていった。ベアトリーチェも回転椅い子すから腰こしを浮うかしてついてゆこうとしたのだけれど、モリーが「いいわよ、わたし一人で。すぐ戻るから、マリアの相手でもしてて」と言って制止したのだ。
「そう……ですか」と呟つぶやくように言って椅子に腰を下ろしたベアトリーチェは、それ以来、口を開かない。

　マリアローズも黙だまりこくっている。話したいことはあるのに。むしろ、モリー抜きで。ベアトリーチェと二人だけで。あんな大事件があって──アサイラムにも大勢の負傷者が運びこまれて、状況はめまぐるしく変わって、マリアローズもてんてこまいだった。じつは、こうやって落ちついて会うのも久しぶりだったりする。話そうと思い、話さないといけないと思って、アサイラムを訪おとずれたのだ。それなのに。

　可能性の段階でベアトリーチェに打ち明け、前もって心の準備をしておいてもらう。その機会はあった。あえてそうしなかった。あのときはまだ、可能性でしかなかったから。できれば、ベアトリーチェに厭いやなことを思いださせたくない。だから黙っていた。それだけか。ただ単に、言いづらい。ふれたくない。そんな気持ちもあったんじゃないのか。あった。まったくなかったとは言えない。そうはいっても、あの段階で話しておくべきだったのか。それは違ちがう──と思う。たぶん。仮に時間を巻き戻すことができて、やりなおしても、やっぱりマリアローズは話さないだろう。でも、それとこれとは別問題だ。

　僕の口から言わないといけない。何をどう話せばいいのか。そんなことはわからないけれど、僕は向きあわないといけない。逃にげちゃだめだ。そして、できることなら、リーチェが望んでくれるなら、何か手伝いをしたい。僕なんかに何ができるのか。見当もつかない。でも、自分にできることがあるのなら、何かしたい。

　マリアローズは大きな窓の外で暮れなずむ空を見やって、そっと息をついた。

　それから、正面のベアトリーチェに向きなおり、深い青の瞳ひとみを見すえた。

　口を開こうとしたら、先手を打たれた。

「あのことか」

　声こわ音ねは落ち着きはらっていた。声だけじゃない。ベアトリーチェは目を細めて「まったく、お前らしいな」と言って、含ふくみ笑いさえしてみせた。「気づいているか、マリアローズ。お前、さっきからすごい顔してるんだぞ」

「え……」マリアローズは手で顔を押さえた。「そ、そお……？

そんなにすごい？　てゆうか、すごいって、どんな顔……？」

「そうだな」ベアトリーチェは顎あごに指をあてて首を傾かしげ、斜ななめ上に視線を向けた。「放ほうっておいたら、そのうち愛の告白でもしそうな顔、とか？」

　まさか、ベアトリーチェの口からそんな言葉が飛びだすなんて。少し――じゃない。かなり意表を突つかれた。それに正直、困った。どんなふうに反応すればいいのか。

「あ――」ベアトリーチェの顔が真っ赤になった。「ち、ち、違うぞ!?　ええと、違うというか、何というか、その、つまり――あくまでたとえで、ようするに、単なる比ひ喩ゆだ！　わかるだろう!?」

「え、あ、うん、わ、わかるよ？　比喩ね。比喩。あー、ま、そうだよね。そういうときって微び妙みようだしね。微妙ってゆうか……」

「け、経験があるのか？」

「経験っ!?　や、ないよ!?　そんなの、あるわけないでしょ!?」

「あったとしても、べつにおかしくはないと思うが……」

「そお……」マリアローズは右手で包むように持っているカップの中身に一いつ瞬しゆん、目を落とし、すぐに上うわ目め遣づかいでベアトリーチェを見た。「かな？」

「そうじゃないか？」ベアトリーチェは軽く肩かたをすくめてみせた。「子供とは言えない年なんだし。お前だけじゃなくて、わたしもそうだが」

「それは……まあ」マリアローズは口を尖とがらせた。でも、なんで僕、ほんのちょっとだけど、不ふ愉ゆ快かい――てゆうか、もやもやするっていうか、割り切れないような気分なんだろ。

　ベアトリーチェは小さく息をついた。注意していないと見み逃のがしてしまいそうな――でも、きっとそれは溜ため息いきに違いなかった。「どうなんだ」

「どうって、何が？」

「昼飯時ランチタイムの頭領マスター」

　これこそまさしく不意打ちだった。

「アジアン」

「へっ……？」

　頭の中が真っ白になった。純白の広大な脳内空間を一羽の鳥が飛んでいた。何だろう。あの鳥。種類ってゆうか、分類？　何科？　みたいな。あるよね。よくわかんないけど。あー。どうせなら、あの鳥の背中に乗って、どっか遠くへ行っちゃいたいなー。無理かな。無理だよね。鳥って軽いし。そういう問題じゃないけど。本当にもう、そんなのどうでもいいし。どうでもいいことで頭の中を埋うめつくしたいっていうか。

「仲がいいんじゃないのか」

　ベアトリーチェは平静だ。そう装よそおっているだけなのか。わからない。さっぱりわからない。

　思ってもみなかった。ベアトリーチェの口から、あいつの名前が出てくるなんて。

　いろいろなことがあったから。事情はひどくこみ入っていて、複雑だから。そこには手をつけないほうがいい。暗あん黙もくの了りよう解かい。そんなものがあった。そう思っていたわけでもない。そんなふうに思うことさえ避さけていた。おそらく、それが実情だ。

　でも、こうなったからには、嘘うそはつけない。ごまかすこともできない。

　こんな自分と友だちでいてくれる。ベアトリーチェは大事な人だ。あれやこれやで困難があるとしても、大切にしたいと思っている。そうしてきたつもりだ。

　偽いつわりは、自分自身も、友だちも、両方を裏切ることになる。

「仲がいい──っていうか……」

　でも、こればっかりは。

「腐くされ縁えんっていうか……何だろ。危ないときに助けてもらったりとか、そういうのはあるんだけど。何回か。何回も。だからって、命の恩人とか、そんなふうにはあんまり思えなかったりもして……たまに迷めい惑わくだったりもするし。あいつはクランの頭領マスターだから━しかも、昼飯時ランチタイムってそこそこ名が知れてるし、あいつもまあ……有名っていえば有名だし、なんていうか、仲間とはもちろん違うし、でも、友だちっていうのも、なんか……」

　正直になろうとすればするほど、わからなくなってゆく。

「たとえば、一いつ緒しよにご飯食べたり、買い物したり、遊びに行ったりとか……そういうこと、するわけでもないしさ。変態だから、家に忍しのびこんできたりはするんだけど、ほら、きゅーがね。不ふ審しん者は撃げき退たいしてくれるから。そのへんは心配なかったりするし。ぜんぜん顔あわせないときだってあったりするし。十日とか。それ以上とか。だからどうってこともないし━」

　わからなくなる。そうじゃない。

　わからないほうがいい。はっきりさせたくない。

　そうなのかもしれない。自分でも気づいている。

　知らず知らずのうちに目線が下がり、うつむいてしまっていた。

「だけど、まあ、友だち、なのかな……？　いろいろあるしね。一口に友だちって言っても。決まった形があるわけじゃないだろうし。うん。友だち━だと思うよ？　あいつがどう思ってるのかは、僕にはわからないけど。てゆうか、そんなの知ったこっちゃないし。あわせてやる義理なんてないしさ」

　だって、しょうがないじゃないか。僕にはどうしようもないんだから。

　━そういえば、知ってる？　あいつ……。━え？　そんなのって……。━何よ、それ。気味が悪いわ。

　ずっと……ずっと、前のことだ。

—おい！　見ろよ、こいつ……。—うわあ！　—逃にげろ、逃げろ……！

ずっと、ずっと……ずっと前のことでしかない。もうめったに思いださない。

たまに—思いだしてしまう。夢を見る。目が覚める。身体からだ中がつめたい汗あせでびっしょり濡ぬれている。わからなくなる。何を信じればいいのか。自分には何もない。そんな気がして仕方ない。信じられるべき何物も、自分には与あたえられていない。気のせいだ。そんなことはない。僕にはたくさんあるじゃないか。僕は一人じゃない。仲間がいる。友だちがいる。何もかも知っている人だって。それでも僕を受け容いれてくれる。何も心配しなくていい。僕は僕を否定しなくていい。それどころか—こう思うんだ。

僕がもし、僕を否定なんかしたら、みんな怒おこるんじゃないかって。バカじゃないのって叱しかってくれるんじゃないかって。抱だきしめて、元気づけてくれる人さえいるんじゃないかって。

今の僕はそう思えるんだ。

すごく恵めぐまれている。幸せすぎて、怖こわいくらいだよ。

だから、もういいんだ。これで十分なんだ。これ以上なんて、高望みだよ。きっとバチがあたる。僕だけなら、べつにいいけどさ。周りにまで、何か起こったら—そう考えると、ぞっとする。冗じょう談だんじゃない。贅ぜい沢たくかもしれないけれど、僕はこの幸せを手放したくない。でもそれ以上に、僕の大切な人たち、誰だれにも傷ついてほしくない。

「そうか」ベアトリーチェは今度こそ溜息らしい溜息をついて、ごまかそうとするかのようにちょっとだけ笑った。「—いや、すまない。おかしなことを言って。ずいぶん、その……よく聞くものだからな。わたしみたいな朴ぼく念ねん仁じんでも、噂うわさくらいは耳に入るんだ」

「朴念仁なんて、そんな。トマトでもあるまいし」

「お前のところの園長マスターか。あの人はたしかに鈍にぶそうだ」

「けっこう……てゆうか、かなりね……」

「お前だって、鋭するどいほうじゃ決してないと思うけどな」

　マリアローズはまばたきをした。「……僕？」

「そうだ」ベアトリーチェは悪戯いたずらっぽい表情を浮うかべた。「お前の場合、とにかく自覚がないんだろうな」

「自覚って、何の……？」

「ほら。わかってないだろう」ベアトリーチェはくすくす笑った。

「な、何だよ。教えてよ」

「そうだな……」ベアトリーチェは少し考えこんでから言った。「お前が思っているよりずっと、周りの者たちはお前のことを大切に感じてる。彼らにとって、お前は好意に値あたいするだけの存在なんだ。そのことを、お前はよくわかってない。いい言い方をすれば謙けん虚きょなんだろうが、いきすぎれば失礼にもなる。ある意味、相手を信じていないというふうにも考えられるわけだからな」

　アリアローズは下を向いて唇くちびるを噛かんだ。胸が痛いということは、その言葉が響ひびいたということだろう。「……気をつけます」

「わたしだって、お前のことがとても好きだ」

　はっとして、ベアトリーチェの顔を見た。

　ベアトリーチェはマリアローズの視線をしっかりと受け止めた。

　目をそらすことなんかできない。そんなこと、思いもよらない。何か言わないと。考えようとしても、頭が回らない。でも、考える必要なんてないのかもしれない。思考を巡めぐらせてたどりついた答えは、いつだって結局、小こ賢ざかしい。

「僕も、きみのことがとても好きだよ、リーチェ」

「ああ」ベアトリーチェは微笑ほほえんだ。「知ってる」

　ただこのあたたかい気持ちだけがあって、それだけでいいのなら、僕はもっとたくさん「好き」を配って、みんなを大切にして、そのために生きて、死んだってかまわない。

リーチェはそれでいいって言ってくれている。それだけでいいって。

言葉は不便で、不自由だ。きみのことを「友だち」としか呼べないなんて、胸を掻かきむしってしまいたくなるほど、もどかしい。

何かもっとふさわしい呼び方があればいいのに。せめて、この気持ちを嚙み砕くだいて、わかりやすい形に整えて、確実に、きっちりと伝えることができたらいいのに。だけれど、たとえ千の言葉を費ついやしたとしても、うまく言い表せそうにない。

ベアトリーチェは指先で目め頭がしらをこすりながら目を伏ふせ、両手でカップを握にぎりしめた。「マリアローズ。お前がわたしを心配して、例の件を言わずにいたことはわかってる。わたしがお前でも、おそらくそうしただろう。だから、そのことはいいんだ。気にするな」

「うん」

「わたしは大だい丈じよう夫ぶだ──とは言わない。まったく平気だと言いはっても、嘘うそくさいだろうしな。正直、もう何とも思っていないと断言できるほど、整理がついているわけじゃないんだ。はっきり言って、動どう揺ようしてる」

「……だよね」と相あい槌づちを打った途と端たん、苦い味が口の中に広がった。だよね、なんて言ってしまっていいのか。ベアトリーチェが感じた痛みの十分の一も、きっとマリアローズにはわからないのだ。

「でも──」ベアトリーチェの指がカップをなぞっている。「今は自分がなすべきことを、しっかりやるだけだ。優先順位をはっきりさせておけば、迷うことだけはない。母様はいつもそうなんだ」

「そういえば、モリーほどぐずぐずしない人っていうのも、ちょっとめずらしいかも」

「わたしの目標だ」

「なれるよ、リーチェは」

ベアトリーチェは苦く笑しようした。「かなり高すぎる目標だと、わたしは思ってるんだけどな」

「や、だけど、なんか似てるところがあるしね。モリーとリーチェって」

「そうかな……？」ベアトリーチェの頬ほおがほんのりと赤らんだ。

「モリーは、いろんな面が突とつ出しゆつしてるっていうか、尋じん常じようじゃない人だったりするからね。どこもかしこも似てるってわけじゃないんだけどさ。なんていうか──」マリアローズは自分の胸を軽く叩たたいた。「芯しんとか、根っことか、そういう部分がね。すごく、似通ってるんじゃないかなって」

「だとしたら、嬉うれしい」

　彼女の笑え顔がおを守りたいと、心の底から思った。

　僕には大それたことはできない。そんな力、僕にはない。でも、ちっぽけな僕の力を尽つくして、誰かを助けたり支えたりして──その結果として何かを成し遂とげることなら、できないわけじゃない。ＺＯＯに入ってから学んだことだ。

　ＳＩＸ。

　ベアトリーチェだけじゃない。やつに傷つけられた人はたくさんいる。命を奪うばわれた者たちも。それに、いつぞやはこの腹にでかい穴をぶちあけられた。やつには個人的な恨うらみもあるのだ。借りは必ず返してやる。償つぐないなんか必要ない。ふさわしい報むくいを受けさせるだけでいい。それがサンランド無統治王国の、エルデンの流りゆう儀ぎだ。

「──いいな」後ろに控ひかえる者たちに短くそう尋たずねたものの、羅ラ叉サは返事など求めてはいない。確かく認にんですらない。死神は進む。死神が征ゆかば、悪あく即そく斬ざん。秩ちつ序じよの番人が貫つらぬくべき義の障害となる悪を滅ほろぼすのみ。わかりきったことだ。彼らも当然、承知しているだろう。

　秩序の番人一番総長直属隊十六名と〝小しよう羅ら刹せつ〟李イ童ドウ晏アン率いる二番親衛隊十六名、併あわせて三十二名は、エ

ルデン第五区の細い路地で息をひそめている。路地から出た先は、二十七号通りと呼ばれている幅はば五メーテルほどの道だ。二十七号通りは、すぐそこで三十四号通りと直角に交わっている。

　今から一時間ほど前のことだ。その場所に奇き天て烈れつ下げ劣れつな装しよう束ぞくに身を包んだ男どもが現れ、通行人に声をかけはじめた。呼び止められた者たちは、男どもの話を聞いて方々に走った。人が人を呼びよせ、さらに人を呼びこんだ。二十七号通りと三十四号通りの交差点は、あっという間に人でごった返した。

　何でも、奇ゲ襲リ劇ラ、というらしい。悪徳再生リヴアイスは七日前から似たような手口で服ふく飾しよく品の即売会を催もよおしている。連日どころではない。エルデンの各所で、奇襲劇は一日に何度も行われている。

　話題が話題を呼び、リヴァイスの商品を求める阿あ呆ほうは多い。ところが、大方の予想に反し、リヴァイスは一いつ般ぱんの小売店に商品を流通させなかった。直営店、専門店のたぐいも存在しない。ならば、どうやって手に入れればいいのか。リヴァイスが虚うつけどものために用意した答えは一つだった。それが奇襲劇だ。開始当初は人が集まるのに時間がかかることもあったようだが、今では奇襲劇ゲリラ・探求者ハンターを名乗って一日中、街をうろつく大おお戯たわけすらいるという。

　リヴァイス・スタイルは急速に広まり浸しん透とうしつつある。悪党バスターどもだけではない。流行に敏びん感かんな若者たちも、リヴァイスの商品を手に入れて身につけようと躍やつ起きになっている。

　今、交差点に集つどっている男女は、義を嘲あざ笑わらう者たちだ。それゆえに、直ちに斬きる。死神といえども、そこまでするつもりはないが、リヴァイスの手先は残らず誅ちゆうしてくれる。

　羅叉は息を吸って、止めた。合図など不要だ。路地から飛びだし、交差点の群衆めがけて突つっこんだ。二人、三人、肘ひじ打うちと膝ひざ蹴げりで吹ふっ飛ばすと、まず悲鳴交じりの怒ど声せいが、それから純度の高い悲鳴がわきおこった。「ひぃっ──」「ば、番人……」「死神だァァッ！」「に、逃にげ──」「どけ！　逃げないと──」「うわあああっ！」「死神！」「きゃあっ！」「殺される！」「殺されるぞ！」「逃げろ……！」

「秩序の番人である！」後ろで李童晏が雷らい鳴めいのごとき声を張りあげた。「我らの義に仇あだなす外げ道どうリヴァイスに天誅を加える！　命が惜おしくば、無関係の者は即そつ刻こく立ち去れ……！」

　羅叉は聞いていなかった。さらに三人、四人、突き飛ばしながら、名めい匠しようダグラス・トゥースの鍛きたえたる大刀「日輪」の柄つかに手をかけた。奇天烈下劣な衣装を身につけた間ま抜ぬけ面づらの男は併せて七名。連中は地べたに厚手の黒い布を敷しき、その上にくだらぬ商品を並べ、理非を弁わきまえぬ馬ば鹿か者ものどもを煽あおっているところだった。そのうちの一名が今、死神の間合いに入った。

　抜いて即、男の右みぎ脇わき腹ばらから左ひだり肩かたまで斜ななめに斬り上げた。

　男は「あ」と声をもらした。二つになった身体からだがずれた。上の部分が先に地面に落ちた。羅叉はその頭を踏ふみつけつつ、二人目の素っ首を叩き斬った。三人目は心の臓に一いつ閃せんの突きを見み舞まった。蹴け倒たおしながら引き抜いた日輪を、四人目の脳天に振ふりおろした。血液だの脳のう漿しようだのうっすらと紅あかい灰かい白はく色しよくの脳のう髄ずいだのを撒まき散らしながら四人目が崩くずれ落ちると、残りの三人のうちの一人が死神に背を向けて逃とう走そうしようとした。愚おろか。真まことに愚かなり。死神は日輪の刃はを水平にして五人目の首筋にすっと突き入れた。その背に足裏を押しつけると、延えん髄ずいを破は壊かいされた男はだらしなく地面に倒れこんだ。振り返ると、六人目は何を思ったか布の上の商品を手にとろうとしていた。死神はその手首を斬り飛ばし、さらに左の眼球へと日輪を突っこんだ。六人目は驚きよう愕がくとも恐おそれとも絶望ともつかない「えー」という声を出し、だらっと舌を垂らした。死神は日輪を六人目の左ひだり眼めから抜いて、その顎あごを蹴り上げた。ひっくり返った六人目のすぐそばで、七人目は土下座した。

「ち……ちがっ—お、俺はただ……ば、バイトで！　金がいいから、それで……！」

「問答無用だ」

　死神は七人目の首を刎はねた。それから、地面に転がった生首の、頭ず蓋がいの一番弱い部分めがけて、思いきり右の踵かかとを

叩たたきつけた。頭蓋骨は硬かたいが、箇か所しよと角度さえ間ま違ちがえなければ、こうしてたやすく割れる。

　死神はあたりを見まわした。出番がなかった隊士たちは死神の周りに集いつつある。阿呆どもは半ばが逃げ散り、もう半分は義の志士たちを遠巻きにしていた。

　隊士の一人が死し骸がいを踏みにじりながら舌打ちをした。阿呆どもの態度が癪しやくに障さわったのだろう。わからぬでもない。阿呆どもの目、目、目。いずれも賞しよう讃さん、共感、好意のたぐいとは程ほど遠とおい。その眼まな差ざしにこめられている感情は、明らかに非難、反感、そして嫌けん悪おだ。

「ひでえ……」と誰だれかが呟つぶやいた。「だな」と誰かが応じた。「何もそこまで……」という女の声が聞こえた。「つーかよ……なんかよくわかんねーけど、服とかはべつに関係なくね？」無分別な若人わこうどの、いかにも頭の悪そうな口調だった。「やりすぎだよな」「いかれてんじゃねーの？」「もともとな……」「フツーじゃねえし」「あーあー、かわいそうに……」「わかってねえんじゃね？」「ていうか、勘かん違ちがい？」「気づけよ。実際、嫌きらわれてんだって」「やべえから、逆らわねえだけで」「怖こわい怖い」「義とか……」「馬鹿じゃねえの」「やーめてくれよなあー。ここ、エルデンだっつーの」「おかしいのは、むしろおまえらのほうですから！」「なあ？」「てか、砦とりでとか落とされて」「かっこわる」「見かけ倒しっつーこと？」「たいしたことねー」「時代はやっぱＳＩＸだよな！」「ＳＩＸ最高！」「ＳＩＸさまぁッ！」「リヴァイス！」「リヴァイス！」「リヴァイス！」「リヴァイス！」「リヴァイス……！」



痴しれ者ものがＳＩＸの名を連呼する。愚ぐ物ぶつが悪徳再生リヴァイスを叫さけぶ。死神の中に怒いかりは芽生えない。ただただ虚きよ脱だつするのみだ。萎なえる戦意を、だが、己おのれで鼓こ舞ぶして育て、研とぎ澄すまさねばならない。

羅叉は亡なき先代〝太たい陽よう鬼き〟デニス・サンライズとは

違う。先代には愛があった。大いなる愛が。強き愛が。先代が打ち立てた義の根本は、人に対する広くて深い愛だ。死神と称しようされる羅叉には、しかし、愛がない。一振りの剣けんでしかない男には、愛で出来た義の外側をなぞることしかできないのだ。義とはおそらく、人を愛することで、愛する者たちを守ることなのだろうが、俺にはただ、先代が一つの形にしてくれた義を貫つらぬくことしかできない。

ヨハン・サンライズ。

今さら詮せん無なきことではあるが、貴様にはできたはずだ。義ち父ちを愛し、愛され、その愛に応こたえんがため、愛する義父の義を支えんがため、憎にくまれ役を買って出た。女を愛するがゆえに、その手でふれることすらしなかった。貴様は隊士の一人一人、その顔も名も経歴も知っていた。その生も死も一人で背負おうとしていた。貴様は愛を知っていたはずだ。

貴様に日輪を継つげと言われたとき、俺はあくまで拒こばむべきだった。本来は貴様こそが秩ちつ序じよの番人の次なる太陽となるべきだった。「月げつ明みよう」を手に貴様の剣となって血肉を撒き散らすのが俺に似合いの役回りだった。詮無きことだ。

貴様は琺瑠フオールらを逃がして死んだ。恰かつ好こうをつけて、一人きりでくたばった。

俺は貴様が嫌いだった。凰おう州しゆう難民の俺たちをいつも遠くから物欲しそうに見ていた貴様が嫌いだった。誰かが手をさしのべても、すっと身を退ひくいじけた根こん性じように苛いらつかされた。それでいて、誰よりも先んじて我が身を盾たてにしようとする潔いさぎよさと果断さが憎かった。頭が切れて一歩も二歩も前を行っているくせに、全員の歩調に気を配って、いつの間にか最さい後こう尾びにいるすかした態度が気にくわなかった。貴様に俺の何がわかる。それなのに、貴様は見抜いていた。何もかもお見通しだった。俺は貴様が嫌いだ。生きていても死んでも、反へ吐どが出るほど大嫌いだ。

だが、貴様は死ぬべきではなかった。

秩序の番人には、俺たちには、俺には、貴様が必要だったのに。

見ろ。あの阿あ呆ほうどもを。屑くずどもの巫ふ山ざ戯けた反応

を。

　こうなることがわかっていなかったわけではない。琺瑠には面と向かって反対された。異論を唱えたい者は他ほかにもいるだろう。リヴァイスの奇ゲ襲リ劇ラを潰つぶす。俺がやっていることは復ふく讐しゆうですらない。八つ当たりに近い。愚行だ。貴様ならば、剣を抜いてでも俺を止めただろう。そもそも貴様がいれば、俺はこんなことをしなかった。

　銀の砦で多くの隊士が命を落とした。貴様をふくめて八十九人も死んだ。しかし正直に言えば、八十八人より貴様一人を失ったことのほうが俺には痛手だ。口くち惜おしくてたまらぬ。それでも貴様は俺に言うだろう。「そんなことをして、私が生き返るのかね」と。薄うす笑わらいを浮うかべ、俺を正そうとするだろう。「君が今、我が団を束ねる者として何をなすべきか、それを第一に考えるがいい。できぬのなら、日輪で脳髄を抉えぐって自決しろ」と。貴様は見み透すかしているのだ。俺は自決などしない。怨おん敵てきの喉のど笛ぶえに噛かみついて相あい討うちに持ちこむ以外の死は選ばぬ。わかった上で貴様は言うのだ。貴様の声が聞こえるようだ。それなのに、貴様はいない。なぜだ。

　調子づいている馬ば鹿か者ものどもの間ま抜ぬけ面づらを見ていると、腹の底がつめたくなってゆく。同時に乾かわいてゆく。

　無口で無表情ゆえ、あまりそうは感じられないが、じつは気の短い李童晏がつかつかと一人の阿呆に歩みより、その喉元にモトロール刀の切っ先を突つきつけた。「やかましい蠅はえめ」

　交差点は水を打ったように静まりかえった。

「勘違いするな」李童晏の口調は殺意で削けずって磨みがいたように平板だった。「我が団は貴様らのごとき腑ふ抜ぬけどもの支持など必要としていない。我らはただ義の道をひた走る。行く手に障害となりうる物があれば即そつ刻こくこれを除く。たとえそれが一いっ匹ぴきの蠅であろうと、だ」

「殺すのかよ！」後ろのほうで誰かが叫んだ。「何もしてねえのに殺すってのか！　それじゃあ、てめえらのやってることは悪党バスターと変わらねえじゃねえか！」

「今ほざいた者」李童晏は声のしたほうへと顔を向けた。「出てこ

い。口を塞ふさいでやる」

　群衆がざわめいた。非難めいた声もいくらかあがったが、大多数は明らかに腰こしが引けている。李童晏は冗じよう談だんとも脅おどしとも無む縁えんで、やると言ったら必ずやる男だ。そんなことは、李童晏の目を見れば誰でもわかるだろう。

　羅叉は細い息を吐はいた。「もういい、李童晏」

「総長」李童晏は羅叉を一いち瞥べつして、だが、刀を引こうとはしなかった。「ですが──」

「いいと言っている。彼らを皆みな殺ごろしにしたところで、何の益もない。ただ──」羅叉は阿呆どもをざっと見まわした。「我らの気がすむだけだ」

　死神は李童晏ほど純ではない。威い嚇かくもする。それが有効な手段ならば、計略、陰いん謀ぼうを企くわだてることも厭いとわない。阿呆どもは今にも逃にげだしそうだ。ざまをみろ。くだらぬ。

　くだらぬことを。

　俺は自ら我が団の義を貶おとしめている。自覚があっても、俺は俺を止められぬ。

「覚えておくがいい」羅叉は身を翻ひるがえしながら自じ嘲ちようをこめて言い捨てた。「俺は死神だ。先代とは違ちがう」

「──ンンンンー……」飛燕フエイヤンはこぢんまりとしたアジトのソファーの上で、足をバタバタさせながら後ろ頭をボリボリ掻かいた。「しっかし、アレだよなァー。ＳＩＸかァー。ムタクソおもろそォーだよなァー。超ちよう級きゆう楽しそォーじゃね？　なんッかよォー。最近そォーゆンもなかったしよォー。身体からだ余ってるっつーか。バトりてェーッつーか。バトバトしてェーッつーか」

「それはいいが」荊王ジンワンは冷蔵庫の前にしゃがんで扉とびらを開け、飛燕を見ずに言った。「服を着たらどうだ。そんな恰好をしていたら、身体が冷えるぞ」

「あ……？」飛燕は自分の身体を見まわした。タンクトップとショートパンツしか身につけてなかった。フードが付いた厚手の上着だけではない。その下に着ていた長なが袖そでのシャツ二枚も、グローブも靴くつ下したも、そのへんに脱ぬぎ散らかされている。「……うぇ？　オレ、いつ脱いだんだっけ？　マルッキシ覚えてねェーし」

「さっきだ」荊王は立ちあがって冷蔵庫からとりだした瓶びん麦ビ酒アの栓せんを親指で抜くと、そのまま口をつけてぐびりと飲んだ。「暑い暑いと裸はだか同然になって熱を出す。毎度のことだ。いいかげん気をつけろ」

「ンー」飛燕は左右の足裏をくっつけて足首を握にぎった。「それよっかよォ。ジン、テメ、一人で飲んでンじゃねーよ。ずるっ子だなァー。オレにもくれよ」

　荊王は顎あごをしゃくって瓶を示した。「お前にこれは早い」

「アホゥ」飛燕は思いきり顔をしかめた。「オレのこといくつだと思ってんだよ。つーかよォ。ンなこたァーわかってんべよ。オレの実じつ年ねん齢れいなんかよォー。常識だべや。それなりに長なげェーつきあいなわけだしよォー」

「熱い茶を淹いれてやる」荊王は決して広いとはいえないアジトの一角を占しめているキッチンへと向かった。「それで我が慢まんしろ」

「ビアビアビアビアビアァー！　オォーレェーはァー！　ビアが飲みてェーんだっつーのビアがァー！　ビア飲ませろビアビアビアビアァー！」

「駄だ目めだ」

「なんでだよォー」

「いいから、服を着ろ」

「着ねェーよッ。ビアも飲ましてくンねェーヤツの言うことなんか、なんで聞かなきゃなんねェーんだよッ。やってられっかッ」

「餓が鬼きか……」

「アホぅ。オレァー大人だっつーのッ」

「だったら、大人らしくしろ」

「オレァーどっからどォー見たって大人だっつーのッ。彼女だっているっつーのッ」

「ユリカ・白雪スノーホワイトか……」荊王は呟つぶやくようにそう言って、キッチンの調理台に麦酒の瓶を置き、色眼鏡サングラスのブリッジを右手の中指で押しあげた。

　何か言いたいことでもあるのか。飛燕は頬ほおをふくらませて待ってみた。それなのに、荊王はいつまで経たっても口を開こうとしない。

「……ンだよ」

「いや」荊王はもう一度、色眼鏡の位置を直すと、戸と棚だなから薬や缶かんやら小さな土瓶やら茶葉の入った缶やらを出した。

「まァー……」飛燕は足裏を打ちあわせながら鼻の下をこすった。「彼女とかゆったらユリィに怒おこられんだけどよォー。けど、つきあってるっぽいと思うんだけどなァー。イヤ、オレも初めてだし？　女とつきあったのとか。わッかんねェーとこもあンだけど……正直？　どォーすンのがフツーなンかなァーとか……べッつにィー？　フツーじゃなくたっていンだけどよォ。けどでもまァー、気になるっちゃァー気になるべよ？　相手がいることだし……？」

　荊王は着々と茶の準備を進めている。闇やみ市いちをとりしきっている龍りゆう州しゆう連合の双そう壁へきの一方、王龍の頭目ともあろう者が、最近、何を血迷ったか、料理だの何だのに凝こっているようだ。ぜんぜん似合わないのだが、どういうわけかこれがけっこうな腕うで前まえで、なかなか旨うまいものをパパッと作ってみせたりする。ただ、手下どもの前ではそんなことはおくびにも出さない。荊王が料理をしたり自分で茶を淹れたりするのは、おそらく一人きりのときか、あとは、秘密のアジトでこうして飛燕と密談するときくらいだ。

「そォーいェばよォー」飛燕は右足をのばして、床ゆかの上着を足の指で挟はさんだ。「ユリィはアレなんだよなァー。茶ァーマニ

ア？　みたいな」

　荊王がこっちを向こうとして、やめた。「ふむ……」

「すっげェーよ。コレクション？　つーの？　なんか──」飛燕は足指で挟んだ上着を持ちあげて羽織った。「仲間とかも、めずらすィーのめっけたら買ってきてくれるとかゆって。オレもよォー。闇市でよさげな茶ァー買ってってったことあンだけど、けっこー喜んでたなァー」

「そうか」

「だけどユリィ、料理はなァー。へたっぴなンだよなァー。食えっけどよォ。オレはね？　でも、上手ではねェーんだよなァー。傷つけちまうかもしンねェーし、ンなことァー口が裂さけたってゆえねェーけど」

「ほう……」

「そこもまァー、かわいィーんだけど？　とかゆって。にひひひひ」

「お前は」荊王は飛燕のほうに顔を向けて小さな息をついた。「本当に、ずいぶん好きなんだな。あの女のことが」

「たりめェーじゃん」飛燕は、ふん、と鼻を鳴らした。「悪わりィーかよ？」

「悪くはない、が──」荊王は薬缶に目を戻もどした。「難なん儀ぎだな。ＺＯＯ自体はともかく、他ほかとの関係もある。あそこは園長マスターが並じゃないだけに、いろいろあって複雑だ」

「関係ねェーよ。ンなこたァー」

「お前がただの飛燕なら、な」

　飛燕は舌打ちをして、何か言い返そうとしたが、言葉が浮うかばなかった。メンドくせェー。以前ならそんなふうに言い捨てていたかもしれないが、今はもう無理だ。

　ユリカとは別次元だとしても、手下たちのことはかわいい。とくに、龍州から苦く心しん惨さん憺たんして流れてきた奴やつらや、

第六区〝屑くず街がい〟で生まれ育った貧しい連中には助けが必要だ。飛燕には力がある。そうした者たちに手をさしのべて、最低限の暮らしを送らせてやる。その程度の力は龍州連合に備わっているのだ。暮らしを立ててやれば、彼らは龍州連合のために身を粉にして働く。働いたら働いたぶんだけ旨いものを食わせて、粋ＣＯＯＬな服を着せてやる。それが親分というものだ。手下どもはいい親分を慕したう。忠誠を誓ちかう。ときに親分のために命すら擲なげうつ。本当にかわいい連中だ。

　飛燕は溜ため息いきをついて、首の後ろで手を組んだ。「テメェーはどォーなんだよ、ジン」

「どうとは」

「一時期、かなァーり……なんつーの？　執しゅう着ちやく？　つーの？　してただろ。アイツだよ、アイツ。マリアローズ」

　荊王は色眼鏡のブリッジに右手の中指をあてたが、動かさなかった。ややあってブリッジから指をそっと離はなし、首を左右に振ふった。それだけだった。もしかしてっつーか、やっぱりつーか、ふれねェーほォーがいいっぽい……？

「まァー」飛燕は口をへの字に曲げて肩かたをすくめた。「今回はなァー。番人のヤツらが絡からんでやがっからよォ。アイツらさえいなきャァーなァ。問題ナッシングなんだけどよォ」

「不思議なクランだな、ＺあＯそＯこは」

「ユリィとかいるしなァー」

「お前はそればかりだ」

「イヤ、ソレばっかしとかゆーけど、オレだってけっこーアレよ？　偉えらくなってきたっつーか。ボスっぽくなってきたっつーか。自分でゆーのも何だけど」

「そうだな」

「アラ……？　そこ、フツーに認めちゃう？」

「事実だからな」荊王は焜こん炉ろの火を止めて、顎あごをしゃくってみせた。「それはいいが、とりあえずちゃんと服を着ろ」

「へいへい」飛燕は長なが袖そでのシャツやら靴くつ下したやらを拾った。うっせーヤツだし、変態だけど、なんつーか、わりと悪くねェーヤツなんだよな──とか思うオレ、キモッ。でも、マジでそんなカンジだからしょォーがねェーか。

Omenage 899 6th revolution 10th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.2

烙印を押す者は

　秩ちつ序じよの番人は現在、大きく二手に分かれている。

　一つはマシュー・シュナイデル副長率いるアサイラム守備隊で、もう一つはそれ以外だ。

　それ以外のほうは「本隊」と呼ばれているようで、総勢二百四十六名だったか、当然、彼らは二代目総長〝死神〟羅ラ叉サの指揮下にある。

　銀の砦とりで陥かん落らくから十二日。住まいを失った秩序の番人本隊は、野の良ら犬いぬのようにエルデンをうろつき回っている──わけではない。彼らは市中を巡じゆん回かいしたり、リヴァイスの奇ゲ襲リ劇ラ潰つぶしに精を出したり、情報収集をしたりと、なかなか、というか、かなり多た忙ぼうな毎日を送っているみたいだけれど、寝ね床どこだけはしっかりと確保している。

　その場所というのが、何を隠かくそう、第十一区第二王立銀行内及およびその周辺の金こん剛ごう獅じ子し公園だったりするのだっ……！

「──するのだっ！　じゃないって……」

　思わず自分で自分の独り言に、それも胸中の呟つぶやきに、つっこみを入れてしまった。

　マリアローズはあたりを見まわした。小声だったので、誰だれも気にしなかったようだ。よかった。よござんした。ほっと一安心。でも、あー、何なんだろ、この空気。おっかしーと思うんだよねー。ここ、棒読みでお願い。はい、もう一回。おっかしーよねー。ここって、どこだっけ？　第二王立銀行内動物園事務所だよねー。ＺＯＯのたまり場っていうか、隠れてないけど隠れ家っていうか、そんなかんじの場所だよねー。だけど、今、動物園事務所名物大だい円えん卓たくを囲む椅い子すに座ってらっしゃる面々のほとんどはＺＯＯじゃないんだよねー。まあ、ＺＯＯはもともと小所帯で、それなのにこの動物園事務所はやたらとおっきくて、ＺＯＯが全員集合したとしても──めったにそんなことはないんだけど、すっかすかで、だだっ広く感じられて、慣れるまではちょっと落ちつかなかったりもしたけど、さすがにもう慣れまくってるし？　こうぎゅうぎゅう詰づめだと、変なかんじどころか息苦しかったりも

して。

　──というわけで、二十時を回った動物園事務所には、園長マスタートマトクン以下ＺＯＯの六名と、秩序の番人からは羅叉総長、琺瑠フオール副長、各隊の隊長、隊長補、三十名ばかりの皆みな々みな様さま方がご出席しやがりまして、連合会議とやらが執とり行われている最中なのだが、諜ちよう報ほう部隊的な位置づけの無名隊から現状の報告がなされたあとは、重い、重い、やたらめったら重い空気が立ちこめまくっていて、誰も、誰一人として口を開こうとしない──そんな状態が、もう三分以上もつづいていたりする。

　三分、か。考えてみると、そこまで長くはない。

　マリアローズは、でも、それほど気が長いほうではないのだ。というか、わりと短い。腕うで組ぐみをして黙だまりこくっている傷きず跡あとだらけのおっかない顔をした死神くんにも、ぺらぺら資料をめくっている東方美人の琺瑠さんにも、死神くんや琺瑠さんと似たり寄ったりだったり、その中間くらいの態度でいる他ほかの連中にも、あのー、何やってるわけ？　てゆうか、喋しやべろうよ？　会議なんだしさ、会議。わかる？　会議って、何かを決めるために話しあうことなんだよ。話さないとさ。何も始まらないわけだし──みたいなことを言いたい気分だ。

　言えないけどさ。さすがに。やっぱり、遠えん慮りよっていうかね。そういうのはあるし。

　マリアローズはそっと息をつき、隣となりの席に視線を向けた。

　トマトクンは死神と同じように腕組みをして、目をつぶっている。うつむき加減だ。というか、少しずつ、ゆっくりと顔が下を向いてゆき、あるところで、がくん、となった。

　頭が持ちあげられた。瞼まぶたはまだ閉じられている。

　また顔が下を向きはじめた。

　マリアローズは耳を澄すましてみてから、うなずいた。「……うん。寝てるね。これは。絶対、寝てる」

　あえてちょっと大きめの声で言ってみた。トマトクンは「む」と短く唸うなって背筋を伸のばし、目には見えないおもりでも引っかけているのか、やたらと重たそうに瞼を押しあげながらマリアロー

ズのほうに顔を向けた。「……ん。何だ。何かあったか」

　マリアローズはにっこり笑ってみせた。「あったよ」

「そうか……」トマトクンは大型の肉にく食しよく獣じゆうみたいに雄ゆう大だいなあくびをして、ゆっくりと一同を見まわした。それから、マリアローズに顔を向けなおした。「で、何があったんだ」

「きみが爆ばく睡すいしてた。会議中なのに。しかも、内輪だけじゃない、連合会議なのに」

「うむ……」トマトクンは首を縦に振ふりかけて、途と中ちゆうでやめた。「いや。俺は寝てなかったぞ。たしかにちょっと眠ねむかったが」

「ふーん……」マリアローズはできるだけそっけない返事を心がけた。「そ」

「ああ」トマトクンはもう一度、大円卓の面々をざっと見た。「違ちがうからな。俺は寝てない。で、何だったか」

「はい……」琺瑠は咳せき払ばらいをした。「我々が把は握あくしている現在の状じよう況きようについて、一通り報告させていただいたところです」

「ふむ」トマトクンは先を促うながすように琺瑠に視線を送った。

　琺瑠は気まずそうに目をそらした。「とりあえずは、そこまでです」

「なるほどな」トマトクンはうなずいてから、片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげた。「……む？　それだけか？」

「つまり──」マリアローズはつい口を出してしまった。「何も進んでないってこと」

　琺瑠はうつむくというよりもうなだれてしまった。「申し訳ありません……」

「謝ることはなんッッ……にもッ！　あらへんでえ！」半魚人は椅子から腰こしを浮うかして大円卓を両手でバッチーンと叩たたい

た。「これはいわゆるっちゅうか、そもそもっちゅうか、かっちりばっちり連合会議なわけやからな！　会議が進展せえへんのは、わしらにも──いや！　むしろッ！　このわしにも責任はあるっちゅうわけや！　決して琺瑠はんのせいやあらへん！」

「そうそう。ぜんぶきみが悪い」

「ヲイヲイヲイヲーイ!?　わしだけかぁーいっ……!?　仲間やろ!?　喜びも悲しみも責任も分かちあおうや！　ちゅうか、何とぞどうか分かちあってくれまへんか……!?」

「なら・土下座してくだサイ」ピンパーネルはピッと床ゆかを指さした。

「なーんや、そんくらいやったら……」馬ば鹿か魚は半はん端ぱ魚のくせに蛙かえるみたいにぴょーんと跳とんで床にひれ伏ふし、すぐに立ちあがった。「──て、なぁーんで土下座せなあかんねん！　そこまでせんかってもなあ！　責任くらい！　責任くらい……！」

「というか」ユリカはいつもどおり渋じゆう面めんを作っても愛らしい。「うるしゃいわよ、カタリ。大事な会議なんだから、ふじゃけないで」

「本当に……」サフィニアは消え入りそうな声で同意した。「……正直言って……恥はずかしいです……かなり……」

　腐くされ半魚は「がっぴーん！」と叫さけびながら斜ななめに跳んで床に倒たおれこんだ。そのまま二度と起きあがってこなければいいのだが、これがまた大ゴ脂ツ羽キ蟲ー並みにしぶといのだ。放ほうっておいてもほどなく復活するに違いないから、決して誰も餌えさを与あたえたりしないように。

「まったく……」マリアローズは溜ため息いきをついて、今は誰も座っていないカタリの椅子の隣に目をやった。そこは最初から空席だ。

　この連合会議、ＺＯＯからはトマトクン以下六人しか出席していない。ルーシー・アッシュカバードは、このところずっと、トマトクンの家できゅーとーいつ緒しよに留守番をしている。

　マリアローズとしても迷うところではあった。でも、やっぱり連れてこなくてよかったのだろう。言うまでもなく、秩ちつ序じよの

番人にとってＳＩＸは宿敵だ。どうもルーシーはその息むす子こらしい。「へー。そうなんだ。だから何？」と、しれっとした顔で言えない者は、幸いＺＯＯにはいない。ただ、秩序の番人はどうか。彼らにしてみれば、けっこう複雑な心境──どころではないだろう。恨うらみ骨こつ髄ずいに徹てつす相手の血を引いている。それだけで信用に値あたいしない、許せない。そんなふうに思う者がいたとしてもおかしくない。もともと頭がカッチコチで融ゆう通ずうがきかない人たちだし。余計な摩ま擦さつを避さけるためにも、ルーシーはできるだけ番人と接せつ触しよくさせないほうがいい。もういっそのこと、何らかの形で決着がつくまで、家に閉じこもっていてもらったほうがいいのかもしれない。そのほうがややこしくなくて、僕らもやりやすいし。番人にとってもそうだろうし。

　ルーシー本人は、でも、どう思っているのか。

　マリアローズは軽く頭を振った。また溜息が出た。

　よそう。今はいい。ルーシーのことはあとで考えよう。そうやって棚たな上あげにしてきた結果がまさしく現在なのだけれど、ベアトリーチェが見習おうとしているモリー・リップス式の思考法をマリアローズも取り入れるべきだ。すなわち、物事には優先順位というものがある。いっぺんに何もかも、というわけにはゆかない。

「で」マリアローズは琺瑠を、それから勇気を振りしぼって死神を見た。「秩序の番人としてはどうするつもりなの？　今後の方針っていうのかな。そのあたり」

　死神の眼光が急に鋭するどくなった。あのー、出ちゃってるよ？　殺害オーラ。こ、怖こわいんですけど。なんでいちいち殺気とか漲みなぎらせるかな……？

「むろん、潰つぶす」

「我々としては」すかさず琺瑠が補足というか通訳してくれた。「ジェノシドを名乗るＳＩＸ一党をなんとしても壊かい滅めつさせ、銀の砦とりでを奪だつ還かんする。それ以外の選せん択たく肢しはありません」

「悪は滅ほろびねばならん」

「彼らを放置すれば、エルデンにさらなる混こん沌とんの嵐あらし

が吹ふき荒あれることになるでしょう。強者のみが好き勝手に振る舞まい、弱者は虐しいたげられ、奪うばわれ、殺あやめられる。我々はそのような状況を決して座視しません。それが先代によって打ち立てられし義であり、我々の旗印なのです」

「たとえ一兵となろうと、悪は悉ことごとく殺す」

「秩序の番人がこの地上にあるかぎり、それがたった一人であろうと、我々はジェノシドを斃たおすために剣けんを握にぎることをやめません」

「ＳＩＸを殺す」

「いずれにせよ、ジェノシドの首しゆ魁かいＳＩＸを亡なき者にしなければ、戦いは終わらないでしょう。戦略上の要点はまさしくＳＩＸを抹まつ殺さつすることで、我々の行動はすべからくその目的に集約されるべきだと考えております」

　死神が「以上だ」と言って口を一文字に結ぶと、琺瑠は軽くうなずいてみせた。

　マリアローズは軽く感動してしまった。何、このコンビネーション。

「だったら」トマトクンはゆっくりと首を左右に曲げた。「話は簡単じゃないか。銀の砦を攻せめればいいだろう」

「きみは報告を聞いてなかったから……」マリアローズは顔をしかめた。「ＳＩＸがエルデンの方々に出しゆつ没ぼつしてるって情報が入ってるんだよ。銀の砦を攻めても、そのときＳＩＸが中にいる保証はないってこと」

「ふむ」

「それに……」琺瑠は言いづらそうに言った。「お恥ずかしいかぎりですが、我々も全面攻こう撃げきに打って出るような態勢が整っておりませんでした」

「先代がおわしたころは」死神は忌いまいましげに円えん卓たくめがけて拳こぶしを振ふりおろそうとしたが、中ちゆう途とで力をゆるめた。「──こうではなかった。いつの間にやら我が団は惰だ弱じやくになっていた。いついかなるときも総長の号令一下、総員火

の玉と化して悪にぶつかってゆく。かくあらねばならぬのに。ひとえに俺の力不足だ」

居並ぶ番人たちは一様に、慚ざん愧きに堪たえない、とでも言いたげな顔つきになった。

おーい……。

口を挟はさみそうになって、なんとかこらえた。一いつ瞬しゅん、かちんときたりもしたのだけれど、このていたらくでは怒おこるのもバカバカしい。呆あきれて物も言えないというやつだ。

たしかに番人は弱くなったのかもしれない。太たい陽よう鬼きが存命だったころの番人は、良くも悪くも、もっとふてぶてしくて武ぶ張ばっていた。人数は今より少なかったはずだが、何かこう、異様な集団という雰ふん囲い気きがあって、理り屈くつ抜ぬきで、怖い、という印象があった。死神にしても、腕うではだいぶ上げたようだけれど、見境のない人ひと斬きり然としていた昔のほうが凄すごみがあった。総長としても、もちろん、あの太陽鬼とは比べるべくもない。一人の戦せん闘とう者としても、やはり太陽鬼の域には達していないだろう。どうしても、小こ粒つぶな印象がぬぐえないのだ。

昔の秩序の番人が、偉い大だいな天才に率いられた強固な異能者集団だったとしたら──今は、秀しゅう才さいたちが手をとりあってなんとか屋台骨を支えている仲良しグループ、といったふうにさえ見えなくもない。

結局、少なくとも現在のところ、羅叉は秩序の番人の大黒柱にはなりえていないのだ。彼らの中心はあくまでも義であって、それはつまり、先代デニス・サンライズなのだろう。死者は、だが、彼らを結束させることはあっても、ああしろこうしろと指図してくれるわけじゃない。もしかして、故人の威い光こうを利用しつつ、その役割を果たしていたのは、ヨハン・サンライズ副長だったのか。

マリアローズにとっては、初めて会ったときから気にくわないやつではあった。とはいえ、死んでしまったとなると、惜おしい人物を亡くした、というくらいの気持ちには──なるような、ならないような、微び妙みようなところではあるけれど、秩序の番人にとってはおそらく、絶対に必要な人材だったのだ。

　マリアローズは腕組みをして、右手の人差し指で顎あごの先をさわった。だんだん見えてきたような気がする。これからどうするべきか。何を考えるべきなのか。違ちがう。そこじゃない。その前だ。問題はそこまでいっていない。

「う……」マリアローズは低く呻うめいて顔をゆがめた。

　なんか、とんでもないことを思いついちゃったかも。

　や、でも、これはないよね。うん。ない、ない。ありえないから。面おも白しろいアイディアだとは思うんだけどさ。面白すぎるっていうかね。波乱を呼んじゃうことになるし。だけど、なんか、それがよくないんじゃないかなーとか、思わなくもないんだよね。波風立てないで、とかさ。なんとなく、とか。馴なれあいみたいな。そんな空気が蔓まん延えんしてるような気もするんだよね。だってさ。この期ごに及およんで、だよ？　こんな状じよう況きょうに追いこまれてるのに、ちょっとこう、覇は気きがないっていうか。ゆっても、僕らは助すけっ人となわけだし？　まあ、因いん縁ねんとか関係とかいろいろあって、当事者にかなり近いっていうか、ほとんど当事者だったりもするけど。でも、主役じゃないはずなんだよね。脇わき役やくの立場からすると、主役にぐずぐずされると、イライライライライラしてたまらないっていうか。しっかりしてくれない？　いいかげんにしないと、主役降りてもらうよ？　まあ、僕が代わりに主役の座に──なんてことはないけどね？　あたりまえだけど。器うつわじゃないし。

　マリアローズはこっそりトマトクンの様子をうかがった。視線を感じたのか。トマトクンがこっちを見た。目があってしまった。

　マリアローズは手招きした。「ちょっと」

「む？」トマトクンはマリアローズのほうに身体からだを倒たおした。耳打ちしようかとも思ったけれど、少し長い内ない緒しよ話ばなしになりそうだ。

「ちょっと……」マリアローズはトマトクンの手を引っぱって、事務所の隅すみのほうに連れて行こうとした。少し考えて、ユリカとサフィニア、ピンパーネルにも小さく声をかけた。「みんな、きて」

　五人で壁かべ際ぎわに集まると、半魚人も芋いも虫むしみたいに

這はってきた。踏ふんづけてしまってもよかったけれど、放ほうっておいた。ＺＯＯの六人は円えん陣じんを組んで密談した。トマトクンは「ふむ」と顎をさすってうなずいた。「いいんじゃないか」

「いいの……!?」マリアローズは目を剝むいた。「──や、僕が言いだしたことだけど……」

「わたしも賛しやん成しえいだわ」ユリカはぷうっと頰ほおをふくらまし、愛らしく眉まゆをひそめて大円卓のほうを見やった。
「だって、あの人たち、なんだか……」

「……わたしは、ちょっと……やっぱり、かなり……心配ではあるけど……」サフィニアはふるふる首を横に振った。「でも……トマトクンが、それでいいと言うなら……」

　ピンパーネルは微び笑しようを浮うかべてうなずいた。「はイ」

「腐ふっ腐っ腐っ……」半魚人が腐くさり果てた笑い声を立てた。
「なんやおもろいことになりそうやのう」

　マリアローズは肩かたをすくめた。「面白がってる場合じゃないんだけどね……」

「まあ」トマトクンは大だい円えん卓たくのほうに身体を向けて、やけに大きな声で言った。「今のあいつらを見たら、デニスのやつもさぞかし腹を立てるに違いないしな。悔くやしくて生き返ってきたくなるかもしれんが、あいにくそうもいかんだろう」

　動物園事務所がざわついた。中には椅い子すから腰こしを浮かせた者もいるが、誰だれも立ちあがりはしなかった。

　トマトクンは悠ゆう然ぜんと──それどころか、傲ごう岸がん不ふ遜そんを絵に描かいたような姿勢、表情、身のこなしで自分の席に戻もどった。マリアローズたちも園長マスターにつづいた。

「羅叉」トマトクンは哀あわれむような、あるいは蔑さげすむような眼まな差ざしを死神に送った。「秩ちつ序じよの番人の前身、モラリティに俺はいた。当時はインモラルって連中がエルデンで幅はばをきかせていてな。俺たちはやつらを完かん膚ぷ無なきまで叩たたきのめした。そのあとデニスは秩序の番人を結成して、肩の荷が下りた俺は去った。そうはいっても、ただ行方ゆくえをくらますってのも愛あい想そがない。だから、金を置いていった。置き土産み

やげってやつだ。使うあてがなくてオメガバンクに預けといた金なんだが、たしか、八百億くらいだったかな」

「はっ──」マリアローズは目玉が飛びだしてどっかへ行ってしまうのではないかと本気で懸け念ねんした。開いた口も塞ふさがりそうになかった。

　動物園事務所は静まりかえっている。マリアローズと同じだ。全員、仰ぎよう天てんしているのだ。

　トマトクンがデニス・サンライズの旧友だということは皆みな、承知しているだろう。その昔、志を同じくし、肩を並べて戦った仲間同士だということも、知っている者は知っているかもしれない。でも、八百億ダラー。そんな大金。てゆうか、ゼロがいくつ？　や、ゼロの個数はいいとしても、とにかく尋じん常じような金額じゃない。それを、何？　置き土産？　え？　あげたってこと？　ただで？　はあ？　バカ？　わかってるけど。そういう人だってことは。だけど、そんなお金、どうやったら手に入るわけ？　そういう問題？　じゃあ、どういう問題……？

「モラリティは貧びん乏ぼう所帯だった」トマトクンは片方の眉をつりあげて唇くちびるをゆがめた。「どいつもこいつも経済観念ってやつに欠けてたんだろうな。デニスにしたって、もともとはいいとこの坊ぼっちゃんだ。ろくでなしどもをぶちのめすことばかり考えていて、明日あしたの飯の心配なんかしてなかった。清せい貧ひんって言葉があるだろう。そいつを地でいっている連中だったが、結果的にそうなってただけだ。ようするに、お前らがずっと住んでて、こないだＳＩＸのやつに奪うばわれた銀の砦とりでは、俺がくれてやった金でデニスが建てたんだ。まあ、気持ちのいい連中だったしな。惜おしいと思ったことはない。一度もなかった。過去形で言わなきゃならん。残念だ」

　動物園事務所に微び妙みような空気が流れはじめている。もちろん、トマトクンがそう仕向けているのだ。わかってはいても、はらはらしてしまう。

「しばらく黙だまって見てたが……」トマトクンはわざとらしく特大級の溜ため息いきをついて、大おお袈げ裟さに首を横に振ふってみせた。「──お前らにはがっかりだ。俺とデニスたちが成し遂とげたことを、お前らは台無しにしちまおうとしてる」

羅叉の眉み間けんに刻まれた縦たて皺じわが深く、深くなってゆく。がっちりと組まれたその両りよう腕うでが小刻みに震ふるえだした。

「いいか」トマトクンは番人たちをぐるりと見まわした。「モラリティは百人もいなかった。俺たちの敵、インモラルは千人以上。もちろん、払はらった犠ぎ牲せいは少なくなかった。インモラルを倒すまでも、そして、俺は直接知ってるわけじゃないが、秩序の番人ができたあとだってそうだったんだろう。実際、モラリティで俺と一緒に戦ったやつは一人も残ってない。デニスが最後だった。俺以外は全員、死んだ。みんな本ほん望もうだったろうさ。やつらはそのために生きて、死んでいった。断言してもいい。デニスだって、あんな死に方をしたが、悔くいなんかこれっぽっちもなかったと思うぞ。一分一秒、あいつらは命を燃やして、燃やしつづけて、燃やし尽つくして、死んでいったんだ。それが、どうだ。お前らのざまときたら、とんだお笑い種ぐさだ」

そこらじゅうで憤いきどおりが噴ふん出しゆつして、充じゆう満まんしようとしている。でも、うなだれている番人も、肩を落としている番人もいた。怒おこっている者たちは図星だから頭にくるのだろう。意い気き消しよう沈ちんしている者たちは反論できないのだ。そうだ、まさしくそのとおりだと思っている。

「お前らには本当にがっかりだ」トマトクンは黄玉トパーズの瞳ひとみにひどく不ふ穏おんな光を宿らせて羅叉を見すえた。「とくに羅叉。お前は最悪だ。隊士たちをまとめきれんどころか、そいつを放ほう棄きして奇ゲ襲リ劇ラ潰つぶしなんぞにうつつを抜ぬかして──お前は憂うさ晴らしができていいのかもしれんがな。それが総長の仕事か？　違ちがうだろうが」

羅叉は歯は嚙がみしながら目を剝いた。「そんなことは……！」

「わかってるっていうのか？」トマトクンはせせら笑った。「だったら、なおのことだ。もう一度言うぞ、羅叉。お前は最悪だ。今のお前に秩序の番人の総長を名乗る資格はない」

「え──」と誰かがもらした。「な──」と絶句する者もいた。

「まさか忘れてないだろうな」トマトクンはすうっと目を細めた。「俺は二代目襲しゆう名めい式の立会人だ。その俺が宣告する。お前じゃあ駄だ目めだ。今すぐ総長を降りろ」

「降りっ……？」「ちょっと待て──」「そんな」「な、何を……」「部外者が……！」「なんてことを」「いいかげんにしろ！」「冗じよう談だんではないぞ！」「ここまで言われて──」

　トマトクンは野や獣じゆうの咆ほう哮こうで一いつ喝かつした。「黙れ……！」

　マリアローズはとっさに耳をふさいだ。ものすごいとしか言いようがない声だった。音量だけじゃない。迫はく力りよくというか、威い力りよくというか、何かとてつもないものが突とつ然ぜん大爆ばく発はつしたようなかんじで、その衝しよう撃げきはとにかく途と方ほうもなかった。騒そう然ぜんとしていた動物園事務所は一いつ瞬しゆんで静せい寂じやくの色に塗ぬり替かえられた。それも、空白とは違う、恐おそろしいほどに重苦しい、苦痛さえ覚えるような静けさだった。

　その凍こおりついた沈ちん黙もくの中で、ただ一人、トマトクンだけが泰たい然ぜん自じ若じやくとしていた。

　羅叉は人食い鬼おにの形相でトマトクンを睨にらみつけている。

　互たがいの視線は、だが、決して絡からみあうことがない。トマトクンが羅叉を相手にしていないからだ。ありとあらゆる面で格が違う。トマトクンは、その事実を態度で示しているのではない。ゆったりと構えてそこにいるだけで、自然と明らかにならざるをえないのだ。

「秩序の番人は俺がもらう」トマトクンはニヤリと笑った。「気にくわんやつはそう言え。俺が全員ひねり潰してやる」

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.3

争い奪う者たち

　円い形をしたサンランド無統治王国首都エルデンには、東西南北に一つずつ、合計四つの門がある。支配すれども統治せぬ我らが王キング・グッダーの居城シャイニンググローリーパレスがある市の中心から、北にまっすぐ延びているマキシマムＡＭドラゴン・ストリートの果てにそびえ立っているのが、そのうちの一つ、北ほく斗と門だ。

　北斗門は、他ほかの四つ──東門、南門、西門と違い、ただの方角＋門ではない名前を授かっている唯ゆい一いつの門だ。それに、他と比べて大きい。何しろ、馬車が三十台くらい横並びになっても余よ裕ゆうで通り抜けられそうなほどなので、無駄にバカでかい、と言ってもいいくらいだ。

　そんな北斗門は無用門と呼ばれている。それにはちゃんとした理由がある。こんなに大きくて、竜界ドラガンドの成せい竜りゆうでもつっかえずに通ることができそうなのに、この門を利用する者はほとんどいないのだ。なぜかといえば、北斗門を出ると、すぐクライド山脈にぶちあたる。今は鉱脈も涸こ渇かつしたというクライド大だい鉱こう洞どうを探検しよう、なんてことを考える物好きでもないかぎり、この門から外に出たりしない。当然、この門からエルデンに入ろうとする者もめったにいないので、エルデンが建設された初代キング・グッダーの時代は事情が違ったのかもしれないが、現在の北斗門はまさしく無用の長物以外の何物でもない。

　というわけで、北斗門の一帯は閑かん散さんとしている。守備についている魔ま導どう兵へいたちの姿が目に入るくらいで、人っ子一人いない、という状じよう況きようもぜんぜん珍めずらしくない。ふだんであれば。

　今日は違う。北斗門前のだだっぴろい舗ほ装そうされた道は、ほとんど殺気に近い熱気に包まれて、異様な賑にぎわいを見せていた。

　その中心は十メーテル四方の試合場だ。試合場といっても、地面に打ちこまれた四本の杭くいと、杭から杭へと張り巡めぐらされた縄なわで囲ってあるだけだったのだが、不ふ慮りよの事態を想定して急きゆう遽きよ、試合場から五メーテル離はなれた場所にも同じような囲いを作ることになった。つまり、十メーテル四方の囲いの外側に、二十メーテル四方の囲いがあるわけだ。

その外側には、純血のピユアブラツド司祭プリーストの鎧よろい兜かぶとに身を包んだ番人たち──だけではなくて、老ろう若にやく男なん女によ問わず、じつに雑多な、本当にいろんな連中が群がりに群がりまくっている。

エルデン市民は警けい戒かい心しんも強いが、好こう奇き心しんだって強い。そうでなければ、こんな危険いっぱいの街で暮らしたりしないだろう。もちろん、やむにやまれず、という者だってたくさんいるはずだ。でも、そういう人たちは息をひそめて、できるだけ目立たないように、堅けん実じつな生活を営んでいる。ともかく、物見高い人間は無数にいるのだ。よっぽど気をつけて密みつ裏りに事を運ばないと、どこからか話を聞きつけた連中がわらわらと集まってきかねない。

だから、ＺＯＯの園長マスタートマトクンが秩ちつ序じよの番人総長羅ラ叉サに上から目線で総長失格を告げ、挑ちよう戦せん状を叩たたきつけて、あれよあれよという間に、なぜか総長争そう奪だつ変則トーナメントを行うことになってしまい、そうと決まってからまだ丸二日も経たっていないのに──善は急げとばかりに、さっさと実じつ施ししようとしているのに、それなのに──何？　この情報の漏ろう洩えい具合？　ダダ漏もれじゃない……？

観衆の人数は、アサイラム守備隊をのぞいた番人が二百人以上いるはずだけれど、それ以外のほうが遥はるかに多い。番人の五倍、千人はいるだろう。いや、そんなものではとてもきかないか。
ちょっと数える気になれないので、もうよくわからないが、ぱっと見ただけでもリヴァイスのどぎつい服を着たバカ者の姿がけっこう目に入る。どいつもこいつも、年とし端はもいかないといったら大おお袈げ裟さだが、せいぜい二は十た歳ちくらい、たぶん大半は十代の若者たちだ。まさか、ジェノシドの一員ではないと思う。ただ奇ゲ襲リ劇ラでリヴァイスの衣類を手に入れ、身につけて調子に乗っているだけのクモソウ野フ郎オどもだろう。

番人たちも歩きまわって目を光らせ、そうした連中をチェックしている。今のところ、排はい除じよするつもりはないようだが、相手が番人に罵ば声せいの一つでも浴びせようものなら、何が起こるかわからない。そんな状態なのに、クモソウ野フ郎オどもは立ち去ろうとしないのだ。

完全に舐なめられている。

ようするに、かつてはエルデンの悪党バスターどもに忌いみ嫌きらわれ、恐おそれられていた秩序の番人の、これが現状なのだろう。

二十メーテル四方の囲いと十メーテル四方の囲いの間に設営された争奪戦運営委員会席で四囲に視線を送りながら、でも、それは──とマリアローズは考えたりしている。もしかすると、銀の砦とりで陥かん落らくで一気に表面化しただけで、徐じよ々じよに進行しつつあった変化なのかもしれない。

秩序の番人のイメージが、以前ほどガチガチでゴリゴリのタカ派といったふうではなくなってきている。なんとなくではあるけれど、マリアローズもそう感じていた。

たとえば、番人の総数が先代のときよりもだいぶ増えた。それに従って、女性隊士の人数が目に見えて多くなった。ＺＯＯにも最強の称しよう号ごうを持つユリカがいたりするし、女性がいけない、というわけではもちろんないが、やはり軟なん派ぱになったような印象はぬぐえない。

警護契けい約やくの件数も増加していたようだ。以前は秩序の番人の義に共鳴する支し援えん者が──もっといえば、デニス・サンライズの人ひと柄がらに惚ほれこんだ者たちが金を出しあい、銀の軍団ザ・シルバリイを支える。そのお返しとして、番人たちは彼らを守る。それだけではないかもしれないけれど、外野からはそんな形に見えていた。ところが最近は、保身を図はかって番人に金を出す者が大勢いる。ようするに、番人にとって警護は商売なのではないか。彼らの市中巡じゆん回かい、悪漢討とう伐ばつも、客寄せのためのデモンストレーションにすぎないのではないか。穿うがった見方かもしれないけれど、そう勘かん繰ぐらせてしまうところが、最近の秩序の番人にはあったような気がする。

すべては、とは言えないかもしれない。ただ、少なくともその責任の一いつ端たんは、争奪戦運営委員会席の近くにある争奪戦参加者席には座らず、地べたにあぐらをかいて腕うで組ぐみをし、瞑めい目もくしている二代目総長〝死神〟羅叉にある。それはもう間ま違ちがいない。

デニス・サンライズと比べて、羅叉はスケールが小さすぎる。一人の剣けん士し、あるいは現場の指揮官としては有能かもしれない。でも、数百人規模の集団を率いるようなカリスマ性は、残念な

がら備えていないのだ。

　ひょっとしたらそれは、長い年月をかけて培つちかわれてゆくものなのかもしれない。先代にも長い艱かん難なん辛しん苦くの道のりがあったはずだ。きっと最初から立派な総長だったわけではないだろう。二代目も、総長としての職責を五年、十年と全まつとうしつづけることで、自然と人格的な深みや広さ、名声を獲かく得とくしてゆく。そういうものなのかもしれない。

　ただ、今はそんな悠ゆう長ちようなことを言っていられるような状況じゃない。住すみ処かから追い立てられ、縁えんの下の力持ちを失った秩序の番人は、本来なら悲しみと憤いきどおりを力に変えて逆境を撥はね返さないといけないのに、ただ耐たえるだけで精せいーいつ杯ぱいなのだ。それどころか、乾かん季きの嫋たおやかな花のように、うちひしがれて枯かれかけているようにさえ見える。

　刺し激げきが必要だ。ガツーンとぶちかますような、大きな刺激が。

　この「第一回秩序の番人総長争奪変則トーナメント」はそのために仕組まれた。

　というか、マリアローズが思いついて、どうかな、ご意見ご要望ご批判をお寄せください程度の気持ちでトマトクンに話してみたら、あっさり、じゃあやってみっか、ということになって、やってみることになってしまった。

　トマトクンは他ほかの参加者たちとーいつ緒しよに、参加者席の椅い子すに腰こしかけて目をつぶり──たぶん、居い眠ねむりをしている。

　マリアローズは一昨日から全体的に引きつり気味な顔面の筋肉を両手で揉もんで、なんとかほぐそうとした。ダメだ。ぜんぜんやわらかくなってくれない。溜ため息いきが出た。

　でも、ほんとによかったのかな、これで。

「──よくないと思ったら、いくら俺でもあんなことを言ったりはし

ないぞ」

　昨夜、というよりも、まだ日は昇のぼっていなかったけれど、かぎりなく早朝に近かった。

　マリアローズは一いつ睡すいもできずにずっと自室のベッドで悶もん々もんとしていた。眠ねむろうとする努力にもとうとう飽あきて、何か飲み物でも口にしようと思い、キッチンに繋つながっている居間へ行ったら、トマトクンがソファーの上で横になっていた。昨日の夕食後、すぐにそこで眠りこんでしまい、自分の部屋で寝ねたほうがいいと起こそうとしたのだが、ぜんぜん目を覚まさなかった。しょうがないからタオルだの毛布だのを持ってきて、かけるというよりは身体からだに巻きつけておいたのだけれど、結局、そのまま眠りどおしだったようだ。

　マリアローズは冷蔵庫の中からりんごジュースの瓶びんをとりだしてコップにそそぎ、一息で飲み干した。瓶の中身がいくらか残っていたので、もう一杯ついだら空になった。少し考えてから、もう一つコップを出して、それには水を入れた。二つのコップを持って居間へと戻もどり、ソファーに──トマトクンの頭のすぐそばに腰を下ろした。

　ローテーブルにコップを置いて、しばらくじっとしていた。

　居間は薄うす暗ぐらかった。暇ひまになってきたので、トマトクンの寝ね顔がおを観察した。いつも思うことなのだけれど、トマトクンが眠っているときの顔はちょっと子供みたいだ。よく表情が変わる。唸うなる。身体のそこかしこを引っ掻かく。洟はなを啜すする。たまにいびきをかく。でも、すぐにやむ。髪かみの毛はぐしゃぐしゃだ。寝言は言わない。ただ、ふっ、とか、へっ、といったかんじで笑うことはある。何か夢でも見ているのだろう。微かすかにうなずくこともある。ときに眉まゆをひそめて、苦しそうな顔をする。

　なかなか苦く悶もんの表情がゆるまなくて、心配になった。

　ほっぺたを軽く叩たたいて名を呼んだ。

「トマト」

「……む」トマトクンは低く呻うめいて、左目だけゆっくりと開け

た。「マリアか……」

「大だい丈じよう夫ぶ？　うなされてたみたいだけど」

「うむ……」トマトクンは右目も開け、何度かまばたきをした。「まあ……そうだな。夢でも見てたのか……？」

「訊きかれても。僕にはわからないよ。きみのことでしょ」

「そうか」

　トマトクンは大きなあくびをして、のっそりと身体を起こし、髪の毛をめちゃくちゃに引っ掻きまわした。

　それから、十秒間くらい静止していた。

　マリアローズは、まさか、と思いながら顔をのぞきこんでみた。トマトクンは寝息を立てていた。

「……いいけどね、べつに」

「む？」トマトクンはパッと目を開けてマリアローズを見た。「何がだ？」

　マリアローズは肩かたをすくめてみせた。「なんでもないよ」

「ふむ……」トマトクンはローテーブルの上のコップに目をつけて、まず水を飲み、立てつづけにりんごジュースを飲み干した。「ああ……もしかして、お前のぶんだったか？」

「気にしないで」

「うむ」

「りんごジュースは最後の一杯だったんだけどね。いいよ。きみはずっとここで寝てて、喉のどもからからだっただろうし。水一杯じゃ足りなかったんだよね」

「む……」トマトクンは大おお袈げ裟さに顔をしかめた。「すまなかったな。今度、買ってくる。りんごジュースだな。わかった。覚えていられたらの話だが……」

　マリアローズは脚あしを組み、膝ひざに頬ほお杖づえをついて軽

く笑ってみせた。「冗じよう談だんだってば」

「お前──」トマトクンは訝いぶかしそうに片方の眉をつりあげて、じろじろとマリアローズの顔を見た。「寝てないのか」

　瞼まぶたが腫はれぼったくなってでもいたのだろうか。マリアローズは目の周りを手でこすってから、無む駄だなことだと思いなおしてうなずいた。「ちょっと、ね。いろいろ考えちゃってさ」

「まあ……」トマトクンはソファーの上であぐらをかいて、首筋をボリボリ掻いた。「あれこれ考えるのはお前の癖くせみたいなものだからな。ＺＯＯうちはそうでもないやつが多かったりもするから、お前のおかげでバランスがとれてるってところもあるんだろうが」

「ほんとにこれでよかったのかなって、ね」

「よくないと思ったら、いくら俺でもあんなことを言ったりはしないぞ」

「けど──」マリアローズは片膝を立てて両りよう腕うでで抱かかえた。「僕が言いださなかったら、こういうことにはなってなかったでしょ」

「それはそうかもしれんな」

「個人的にも、どうにかしなきゃっていうのはあるんだよね。どうにかしたいって気持ちは。ほら。アサイラムとか、リーチェとかのこともあったりするし。僕もＳＩＸには殺されかけたわけだし」

　トマトクンは誤って苦い物をのみこんでしまったような表情をした。「そうだったな」

「でも、相手は数が多いしさ。僕らを主体として考えた場合、ありていに言えば、秩ちつ序じよの番人の戦力を上手に利用しなきゃいけない」

「ところが、やつらときたら腑ふ抜ぬけばかりで、まるっきり頼たよりになりそうにない」

「そこまでひどいと思ってるわけじゃないんだけどね。なんていうか……」マリアローズは片方のほっぺたを膨ふくらませた。「会議

のときに、羅叉が言ってたでしょ。『ひとえに俺の力不足だ』って」



「うむ。今のはけっこう似てたぞ」

「そお？」物もの真ま似ねをしたつもりはない、と言いたいところ

だけれど、ちょっとそれっぽい声の出し方をしてしまったかもしれない。恥はずかしくて、笑ってごまかすしかなかった。「──とにかくさ、ああいうこと、みんなの前で言うのはいいとしても、言いっぱなしはまずいと思うんだよね。自分は力不足だけど、こうしたい、こうするつもりだから、みんなでがんばろう、とかさ。反省したらしたで、その先がないと、下の連中は困るでしょ」

「秩序の番人を動かしてたのは実質、ヨハンだったんだろうな」

「あ。トマトもそう思う？」

「あいつは餓が鬼きのころから頭がよかった。昔はもっと素す直なおだったがな。案外、デニスが生きてたころも、細かい部分はヨハンが決めてたんじゃないか」

「言い方はよくないけど」マリアローズは一つ息をついた。「まず芯を通さないと、使えないと思うんだよね」

「お前は少し似てるな」

「誰だれに？」

　トマトクンはニヤリとした。「ヨハンだ」

「えー……」

　間ま違ちがいない。いま鏡を見たら、確実にものすごくイヤそうな顔をしている自分がそこにいるだろう。

　トマトクンは肩を揺ゆらして、ヒヒヒ、と似合わない下品な笑い方をした。「そんな顔をするなよ。少しだけだぞ。似てるところがあるって話だ」

「や、似てないでしょ。少しも。ぜんぜん」

「そうか？　あいつも気が回るタチだったしな。ああ見えて、自分のことは二の次、三の次で、他人のことばかり考えてるやつだった」

「なんとなく、わからなくもないけど……そういう人だったっていうのは。でも、僕は違うよ。自分勝手だし。我わが儘ままでしょ。けっこう」

「どうだかな」トマトクンはまた、ヒヒヒ、と笑った。

「絶対、違うってば」

「お前はもっと──」トマトクンは不意に大きな右手を伸のばしてきて、マリアローズの頭の上に置いた。「我が儘になってもいいくらいだと、俺は思うんだがな」

「だから」マリアローズは首を縮めた。「今でも十分、我が儘だって」

　トマトクンの右手がマリアローズの頭をごしごしこするように撫なでている。力が強すぎて、少し加減してほしいと思わなくもないけれど、痛くはない。なんだかくすぐったい。

　ふと気づいた。

　黄玉トパーズの瞳ひとみにはマリアローズが映っているのに、トマトクンはどこか別の場所を、ここではない、遠くにいる何かを見ている。

　マリアローズは両手の指をトマトクンの右手にそっと絡からめた。「……トマト？」

「ああ」トマトクンは曖あい昧まいにうなずいて目を伏ふせ、ふう、と息をついて、マリアローズの指をゆるく握にぎりかえした。「まいったな」

　何が、とは訊きかなかった。訊かなくても、もしかしたら見当外れかもしれないけれど、なんとなくわかった。

　マリアローズはトマトクンの右手をぎゅっと握りしめて、自分の胸に押しつけた。笑うつもりなんかないのに、笑ってしまった。感情に裂さけ目ができると、それを繕つくろおうとして、不完全な、出で来き損そこないの笑えみがこぼれてしまう。「どういうわけか、大事なものばかり、増えていくよね」

　トマトクンも短く笑った。「そうだな」

　僕らが何かを失ったとしても、大切なものが無くなってしまうわけじゃない。それどころか、失うたびに知ることになるんだ。

　失ったものさえも僕らにとってはかけがえのない何かで、もしかしたら、本当にそれを無くすることなんて、僕らにはできないのかもしれない。

「やめ、やめ……」

　マリアローズは首を左右にぶるんぶるん振ふるった。果たしてこれでよかったのか。そんなことを考えてもしょうがない。争そう奪だつ戦せんはもう始まろうとしているのだ。

　それにしても、予想していたより参加希望者が多かった。マリアローズは持っていたバインダーを開いて、参加者がずらっと列記されている紙を見た。

1　羅叉　秩序のモラル・番人キーパーズ総長

2　珐瑠　秩序の番人副長

3　李イ童ドウ晏アン　二番親衛隊隊長

4　ラッド・ワーノン　六番突とつ撃げき隊隊長

5　チェス・ピード　七番突撃隊隊長

6　シャット・グレヒャ　八番突撃隊隊長

7　デートニッヒ・ボルボンゾル　九番突撃隊隊長

8　太臺子タイダイシー　十番遊撃隊隊長

9　ジョービー・カラマー　十一番遊撃隊隊長

10　シャルロット・リンデ　十二番遊撃隊隊長

11　ハインツ・クルエルフォート　二十五番無名隊隊長

12　カロリーナ・シェルベリ　二十七番無名隊隊長補　ＪＭＡ会長

13　コンラッド・アシャー　元三番副長直属隊隊長補　現五番副長直属隊

14　ユキシ・庚コウ　元三番副長直属隊　現五番副長直属隊

15　トマトクン　ＺＯＯ園長マスター

　アサイラム守備隊の指揮をとっているマシュー・シュナイデル副長は参加しないものの、勇ゆう猛もう果か敢かんな突撃隊、遊撃隊の隊長が申しあわせたように名を連ねているので、番人の音に聞こえた勇士がほとんど顔をそろえているといっても過言ではないだろう。

　三番副長直属隊はいわゆる「ヨハン隊」というやつで、コンラッド・アシャーはその隊長補、ユキシ・庚は隊士だった。今は五番副長直属隊、つまり「琺瑠隊」に編入されているが、亡なきヨハン・サンライズへの思いも深く強いだろうから、そのあたりが動機にあるのだろう。ハインツ・クルエルフォート。二十五番無名隊はヨハン副長の麾き下かだったはずなので、これも似たようなものか。

　マリアローズは少しだけ首をひねった。

　わからないのはこれだ。

　カロリーナ・シェルベリ。

　二十七番無名隊隊長補。それはいいとして、ＪＭＡ会長、というのはいったい何なのか。

　ＪＭＡ。

　何かの略りやく称しようなのだろうけれど、会長とはずいぶん大おお仰ぎようだ。そんなに大きな組織なのか。組織内組織……？　これもまた、先代亡きあとの秩序の番人の乱れを表しているのだろうか。

　まあ、いい。

　とにかくこの争奪戦には、トマトクンを入れて十五人が参加することになっている。

発案者のマリアローズとしては──

羅叉とトマトクンが番人たちの前で決けつ闘とうする→もちろんトマトクンが勝利、しかも圧勝→トマトクンが先代の代わりとして羅叉のみならず番人全体に気合い注入→心機一転、羅叉にがんばってもらい、番人たちにも奮起を促うながす。

以上のような流れを考えていたのだが、トマトクンが余計なことを口走ってしまったのだ。

──気にくわんやつはそう言え。俺が全員ひねり潰つぶしてやる。

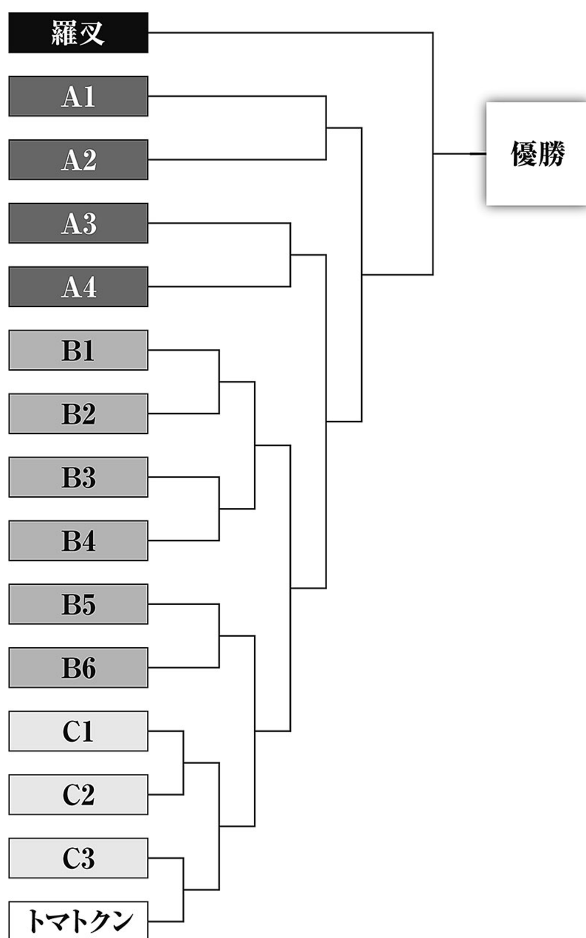
先代に比べれば頼たよりないとはいえ、総長が面めん罵ばされたのだから当然といえば当然の話で、俺も、わたしも気にくわないから、やれるものなら全員ひねり潰してみるがいい、ということになった。

こっちとしても、喧けん嘩かを売っておいて、いや、あれは言葉の綾あやというもので──とは言えない。かといって、番人側から名乗りでた十四人を、トマトクンが一人で相手にする、というのはどうなのか。

トマトクンは、べつにそれでもかまわない、と考えているようだったけれど、マリアローズとしてはとても納なつ得とくできなかった。

番人側にも、ちょっと後ろめたいというか、そんな形でトマトクンをやっつけたとしても体てい裁さいがよくない、という意見があって、いろいろ調整した結果、変則トーナメントという形式に落ちついたのだ。

マリアローズは参加者一覧の紙をめくって、トーナメント表をざっと見た。



これなら、トマトクンは七回戦えばいいということになる。それでも多いけれど、十四回のちょうど半分だ。羅叉は一回きりなので、ちょっと不公平な気もするが、番人たちも総長を向こうに回して本気にはなかなかなれないだろう。これは致いたし方かたない。

残りの参加者十三人については、A、B、Cの三つにランク分け

して、それぞれくじを引いてもらうことにした。

　Ａランクは、副長の珐瑠、〝小しよう羅ら刹せつ〟の異名をとる李童晏、〝神しん剣けんグレヒャ〟と呼ばれていて番人きっての剣上手じようずらしいシャット・グレヒャ、それから剛ごう剣けん使いの巨きよ漢かんラッド・ワーノン。いずれも名実相あい伴ともなう強者つわものぞろいだ。Ｂランクは他ほかの隊長たちで、隊長以外はＣランクということにさせてもらった。

　参加者たちはランクごとに分けられた椅い子すに腰こしかけて、そのときを待っている。

　参加者席の前には抽ちゆう籤せん箱を抱かかえたユリカとサフィニアとカタリが立っていて、さっきからマリアローズの合図を待っていた。

　トマトクンも参加者席だ。ルーシーは今日もきゅーと一いつ緒しよに留守番をしている。マリアローズのそばにはピンパーネルしかいない。いや、争そう奪だつ戦せん運営委員会席には、他にも隊長補などの番人が七人ばかりいることはいる。でも、彼らは何か用がなければ近づいてこない。ほとんど敵視されているのではないか。そんなふうにさえ感じられる。

　ちなみに、ピンパーネルは白いワイシャツに蝶ちようネクタイ、黒いスラックスという恰かつ好こうで、審しん判ぱんを務めることになっている。

　ＺＯＯの者が勝敗を判定するのは問題があるのではないか。そんな異論も出たが、争奪戦のルールは単純だ。時間無制限。試合場の外、ただし地上に、身体からだの一部が出たら負け。降参したら負け。気絶したら負け。仮に絶命したら、もちろん負け。武器は鍔つば付つきの木刀一本のみ。他は何でもあり。審判の裁定で有利不利が生じる可能性はあまり高くないので、最終的には番人側も認めた。

　マリアローズはピンパーネルのほうを見た。

　ピンパーネルは目め許もとと口許をほんの少しゆるめて微笑ほほえんでくれた。「大だい丈じよう夫ぶデス」

　マリアローズはうなずいて、そんなに無理をせずに微笑を返すこ

とができた。

　時計を見た。

　もうすぐ十三時半だ。

　マリアローズはユリカ、サフィニア、カタリに視線を投げかけて、力強く首を縦に振ってみせた。

　抽籤が始まった。

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.4

アニキ風は吹かず

『━ちゅうわけでえっ……！』妙みような響ひびきを伴ったアホアホ半魚人の、やたらとでかい、でかすぎる声が北ほく斗と門前一帯に轟とどろき渡わたった。そうかと思うと、キイイイイイイイイイイィィィィィィィィィィン……という耳をつんざく不ふ愉ゆ快かいな音がつづいて、マリアローズはとっさに両手で耳をふさいだ。野次馬の群れも、運営委員会席の番人たちも、参加者席の参加者たちも、頭を抱えたり悲鳴をあげたりした。半魚人は手に持った棒状の物体を少し口から離はなした。『おぉーっとぉ……すまんすまん。ちょおっとな！　リキが入りすぎてもうた！　てへっ。ちゅうわけで、もっかいイクでえっ！　パゥワァー約八十ッパーくらいでな！』

「いいんだけどさ……」マリアローズは棒状の物体を横目で見た。「何、それ」

『ふぇ？　これかあ？』カタリは棒状の物体の先っぽを指で何度か弾はじいてみせた。そのたびに、ボツッ、ボツッ━と、いやなかんじの、なかなか大きな音が出た。『これはアレや。まいくろふぉんっちゅうやッつやな。わざわざこの大エヴェントのためにＥＭＵから借りてきたったんや。そのうち正式に売りだされるみたいやけど、まだほっとんど出回っとらんのやで。すごいやろ。ちゅうか、偉えらいやろ。エッヘン！』

「……まいくろふぉん……」

　なんだか、どこかで見たことがあるような、ないような。やっぱりあるような。それはとりあえずいいとして、大エヴェント？　イベントじゃなくて？　や、そんなことはどうでもいい。てゆうか、だいたいなんで僕、こんなとこに座らされちゃってるわけ？　僕だけじゃないんだけど。

　試合場のすぐそばだ。長いテーブルが置かれて、椅子が並べられ、近くに何か大きな機械らしき箱が設置されている。箱はカタリが持っているまいくろふぉんとやらと線で繋つながっているだけではない。さらに別の線が方々に伸のびている。それらもすべてＥＭＵから借りてきたものなのだろう。で、椅子には、カタリ、マリアローズ、ユリカ、サフィニア、それからなぜか、秩ちつ序じよの番人二十七番無名隊の隊長らしいけれど、あんまりそんなふうには見えない、ブルネットをお下げにしたえらく小こ柄がらで童顔のアー

ニャ・クルチバが座っている。なんと弱じやつ冠かん十九歳ということなので、マリアローズと同い年だ。その年ねん齢れいで隊長なんて驚おどろくしかないが、それもまあ、ひとまずいいとしよう。

　マリアローズはカタリの耳を引っぱった。カタリは『いでえでえでえッ……！』と大おお袈げ裟さに痛がった。かまわず耳許で囁ささやいた。「もしかして、こんなにいっぱい人を集めたの、きみの仕し業わざだったりする？」

『ほえ？』カタリは半魚眼をぱちくりさせた。『ああ、せやで。ゆうても、友人知人に教えたっただけやけどな。わしってばほら、顔が広いやん？　実際の顔かお幅はばの話ちゃうで。そらそうや。あたりまえやがな。まあ、そないに気張らんでも、こんくらいはヨッユーで集まるやろ思とったら、案の定やったで。ヒシシシシ。ほんで？　それがどうかしたか？』

「どうかしたかって──」マリアローズは眩暈めまいを覚えて額を押さえた。「……訊ききたくないんだけど、一応訊かせて？　その金魚の脳ほどもないちっちゃな脳みそで、いったいきみは日々何を考えて生きてるの？」

『失礼やな。ナンボなんでも金魚よりかはちっさぁーない思うで。もうちょっとでっかいやろ。ふつうに考えて』

「どうかしら……」ユリカは愛らしく溜ため息いきをついた。

　サフィニアは微かすかに首を横に振った。「あやしい……ところ、ですね……かなり……」

『腐ふっ腐腐ーん』カタリはどこ吹く風といった表情を作ってみせた。いかにも無理やりだ。そうとうわざとらしい。『ええねん、ええねん。好きにゆうたらええねん。脳みそはな。大きさやないわッけやしな。皺しわの数、その深さやろ。問題は。わしのンはアレやからな。省スペース志向でコンパクトなんやけども、しわッしわやからな。しわッしわ』

　猛もう烈れつな疲ひ労ろう感かんに襲おそわれて、マリアローズはうなだれた。「……あっそ」

『ちゅうわけでえッ……！』

　キイイイイイイイイイイイイイ

ィィィィィィィィィィィィィィィィン……！

『──っと、またやってもうた。すまんすまん。えろうすんまへん。ちゅうわけで！　おほ。今度は大だい丈じよう夫ぶやったな。三度目の正直っちゅうやッつや。えほほほ』カタリはひとしきり不気味な笑い声を立ててから、オハンッと変な咳せき払ばらいをした。
『──さぁーて。第一回秩序の番人総長争そう奪だつ変則トーナメントがもうそろそろ始まろうとしとるわけやけども、せやせや、自己紹しよう介かいがまだやった。わしはカタリ！　クランＺＯＯの元気印、熱血闘とう魂こんがキャッチフレーズの本格派稀少物レア・蒐集家ハンター、グレート・半魚──って、誰だれが半分魚やねん、オールでパーフェックに人類やっちゅうの！　ともあれ！　カタリっちゅうたらその筋ではちょっとしたモンやから、今さらっちゅうかんじもなきにしもあらずやけど、本大会の実じつ況きようを担当することになっとる、わしがそのカタリや！　一つよろしゅう頼たのんますぅッ！　えーそれからそれからぁ……』

「え……？」マリアローズは目を見開いてきょとんとしてしまった。いきなりカタリがまいくろふぉんを押しつけてきたからだ。

「自己紹介や！」カタリはひそひそ声で言った。「じ、こ、しょ、お、か、い！　お前じぶん、解説なんやから、挨あい拶さつくらいしとかなあかんやろ！」

「解説……？」

「せや！　ほれ！　喋しやべらんかい！」カタリは力ずくでマリアローズの手にまいくろふぉんを握にぎらせた。

『……えっ──とぉー……』

　うわ。

　小さく呟つぶやいただけなのに。自分の声がやたらと大きくなって響ひびき渡わたり、試合場周辺が静まりかえった。視線を感じる。それも、すごい数だ。数人じゃない。数十人、ひょっとしたら数百人かもしれない。何これ。どういう状況？　意味わかんないんだけど。汗あせが。心臓が。熱が。マリアローズは下を向いた。
『あの……か、解説の……マリアローズ、です。よろしく』

　言ってしまってから津つ波なみのように後こう悔かいが襲いか

かってきた。解説……？　やるの？　てゆうか、何を解説するわけ……？

「なんや元気がないのう。まあ、ええわ」カタリはマリアローズからまいくろふぉんをひったくった。『ほんでもって特別解説としてもうお一ひと方かたぁッ！』

　そうしてまいくろふぉんは、カタリの隣となり、マリアローズの逆側の椅い子すに腰こしかけているクルチバ隊長に手渡された。

　クルチバは平然とまいくろふぉんを握った。『解説を務めさせていただきます、ＪＭＡ副会長のアーニャ・クルチバと申します。ふつつか者ですが、どうぞよろしく』

「……ＪＭＡ？」マリアローズは首をひねった。副会長？　てゆうか、だから、そのＪＭＡっていったい何なの……？

　粗そ忽こつな半魚人はとくに気にならなかったようで、クルチバからまいくろふぉんをほいほい受けとった。『ちゅうわけでえ！──って、ちゅうわけでちゅうわけでって何回ゆうとんのや、わし！　今のでもう三回プラスやからな。ええか！　そんなんどうでもええな！　えーっと、せや！　あとはアレや！　我らがＺＯＯの花組！　ユリカ・白雪スノーホワイトとサフィニアがマスコットっちゅうことで、実況席は合計五名でイクでイッてまうでイカせてもらうでえ！　ほれ！　ここで拍はく手しゆ！　拍手や！　拍手やがな！　しぃーんとしとらんでな！　盛りあげていかなあかんやろ！　常識的に考えて！』

　そこかしこから起こった拍手は、心が寒くなってくるほど疎まばらだった。普ふ通つうなら、冷えて凍こおりついた心がポッキリ折れてしまってもおかしくないところだけれど、半魚人は違ちがう。人生、否いな、半魚人生七転び八起きどころか、一万回転んで一万一回起きる。性しよう懲こりもないという言葉がこれほど似合う生物もめずらしい。というか、他ほかにはいないだろう。

『ちなみに、審しん判ぱんは我らがＺＯＯが誇ほこる最速男スピードスター！　ピンパーネルが一手に引き受けるっちゅうことになっとるから、そこんとこ、よろしくメガドッグ！　言わずもがなやけど、メガドッグはでっかい犬っちゅうことやで！　わかるやろ、そのへんは！　何ぃ……？　さっぱり意味がわからんやとぉ……!?　せやったら流しとこ！　そこはさぁーっとな！　お互たがいのため

や！　頼むでしかし！　ほんなら準備はでけとるようやから、そろそろ始めよか！　第一試合はアアアァァァッ……！』

　キイイイイイイイイイイイイイ
イィィィィィィィィィィィィィィィン……！

　三回目ということで、マリアローズもそれほど驚おどろかずにさっと耳をふさいだ。なんとなく予想していたから、冷静に対処できたと思う。一万一回起きたあとでも、一万二回目の転てん倒とうを警けい戒かいしたりしない。それが半魚人だ。学習能力というものが備わっていないので、しょうがないのだろう。

『たはは』腐くされ半魚人はちっちゃな魚脳で何を思ったか照れ笑いなんかして観衆の怒いかりを買ったが、何しろきわめて鈍どん感かんな魚神経の持ち主だから痛つう痒ようを感じないのだ。『よっしゃ。なんやかんやで始めるでえ！　第一試合はこのトーナメントの言い出しっぺ！　我らがＺＯＯの園長マスタートマトクン！　ヴァーサスッ！　くじでＣ３を引きよった秩ちつ序じよの番人元三番副長直属隊現五番副長直属隊所属ぅッ！　ユキシ・庚コウッ……！』

　それでもいざ勝ちトーナ抜き戦メントが始まるとなったら歓かん声せいがあがった。手を叩たたく者や、足を踏ふみ鳴らす者、口笛を吹ふく者もいる。審判のピンパーネルがトマトクンとユキシ・庚を引き連れて試合場入りすると、さらに熱気が高まった。うねり、渦うず巻まいて、今にも破は裂れつしてしまいそうだ。

　試合場の中央にピンパーネルが立って、トマトクンは北東の角へ、ユキシ・庚は南西の角へと移動した。

　トマトクンはいつもの炎模様ファイヤーパターンが悪目立ちする全身鎧よろいを身にまとい、右手に木刀を持っている。ユキシ・庚は銀色に輝かがやく純血のピュアブラッド司祭プリーストのプロヴィデンスＯＦ□□重じゆう装そう甲こうではあるがすっきりした印象の鎧を着て、兜かぶとは被かぶらず、木刀を握っているのは左手だ。左ひだり利ききなのだろう。

　木刀はすべて同じものを用いる。長さは約一メーテル二十五サンチ。形状は一いつ般ぱん的なモトロール刀に似ていて、反りがある。黒くろ塗ぬりで、鍔つば付つき。秩序の番人が練習に使っているものだ。ふだんは琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣を

振ふりまわしているトマトクンが持つとやけに小振りに見えるけれど、決してそんなことはない。全長一メーテル二十五サンチといったら、剣としてはそれなりの大きさだ。

　ユキシ・庚はまだ若い。マリアローズと同年配だろう。黒くろ髪かみで、東方の匂においがする顔立ちだが、瞳ひとみは明るい色をしている。背は百七十サンチくらいか。小こ柄がらだ。年ねん齢れいから考えても、まだ身体からだができていないのだろう。

『さぁーて』半魚人にしては控ひかえめな声だった。『トマトクンはまあ、わりと有名人なわけやし、見たまんまやからとりあえずええとして、対戦相手のユキシ・庚やけども──』

　まいくろふぉんを向けられたクルチバは軽くうなずいた。『彼は齢よわい十八歳、しかも入団わずか三巡じゆん月げつにして、後備隊から三番副長直属隊に抜ばつ擢てきされました。今は亡なき──』突とつ然ぜん、クルチバの声が乱れそうになった。表情も曇くもった。でも、一いつ瞬しゆんだった。クルチバは小さく息をついた。それだけで平静を取り戻もどしたようだ。いや、そうでもなかったのか。『ヨハンさま……』

「さま……？」「しゃま……？」「……さま……？」マリアローズとユリカとサフィニアが一いつ斉せいに首を傾かしげ、半魚人は半魚眼をちょっと見開いて「ふぉろ？」と変な声を出した。

　クルチバは咳せき払ばらいをした。『──ヨハン・サンライズ副長にその才能を見み込こまれた逸いつ材ざいです。経験はまだまだ不足していると言わざるをえませんが、過日の激戦を生き抜ぬいたことから考えても、彼の能力が並外れていることは間違いないでしょう。一般的に言って、天てん賦ぷの才に恵めぐまれた剣士ほど、若くして大きな戦場に出ると落命しやすいのです。能力がある者は戦えるから戦ってしまう。しかし、未熟ゆえに己おのれの限界を知らない。また、目立つから敵に狙ねらわれる。彼は生存しました。期待をこめて申しあげれば、紛まぎれもなく次代の我ら銀の軍団ザ・シルバリイを背負って立つ人材です』

　カタリはまいくろふぉんを自分のほうへと引き戻してうなずいた。『ふむふむ。おおきに。なるほどなあ。ようするに、若手のホープっちゅうわけやね。せやけど、そのホープがなんでこのトーナメントにエントリーしたんやろな？　まさか、総長になりたぁーい！　このチャンスに下げ克こく上じよう！　──っちゅうこともな

いやろし……』

　その言葉が耳に届いたのだろう。ユキシ・庚がカタリのほうに身体を向けて、にっこりと笑った。少し肩かたに力が入っているようだが、緊きん張ちようでガチガチになっているというふうではぜんぜんない。若者らしい気負いと、ある種の自信、それから何か吹っ切れているような爽さわやかさを感じさせる態度だった。

「僕は副長をお守りすることができませんでした！　副長と共に死ぬこともできなかった！　とても口くち惜おしい！　でも、副長は言うでしょう！　くだらぬことを考えず、ただ義のために進めと！　僕は副長のことを忘れません！　副長の思いを抱いだいて進みます！　副長は迷めい惑わくがるかもしれませんが、僕は副長のようになりたい！　トマトクンさん！」ユキシ・庚はトマトクンに向きなおった。「──あなたは副長と特別な関係にあったと聞いたことがあります！」

　試合場一帯がざわめいた。

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、どう答えたものか、というような顔をしている。

　てゆうかまあ、縁えんがあったことは間違いないんだけど、「特別な関係」って表現はちょっと、変なこと連想させちゃいかねない微び妙みような響ひびきがなきにしもあらずのような。

「僕は是ぜ非ひ、そんなあなたの胸をお借りしたい！」

　ざわめきが高まって広がった。

　うん。その「胸をお借りしたい」っていう表現もまた、若じやっ干かんアレだしね……。

　ユキシ・庚はおかまいなしだ。「趣しゆ旨しからは外れるかもしれませんが、さいわい組みあわせに恵まれました！　お手合わせ願います！」

　若さか。それだけじゃなくて、天然気味なのかもしれないけど。

　トマトクンは少しだけ顔をひきつらせて「あ、ああ」とうなずいた。

　ピンパーネルが試合場の中央で両手を高々と上げた。

『おおっ』カタリが大きな音を立てて唾つばをのみこんだ。『いよいよやなッ。よっしゃよっしゃ。ほんなら、ユリカ！　サフィニア！　ゴングのほう、頼たのむで！』

「ごんぐ……？」「……って……？」ユリカとサフィニアが仲よく眉をひそめた。

『それや、それ』カタリは半魚顎あごをしゃくって、ユリカとサフィニアの前に置いてある鐘かねを示してみせた。『ゴング、カァーン鳴らしたったらな、試合開始っちゅうことやねん。合図みたいなモンやな。ちゅうか、完全無欠に合図やねんけど』

「しょれじゃあ……」ユリカはサフィニアと目を見み交かわして、二人で小さな鎚つちみたいなものを持った。ゴングとかいう鐘自体も決して大きくはないし、二人がかりでやるようなことではない気もするけれど、微笑ほほえましいので、べつにいいか。

　ユリカとサフィニアの共同作業でゴングが鳴らされた。

　ピンパーネルが両手を振りおろしながら後退した。

『スタアァッ……！』カタリがそう叫さけんでから唸うなった。『……ちゃうな。なんかちゃうで。タイミニングが―それゆうんならタイミングやがな。ぷほほ。まあええわ。始まりよったでえ。第一試合や』

　トマトクンは木刀で自分の肩を叩たたきながらゆっくりと前進しはじめた。

　ユキシ・庚は左足を前に出した諸もろ手て上段の構えから右の拳こぶしを右肩あたりに落とし、八はつ相そうの構えをとって、前ではなく右方向へと移動した。

「ユキシ・庚って人は」とマリアローズが呟つぶやくと、カタリがまいくろふぉんを向けてきた。仕方ないから言いなおした。『……ユキシ・庚はスピードに自信があるみたいだね。八相は陰いんの構えともいうんだけど、相手の出方によって攻せめ手を変える。後ごの先せんをとるためには、でも、当然、打ち込みが速くないといけない』

「体格から考えれば」とクルチバが言った。カタリはササササッと
そっちにまいくろふぉんを差しだした。『……両者の体格から考え
れば、膂りよ力りよくの面ではＺＯＯの園長マスター、敏びん捷し
よう性の面ではユキシ・庚に分があると思われます』

　マリアローズはつい鼻先で笑ってしまった。「それはどうかな」

　カタリが「ほひょっ」と奇き声せいを発しながら背を屈かがめる
と、クルチバの視線が矢のようにマリアローズの顔に突つき刺さ
さった。ふたたびまいくろふぉんが差しだされた。ええい、まだ
るっこしい。マリアローズはそれをカタリの手からひったくった。
『トマトはのっそりしてるように見えるかもしれないけど、とろく
さくはないよ。だいたい、図ずう体たいが大きいからのろいなんて
固定観念でしょ。僕も身体からだが小さいから、そう信じたくなる
けどね。実際は違ちがう。どれだけでかくても、筋力さえ足りてい
れば速く動ける。大きいってことは、それだけで大きなアドバン
テージなんだよ。実戦の経験があればわかることだと思うけどね』

「……わたしが」とクルチバが押し殺したような声で言うと、すか
さずカタリがマリアローズの手からまいくろふぉんを奪うばってク
ルチバに向けた。『申しあげたことは、机き上じようの空論でしか
ないとおっしゃりたいのですか』

「そんなつもりは──」「ほいっ！」『ないけどね。べつに。僕はた
だ、自分の考えを話してるだけで』「わたしは」「しゃっ！」『あ
くまで一いつ般ぱん論として申しあげただけです』「一般論なん
て」「ほりょっ！」『……一般論なんて、そんなにあてにならない
と思うけどね。とくに一対一の状じよう況きようって、いつも特と
く殊しゆなんだよ。全体的な話なんかしてもしょうがないでしょ』
「個別的な問題については」「はいさっ！」『……個別的な問題に
ついては保留して論ずるのが一般論であり、その上で……』「あの
さ……」「とりゃっ！」『うっさいんだよ！　いちいち邪じや魔
ま！』マリアローズは半魚人の脳天に肘ひじ打うちを見み舞まっ
た。「──ほげっ……!?」

　そうしてまいくろふぉんを奪い返し、溜ため息いきをついて口を
開こうとしたときだった。

　円を描えがくようにして右へ左へと移動するユキシ・庚を、ゆっ
たりした足どりで追いかけていたトマトクンが、立ち止まって少し
だけ首を傾かしげた。「いつまでたっても逃にげまわるだけか。か

かってこんのなら、こっちから行くぞ」

「どうぞ！」ユキシ・庚の足が一いつ瞬しゅん、止まった。

　そのときにはもう、トマトクンはユキシ・庚に襲おそいかかっていた。

　何の工く夫ふうもない単なる打ち下ろしだ。でも、間まが最高だった。それに、豪ごう快かいで一いち撃げき必殺の気に満ちていた。それこそがトマトクンの剣けん技ぎの特とく徴ちようだ。とにかく無む駄だな太た刀ち捌さばきがない。特別な意図がないかぎり、すべての斬ざん撃げきが勝負を決めるために放たれる。トマトクン相手に、様子を見ようとする者は一太刀で圧あつ倒とうされるだろう。そもそも気構えが違うということだ。

　ただ、日々の訓練でトマトクンの剣を見ているマリアローズの目には、手加減していることがはっきりとわかった。

　あるいは、そのおかげだろうか。それだけじゃないか。反応がよくて、相応の技量がなければ、トマトクンの一撃を受けられるものではない。

「━かあっ……！」ユキシ・庚は跳とびあがるようにして木刀を撥はねあげ、トマトクンの木刀を弾はじいた。トマトクンがニヤリと笑った。そんなふうに見えた。たぶん、見間違いじゃない。きっとトマトクンの木刀は弾かれたのではない。トマトクンが木刀を引いたのだ。誘さそいこまれるようにして、ユキシ・庚は立てつづけに右上から、左上から、そしてまた右上から、斜ななめに木刀を振ふりおろした。トマトクンは半歩も下がらずに木刀でそれらをカンカンカンッと防いだ。ユキシ・庚はすっと腰こしを沈しずめて突きに転じた。鋭するどい突きだった。三連。いや、四連。五連突きか。トマトクンは四突目まで身体をひねるだけでひょいひょいかわし、五突目は直上から木刀で叩き落とした。すごい力だ。ユキシ・庚の木刀の先が地面を叩いた。顔面がガラ空きになった。トマトクンの木刀がその横っ面つらを薙ないだ。いや━

『わっ……』と声をもらしたのはマリアローズだけではなかった。番人たちが、観衆が、おお、うわ、ほう、わお、と一いつ斉せいに感かん嘆たんの声をあげた。

　ユキシ・庚は上体を思いきり後ろに反らして、本当に紙かみ一ひ

と重えの差でトマトクンの木刀をかわしたのだ。いい反応だった。柔じゆう軟なん性も素す晴ばらしい。でも、次の瞬間、試合場一帯には驚きよう愕がくの声と悲鳴が響ひびき渡わたることになった。

　トマトクンが間かん髪はつを容いれずぐっと踏みこんで、ユキシ・庚の胸を右足で踏んづけた。

「──あぐっ……！」

　ユキシ・庚は両りよう膝ひざを立てたまま後頭部、背中、腰を地面に打ちつけた。

　トマトクンは右足をユキシ・庚の胸からどけ、木刀を振りかぶった。

　ユキシ・庚は木刀を手放して、目をつぶったようだった。

　トマトクンは木刀を振りおろした。観客は、あ、とか、わ、とか、お、とか声を出したが、マリアローズは黙だまって見守っていた。

　頭ず蓋がいが砕くだけるおぞましい音はしなかった。トマトクンの木刀は地面を殴なぐりつけただけだった。ユキシ・庚の顔のすぐ脇わきだった。

「お前は今、死んだぞ」トマトクンは聞く者の心しん胆たんを寒からしめる低い声を出した。黄玉トパーズの瞳ひとみは凍いてついた輝かがやきを宿していた。「なんで諦あきらめた。ただの試合だからか。それとも、お前は真剣勝負でもいざとなったらそうやって観念するのか」

「……僕は──」ユキシ・庚は絶句した。

「ヨハンみたいになりたいだと？」トマトクンは嗤わらった。「お前には無理だな。俺はあいつのことをよく知ってるわけじゃない。だがな。あいつの親おや父じのことを知ってる。二人とも、だ。二人の親父の背中を見て育ったあいつなら、もし俺と勝負して勝つ見み込こみがなくても、絶対に最後まで諦めんだろう。試合でも同じだ。あいつには負けられん理由があった。でかい荷物を背負ってたんだ。お前の剣は軽すぎる」

　ユキシ・庚は身じろぎもできないでいる。

　クルチバがカタリを押しのけて、マリアローズからまいくろふぉんを奪いとった。『彼は前ぜん途と有望とはいえまだ若いのです！　ヨハンさま━いえ、ヨハン・サンライズ副長と同じだけの重荷を背負うことなどできるはずもありません！　そこまでおっしゃるのは酷こくなのではありませんか！』

「笑わせるな」トマトクンはクルチバを一いち瞥べつし、唇くちびるの片かた端はしをつりあげた。「俺はたまたま気まぐれでこいつを殺さなかった。だが、頭をかち割って殺してやったってよかったんだぞ。死んだら前途もへったくれもない。それがわかってないから、死を目前にして目をつぶったりできるんだ」

　クルチバはまいくろふぉんを握にぎりしめて唇を噛かんだ。

「あいつの親父も」トマトクンは小さく息をついた。「カレル・シュペクナーも、デニス・サンライズも、目を見開いて死ぬ男だった。すべてが終わるその瞬間まで、自分を信じて戦うことをやめない男たちだった。ヨハンもきっと同じだったろうさ。ユキシ・庚」

　ユキシ・庚は絞しぼりだすように「……はい」と涙なみだ声ごえで答えた。

　トマトクンは木刀を持ちあげて身体からだを起こした。「勝ち負け以前の問題だ。今までのお前はここで死んだと思え。これからは二度と死なん覚かく悟ごで、ヨハンの背中を追いかけろ」

「はいっ……！」ユキシ・庚は清すが々すがしいまでに元気のいい返事をして、跳はね起きるなり深々とお辞じ儀ぎをした。「ありがとうございました……！　精しよう進じんします……！　あ、あの━」

「む？」

「一つ、いいですか」

「べつにかまわんが」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて唇をひん曲げた。「何だ？」

　ユキシ・庚の目がきらきら輝きだした。「僕、あなたに惚ほれました！　お父さんというのはちょっと違ちがうような気もするので━お兄さんと呼ばせてください！　お願いします……！」

　試合場一帯がしんとなった。

　またこの若造ときたらどう理解したものか困るような微び妙みようすぎることを。

　トマトクンは少し顎あごを引いて眉み間けんに縦たて皺じわを刻んだ。「そ、それはちょっと、な……」

「いけませんか!?」ユキシ・庚はトマトクンに詰つめよった。
「じゃあ、アニキ！　これだったらどうでしょうか!?」

　そっちのほうがもっと微妙だよ。

　でも、トマトクンのことだ。もうめんどくさくなったのだろう。

「まあ……好きにしろ」

「ありがとうございます、アニキ！　それでは、今回は僕の負けということで！」ユキシ・庚は木刀を拾って身を翻ひるがえしたかと思うと、すぐに振ふり返った。「──あ！　今度またお手合わせ願います！　次は負けませんよ、アニキ！」

「……ああ」

「じゃあ！　失礼します！」

　ユキシ・庚は颯さつ爽そうと試合場をあとにした。

　試合場一帯にはまだ、冗じよう談だんと笑い飛ばすことも真しん剣けんになることもできないような、なんとも落ちつかない、微妙きわまりない空気が漂ただよっている。

　ユキシ・〝空気粉砕ムードクラッシャー〟・庚──ちょっとだけ恐おそるべし。

「とりあえず」トマトクンが気をとりなおしたように軽く首を振って、木刀で肩かたを叩たたきながらあたりを見まわした。「これだけは言っておくぞ。おれを潰つぶすつもりなら、殺す気でこい。所しよ詮せん、試合にすぎんと思ってるような甘っちょろいやつは俺の前に立つな。秩ちつ序じよの番人はいずれ俺のものになるんだ。無む駄だに戦力を減らしたくはないからな」

　無責任な野次馬どもは冷やかし半分の歓かん声せいをあげ、番人たちは色めきたった。

　カタリがどこからか予備のものらしきまいくろふぉんをとりだして叫さけんだ。『──ちゅうわけでえ……！』

　ピンパーネルがトマトクンのほうに身体を向けて、静かに右手をあげた。「勝者、トマトクン──デス」

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.5

野良犬

「総長争そう奪だつトーナメント、か」

　北ほく斗と門前の四角い試合場と群衆は遥はるか遠くだ。彼は第十一区の背が高いくたびれた建物の屋上から、双そう眼がん鏡きようを使ってその様子をうかがっていた。ＥＭＵ製の最新式で、まだ製品としては出回っていない高性能な代しろ物ものというふれこみだが、視野が狭せまくなっていけない。

　彼は双眼鏡を外して目を凝こらした。肉眼だと細かい部分まではわからないものの、必要に応じて双眼鏡を利用すればいい。

　顧かえりみれば、昔はむやみやたらと道具に頼たよったりはしなかった。彼が愛用している大小さまざまな釘ネイルも、材料さえ手に入れば自作できる。べつに金属でなくてもいい。石だろうと骨だろうと、人間を破は壊かいするのに十分な強度と鋭するどさを持たせることができる。問題は耐たい久きゆう性。ほとんどそれだけだ。

　彼は北斗門前から目を離はなさずにネクタイを少しゆるめた。

　お仕着せの衣類を黙だまって身につけることはやめた。彼にもこだわりくらいある。衣服はまず身体の動きを妨さまたげるようであってはならない。適度な丈じよう夫ぶさも必要だ。目立ちすぎる色しき彩さいは禁物だし、奇き抜ばつな意い匠しようも不要だが、飾かざり気けがなさすぎてもいけない。ガルベル・ダの服は気に入っていた。今はリヴァイスのデザイナーになっているが、もともとガルベル・ダのリードデザイナーだったデメトリオ・アルベルティーニは〝十二人殺し〟の異名を持つ武ぶ闘とう派はだ。アルベルティーニがデザインする衣類には、戦せん闘とう者向けの細かい工く夫ふうが凝らされている。見かけより、そこが彼にとっては重要だった。リヴァイスのものは最悪だ。ごてごてしすぎていて、機能面ではどれも不足か過か剰じよう。まるで彼の神経を逆さか撫なでするためだけに作られているかのようで、まったく馴な染じむことができなかった。

「ＺＯＯ――やはり連中が絡からんでくる」

　彼の片割れもやつらの一味に殺された。ピンパーネルといったか。あれは間違いなく彼と同じラハン大陸出身のアッサシンだ。そ

の中でも上等の部類に入るだろう。手て強ごわい相手だ。二人一組で行動することを前提に育成された彼よりも、個人としての戦闘能力は高いかもしれない。いや、高い、と考えるべきだろう。ほぼ彼と同一といってもいい存在だった彼の片割れは、ピンパーネルに敗北したのだ。こちらに有利な条件を整えなければ、彼もまたピンパーネルに勝つことはできない。それに、ＺＯＯには魔ま術じゆつ士がいる。少女のような外見の医術士も、あの鵺ヌエ流古式戦闘術の使い手だから要注意だ。巨きよ漢かんの僧そうは見あたらないが、身を隠かくしているだけかもしれない。もちろん、かつて彼の主あるじを斃たおした長身の園長マスターは言うまでもなく危険だ。残りは雑ざ魚こだが、厄やつ介かいな—しかも、戦局に決定的な影えい響きようを及およぼしかねない戦力を抱かかえているＺＯＯは、ある意味、彼の主にとって秩序の番人以上の宿敵なのかもしれない。

彼の主とあの園長マスターとの間には、浅からぬ因いん縁ねんもあるようだ。さまざまな証しよう拠こから彼がそう推察しているだけで、確かく認にんしたことがあるわけではない。どうでもいいことだ。ここでこうしていることにも、彼はもう正直、そこまで執しゆう着ちやくしていない。

彼は主に申し出たのだ。自分を一人の密みつ偵ていとして使ってほしい、と。

聞き入れられぬだろうと覚かく悟ごしていた。これまでもずっと不満を抱いだいていたのだ。彼の主は当然、気づいていただろう。予想は見事に外れた。

彼の主は軽く笑ってうなずいた。いいだろう、と言った。いいだろう、ジェイ、お前はこれからただのしがない密偵だ。密偵として秩序の番人並びにＺＯＯの動きを探さぐれ。それがお前の仕事だよ。そう彼に命じたのだ。それから、最後にこう付け加えた。何かわかったら、シックスナインズに報告するんだよ。そうすれば我わが輩はいに伝わるからねえ。彼の主はわざわざそう付言して、鬼おに火びを宿らせた眼めで彼の表情を観察し、愉たのしげに笑った。彼を嬲なぶったのだ。

もともとそういうところが彼の主にはあった。彼は長らく耐たえてきた。ついに我が慢まんならなくなった。端たん的てきに言えば、そういうことなのだろう。さりとて、主から離れて歩むべき道など、彼には用意されていない。無む軌き道どうに盗ぬすみ、奪う

ばい、殺して回った、彼が二人で一人であったころとは何もかもが違ちがう。いや、何も違ってなどいないのかもしれない。一人になってから、彼は物を考えるようになった。とりわけ、彼自身について思いを巡めぐらすようになった。

　彼は殺すための道具として生まれ、育てられた。彼自身が便利な道具だった。道具は使われる運命だ。使われることのない道具には価値がない。意味がない。

　自由を欲ほつして、二人の彼を育成したダクナとイヴェンを殺した。砂と岩ばかりが目につくラハン大陸をあとにした。せっかく自由になったのに、二人の彼はまた飼い主を見つけた。自由を差しだして飼い主に仕えた。やがて彼は一人になった。飼い主に使われるだけで重んじられることのない暮らしに飽あき飽きして、自由を求めた。今はもう、彼の肩かたには何の荷物も載のっていない。このまま行方ゆくえをくらますこともできる。飼い主は彼を捜さがさないだろう。

　今の彼は野の良ら犬いぬ同然だ。どこへでも行ける。

　それはすなわち、行き場がない、ということでもある。

「俺は野良犬だ」

　口に出して言ってみた。

　俺は、だが、犬だ。生まれながらに犬なのだ。狼おおかみにはなれないのか。なれない。今も胸が焼け焦こげているし、腸はらわたがちぎれそうだ。もし主が何か命令したら、俺は喜び勇んで駆かけだすだろう。俺が俺を満たすことはない。絶対に。自由になった俺たちは、退たい屈くつで退屈で仕方なかった。それどころか、餓うえて渇かわいてにっちもさっちもゆかなかった。当然だ。

　自由は俺に何かをもたらすのか。否いなだ。首輪を嵌はめられ、鎖くさりで繋つながれて、餌えさを与あたえられ、そして何より命令を下されて、それに従う。他ほかの生き方はない。最初からなかった。これからもおそらくないだろう。

　新しい主を探すか。

　馬ば鹿かげている。なぜそう思うのか。

彼は両手首を内側に曲げて中指と薬指を伸のばした。両手首のホルダーから釘ネイルを出して握にぎりこむと、後ろから声がした。
「──精が出るネ」

振ふり返りざまに、彼は二本の釘ネイルを投じた。当たるわけがない。案の定だった。音もなく、その他の気配もほとんど感じさせずに彼の背後をとった黒ずくめの男は、揺ゆらめいて消え、また現れるかのような巫ふ山ざ戯けた身のこなしで、彼の釘ネイルを楽々とかわした。彼はそのさまを目にしながら後方宙返りをして、屋上から身を投げた。一階──二階ぶん落下したところで猫ねこみたいに身体からだを回転させ、右足を突つきだして割れ砕くだけたままになっていた窓の縁ふちに引っかけた。すかさず上体を折って、両手で窓の縁につかまった。右みぎ脚あしと両りよう腕うでの力で全身を建物の中へと押しこみ、埃ほこりっぽい蜘く蛛もの巣だらけのフロアを走った。黒ずくめはすぐに追いかけてくるだろう。今だ。くる。彼は振り向き、両手で四本の釘ネイルを投とう擲てきした。直後、黒ずくめが四人に見えた。しかも、黒ずくめは薄うす青あお色の目を細めて、口くち許もとにうっすらと笑えみを浮うかべていた。それくらい余よ裕ゆうがあるというわけか。むろん、釘ネイルは一本も命中しなかった。かすりもしなかった。

「キミには訊ききたいことがあるんだヨ、ジェーイ」

彼は答えずにフロアを突っ切って階段を駆けおりた。口を開いてなどいられない。あれは化物だ。とくに悪意を持っているときは手に負えない。

昼飯時ランチタイムの頭領マスターアジアン。またの名を虐殺人形カーネイジドール。

彼は五段飛ばしで階段を下りながら舌打ちをした。運の悪いことに、あの化物に恨うらまれるだけの理由が彼にはある。

「逃にげるなヨ、ジェーイ」

階段室に化物の声が響ひびく。あの声で歌でもうたったら、さぞかし女どもが喜ぶだろう。だが、虐殺人形カーネイジドールが恋こいの歌を口ずさむことはまずない。あの化物の歌はいつだって子守歌ララバイか鎮魂歌レクイエムだ。そして、その歌を聴きくべき者はそこにはいない。すでに永遠の眠ねむりについているから、耳を傾かたむけることができないのだ。

「どうしたのサ、ジェーイ」「話をしよう、ジェーイ。二人だけで話をしよう」「ジェーイ、心配しなくてもいい」「命まではとらないヨ、ジェーイ」「ジェーイ──」

「ジェーイ」

　笑いさえふくんで少しも乱れぬ声が彼を動どう揺ようさせる。俺は動揺している。そう感じられるうちはいい。制せい御ぎよできる。わからなくなったら事だ。そうなる前に、彼はこの危機を脱だつしなければならない。逃げる。それ以外に手はない。相手はとにかく化物だ。化物と命いのち懸がけでやりあう理由が彼にはない。

　階段の半ばに硝子ガラスが塡はめこまれた窓がある。彼は大きめの釘ネイルを二本とりだして窓に体当たりをした。釘ネイルで突き割って、全身で砕いた。硝子の破は片へんと一いつ緒しよに外に飛びだすと、隣となりの建物までは二メーテルもなかった。一階下の、あの窓だ。突っこんだ。住居らしい部屋だった。薄うす汚よごれた寝しん台だいで汚きたならしい恰かつ好こうの男が跳はね起きた。「──何だ、てめえ……！」

　彼はもちろん無視して部屋を出た。長い廊ろう下かだ。窓はない。ドアがたくさんある。階段はどこだ。あっちか。彼は走った。階段。あった。下ではない。上だ。彼は階段を駆けあがった。一いつ瞬しゆんたりとも休まなかった。ここが最上階。この上はもう屋上だ。彼はドアを開けた。すぐに閉めて、階段を下りはじめた。

　化物がいたのだ。屋上に突きでた小屋みたいな構造物の上に立って、こっちを見ていた。まるで待ちかまえていたかのように。おそらく、そうなのだろう。

　読まれていた。裏をかくつもりだったが、化物の掌てのひらの上だった。

「くっ……！」彼は無意味な声を吐はきだすようにもらし、そのことでさらに苛いら立だった。さらに。そうだ。彼は苛ついている。この胸を焦がしているものは間ま違ちがいなく焦しよう燥そうの炎ほのおだ。

　階段を上ってくる者があった。女だ。三十歳から四十歳の間だろうが、老女のように疲つかれ果てている。身なりからしてかなり貧しい、醜みにくい女だ。女は彼を見るなり「ひい」と短く小さな悲

鳴をあげて壁かべにへばりついた。弱い生き物としての習性が身についているのだ。抵てい抗こうしない。主張しない。這はってでも道を譲ゆずる。決して妨さまたげない。そのことを態度で示す。正しい選せん択たくだ。ふだんなら彼も気にならない。それなのに、なぜか今は見み逃のがせそうになかった。なぜか？　違う。これは必要なことだ。俺は殺すための道具として生まれ、育てられた。殺すことは生きることだ。食べる。眠る。それらと同じくらい俺には必要なことだ。

　彼は女のこめかみに、そして首筋に、ほぼ同時に二本の釘ネイルを埋うめこんだ。

　女は瞬時に絶命して、だらしなく崩くずれ落ちた。

　彼は両眼を見開いて、鼻から息を吸いこんだ。饐すえた臭においはさして気にならなかった。これだ。この感覚。殺すための道具として育成された彼は、殺しが好きだ。何よりも好きだ。女を抱だくより遥はるかにいい。重みのある死には達成感という爽きよう雑ざつ物ぶつがある。何の意味も価値もない、本当にくだらない、どうでもいい死がもたらす感かん触しよくは格別だ。この死の、殺しの純じゆん粋すいさこそが、目の眩くらむような快感を彼に与あたえてくれる。「━原点だ。原点だよ。帰るんだ、原点に。そうだろう？　ああ、そうだ。俺はもっと自由に殺したい。殺したいときに殺したい。指図されたくない。そうだったろう？　ああ、そうだ。そのとおりだとも」

　彼は一人だが、必ずしも一人ではない。物心がついたころから二人だった。いつも二人で、彼ともう一人の彼は寸分違たがわなかった。ずれが生じれば、ただちに矯きよう正せいされた。あんなにも同じだったのだ。もう一人がいなくなっても、一人にはならない。そうだろう……？

　彼はふたたび階段を下りはじめた。もう急がない。急ぐ必要はない。いったい何を怯おびえていたのか。あの化物はいきなり彼の息の根を止めたりしない。訊きたいことがある。化物はそう言った。殺す前にまず話をしようとするだろう。あの化物はまさしく化物以外の何物でもないが、夢見がちな少年みたいに甘いところがある。それが化物の弱点だ。付け入る隙すきがないわけではない。

　さあ、一階だ。彼は出入口を使って建物を出た。前。右。左。上。それから、後ろ。化物の姿は見あたらない。気配も感じられな

いが、どこかにいるはずだ。

　硝子の割れる音がした。上か。三階、いや、四階の窓だ。

　硝子の破片と共に黒ずくめの化物が降ってきた。

　疾はやい。それだけではない。化物は「アルカーディア」と低く呟つぶやいて、右手を彼のほうへと差しむけた。その右手から何かが飛びだした。黒い管のようなものだ。彼はとっさに右方向へ跳とんだが、それは追いかけてきた。化物め。黒い管は彼の左ひだり肩かたに突つき刺さった。貫つらぬいて、地面にまで達した。身体からだを動かした途と端たん、全身から冷や汗あせが噴ふきだした。痛みには耐たえられるが、これでは動けない。

　彼に少しの時間が与えられれば、太い釘ネイルで滅めつ多た刺ざしにして左肩から先を切り離はなしていただろう。無理だった。化物が飛びかかってきて、彼の両肩を両足で踏ふみつけた。なすすべがなかった。ほとんど踏み潰つぶされるようにして、彼は倒たおれた。化物は仰あお向むけに倒れた無ぶ様ざまな彼の上で踊おどった。それは正確無比で完かん璧ぺきに目的を達成する恐おそろしい舞まいだった。粉ふん砕さいされる音が四度、彼の体内で鳴り響いた。順番はたぶん、右みぎ肘ひじ、左ひだり膝ひざ、右膝、そして左肘だ。その途中、彼の左肩から例の黒い管がするりと抜ぬけてゆく感覚もあった。苦痛はそれからやってきた。彼はほんの少しだけ呻うめいた。こみあげてくる無力感。これだけは抑おさえこまねばならない。何を措おいても、生きなければ殺すことはできないのだ。生き残る。その意思だけは失ってはならない。

　化物は彼の喉のど頸くびを踵かかとで踏みつけた。どこまでもつめたい薄うす青あお色の瞳ひとみに見下ろされると、まったく生きた心ここ地ちがしない。非の打ち所がない化物の微笑ほほえみだった。砂と岩しかない国で、人殺しのためだけに生みだされた道具の彼ですら、美しいと思わざるをえない。

「ボクは話をしようと言っただろう？　バカだネ。逃にげるからこうなるんだヨ、ジェーイ」



「俺には──」声を出すことはできる。喉を踏まれているが、加減してもらっているということだ。やつは俺を殺さない。俺は殺されない。胸中でそう唱え、萎しなびて今にも枯かれそうな心に気合いを入れた。「何もないよ、アジアン。お前と話すことはね。俺には何もない」

「べつに喋しやべらなくていいサ」化物は目を細めて軽く首を横に振ふった。「キミはただうなずくだけでいい」

「そう言われると──」

「臍へそ曲まがりなんだネ、ジェーイ」

「あがっ──」化物の足に力がこめられた。こいつはまずい。本当にとんでもない野や郎ろうだ。痛みと苦しみがちょうどバランスよく最高潮に達するポイントを知っているのか。きっと知っているのだ。わかっていてやっているとしか思えない。この化物はあえて俺を嬲なぶっている。俺は嬲られている。我が主マイ・ロードのみならず、化物にまで。

「クラニィを殺したのは──ジェーイ、キミだネ？」

　力がゆるんだ。彼は唾つばを飛ばして叫さけんだ。「──そうだ！」

「ＳＩＸに命じられて、キミが手を下した」

「ああ、そうだ！」彼は渾こん身しんの力をふりしぼって笑った。「そうだよ、アジアン！　貴様の大事な友だちは俺が殺した！　あの男がどうやって死んだか、知りたいか！　あの男は最後まで恰かつ好こつけだったよ！　自分の子供でもない餓が鬼きを庇かばって死んだんだ！　ざまあないな！　恰好よすぎて惨みじめだ！　愚おろかな男だよ！　まともにやりあったら、もしかすると俺のほうがやられてたかもしれない！　それなのに、どうでもいい餓鬼を助けるために、あの男は自分の命を差しだした！　ようするにアジアン！　あの男は貴様との友情よりも薄うす汚ぎたない餓鬼のほうをとったってことだ！　とんでもない馬ば鹿かだよ！　俺はね！　思いだすたびに笑っちまうんだ！　あの死に様をね！　思いだすたびに、腹を抱かかえてゲラゲラ笑っちまうよ！　腕うでの立つ男だったのにね！　すぐ情に流されて、甘っちょろい、くだらない男だったな！　そうさ、俺が殺したのさ、アジアン！　悔くやしいんだろう!?　まだ忘れられないのかい!?　ひょっとして、そういう仲だったのか！　どっちにしても、あの男は帰ってこない！　俺が貴様から奪うばってやったんだ！　絶対に、二度と帰ってこないんだよ、アジアン……！」

　なぜだ。どうして化物の整いすぎた顔に貼はりついている微び笑

しようは一向に崩れない。小こ揺ゆるぎ程度もしないなんて、いったいどういうわけだ。

「わかっているヨ」化物は小さな、あまりにも小さな溜ため息いきをついた。「そんなことはわかっている。ボクはただ確かく認にんしたかっただけだ」

「確かめて、それで――」どこからかこみあげてきて、身体中を満たそうとしているこの苦さは何だ。痛みも苦しみも乗り越こえられる。どれだけ泣き叫んでも、のたうちまわることになっても、生存への欲よつ求きゆうを失わない。そういう訓練を受けた。それなのに、この苦さは耐えがたい。今すぐ全身を掻かきむしって、皮ひ膚ふを剝はいでしまいたい。できない。肘と膝を破は壊かいされた。手足にほとんど力が入らない。「……どうするっていうんだ」

　化物はすぐさま「キミが知る必要はない」と応じた。

「殺せ」と口走るや否いなや、彼は頭の芯しんが痺しびれるような後こう悔かいに襲おそわれた。

「驚おどろいたな」化物はほんの少しだけ目を瞠みはってみせたが、驚いているようにはこれっぽっちも見えなかった。「キミはどうやら本当に死にたがっているようだ」

　彼は歯を食いしばった。言葉が出てこない。浮うかばない。一言も。

　化物は唇くちびるの端はしを舐なめた。「どうしたんだい、ジェーイ。キミらしくないヨ。そもそも、こんなところで、しかもたった一人で、こそこそと偵てい察さつみたいなことをしているのもなんだか変だ。だって、キミはＳＩＸの腹心の部下だろう？」

　生きながら解かい剖ぼうされるよりも、今の彼には打だ撃げきだった。途方もなく大きな打撃だという事実が、さらなる打撃だった。二重の衝しよう撃げきにひねり潰されそうになって、彼は「ハアッ」と息を吐はいた。そうして唇を嚙かみしめた。彼の前歯は下唇に食いこんで、嚙み切る寸前だった。

「どうしたんだい、ジェーイ」化物は低く喉を鳴らした。「ＳＩＸと喧けん嘩かでもした？　それで下したっ端ぱに格下げされて、こんな雑用めいた仕事を？」

「違ちがう」

「じゃあ、どうしたのサ。何があったんだい。ボクが話を聞いてあげてもいいヨ」

「黙だまれ」

「いいや。ボクは黙らない。いいかい、ジェーイ。考えてみて。なぜボクがキミの願いを聞き入れてやらないといけないんだ？」化物は首を傾かたむけて、指先で前まえ髪がみを払はらった。「理由がないヨ。どこにも、ネ。キミだって、それくらいのことはわかるだろう？」

「殺せ」

　化物は「フッ」と鼻先で笑った。

「殺せ」彼は繰くり返した。「殺せ。俺を、殺せ」

「い」

　化物はわざとらしく区切った。

「や」

　殺さないというのなら、あの化物を殺してやりたい。

「だ」

　無理だ。殺せっこない。両りよう肘ひじ、両りよう膝ひざを壊こわされた俺にはできない。あらがうことすら。何もできない。

　俺はただ嬲られるだけの、幼児の指でいいように弄いじくられても、駆かけ足で逃げることさえできない芋いも虫むしみたいなものだ。

「決めたヨ、ジェーイ」化物は彼の喉のどから足をどけた。「今、決めた。ボクはキミを殺さない。今はネ。次に会ったときはどうしようかな。それはそのときに考えるヨ。でもとにかく、今は殺さない。見み逃のがしてやろう。キミはボクに情けをかけられて、生かされるんだ、ジェーイ」

「殺せ」としか彼には言えなかった。殺してくれ、とは口が裂さけても言えないからだ。

「ＳＩＸは今どこにいる？」

「殺せ」

「銀の砦とりでにいるのかい？」

「殺せ」

「フッ……」化物は踵きびすを返して、手を振ふってみせた。「またネ、ジェーイ」

「殺せ」彼は声をかぎりに叫さけんだ。「俺を、殺せ……！」

　いっそ自害して果てるか。自ら命を絶つことくらいはできる。

　初めて出会った日、血ち反へ吐どを撒まき散らしながら高らかに笑う主あるじの姿が蘇よみがえった。

　──俺のものにしてやろう。

　さあ、俺のものになれ！

　それがお前たちにとって一番の幸福だってことに、いいかげん気づくんだよ！

　そうしたら、俺はお前たちを愛してやろう……！

「……とんだペテン師じゃないか」

　嘘うそつきめ。

　俺は頭のてっぺんから足の先まであんたのものになったし、今もそうだってのに、このざまは何なんだ。

　まるで俺は野の良ら犬いぬだ。主人に捨てられちまった野良犬みたいだ。

　それでも、俺は狼おおかみにはなれない。

　我が主マイ・ロード。

どうか俺を使ってくれ。俺はあんたのものだ。

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.6

戦闘作法

『──ちゅうわけで、第二試合！　くじでＣ１を引いたったのンが、秩ちつ序じよの番人二十七番無名隊隊長補！　ＪＭＡ会ちょ──じぇい？　えむ？　ええ？　何やこれ……？　まあええわ、カロリィィィィーナ！　シェルベリッ……！』

　実じつ況きよう担当の半魚人がまいくろふぉん略してマイクに向かって叫ぶと、試合場の北東角に立っていた女の番人が一歩踏ふみだした。喚かん声せいがあがった。ほとんどが黄色っぽい声だった。観衆よりも、番人の女性陣じんが声せい援えんを送ったようだ。

　金きん髪ぱつ碧へき眼がんのカロリーナ・シェルベリは、女性にしては背が高い。百七十サンチ以上ありそうだ。兜かぶとを被かぶっていないので、顔があらわになっている。髪はかなり短く切ってあり、目つきがずいぶん鋭するどくて、ちょっと怖こわいくらいだ。顔立ちも、美人といえば美人なのだが、どこか猛もう禽きん類的で、女性用のプロヴィデンスＧＤＳさえ身につけていなければ、細身の美男子だといわれたら、信じてしまう者もいるだろう。

　もしかすると、異性よりも同性に人気があるタイプだったりするかもしれない。女性番人たちの応援団が結成されていそうな理由は、そのあたりにあるのか。

　マリアローズはカタリの向こうにいるアーニャ・クルチバに目をやった。クルチバはマイクを握にぎりしめ、真しん剣けんな眼まな差ざしをシェルベリに向けている。まさか、クルチバもカロリーナ・〝姐あね御ご〟・シェルベリ応援団の一員だったりするのか。いや、そもそも二人は同じ隊の隊長と隊長補なのだ。仲がいいかどうかはわからないが、浅からぬ関係、といったらまたちょっと誤解を招きそうだけれど、とにかく、肩かた入いれしたい気持ちがあってもおかしくはない。

　ちなみに、カタリが予備を出してマイクが二つになったので、一つはクルチバが、もう一つはカタリとマリアローズで使うことにした。てゆうか、僕はべつに喋しやべりたくないし、解説だか何だか知らないけど、クルチバが一人でやってくれるなら、そのほうがいいんだけどね。

　それにしても、ＪＭＡっていったい何なんだろ。

『──ほぉーんでもってえッ！』半魚人は試合場の南西角を指さした。『物の見事にＣ２を引いてまいよったァッ！　同じく秩序の番人、元三番副長直属隊隊長補、現在は五番副長直属隊所属ゥッ！　コォォン！　ラァァァァッドッ！　アシャァァァァァァー……！』

「よろしくお願いしまぁーっす！」と大声で叫びながら、観衆にまで笑え顔がおを振りまいたり手を振ったりしている男は、銀色の鎧よろいプロヴィデンスＯＦを身にまとってはいるが、いわゆる番人のイメージから大きく外れている。顔は柔にゅう和わだし、明るい色の巻き毛がぽわぽわしていてやわらかそうだ。好青年どころか、底そこ抜ぬけに朗ほがらかな子供みたいな印象さえ受ける。

　あんな男がヨハン・サンライズの側近だった。不思議でもあり、妙みように納なつ得とくできもする。自分とは正反対の資質を持つああいう男をそばに置いていた〝冷血〟の副長は、見かけよりずっと懐ふところが深かったのかもしれない──なんてことを考えてしまい、マリアローズは顔をしかめた。だから何だっていうんだよ。ヨハン・サンライズの懐が深かろうと浅かろうと、知ったことじゃないし。だいたい、面識がある程度でしかないわけだし。死んじゃったんだし。

『ほんなら、第二試合ィィィ……──』と半魚人が言うと、試合場の中央にいるピンパーネルが両手をあげた。

　ユリカとサフィニアが「いい？」「……はい……」とうなずきかわして、二人で小さな鎚つちを持った。

『レエエエエエ
ディィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ……』

　ゴングが鳴った。

『──ファイッ……！』

　ピンパーネルが両手を振りおろして後退すると、木刀を正眼に構えたカロリーナ・シェルベリとコンラッド・アシャーが進みでてきて、カンッと一度、剣先を打ちあわせた。

　アシャーは下がろうとしたが、シェルベリは前進した。喉のど元もとを狙ねらった突つきだ。鋭いだけじゃない。力強さもあった。アシャーは「──わっ」と木刀を斜ななめに撥はねあげ、シェルベリ

の木刀を弾はじいて跳とびさがったが、かなりびっくりしている――ように見えるだけなのか。

「いきなりくるとはねえ！　怖いなあ！　いい突きだし！」

「べらべらと――」シェルベリは冷え冷えとした憤ふん怒ぬの形相で距きょ離りをつめた。「無む駄だ口ぐちをたたくな……！」

　アシャーはやはり斜めに木刀を振ふりあげてシェルベリの突きを払はらった。シェルベリはすぐに木刀を引いて、また突きを放った。アシャーはこれも「わわっ」と声をもらしながら木刀で弾いた。一つ一つの動作がやや大きすぎるし、常に体勢が崩くずれ気味で、一見、危なっかしい。でも、シェルベリの決して悪くない突きを、アシャーはことごとく防いでしまう。

「あの人……」ユリカが呟つぶやいた。「けっこうできるわ」

　ＺＯＯの小さな太陽であり、妙たえなる一輪の花でもある最強伝説の持ち主は、誰だれにも負けない弛たゆまぬ努力の人ではあるけれど、決して理論派ではない。「ぱちっときたタイミングで、ばーんとやって、しゅーっしゃーってやるのよ」とか言ってしまうような感覚派で、その意味ではたぶん、一種の天才なのだろう。だからこそ、こういう場合、ユリカの言葉は信用できる。

「型にはまらない――」そこまで言ったところで、カタリが「魚うおっ」とマリアローズにマイクを向けてきた。『あのアシャーっていう人は、ちょっと矛む盾じゅんしてる言い方だけど、型にはまらないタイプみたいだね。癖くせはあるけど、我流だから読みづらい。合理的じゃなくてめちゃくちゃだけど、身体能力の高さでカバーしてる。あれで大だい丈じよう夫ぶなのって思わせるような姿勢で剣が出てくるから、相手にとってはやりづらいよ』

『当然です』とクルチバが口を挟はさんできた。『コンラッド・アシャーは、ヨハンさ――失礼。ヨハン・サンライズ副長の直属隊で隊長補を務めておられたほどの方。ヨハンさ――ヨハン・サンライズ副長がその実力を認めておられたということです。変わり種ではありますが、コンラッド・アシャーは諸隊長にひけをとらない、才能豊かな卓たく越えつした剣士です』

『いいんだけどさ』マリアローズは横目でクルチバを見た。『さっきから何なの？　ヨハンさまって』

　クルチバは素知らぬ顔で『しかし、シェルベリも──』とつづけた。

『て、無視……？』

『ＪＭＡ会長にして、自他共に認めるＪＭＡ最強の剣士』

『そのＪＭＡっていうのも、ずっと気になってるんだけどね……』

　クルチバはいきなり椅い子すから立ちあがって『シェルベリ隊長補！　いいえ！　あえてこう呼ばせてもらいます！　会長……！』と高らかに叫さけんだ。『我々を代表して、ＪＭＡの心意気を見せてください！』

『……てゆうか、気のせいかな？　なんかきみ、涙なみだぐんでない……？』

『我々は！』クルチバは掌てのひらで目の周りをこすった。『もはや秘密結社でありつづける必要がなくなってしまった！　あるいは、この胸に宿した青春の炎ほのおを、我々は消してしまうべきなのかもしれない！　でも！　できない！　そんなことは！　できるはずがない！　我々は全員一いつ致ちでＪＭＡを存続させることを決定した！　今こそ宣言します！　公然と！　正々堂々と！　ヨハンさま！　我々の身勝手をどうかお許しください！　ＪＭＡは永遠です……！　ヨハンさま万ばん歳ざい……！』

　すかさず女性番人たちが「ヨハンさま万歳！」「ヨハンさま万歳……！」と唱和した。

　クルチバはマイクを左手に持ちかえ、右手の中指を眉み間けんのあたりにあてて、ほとんど涙声で絶ぜつ叫きようした。『──眼鏡めがね万歳……！』

「眼鏡万歳！」「眼鏡万歳！」「眼鏡万歳！」「眼鏡万歳……！」「眼鏡万歳……！」

『……眼鏡……？』マリアローズは呆あつ気けにとられて中ちゆう途と半はん端ぱなまばたきをした。なんかよくわからないけど、かなり変な雰ふん囲い気きになっちゃってるんだけど……？

『会長！』クルチバは右手の人差し指を試合場に向けてズバッと突きだした。『ＪＭＡの名にかけて！　なんとしても一勝を……！』

「━承知……！」シェルベリの顔はもう真っ赤だ。だいぶ汗あせもかいている。呼吸も乱れ気味だ。ずっと休みなく突きを繰くりだしつづけているので、そうとう消しよう耗もうしているだろう。対するアシャーは、とくに疲つかれた様子もなく「ほっ」とか「はっ」とか「ややっ」とか「うわっ」とか言いながら、曲芸めいた身のこなしで、シェルベリの木刀をかわすのではない。必ず自分の木刀で弾いたり受け流したりしている。

　これではまるで、アシャーがシェルベリに稽けい古こをつけているかのようだ。アシャーはわざとやっているのか。そこまではわからない。でも、シェルベリにしてみれば、精神的にもかなりきついに違ちがいない。

　どうやって挽ばん回かいするつもりなのか。

　不意にシェルベリがタンタンタンッと三歩後退して全身を力ませた。「━憤フンッ……！」

　カタリがマリアローズからマイクを奪うばいとった。『さあ、カロリーナ・シェルベリ！　いったいぜんたいどう出よるンか……!?』

　アシャーは木刀を右手一本で持って、左手で手招きしてみせた。「カモォーン♪」

『コンラッド・アシャーはむっちゃ余よ裕ゆうの構えやああッ……！』

『行け！　シェルベリ……！』クルチバがけしかけるように叫んだ。

「イゴール流！　ワァールウィンドッ……！」シェルベリの身体からだが急に沈しずんだ。しゃがんでいるといってもいいくらい、ものすごく低い体勢だ。そのままシェルベリは回転しつつ前進した。もちろん、その回転にあわせて木刀も振りまわされた。全体重がかかっていて、回転運動の力も加えられているから、あれはそんなにたやすくは受けられない。アシャーもそう判断したのだろう。斜ななめに下がろうとした。

「━シフトォッ……！」シェルベリは獣けものみたいに跳とびあがった。いや、そう見えただけだ。実際には極限まで低くしていた

重心を起こした──つまり、膝ひざを伸のばした。それだけだったのだが、何しろすごい勢いだったので、アシャーに躍おどりかかったかのように錯さつ覚かくしたのだ。

「ハンドレッドォッ……！」シェルベリは打ちこんだ。苛か烈れつだった。猛もう速そくだった。右から。左から。右から。左から。右から。左から。攻せめは変化に乏とぼしいどころか、完全なまでに単調だ。でも、その圧力はとてつもない。洗練されているとは言いがたいけれど、力押しに押して、押して、押しまくる剣けん技ぎ。これはありだ。

『さあさあさあさあさあッ……！　どないした、コンラッド・アシャー！　防戦一方やでえ！』

　半魚人の言うとおりだ。さっきまでアシャーは、守りながらも優位に立っていた。今は違う。シェルベリの怒ど濤とうの打ちこみを、ことごとく木刀で打ち返してはいる。でも、じりじりと後退している。左右に動く余裕はないようだ。まっすぐ下がっている。もうすぐ試合場の端はしだ。審しん判ぱんのピンパーネルがアシャーの足あし許もとを見ている。アシャーの足が一歩でも、いや、ほんの少しでも試合場から出たら、その瞬しゅん間かん、負けが決まる。アシャーの表情も硬かたい。それでいて、口許には笑えみが──

『魚ぎよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおう……ッ!?』『はっ……!?』

　半魚人が叫び、クルチバは息をのんで、試合場一帯がどよめいた。

　何が起こったのか。

　シェルベリの手から木刀が吹ふっ飛んで、地面に落ちた。

　アシャーは木刀を振ふりあげた体勢で静止している。

「……巻いて、打ち払はらったんだわ」とユリカが呟つぶやいた。「あの人、目がいい。しょれに、手首がものしゅごく強ちゆよい……」

「適当剣法──」アシャーは首をひねった。「えっと……アヒル返し？　的な……？」

「……アヒル……」サフィニアは首をふるふる横に振った。「なぜ……アヒル……」

　マリアローズはそっとうなずいた。「飛べないしね……アヒル……」

『シェルベリッ……！』クルチバが怒ど鳴なると、キイイイイイイィィィィィィィィン……という不快な音が響ひびき渡わたった。『何をしている！　まだ勝負はついていないでしょう……！』

「ムワアアアアァァァ……！」シェルベリは雄お叫たけびをあげてアシャーにつかみかかってゆこうとした。アシャーは逃にげなかった。シェルベリに向かってゆき、すり抜ぬけるようにしてこれをかわした。シェルベリは勢いあまって試合場から飛びだしそうになった。なんとか踏ふみとどまったけれど、背中がガラ空きだ。今なら簡単に押しだしてしまえる。アシャーはそうしなかった。マリアローズは啞あ然ぜんとした。

　アシャーはシェルベリの木刀を拾った。

「ほいっ」

　そうして、シェルベリに向かって投げた。

　シェルベリは振り返るなり、おそらく半ば反射的な動作なのだろう、木刀を受けとる恰かっ好こうになった。「──なっ……!?」

「ぼくもね」アシャーはすっとあとずさって、自分の胸に木刀の柄つか頭がしらを突つき立てるような構えをとった。「負けるわけにはいかないんだ。今、このぼくがここにあるのは、ヨハン副長のおかげだから。ぼくに命をくれたヨハン副長のために、絶対に負けられない。ぼくは秩ちつ序じよの番人の総長になるっ……！」

　この言葉には、観衆よりむしろ、番人たちのほうが驚きよう愕がくの声をあげた。半魚人が半魚眼をひん剝むいて机を叩たたいた。『──出たあああァァァッ……！　関白宣言!?　ちゃうわい、総長奪だつ取しゆ宣言ンンンンッ……!?』

『あの構えは……』クルチバの声は震ふるえていた。

「この身は空くうとなる──」アシャーの眼光がいきなり鋭するどくなった。「天空の威い力りよくよ、ぼくの剣に宿れ。真ま似ね真似

剣法、偽にせ破天一流──でも、ぼくには〝七しち星せい〟はちょっと無理だから、ゆえに〝四よん星せい〟っ……！」

「舐なめるなあああああァァァッ……！」シェルベリが突とつ進しんしていった。

　アシャーも前に出た。

　シェルベリは愚ぐち直よくなまでにまっすぐな突きだ。アシャーも突きを出した。

　わずかにアシャーのほうが速い。

　シェルベリは身体を横に向け、その左ひだり肩かためがけて放たれた一突き目を紙かみ一ひと重えでかわした。そのときにはもう、二つ目の突きがシェルベリの右肩を襲おそっていた。そして、三つ目は喉のど頸くびを。これは少し甘かった。シェルベリは首を左に曲げた。アシャーの木刀はシェルベリの首の左側面をこそげ落とすように奔はしって戻もどり、最後の突きは鳩尾みぞおちにめりこんだ。鎧よろいの上からの打だ撃げきなのに、やたらと重い音がした。

　シェルベリの身体が力を失って崩くずれた。アシャーは「──よっ」とシェルベリを抱だきとめて、地面に寝ねかせた。ピンパーネルが駆かけよってシェルベリの状態を確かく認にんし、両手を何度か交差させた。「気を失ってマス」

　色が変わるまで強く唇くちびるを噛かんでいるクルチバを横目で見ながら、マリアローズは「はい」と半魚人にマイクを渡した。

『勝者ァァァッ！』半魚人は叫さけんだ。『コンラァァッド！　アシャァァァァァァー……！』

『──さてはてはてさて。そないなわけで今回の総長争そう奪だつ変則トーナメント、突撃隊、遊撃隊に関しては隊長はんが全員エントリーしたっちゅうことになるわけやけども、やっぱりアレなんかいな。隊長はんがたの間で申しあわせみたいなモンがあったんやろか。そこンとこどないやねん、解説のアーニャちゃん』

『ちゃん……？』クルチバは不ふ愉ゆ快かいそうに眉まゆをひそめたけれど、すぐに咳せき払ばらいをして表情を消した。『──わたしが把は握あくしているかぎりにおいては、各隊長が合議の上で参加を決めたという事実はないようです。最初に太臺子タイダイシー隊長が出場を申し出て、各隊長がそれならば自分も、といった具合にあとにつづいた──そのような経けい緯いだとわたしは考えておりますが』

『ふむふむふむ。にゃるひょどにゃあ。情報通のアーニャちゃんがそないにゆうンなら、きっとそんなかんじなんやろな。えひょえひょえひょ』

『あの……』

『ほりょ？』

『もしかして、わたしのことをバカにしてらっしゃるのですか』

『なんでやねん。わしがアーニャちゃんみたいなかわいい子ぉのこと、バカにしたりするわけあらへんやん』

『か、か、か、か、かわいい……』クルチバの顔が真っ赤になった。半魚人に褒ほめられて赤面するなんて、よっぽど免疫がないのか。『そ、そんな……よ、よしてください。こ、心にもないことを……』

『なーにゆうとんのや。わしの人生はいっつも真しん剣けん勝負、ド根こん性じようで全力全開、漢おとこ道みちをまっしぐらに爆ばく走そう中やで。アーニャちゃん』半魚人はクルチバに向きなおり、まるで似合わないクソ真ま面じ目めな半魚顔になった。『お世辞でもなんでもない。アーニャちゃんはめっちゃかわいいで。今のまんまでも魅み力りよく的やけど、磨みがけばもっと光る。ぴっかぴかにのう。わしはな。嘘うそはよぉつかん。ちゅうか、つけへんのや。馬ば鹿か正直な漢やからのう。器用には生きられへんねん』

『……わ、わ、わたし……』クルチバはうつむいて首を横に振ふった。『そ、そんな……』

「てゆうか……」マリアローズは試合場一帯を見まわした。「みーんな、極限を超こえてひきまくってるんだけど……」

『おひょうっ』半魚人は自分の頭をぴしゃっと叩いて破は顔がん一

いつ笑しようした。『すまんすまん。わしとしたことが。聞き逃のがせへん一言やったもんで、ついマジになってもうたわ。堪かん忍にんな、アーニャちゃん』

『……え、ええ……べつに、わたしは……』

『ちゅうわけで、第六試合の前に、第三、第四、第五試合の模様をさらぁーっとダイジェスト的にお伝えしたろ思うんやけども、ええかな』

『あ……はい。それは、わたしとしては、とくに異存はないところでありまして……』

『そか。ほな、第三試合やけども──』

　第三試合は七番突撃隊隊長チェス・ピードと二十五番無名隊隊長ハインツ・クルエルフォートとの対戦だった。双そう方ほう隊長とはいえ、突撃隊はその名のとおり、戦せん闘とうとなれば真っ先に敵に突つっこんでゆく命知らずが集められている隊で、無名隊は諜ちよう報ほうを主とする。マリアローズも知っている焔ホムラの跡あとを継ついで七番突撃隊の隊長となったチェス・ピードは、小こ柄がらだが俊しゆん敏びんで、機転が利きき、動じない。クルエルフォートの不利は明らかだと見られたが、予想は覆くつがえされた。

　クルエルフォートは秩ちつ序じよの番人の象しよう徴ちようといってもいい、銀色に輝かがやくプロヴィデンス・シリーズの鎧を脱ぬぎ捨て、暗色のぴったりしたボディスーツだけという姿で勝負に臨のぞみ、素す早ばやいチェス・ピードと互ご角かくに渡わたりあってみせた。それでも終しゆう盤ばん、クルエルフォートの動きがガクンと落ち、表情も曇くもった。やはり実戦経験豊富な突撃隊の隊長が最後には笑うのか。チェス・ピードは嵩かさにかかって攻せめたて、クルエルフォートはぎりぎりのところで粘ねばった。その執しゆう念ねんをへし折るには、力強く大だい胆たんな攻こう撃げきが必要だ。チェス・ピードの木刀にそれまで以上の速度と威力がこもり、そのぶん太た刀ち筋すじがやや荒あらくなった。そこでクルエルフォートはいきなり逆ぎやく襲しゆうに転じた。マリアローズの目には、倍以上に動きがよくなったように見えた。あまりにも急激な変化だった。すべて演技だったのだ。クルエルフォートは疲つかれてなんかいなかった。そう見せかけていただけだった。しかも、序盤は防ぼう御ぎよからカウンターを狙ねらう堅けん実じ

つな剣術だったのに、攻めて攻めて攻めまくるスタイルに変わった。たった数秒の間にクルエルフォートはチェス・ピードを試合場の端はしに追いこみ、身体ごとぶつかっていって鍔つば迫ぜり合いに持ちこむのかと思ったら、足払いをかけて転てん倒とうさせた。それで場外に出てしまい、チェス・ピードは敗北した。

　終わってみれば、クルエルフォートの作戦勝ちだった。最終局面の印象だけでいえば、クルエルフォートがチェス・ピードを圧倒していたけれど、あくまで印象だ。たぶん、実力ではチェス・ピードのほうが上だろう。クルエルフォートはそれがわかっていたから、重い鎧よろいを脱いで、序盤から中盤まで耐たえに耐えた。鎧を着ていないぶん、いくらか体力の消しよう耗もうが抑おさえられるはずだし、もともと持久力には自信があるのだろう。溜ためて、溜めて、疲ひ労ろうした演技をし、チェス・ピードが隙すきを見せたら、一気に勝負をつける。それがクルエルフォートの策で、見事に図に当たった。でも、もし最後の奇き襲しゆうをチェス・ピードがしのいだら、勝敗は逆になっていただろう。見た目よりも薄はく氷ひようの勝利だったのに違ちがいない。

『第四試合は、とっにっかっくっ！　シャルロット！　いやいや、シャルロットさま！　シャルロット・リンデさま！　──ちゅう展開やったなぁー。いひょほひひょひょ……』半魚人の笑い方は無ぶ様ざまなほどいやらしかった。クルチバが、信じられない、とでも言いたげな顔つきで隣となりの半魚人を睨にらんでいるけれど、半分以上魚なだけに、やつは鈍どん感かんだ。まったく気づいていないらしい。『ものごっつかぁーっこえかったでえ、シャルロット・リンデさま！　わしも一回でええからしばかれたいっ！　ちゃうか！　だはは！』

　第四試合は、十一番遊撃隊隊長ジョービー・カラマーと十二番遊撃隊隊長シャルロット・リンデ、遊撃隊隊長同士の対決となったのだが、二人は対照的だった。

　まず、カラマーは男性で、リンデは女性だ。〝夜の遊撃手〟の異名をとるらしいカラマーは、いつもにやついている軽薄そうな長身の三十男で、全参加者中一人だけ羽根付きの兜かぶとを被かぶって出場したリンデは実直、果断、高潔、ただし酒しゆ豪ごう。カラマーは「えー。あれが番人？」と首を傾かしげたくなるようなタイプの男で、リンデは「女で番人っていったら、やっぱりああいうかんじだよね」と思わせる。

　戦い方もぜんぜん違っていた。カラマーは左利きで、左手一本で木刀を持ち、しかも腕うでを伸のばして身体からだを完全に横に向けるという変則的な構えだった。その木刀捌さばきは剣術というより腕と木刀を一体にして鞭むちみたいに使うもので、足の運びはわりあい直線的なのに、太刀筋はやたらとぐねぐねしていた。対するリンデは、木刀を両手持ちして剣先を膝ひざ頭がしらよりも下ろし、腰こしをしっかりと落として右足を前に、左足を後ろに置くという、オーソドックスな下段の構えだった。ちなみにバーニング・バラッド著『武技概がい論ろん』によると、下段は防御を主眼とした構えで、相手の攻めに対応しやすい。実際、リンデがカラマーに先手をとらせて防ぐ、という展開がしばらくつづいたのだが、そのままでは終わらなかった。リンデが突とつ然ぜん、動きを止めたのだ。もちろん、カラマーはリンデの左ひだり肩かたを木刀で打った。リンデは小こ揺ゆるぎもしなかった。カラマーはさらにリンデの兜に木刀を叩たたきつけた。それでもリンデはびくともせず「なまぬるい！」と叫さけぶなり攻撃に転じた。「──カラマー！」「貴公！」「一対一の勝負を！」「何と心得ているのです！」「その腐くさった根性を！」「性根を！」「叩きなおして差しあげましょう！」「惰だ弱じゃく！」「軟弱！」「腑ふ甲が斐いない！」「ぬるい！」「ぬるい！」「なまぬるい……！」

　リンデは容よう赦しゃのない言葉と鋭するどい木刀でカラマーをさんざん打ちすえたあげく、跳とびあがって一回転し、頭頂部に踵かかと落おとしを見み舞まって失神させ、兜を脱ぐと──その峻しゅん厳げんで美々しい顔かんばせは血に染まっていた。リンデの兜に浴びせたカラマーの一撃は、決してなまぬるくはなかったのだろう。ただ、リンデの気き迫はくを揺らがせることはできなかったのだ。

「貴公のごとき軽けい佻ちょう浮ふ薄はくな輩やからは我が団の面つら汚よごしだと、かねてより思っておりました。女の尻しりを追いかける暇ひまがあれば剣けんを磨みがきなさい、カラマー」そう言い放ってから、リンデは少しだけ笑った。「といっても、今の貴公には聞こえていないでしょうね。未熟者相手に、私も大人げない。手心を加えてやるべきでした」

　たしかに、あれはかなりかっこよかった。シャルロット・リンデは泉セン里リ決戦のころから隊長だった。筋金入りなのだ。モノが違うということだろう。

『──ほんで、第五試合！　一言でゆうたら、熱かったッ……！　あ

れこそまさしくッ！　漢おとこ同士の意地の張りあい！　真っ正面からのドツキ合いっちゅうかんじやったな！』

　九番突撃隊隊長デートニッヒ・ボルボンゾルは、垂れ目で眉まゆ太く顎あごが割れている男くさい女たらしといった風ふう采さいで、一見、リンデにこてんぱんにやられたカラマーと似た雰ふん囲い気きさえ感じるほどだった。

　対戦相手の十番遊撃隊隊長太臺子は、それとは正反対だ。二番親衛隊隊長〝小しよう羅ら刹せつ〟李童晏の兄弟なのではないかと思えるような——というか、同じ熾シキ帝てい国こく出身で、当然、東方系の外見的特とく徴ちようを備えているからそう見えるのかもしれないが、両者は間違いなく同じカテゴリーに属するだろう。李童晏よりは表情に明るさがあって、快活そうな男ではあるけれど、戦って、戦って、戦って、戦場で散る。見るからにそういうタイプの男だ。

　太臺子がガツンガツンいって、ボルボンゾルが受け流しつつ、勝機をうかがう。あるいは、猪いのしし武む者しやの太臺子がボルボンゾルの術中に嵌はまる。そんな展開になるのではないかという戦前の予想は、完全に外れた。

「行くぞォォラ太臺子ーッ……！」

「応よッ、ボルボンゾル……！」

　ユリカとサフィニアがゴングを鳴らすなり、二人はそう声をかけあって、何のひねりもなく真正面から激突すると、激げき烈れつな鍔つば迫ぜり合いになった。「——オウオウオウ！」「ウォラウォラウォラ……！」雄お叫たけびの声量と両者の筋力は拮きつ抗こうしていて、鍔元でこすれあう二本の木刀はガチガチガギガギ悲鳴をあげた。二人は右へ、左へと動いて、さかんに膝をぶつけあい、なんとかして相手の体勢を崩くずそうとした。距きよ離りが近くなると、頭ず突つきも飛びだした。二人は兜を被っていなかったから、すぐに額が切れて双そう方ほう血ち塗まみれになった。力比べは完全に互ご角かくだった。少なくとも、そう簡単には勝負がつきそうになかった。ちょっと膠こう着ちやく気味か。マリアローズがそんな印象を抱いだいた瞬しゆん間かん、ボルボンゾルが「がははは」と笑った。

「いくらなんでも宵よい越ごしのタイマンはまずいな、太臺子！」

「俺はかまわぬが！　酒を酌くみ交かわすのと一いつ緒しよで、それはいつでもできる！」

「やるか……！」

「ああ……！」

　そうして二人は飛び離はなれた。すぐに双方突進して、木刀を繰くりだした。

　早いほうが攻せめ、遅おくれたほうは受けに回る。狙ねらうは頭か肩、あるいは喉のど、鳩尾みぞおち、腹。牽けん制せいや眩げん惑わくめいた技わざ、小こ賢ざかしい手管は一いつ切さいなかった。深く入れば、木刀といえども命が危あやうい。一ひと振ふり一振りが必殺の一いち撃げきだ。世の中には技ぎ巧こうを凝こらした精せい緻ちな剣術が数あま多たある。二人の攻こう防ぼうは単純すぎて、剣術家は稚ち拙せつと評するかもしれない。ただ、彼らのごとき烈れつ士しは、たとえ手足をなくそうと目が塞ふさがれようと、微み塵じんも戦意を失わず、決して止まらない。意識があるかぎり戦いつづける。だとするなら、必ず相手を斃たおさねばならない。それが中ちゆう途と半はん端ぱな攻こう撃げきであれば、彼らは躊ちゆう躇ちよせずに肉を斬きらせて骨を断たつだろう。彼らは明らかに似た者同士で、互たがいを知っているがゆえに、必殺の太た刀ちを浴びせあう以外になかったのだ。

　試合場一帯は異様な熱気に包まれた。

　ボルボンゾルが、太臺子が、木刀を振りおろすたびに観衆は、番人たちは、一いつ斉せいに掛かけ声をかけた。次の一撃で決まるのではないか。その緊きん張ちよう感かんが少しも弛たゆまずに持続して、むしろ高まり、終わりのときを待つのではなく永続を期待した。ボルボンゾルと太臺子は、だが、次の瞬間に相手を打ち倒たおすことのみを考えて木刀を振るいつづけた。

　終しゆう焉えんは突然やってきた。唐とう突とつではあったが、必然だった。あとから考えてみると、徐じよ々じよに二人のタイミングがあってきていて、攻めと守りがほとんど同時に行われるような展開になりつつあった。その果てに、完全に一いつ致ちしたのだ。

　上段から振りおろされた二本の木刀が二人の斜ななめ上、ちょう

ど中間で衝しよう突とつして──しかし、両者とも退ひかず、力を緩ゆるめなかった。

　木刀同士はグアシグアシとこすれあい、削けずりあいながら、ついにはボルボンゾルと太臺子の頭頂を直撃した。二人は同時に「オオオオオオオオオオオオオオラアアアアアア！」「デエエエエエエエエエエエエエエアアアア！」と声を張りあげた。おそらく自身を叱しつ咤たしてもう一撃、相手に見み舞まおうとしたのだろうが、果たせなかった。

　二人はともに大の字になって倒れた。双方失神していたが、握にぎりしめた木刀を放すことはなかった。凄せい絶ぜつな、それでいてすがすがしい熱ねつ闘とうを称たたえて、試合場一帯に割れんばかりの拍はく手しゅと喝かつ采さいが巻き起こり、中には感かん涙るいにむせぶ者さえいた。審しん判ぱんピンパーネルの相あい討うち、引き分けという裁定に異を唱える者は皆かい無むだった。ただちにユリカが二人を診しん察さつして、命に別状はないものの、負傷の程度はそうとう重かったので、アサイラム送りということになった。結果、第四試合と第五試合の勝者同士が剣を交える試合は中止となった。

『──ちゅうわけで、今や恒こう例れいとなってもうた感もなきにしもあらず的なちゅうわけで、ちゅうわけでえッ……！』半魚人は椅い子すから腰こしを浮うかせて試合場を指さした。

　ちょうど第六試合の参加者が試合場に足を踏ふみ入れたところだった。

　二番親衛隊隊長〝小羅刹〟李童晏と、八番突撃隊隊長シャット・〝神剣グレヒャ〟。いよいよＡランクだ。

『第六試合は、銀の軍団ザ・シルバリイが誇ほこる剣けん豪ごうとしてエルデンにその名を轟とどろかしとる両名の対決っちゅうことになってまいよったでえッ……！　いったいどうなる⁉　何が起こるッ⁉　ごちゃごちゃぬかさんでも見とったらわかるってか⁉　そのとおりやッ……！』

　李童晏は試合場の北東角に移動すると、いきなり胸むな鎧よろいと肩かた当あてを乱暴に外した。観客が沸わいた。一度ではない。二度、沸いた。李童晏は鎧だけではなくて、その下に着ている濃のう紺こんのアンダーウエアの裾すそにも手をかけたのだ。

諸もろ肌はだを脱ぬぐと、一いつ片ぺんの贅ぜい肉にくもついてない、鑿ノミで彫ほったような、荒あら々あらしくも精密な肉体があらわになった。その背には、東方で闘神として崇あがめられているという羅ら刹せつが生々しく刺青いれずみされている。李童晏は細い眼めを見開いて「叱シッ！」と気合いを発しながら、黒くろ塗ぬりの木刀を鋼はがねのごとき自身の胸板に叩たたきつけた。
「……い、痛そう……」とサフィニアがもらした。

まったくだ。痛いよ、あれ。痛いに決まってる。痛くないはずがない。普ふ通つうなら。普通じゃないんだよね。まあ、ボルボンゾルと太臺子も、だいぶおかしかったし。李童晏なんて、それ以上ってかんじがひしひしするし。てゆうか、全身から湯気が立ってるんですけど。意気込むのはいいんだけど、物事には限度とか程度ってものがあってしかるべきなんじゃないかと、言えるものなら言いたい。でも、言えない。言えるわけがない。怖こわいから。

南西角のシャット・グレヒャは、おそらく二十代の半ばで、鎧の上から見たところでは中肉中背か、やや痩やせ気味くらいで、どうってことのない金きん髪ぱつ碧へき眼がんで、正直、「え？　これが〝神しん剣けんグレヒャ〟……？」と言いたくなるような外見だ。全体的に八の字的な顔立ちだし、肩当てをつけていても撫なで肩だとわかるほどだったりもするので、なんとなく気弱そうに見える。姿勢もよくないし、表情が暗い。「あー、つまんねーなー」とでも思っていそうな顔つきだ。血色がよくないので、病人のような風ふ情ぜいさえある。

李童晏が木刀の先をグレヒャに向けた。「一度、貴様の神剣とやらを我が剣で受けてみたかった。ようやく念願が叶かないそうだ」

「……あのう」グレヒャは左手をあげて、実じつ況きよう席のほうに不景気な顔を向けた。

『ほろ……？』半魚人は魚にはないはずの首を傾かしげた。『何やねん。どないしたん』

「いや、じつは……」グレヒャは木刀を持ったままの右手で腹部を軽く叩きながら、溜ため息いきをついた。「朝からけっこう体調が思わしくなくて。それで──」

「おい、貴様……」李童晏の顔が引きつった。

グレヒャはちらりと李童晏を見て、実況席に視線を戻もどした。その間のほんの一いつ瞬しゅんだった。マリアローズは見み逃のがさなかった。グレヒャは笑えみを浮かべた。それは苦笑いのようでも、嘲ちよう笑しようのようでもあった。少なくとも、誠意や率そつ直ちよくさといったものとは無む縁えんの、かなり性格が悪そうな笑い方だった。

グレヒャは頭を下げた。「私は棄き権けんします。当然、不戦敗ということでかまいませんから。申し訳ありませんが、そういうことで一つ、お願いします」

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

chapter.7

因果

「――ヨハン」

「ヨハン」

「……ヨハン」

　だれだろう。おれをよぶのは、だれだ。

　しっている、こえだ。

　なつかしいな。

「ヨハン」

　ああ、そうか。

　お父さん。

「そうだ。俺だよ、ヨハン。どうした」

　どうって――

　どうもしないよ。べつに、どうもしない。お父さんこそ、どうしたの。おかしいな。声は聞こえるのに、姿は見えない。どこにいるの？

「ここにいるじゃないか」

　でも、変じゃないか。

　お父さんは死んだはずだ。

　モラリティ時代からデニス・サンライズの同志だったカレル・シュペクナーは、ある夜、当時、秩ちつ序じよの番人と敵対関係にあったクラン〝ドンダッド・ハイネル〟の罠わなにかかり、隊士五名とともに三十人以上の悪漢どもに押し包まれて、敵二十三人を道連れにしたが、殺害された上、斬きり刻まれて、市中にさらされた。

「そうだ、ヨハン。俺は死んだ」

　誰だれも彼もが炎ほのおのような男だと評した。おれは果たして本当に彼の息むす子こなのか。幼心にも不思議に思っていた。

「おまえは母さん似だからな。おまえが二歳になる前に死んでしまったから、覚えてないだろうが。あれは心根のやさしい女だった」

　お父さんも死んだだろう。

「まあな」

　じゃあ、なんで？

「何がだ」

　死んだはずのお父さんが、どうしてここに？

「わかるだろう」

　わからないよ。

「案外、愚おろかだな」カレル・シュペクナーは聞き覚えのある豪ごう気きな笑い声を立てた。「──おまえもきたんだよ、ヨハン。こっち側に。だから、こうして話ができる」

　嘘うそだ。

「嘘じゃねぇよ」

　誰だ、君は。違ちがう。お父さんじゃない。でも、知っている。いったい誰なんだ。

「わかるだろ」

　わからない。

「俺だよ、ヨハン。ああ、副長ってつけたほうがいいのか。お前はいちいちうるせぇからな」

　まさか──焔ホムラ、なのか。

「ああ。久しぶりだな」

なんで、君が。

「違うぜ、ヨハン。俺がお前に会いにきたわけじゃねぇ。お前がこっちにきたんだ」

こっち……？

「そうさ。釈拿シヤクナもいる。こいよ、釈拿」

「ヨハン！　元気だった？　……て言うのも変だよね。こっちにきちゃったんだもの」

釈拿……。君は……。

「そんなに気ぃつかうなよ」焔は軽く笑った。「お前らにはちょっと申し訳ねぇが、俺らはこっちでけっこう楽しくやってるんだ」

「そうそう」釈拿の声は明るい。「こっちには、危ないこととか何もないし！」

「ガキも産まれたんだぜ。ほら──」

赤子の声が聞こえた。

「俺らのガキだ。……なんか照れくせぇな」

「焔なんて、すっかりいいパパさんになっちゃって！　ママより赤ちゃんのことのほうが好きなんだよねー」

「んなこたぁねぇよ。お前が一番に決まってんだろ、釈拿」

「ほんとかな？」

「たりめぇだろうが」

……やめろ。

「しかし、これでまた賑にぎやかになるな。ヨハン、お前もこっちにきて──」

「そうだね。お父さんもいるし。あ。ヨハンの場合、二人いるんだよね！　どっちもこっちにいるから──」

　……やめてくれ。

「そうだ。総長を──いや、こっちじゃあそんな呼び方は似合わねぇな」

　……頼たのむ。よせ。

「ヨハン」

　ああ。

　だめだ。どうか、養ち父ちよ。あなただけは。どうか、やめてくれ。

「どうした、ヨハン。疲つかれておるのではないか。もうよいのだぞ」

　よくはない。おれは決めた。生きる。死なぬ。それがおれの戦いだ。

「もうよいのだ、ヨハン。もはや苦しみのときは果てた。戦いは終わったのだ」

　おれを慰なぐさめるな。慈いつくしむな。惑まどわせるな。あなたは違う。養父ではない。断じて違う。

「そう信じたいのであろう。お主の心持ちはわからぬでもない」

　わかるものか。わかるはずもない。わかられてたまるか。

「いつまで独りで歩いておるつもりなのだ、ヨハン。いいかげん気づくがよい。お主のそばには常に我らがおる。お主はとうに独りではないのだぞ」

　黙だまれ。黙ってくれ。言わないでくれ。その声で。その表情で。ああ──見える。あなたの顔が。太陽のごとき慈じ愛あいと威い厳げんに満ちた養父の顔が。養父が微笑ほほえんで手をさしのべる。その手をつかめば、楽になれる。もういい。終わりだ。この戦いに勝利はない。いつか必ず敗れる。引き延ばしているだけだ。何の意味もない。そこにあなたたちがいるのなら、恐おそれることは何もない。おれもそこへ行こう。おれは独りではない。ようやく独りではなくなる。誰かおれを抱だきしめてくれ。寒いんだ。とても

寒い。

　遠くから見ていた。凰おう州しゆう難民の羅ラ叉サ、焔、琺瑠フオール、釈拿。彼らはいつも一いつ緒しよにいた。羅叉は片時も剣けんを手放さなかった。銀の砦とりでの中にいても、物ぶつ騒そうな眼めで常に敵を探していた。大だい丈じよう夫ぶだって、と焔は笑っていた。琺瑠は釈拿をいたわり、庇かばっていた。物もの陰かげから彼らの様子をうかがっていた。そのときのおれはきっと、さぞかし物欲しげな顔つきをしていたことだろう。彼らに親しみたいと思う自分の性しよう根ねが嫌きらいだった。幼くして厳しい逃とう亡ぼう生活を、そして生存競争を強しいられ、ようやくエルデンにたどりついた彼らは哀あわれだった。それなのに、養父にかわいがられる彼らを見ていると胸がむかついた。その席は本来おまえたちのものではない。おれが座るべき場所だ。そう感じる自分の狭きよう量りようさに反へ吐どが出た。

　おれは弱いと思った。

　惰だ弱じやくだ。

　もっと強くならねばならない。

　まだ父が生きていたころだ。見み世せ物ものの一座がエルデンを訪おとずれた。鉄てつ鎖さの憩いこい場の公園。巨きよ人じん族もきているらしい。見に行きたいと父にせがんだ。「どうしたんだ、ヨハン、ん？　いつもはそんなわがままを言わんだろう。お父さんは仕事があるんだ。悪いやつを懲こらしめなきゃならん」「でも、見たいよ。巨人族だよ。二度と見られないよ」「お父さんにもな。今日やっつけなきゃならん敵がいるんだ。聞き分けてくれ、ヨハン。おまえはいい子だろう」

「──何？　巨人族？　ふむ。じゃあ、俺が連れてってやる」

　公園は混こみあっていた。男はおれを肩かた車ぐるましてくれた。そうしておれは巨人族を見たんだ。

「カレルを許してやれ、ヨハン。あいつはまっすぐな男だ。一度に一つのことしか考えられん。そういうやつなんだ」

「わかってるよ。お父さんはいい人なんだ。すごく、いい人で──」

「泣くな」

大きな手で頭を撫なでられた。

「泣いてないよ。ぼく、泣いてなんかない」

「そうか。そうだな。うむ。他ほかにも見世物があるみたいだぞ。行ってみるか」

あなたが何も言わずに去ったあと、おれはこっそり泣いたんだ。

いつだっておれは独りではなかった。おれが勝手に独りだと思っていただけだ。いや、おれだってわかっていた。独りではないから、おれは生きてこられた。独りではないから、守ろうとした。貫つらぬこうとした。独りではないから、強くなりたかった。独りだったら、とうにおれの心は折れていただろう。

お父さん。養父上。焔。釈拿。ひたすら前を向いて突つき進み散っていった多くの同志たち。死してあなたがたに見まみえることはない。死後の世界などおれは信じぬ。おれはあなたがたが先立った道を独りで行くのだろう。結局は皆みな、独りになるのだろう。おれは、だが、寂さびしくはない。これはあなたがたが通った果てなき道だと思えば、おれはしっかりと歩いてゆける。

この莫ば迦か者ものに従ってくれた者たち。まだ命があらば、力のかぎりに義の剣を握にぎり振ふるえ。

羅叉。背負えよ。逃にげずに、背負え。

珐瑠。おれは君が好きだった。君にだけ捧ささげた恋こいだった。どうかいつか、誰だれよりも君を愛する者が現れて、君はその愛に包まれ、誰よりも何よりも、君よ、幸せになれ。その日がくるまで、君だけは決して死ぬな。おれの最後のわがままだ。

トマトクン。メロンクン。いずれにせよ、本当に巫ふ山ざ戯けた名だ。筋すじ違ちがいかもしれないが、おれはあなたを信じている。お願いだ。未熟な羅叉と珐瑠を、我が掛かけ替がえのない友たちを、同志たちを、どうか何とぞ導いてくれ。言うまでもなく、あなたはそうしてくれるだろうと、おれは信じている。あなたのことは信じられる。ああ──

もう、いいよな。

寒いんだ。とても寒い。楽になりたい。すぐ楽になれそうな気が

する。簡単だ。

「諦あきらめるのか？」

　誰だ。誰の声だ。いい。誰でも。そうだ。諦める。おれは楽になりたい。

「だめだ」

　放ほうっておいてくれ。

「いいや。だめだ」

　なぜだ。どうして休ませてくれない。

「おれは諦めぬ」

　おれ……？

「そうだ。おれの戦いは終わってなどいない。少なくとも自ら放ほう棄きすることはしない」

　そうか。

　おまえは──

　笑いがこみあげてきた。ほとんど力が残っていないので、笑うことはできなかったが、横おう隔かく膜まくが震ふるえるような感覚はあった。そういうことか。

　おまえは、おれか。

　我ながら呆あきれるばかりだ。このおれの諦めの悪さ、しつこさ、執しゆう念ねん深さには。まったく度しがたい。

「どうしたんだい、ヨハァァァァァン……？」

　これはＳＩＸの声だ。はっきりと聞こえる。おれは衰すい弱じやくしているが、まだ生きている。

　ＳＩＸが近づいてくる。しゃがんで、おれの顎あごをつまみ、持ちあげる。おれは目をつぶっているわけではないが、どこにも焦しよう点てんをあわせない。何も見えない。どんな罵ば声せいを浴び

せられようと、何を訊きかれようと、おれは答えない。あらゆる種類の屈くつ辱じよくに、おれは反応しない。痛ければ叫さけぶ。耐たえられなければ悶もだえる。それだけだ。

「つまらないねえ、ヨハァァァァァァァン──そう我わが輩はいに言わせたいんだろう？」

　おれは返事をしない。何も考えぬ。ただ今を生きる。

　くだらぬ戦いだ。それでもやめられぬ。

　因いん果がなことだ。

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.8

俺のものだ

かなり盛りあがってはいるのだけれど、興奮が最高潮クライマックスというかんじとはちょっと違う。番人たちはどうか知らないが、観衆の一部は異なる展開を期待していたのかもしれない。ようするに、知らぬ者とていない秩ちつ序じよの番人の美人副長が、もし筋肉同盟というものがこの世にあるとしたら絶対に加盟しているに違いない、いかにも剛ごう気きそうな巨きよ体たいのマッチョ男にこっぴどくやられる、という光景だ。

琺瑠フオール副長は誰がどう見ても絶世の東方美女だ。秩序の番人の情報部門を充じゆう実じつさせたのは彼女の手しゆ腕わんだと言われている。女だてらに一ひと廉かどの剣けん士しだという評価もすでに確立している。ただ、果たして彼女は本物なのか。その点については、疑問を差し挟はさむ向きもなくはなかった。

秩序の番人という硬こう骨こつの集団にあって、琺瑠は美しすぎるのだ。女性は美び貌ぼうで得をすることもあるが、逆の場合もある。早い話、能力云うん々ぬんよりも、とにかく美人だからちやほやされて、副長に祭りあげられているのではないか。見み目め麗うるわしい上に知勇兼けん備びという評判は、実態を覆おおい隠かくすために作りあげられた虚きよ像ぞうにすぎないのではないか。そんなふうに疑っている者も、決して少なくなかったということだ。

心得違いをしていた馬ば鹿か者ものたちは、認にん識しきを改めるだけでなく、悔くい改めるべきだろう。

ラッド・ワーノンは身長二メーテル近い髭ひげ面づらの大男で、手にした木刀が玩がん具ぐめいて見える。齢よわい三十二歳。年ねん齢れい相応とは言えないかもしれない。おそらく二十代のころからワーノンの見た目はマッチョなオッサンだったはずだ。今もオッサンだし、これからもオッサンだろう。

まともな神経の持ち主なら、いきなり道であんなやつに出くわしたら、とりあえず回れ右をして逃にげる。琺瑠も百七十サンチ以上あって、女性としては長身の部類に入るが、ワーノンと比べたら病弱で華きや奢しやな深窓の令れい嬢じようにしか見えない。ここまで体格に差があると、技術がどうとか、そういう問題じゃない。小石を投げつけて巨岩を砕くだこうとするようなものだ。どんなに技ぎ巧こうを凝こらしてうまい投げ方をしたところで、巨岩が割れるわけもない。巨岩がごろごろ転がってきたら、なすすべがない。ペ

ちゃっと潰つぶされて終わりだ。

　そのはずなのに、ワーノンが「ふううん！」「むううん！」と繰くりだすちょっと人間業わざとは思えない木刀の一ひと振ふりを、珐瑠はひらりひらりとかわしてみせる。それだけならまあ、感心するだけで仰ぎよう天てんしたりはしない。でも、ときにワーノンの木刀を木刀で受け流してみせるとなると、話は違う。これはもう尋じん常じようではない。珐瑠はそうしてワーノンの体勢を崩くずすなり、すっと間合いを詰つめて鋭するどい攻こう撃げきを放つ。狙ねらいは徹てつ底ていしてワーノンの下半身だ。とくに膝ひざ、そして踝くるぶし。身体からだの大きなワーノンにとっては防ぎづらい。いや、最初のうちは、鎧よろいを着ていることもあって、膝当てなんかでガツーンと弾はじいてやればどうということもない、くらいの気持ちがワーノンにはあったのではないか。ところが珐瑠の攻せめは執しつ拗ようだった。何度も同じ箇か所しよを同じ角度で打った。そのダメージが少しずつ蓄ちく積せきして、徐じよ々じよにワーノンの動きが鈍にぶってきている。

　派手な戦い方じゃない。かなり地味だ。面おも白しろみがないと言えば、そうかもしれない。下か肢しばかり狙っているので、正統的な剣術から外れている。たしかにそのとおりだろう。でも、見た目以上に高度な技術と持久力、そして何より強固な精神力が要求される戦術だ。

「あの人──」試合場を見つめるユリカの眼まな差ざしは真剣そのものだ。「自分を知りちゅくしているのよ。不利なところも、有利なところも、しゅべて。過信も、卑ひ下げもしていない。完かん璧ぺきなまでに自己を客観視している。簡単なようで、とてもむじゅかしいことだわ」

「……どの分野でも……」これまでトマトクンの試合以外はどこか無関心というか、ほぼ完全に傍ぼう観かん者的な態度で見物していたサフィニアが、すっかり魔術士の目つきになっている。「ものすごい才能を備えて生まれてくる人が……います。確実に。わたしたちの前には……壁かべが、ある……高い壁が。どうやって、その壁に……挑いどめばいいのか。じつは……道は一つしかないのかもしれない。あの人は……あるいは、その道をまっすぐ進んでいるのかも……」

「ただ自分であること」マリアローズは唇くちびるを軽く噛かんでうなずいた。「自分に期待しない。失望もしない。前を向いてるだ

けじゃダメなんだ。全周囲を見み渡わたして、自分が何者かを知り、決して行くべき方向を見失わずに、ひたすら足を進めつづける。終着点なんてないのかもしれないのに、一歩一歩、刻みつけるように」

『一つだけ申しあげられることがあるとするならば』クルチバの声こわ音ねは落ち着きはらってはいるものの、どこか誇ほこらしげだった。『いかなる強者であろうと、琺瑠副長をたやすく打ち負かすことはできないでしょう。僭せん越えつながら、羅ラ叉サ総長は我が団の誇る最強の矛ほこですが、最上の盾たては琺瑠副長なのです』

　そんな表現もあながち大おお袈げ裟さとは言えないかもしれない。

　琺瑠は最初から一いつ貫かんして、ワーノンの木刀をよけるか、受け流して中に入り脚きゃく部ぶを一撃するというやり方を崩していない。もちろんワーノンは、木刀を短く持ってみたり、反対に長く持って間合いを広くとってみたり、後ろ回転斬ぎり、低い姿勢からの振りあげ、身体つきに似合わないわりと器用な連続突つきといった具合に、奇き策さくめいた攻めに転じてみたりと、いろいろ変化をつけているのだ。それでも琺瑠は同じことを延々繰り返す。それがもっとも危険が少なく、効率よく相手を弱らせ、確実に追いつめてゆく方法だという確信が、琺瑠にはあるのだ。

　ずっと琺瑠のペースだった。琺瑠が圧あつ倒とう的といってもいいほど有利に試合を進めるということ以外、意表を突かれるような出来事は一つも起こらなかった。

『──おおっとォッ！』半魚人が叫さけんだ。『ここにきてラッド・ワーノン！　いきなりガクッときてまいよったみたいやでえ……！』

　右足で踏ふみこもうとしたワーノンの膝がふにゃっと曲がってしまい、前に出ようにも出られなかったのだ。観衆が煽あおるように喚かん声せいをあげた。今が絶好のチャンスだ。一気に攻めて片をつけろ。野次馬根こん性じよう丸出しの声や口笛の嵐あらしを浴びせられても、琺瑠は顔色一つ変えなかった。

　不用意に飛びこんだりしない。一分の隙すきも見せず、相手に一厘りんの望みも与あたえない。琺瑠はワーノンの膝を破は壊かいす

るまで──いや、骨を砕いてもなお、攻め手を変えることはないだろう。

「ぬううううううん……！」ワーノンは己おのれの木刀で自身の前頭をぶっ叩たたいた。ちょっと怖こわいくらい大きな音がした。おそらく手加減なしだ。それでも出血しなかったのだから、そうとう頑がん丈じような男なのだろう。ワーノンはニカッと笑った。「──恐おそれ入った！　負け申した……！」

『──なんとォォッ!?　降参きたあああああああああああああああああァァッ……！』

　ワーノンに対する罵ば声せいが飛び交かいはじめた。玹瑠はまだ木刀を引かない。審しん判ぱんのピンパーネルが玹瑠に身体を向けて手をあげ、勝利を宣言した。その直後だった。目を離はなさなくてよかった。いいものを見せてもらった。玹瑠は目を細めて口くち許もとを綻ほころばせ、少しだけ上気して汗あせばんだ顔に魅み惑わくの微び笑しようを浮うかべた。「未熟ね、ワーノン。精しよう進じんなさい」

　ここからだ。

　本来なら第四試合と第五試合の勝者、つまり、ボルボンゾルか太臺子タイダイシーとシャルロット・リンデが勝敗を争う試合を挟はさむはずだったが、予定が変わった。ボルボンゾルと太臺子は相あい討うちで二人ともアサイラム送りになったので、リンデが不戦勝ということになる。すなわち、この先はトマトクンがコンラッド・アシャー、ハインツ・クルエルフォート、シャルロット・リンデ、李童晏、玹瑠、さらに羅叉と連戦しなければならないのだ。

　途と中ちゆうで負けたら当然、そこでお終しまいだが、トマトクンは全勝するつもりでいるだろう。

　マリアローズはユリカ、サフィニアと顔を見あわせた。サフィニアは言うに及およばず、ユリカもさすがに少し緊きん張ちようしているようだ。自分では平静を保っている──少なくとも、保とうとしているつもりだけれど、きっとマリアローズの顔もこわばっている

だろう。

『えん。おほん。うぇっほん』カタリが連続で奇き怪かいな咳せき払ばらいをした。その半魚顔も魚レベルで真しん剣けん味みを帯びている。『──ちゅうわけでありましてえ……次はいよいよ、第八試合……』

　すでにトマトクンは試合場の北東角、コンラッド・アシャーは南西角、そして審判のピンパーネルは中央と、それぞれが配置についている。

『ちなみにこの試合からは、特別解説として──まさかまさかの棄き権けんで、なぁーんもせんままに今回のトーナメントから離り脱だつしてまいよった、今エルデンで評判倒だおれナンバーワンの〝神剣グレヒャ〟はんに参加してもらいまっせ』

　カタリの隣となりにいるクルチバが、そのまた隣に急きゆう遽きよ設けられた席でどこか窮きゆう屈くつそうに、でも、ちょっとへらへらしているシャット・グレヒャにマイクを渡わたした。

『ええ、と……』グレヒャは、ふふ、と意味不明の笑い声をもらした。『はい。どうも。がっかりさせてしまい、申し訳ないです。シャット・グレヒャです。よろしく』

『せやけどお前じぶん』カタリは横魚目でグレヒャを睨にらんだ。『どないやねん。エントリーしといて棄権て。ナンボ体調悪かっても、そこは漢おとこやったらつべこべゆわんでゴーやろ、フツー』

『はあ。申し訳ない。そもそも、最初から気乗りしていなかったもので。はは』

『なんやそれ。せやったら、なんでエントリーしよったんや』

『まあ、空気といいますか雰ふん囲い気きといいますか。突とつ撃げき隊と遊撃隊の隊長はみんな出るみたいな流れだったので。私だけ出ないとなると、角が立つでしょう。やっぱり』

『ほんで棄権したったら、結局ンところ空気悪ぅーなるわけやんか』

『いやあ。相手が相手だったので』グレヒャは、え、え、え、というかんじの少々気味の悪い笑い方をした。『真剣ならともかく、木

刀ですからね。ずばっと斬きって終わり──というわけにはいかないでしょう。負けるとはこれっぽっちも思いませんが、かすり傷くらいは負わされそうですから、いやだったんですよね、じつは。私、痛いの嫌きらいなんです』

　試合場一帯が騒そう然ぜんとなった。グレヒャは、す、す、す、と歯の隙すき間まから不快な笑い声をもらした。『あれ？　私、何かまずいこと言いました？』

『……な、なんや、こいつ』カタリはドン引きしている。

　マリアローズもちょっとばかり驚おどろいたけれど、まあ、秩ちつ序じよの番人は大所帯だ。いろいろなやつがいるということだろう。

『と、ともあれ──』カタリはまたぞろ咳払いをした。『第八試合やっ。こっからは我らがＺＯＯのスゥーパァー園長マスタートマトクンにとって、まさにッ！　死のロードっちゅうても過言ではないやろ！　その終着点で待ち受けとるンが〝死神〟っちゅうことになるわけやけど、途中途中に立ちふさがっとるのンも、ご覧のとおり一いつ騎き当とう千せんの強者つわものぞろいや！　その一番手……！　コンラァァァッドッ！　アシャァァァァァァーッ……！』

　コンラッド・アシャーが左手を突つきあげた。「しゃーっ……！」

　観衆が声をあげ、拍はく手しゆをして、足を踏ふみ鳴らした。番人たちもアシャーに声せい援えんを送った。

『レェェェディィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ……』

　ユリカとサフィニアが共同作業でゴングを鳴らした。

『ファイッッ……！』

　ピンパーネルが両手を交差させて後退した。

　すかさず駆かけだそうとしたアシャーに、トマトクンがゆっくりと木刀の先を向けた。「おい、お前。さっきのやつをやってみせろ」

　アシャーはきょとんとした顔で首をひねった。「さっきの……？」

「あれだ」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげてみせた。「ぶよんせぇ……？　だったか。破天一流の技わざを真ま似ねしたんだろう」

「違ちがいます、四よん星せい、ですよ」アシャーは口を尖とがらせた。「でも、いきなりですか……？　あれ、一応、ぼくの必殺技なんだけどな。必殺技って普ふ通つう、最後までとっておくものでしょ」

　トマトクンは唇くちびるの端はしをゆがめた。「今が最後だ」

「……なるほど」アシャーはニカッと笑った。「そうですね。たしかに、あなたのような人が相手なら、一いつ瞬しゅん一瞬が最後だ」

『──何やら何やらァァッ!?　この勝負、しょっぱなから動きがありそうやでえ……!?』

『というか』グレヒャが、ふふん、と鼻を鳴らした。『いきなり決まっちゃいますよ』

「この身は空くうとなる──」アシャーはすうっと目を細めて、自分の胸に木刀の柄つか頭がしらを突き立てるような構えをとった。「天空の威い力りよくよ、ぼくの剣に宿れ。真似真似剣法──偽にせ破天一流〝四星〟っ……！」

「ふむ……」トマトクンは右手一本で持った木刀を高々と頭上に掲かかげた。ただでさえ背が高いのに、余計に大きく見える。あれは飛びこみづらい。でも、突っこまないかぎり、トマトクンに一ひと太た刀ち浴びせることはできない。

「疾シッ……！」アシャーは躊ちゆう躇ちよせずに突進していった。悪くない出足だ。一歩目から速い。あの速度で迫せまってこられたら、なかなか対応しづらい。しかも、トマトクンは腕うでをまっすぐ上に持ちあげている。アシャーはたやすくトマトクンの懐ふところに入りこみ、鋭するどく木刀を突きだした。その直前だった。

　トマトクンが木刀を振ふりおろした。

「──あっ……！」アシャーの木刀は叩たたき落とされ、トマトクンではなくて地面を打った。

　トマトクンは無造作に踏みこんで、アシャーの両手に薙なぎ払うような回し蹴げりを叩きこんだ。アシャーは小さく悲鳴をあげた。木刀の柄から手が離はなれた。動きが止まった。その顔面を、トマトクンの足が踏んづけるように蹴った。アシャーはひっくり返った。それでもすぐに起きあがって、距きょ離りをとろうとしたところを、また蹴っ飛ばされた。アシャーはごろごろ転がった。立ちあがる前に、四つん這ばいの姿勢でトマトクンの様子をうかがった。トマトクンは木刀で肩かたを叩きながら首を曲げた。「話にならんな」

『連撃の技は──』グレヒャは大おお袈げ裟さに肩をすくめてみせた。『多くの場合、牽けん制せいと本命の組みあわせで構成されます──が、牽制というものは本来、それと知れた時点で死にます。四星などと言って、馬ば鹿か正直に四連撃を出そうとした時点で、アシャーさんの敗北は決定的でした。しかも、破天一流の七星は、一撃必殺の突きを七本まで連続で出せるというところに技の妙みようがあるのであって、一本たりとも牽制はない。アシャーさんの四星は真似というより猿さる真ま似ね。もし自覚がなくやっているのでしたら、よっぽどの馬鹿ですね』

　クルチバが何かを抑おさえつけてそれでも漏もれてしまったような溜ため息いきをついた。

『しかし』グレヒャはわざとらしく、うーん、と唸うなった。『ＺＯＯの園長マスター。彼こそ一見、薄うすら馬鹿といった風ふ情ぜいですが──』

「さ、サフィニア……！」マリアローズはユリカと一いつ緒しよに大おお慌あわてでサフィニアを押さえつけた。グレヒャのアホはのんきに余よ裕ゆうをぶっこいているけれど、今、マリアローズとユリカがとっさにサフィニアを押しとどめなければ、絶対にただではすまなかった。たとえグレヒャが口だけの男じゃない、とてつもなく腕が立つ剣けん士しだったとしても、本当に強力な魔ま術じゆつの前では赤子同然なのだ。

『どうしてどうして』グレヒャは自分が命拾いしたことを知ってか知らずか、う、う、う、と喉のどを鳴らして笑った。『アシャーさんの頭の悪さを見てとり、挑ちよう発はつして攻せめ手を限定。事

実上、その時点で勝敗を決してしまったんですから、あえて策士とは言いませんが、なかなか一ひと筋すじ縄なわではいかないお人ですね』

　トマトクンは実じつ況きよう席を一いち瞥べつしてアシャーに視線を戻もどし、ふう、と一つ息をついた。「──まあ、ようするに、お前の必殺技とやらは餓が鬼きのお遊びと大差ないってことだ。そんなものをひけらかしていい気になってる阿あ呆ほうが、総長になるだと？　あまり笑わせるなよ。そういう気分でもないんだ」

　アシャーはうなだれた。そうしてしばらくの間、肩で息いきをしながら、迷っていたのではなく打ちひしがれ、恥はじ入って、声も出せなかったのだろう。ようやく一言、「参りました」と言って地面に額をこすりつけた。

　ピンパーネルがトマトクンに向きなおって手をあげた。「トマトクンの勝ちデス」

　カタリが叫さけんだ。『──あっちゅう間の決着やァァァッ……！』

「さて」トマトクンはゆっくりと首を回した。「次は誰だれだ？　この際、全員一緒でも俺はかまわんがな」

　番人たちが気色ばむ中、ボディスーツ姿の二十五番無名隊隊長ハインツ・クルエルフォートが無言で進みでてきて、試合場に足を踏み入れた。入れ替かわりに、ピンパーネルに促うながされてアシャーが外に出た。

　トマトクンは妙に静かな黄玉トパーズの瞳ひとみをユリカとサフィニアに向けた。「ゴングを鳴らせ」

「はい！」「……はい……！」ユリカとサフィニアは弾はじかれるように二人で小こ鎚づちを持ってゴングを鳴らした。『──ぬおっ！』とカタリが奇き声せいを発した。『だ、だ、だ、だ、第九試合いきなり開始ィィィィッ……!?』

　ちょっと意表を突つかれた。チェス・ピードとの試合では、まさしく策士という印象を受ける勝ち方をしたクルエルフォートが、トマトクンに正面からぶつかっていったのだ。しかも、あの足運び。癖くせのない、同時に無む駄だもない剣けん捌さばき。マリアロー

ズもバーニング・バラッドの著作をもとに勉強していたからわかる。あれは剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟直系の正統派剣けん闘とう術だ。

　正統派剣闘術には「従じゆう着ちやく破は極きよく」という理念がある。すなわち、従とは型に従う。着とは型が身につき、状況に即そくして自在に用いることができるようになる。破とは型を破り、原則論を超ちよう越えつして有効な戦法が選せん択たく可能となる。極とは剣を極きわめ不敗に至る。そのためには一にも二にも型だ。型の反復練習が何よりも大切で、極論すると、朝から晩までそれだけやっていれば、いつか誰にも負けない剣士になることができる。それが正統派剣闘術の考え方なのだ。

　斜ななめ斬きり下ろし。返し胴どう薙なぎ。逆胴薙ぎ。引き剣。すくい上げ斬り。クルエルフォートが繰くりだす技わざはどれも基本に忠実だ。正統派剣闘術においては技、型の動きのみならず、名前まで地味で、本当に外連味けれんみがない。それが余計に玄人くろうと臭しゆうを漂ただよわせていて、おかげでバーニング・バラッドの著作『武技概がい論ろん』や『剣の技法』はベストセラーになったのだが、読んで齧かじってはみたものの、すぐに飽あきて放ほうり投げてしまう者が大半だろう。マリアローズもそうだった。

　クルエルフォートは真ま面じ目めな修しゆ行ぎよう者しやのようだ。正統派剣闘術の特とく徴ちようを挙げれば、とにかく隙すきが少ない、という点がまず浮うかぶ。ほとんどの型において、攻め手のあとに必ず防ぼう御ぎよ姿勢が入るので、逆ぎやく襲しゆうを食くらいにくいのだ。クルエルフォートは矢や継つぎ早ばやに攻こう撃げきを繰りだしているが、相手に反撃の糸口をつかませないように、その攻めはじつにうまく組み立てられている。もちろん、いちいち頭で考えてやってのけられる芸当ではない。身体からだに染しみついた──いや、弛たゆまぬ練習で全身に刻みつけた型が、技が、考えずとも勝手に出てくる。型が身につき、状況に即して自在に用いることができるようになる。クルエルフォートは「従着破極」の「着」までは体得しているということだ。

『クルエルフォートさんは』グレヒャは、くふふ、と笑った。『ああ見えて、非常に真面目な方なんですよ。不真面目を真面目に貫つらぬこうとするくらい本当に生き真ま面じ目めで、ある意味、かなりうざい人ですよね。亡くなられたヨハン・サンライズ副長とは、さぞかし気がお合いになったんじゃありませんか』

「グレヒャ隊長」押し殺したような声だった。クルチバだ。「お言葉に気をつけていただいたほうがよろしいかと」

『心しましょう。昔から、口は災わざわいの因もと、といいますしね』グレヒャは、うんうん、といやみたらしくうなずいてみせた。『いや、でも私、個人的にヨハン副長のことは高く評価していましたよ。なんたってあの方は、あれでとてもお強かったですしね。一度は手合わせ願いたかったな。むろん、僅きん差さで私が勝ったと思いますが』

　ほんと、もうマジでいったい何なんだよ、こいつ――なんてことを思いながら、マリアローズが苦虫を嚙かみ潰つぶしたような顔をしている間も、正統派剣闘術の枠わくから少しも外れることのないクルエルフォートのきちきちっとした攻撃はやむことがなかった。

　これにはさしものトマトクンも防戦一方だ。そう見えなくもない。実際、トマトクンは右へ、左へ、ときに後ろへ動きながら、クルエルフォートの木刀をよけたり、自分の木刀で防いだりしているだけだ。でも、そんなわけないよね。たとえばマリアローズなら、あんなふうに攻せめたてられたらきつい。しのぎきれる自信はちょっとないけれど、トマトクンなのだ。

「一つ訊きこう」

　獰どう猛もうな野や獣じゅうがとうとう牙きばを剝むいた。トマトクンはクルエルフォートの胸むな突つきを木刀の柄つか頭がしらで簡単に叩たたき落とし、迅じん雷らいのごとき一撃を放った。クルエルフォートはそれをよけたのではない。飛びすさって逃にげた。完全に腰こしが引けている。あのざまではすぐには攻めてこられない。

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて目を細めた。「お前、そんなに弱いくせに、なんで出しゃばってきたんだ」

「私は日ひ陰かげ者ものです」クルエルフォートは唇くちびるだけ微笑ほほえませた。「そういう性しよう分ぶんだし、日の当たっている場所に出られるような資質もない。人の上に立つなんて柄がらじゃない。何者かの手足として働く程度が関の山だ。ですが、誰に仕えるかは自分自身で決める」

「だから、何だ。まだるっこしいな」

「あなたがどれほどのものか、私はこの目で見み極きわめたい」

「それだけか」

「いいえ」クルエルフォートは目め許もとも少しだけゆるめて、微かすかに首を横に振ふった。「我ながらくだらないと思いますが、これは私なりの意地です。私はあの方を選んで、その手となり足となった。唯い々い諾だく々だくと他ほかの者に従うわけにはいかないんですよ」

「本当にくだらんな」トマトクンは半はん身みに構えてぐぐっと腰を落とし、両足を肩かた幅はばより広く開いた。「教えてやる、ハイツ・クルクルボート。お前の意地なんぞ屁へにもならん。秩ちつ序じよの番人の隊士なら、ただ義のために生きて死ね」

　クルエルフォートは目を見開いて声を荒あららげた。「──あなたが、それを……！」

　そのときにはもうトマトクンは跳とんでいた。それは肉にく食しよく獣じゆうが獲え物ものに襲おそいかかるときの最後の一っ飛び以外の何物でもなかった。トマトクンはつんのめるような勢いでクルエルフォートに突っこんで木刀を振りおろした。クルエルフォートはとっさに何か声を出した。自分の木刀を振りあげて、トマトクンの木刀を防ごうとしたのだろうが、簡単に押しきられてしまった。クルエルフォートは倒たおれた。トマトクンはクルエルフォートにのしかかるというよりも押し潰して、逆手に持ちなおした木刀を突き下ろした。

「……私の名は」クルエルフォートの声は少しも乱れていなかった。「ハインツ・クルエルフォートだ。以後、お間ま違ちがえなきよう願います」

　トマトクンの木刀はクルエルフォートの顔をわずかにそれて、地面を打ち砕くだき、突き刺さっていた。もちろん、わざとそらしたのだろう。

「覚えておこう」トマトクンはニヤリとした。「保証はできんがな」

『──こッ……こ、これはァァァッ……!?』カタリは半魚眼を魚ぎよろ魚ぎよろさせて、きょろきょろした。『と、トマトクンの勝利っ

ちゅうことで……ええんかな？』

　トマトクンは木刀を地面から引き抜ぬいて立ちあがった。「よし、次だ。誰だれか知らんが、さっさと出てこい」

「秩序の番人十二番遊ゆう撃げき隊隊長シャルロット・リンデであります……！」すぐに凜りんとした声が轟とどろいて、羽根付きの兜かぶとを被かぶったリンデが試合場に躍おどりこんできた。

　クルエルフォートは起きあがるなり片かた膝ひざをついてトマトクンに向かって一礼し、影かげのように存在感を消して去った。ユリカとサフィニアがゴングを鳴らした。

「イヤアアアァァァッ……！」リンデがトマトクンに打ちかかっていった。トマトクンは木刀を左手に持ち替かえてリンデの斬ざん撃げきをやすやすと撥はね返してみせた。リンデは体勢を崩くずした。立てなおそうとしたところに、トマトクンの木刀が襲いかかった。リンデは木刀を立ててこれを防いだが、弾はじかれた。「──くっ……！」

　右みぎ利ききのトマトクンが、あえて左手で木刀を扱あつかっている。それなのに、十分以上に怖こわい。マリアローズはトマトクンに稽けい古こをつけてもらっている。だから、その恐きよう怖ふがわかる。理り屈くつじゃない。爛らん々らんと輝かがやく黄玉トパーズの瞳ひとみに見つめられただけで、とにかく恐おそろしくて、どうしようもなく身がすくむのだ。

　トマトクンは野獣の身のこなしでリンデの顔面めがけてねじりこむような突つきを放った。リンデはとっさに身体をよじったが、完全にはかわせなかった。兜が吹ふっ飛んだ。それで気力が萎なえることなく、反撃しようとしたリンデの胆たん力りよくは並なみ大たい抵ていじゃない。でも、リンデが斜ななめに振りあげた木刀に渾こん身しんの力がこめられていたかといえば、間違いなく否いなだろう。リンデは負けん気が強い。気骨がある。だから、苦しい姿勢からでも木刀を繰くりだした。あらゆる条件が整っていてもトマトクンと対等に渡わたりあうことは難しいのに、ろくに腰が入らない状態から、ほとんど腕うでの力だけで木刀を振ったのだ。

　トマトクンはリンデの木刀を右手で止めた。がっちりと握にぎりしめて、引っぱった。

　リンデはトマトクンの胸に飛びこむ恰かつ好こうになった。「──きゃっ……!?」

　サフィニアが舌打ちをした。

　トマトクンはリンデから木刀をとりあげた。あまりにも簡単だった。それからトマトクンはリンデを抱かかえあげた。リンデは「え、え、え……!?」とか言いながら、抵てい抗こうという概がい念ねんを忘れてしまったかのようにトマトクンにしがみつこうとして、違う、違う、と思いなおしたようにじたばたした。トマトクンは許さず、リンデを抱だくというよりも荷物みたいに抱かかえたまま悠ゆう然ぜんと歩きだした。サフィニアが「……おい……！」と叫さけんだ。そうとうドスのきいた、かなりおっかない声だった。マリアローズは一いつ瞬しゆん、ユリカと目を見あわせた。いざとなったら、身体からだを張って二人でサフィニアを制止しないといけないかもしれない。ユリカも同じ考えのようだった。うなずきあって目を戻もどすと、トマトクンはもう試合場の端はしにいた。

「気合いが入ってるのはいいが、少し頭を冷やせ」トマトクンはそう言ってリンデを試合場の外へ放ほうりだした。勝敗が決した瞬間に、裸はだかの背中に羅ら刹せつを棲すまわせている男が試合場に駆かけこんできた。ゴングを鳴らす暇ひまなんてない。李イ童ドウ晏アンは「羅ラ阿ア阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿……！」と雄お叫たけびを発しながらトマトクンに突っかかっていった。

「挨アイッ！」「犀セイッ！」「把ハァッ！」「蛇ジヤァッ！」「勁ケイッ……！」李童晏は木刀を剣けんではなく棍こんのように使った。その攻せめは斬撃ではない。むしろ打撃だ。木刀を極きよく端たんに短く持っていて、出すのも戻すのもとにかく速い。当然、近づかないと当たらないので、李童晏はどんどんトマトクンに接近してゆく。距きよ離りが狭せばまるほど、身体の大きいトマトクンにとっては窮きゆう屈くつになる。そのせいか、トマトクンは押され気味だ。しかも、李童晏はリンデの木刀を拾いあげた。

『──ヲヲヲヲヲッとォォォゥ……!?　コレはァァァァッ……!?』カタリはマリアローズやクルチバをちらちら見た。『……は、反則に……ならへんのかな？　どうなんやろ、アレ』

　クルチバはグレヒャからマイクを奪うばいとった。『ルールによれば、武器は木刀のみとされておりますが、一ひと振ふりのみとは

定められていないように記き憶おくしております』

『ム、ム、ム、ム、ム……』半魚人は生意気にも難しい半魚顔をして低く唸うなった。

「そ、そんなの……！」サフィニアが顔を真っ赤にして身を乗りだした。「は、反則に……決まっているじゃないですか……！」

「や」マリアローズは試合場のトマトクンと李童晏から目を離はなさずに半魚人からマイクをひったくって、唇くちびるを舐なめた。『ルールで一本だけって決まってないなら、反則にはならないよ。それに、李童晏が二刀流になったからって、だから何なの？』

　クルチバの視線を感じる。番人たちも実じつ況きょう席を見ている。殺気立っている者もいるようだ。マリアローズはわざと笑えみを浮うかべてみせた。不敵な笑み、というやつだ。自分では一応そのつもりなので、なんとかそう見えているといい。

『関係ないよ。たいしたことじゃない。あれくらいじゃハンデにもならないでしょ。まあ、見てればわかると思うけどね』

「しょうね」ユリカは乗ってくれた。「たとえ反はん則しよくだとしても、べちゅにいいんじゃないかしら。子犬しゃんが獅し子しに挑いどむのに同じ条件っていうのも、ちょっとかわいしょうな話だわ」

　サフィニアは、ふん、ふん、と蒸気みたいな息を鼻から噴ふん出しゆつさせているけれど、どうにか自分の気持ちを抑おさえてくれたようだ。

「──導ドオォッ！」「禰デイッ！」「犀ッ！」「挨ッ！」
「挨ッ！」「把ァッ……！」李童晏は二本の木刀をほとんど回転させるようにして、休みなくトマトクンを攻めている。何も身につけていない上半身は紅潮していて、汗あせに濡ぬれて光り、筋肉がぐんねぐねうりゅんうりゅん動くのにあわせて、なんと背中の羅刹が踊おどっている。ちょっと気持ち悪いけれど、けっこうすごい。
「どうした……！　減らず口をたたく余よ裕ゆうもないか……！」

「そうでもないぞ」トマトクンは薄うす笑わらいを浮かべると、一歩下がって李童晏に背を向けた。

「──な……⁉」李童晏の動きが止まった。いや、止まりかけただけ

だった。李童晏はトマトクンに詰つめよって二本の木刀を叩たたきつけようとした。その前にトマトクンが右足の後ろ回し蹴げりを放った。李童晏はよけなかった。即そく座ざに狙ねらいを変えて、木刀でトマトクンの右足を迎むかえ撃うった。木刀と真しん剣けんを比ひ較かくすると、殺傷力でいえば、じつはかけ離れているというほどの差はない。刃はがないから斬きれないだけで、木刀は人を殺すに足る破は壊かい力を十分以上に秘ひめている。当然、人間の足と木刀が真っ向勝負をしたら、木刀が勝つ。そのはずだ。普ふ通つうなら。

　トマトクンの右足と二本の木刀が衝しよう突とつした。鈍にぶいのに大きな音がした。いやな音だった。トマトクンの右足が静止した。李童晏の木刀がトマトクンの後ろ回し蹴りを防いだのだ。いったんせき止めただけだった。「──がああああああああああああああああああああ……！」

　二本の木刀によって築かれた堤てい防ぼうはあっという間に決けつ壊かいした。トマトクンの右足は木刀を押しのけて李童晏の横っ面つらを直ちよく撃げきした。

「──か……はっ……！」李童晏は薙なぎ倒たおされた。たぶん一瞬、意識が飛んだはずだ。地面に側頭部を強く打ちつけたのに、李童晏はすぐさま起きあがった。立ったまではよかったが、膝ひざが曲がりそうになってぐらついたし、目はイッている。でも、木刀は手放していない。まだやる気のようだ。

「剣に頼たよるなよ、青二才」トマトクンは木刀を右みぎ肩かたで担かつぐような姿勢になり、ぐっと踏ふみこんだ。右足が嘘うそみたいに伸のびていった。前蹴りだ。李童晏はこれも木刀で叩き落とそうとしたが、今度は間に合わなかった。トマトクンの爪つま先さきが李童晏の鳩尾みぞおちあたりにめりこんだ。李童晏はひっくり返りそうになったけれど、危あやういところでこらえた。持ちこたえるだけで精せい一いつ杯ぱいという様子だった。トマトクンはさらに前進して、李童晏の前頭部を左手で鷲わしづかみにした。「怖こわいのか、若造。剣を持たないと戦場に立てんのなら、どこかそのへんの隅すみで震ふるえてろ」

「──ヌウウウウアアアア……！」李童晏は木刀を二本とも捨てて、両手でトマトクンの左腕をつかんだ。そうして膝蹴りを繰りだした。トマトクンはよけなかった。李童晏の膝蹴りを一発、二発、三発と立てつづけに土手っ腹に食くらっても、びくともしなかった。

「悪あがきでどうにかなる相手ばかりだといいがな」トマトクンは左ひだり腕うで一本で李童晏を持ちあげて、ひょいと投げあげた。「そんなに甘くはないぞ」

　何かが破は裂れつするような音がした。

　トマトクンは李童晏の胸むな板いたに横蹴りをぶちこんだ。その際の衝撃音だということはわかっている。でも、にわかには信じられないような、鳥とり肌はだ物の大きな音だった。

　李童晏は場外まで吹ふっ飛んで、地面に突つっこんだ。

　ぐちゃぐちゃに丸められ、投げ捨てられた襤ぼ褸ろ切きれのようだ。李童晏は微び動どうだにしない。

「次は──」

　試合場一帯がざわめいた。珐瑠は気負いも緊きん張ちようも感じさせない、微び笑しようと呼んでも差し支つかえないだろう表情を浮かべて試合場に入ってきた。右肩を前にして半はん身みに立ち、右手で持った木刀の先がほぼ地面にふれているあの構えは、ただの下段じゃない。どこか風にしなう柳やなぎを、あるいは流れる水を思わせる。ぴたりと止まっていても絶えず揺ゆらいでいるかのようだ。

「わたしですね。お手て柔やわらかに願います、トマトどの」

「断る」トマトクンは獲え物ものに忍しのびよる豹ひようのごとく足音を立てず珐瑠に迫せまっていった。

　マリアローズは目を瞠みはった。珐瑠は下がらなかった。右にも左にも動かなかった。前に出てきた。でも、あれは歩いているのか。珐瑠の足は地面を踏んでいない。少なくとも半分ほどは宙に浮いているのではないか。珐瑠の身体からだは前進しながら上下左右にゆらゆらと揺れている。まるで幻まぼろしのように。

　斜ななめに振ふりおろされたトマトクンの木刀は鋭するどくも狂きよう暴ぼうだった。

　珐瑠は斬り裂さかれた。

　そう見えた。

　おかしい。

　それなのに、琺瑠はトマトクンの至近距きよ離りにいる。

「──む……！」トマトクンは右方向に三メーテルほども跳とんだ。琺瑠はぴったりついてゆき、腕を鞭むちのように柔やわらかく使って木刀を振りまわした。木刀がぐにゃぐにゃと曲がって見えた。トマトクンは自分の木刀で、かん、かん、かん、と琺瑠の木刀を弾はじいたが、奇き妙みように軽い音だった。そう思った途と端たん、琺瑠は木刀を両手持ちして突きを放った。トマトクンは這はうような姿勢になって、この突きをかわした。そこから猛もう然ぜんと木刀を振りあげた。あんな体勢からでも、驚おどろくほど遠くまで届く──しかも、掠かすっただけでもただではすみそうにない斬ざん撃げきを繰くりだしてみせる。トマトクンの身体能力が並外れて高いからこそ、そんな芸当が可能なのだ。

　今度こそ当たった。

　目を疑った。

　琺瑠はトマトクンの木刀をすり抜ぬけた。そんなふうにしか見えなかった。

　トマトクンは、でも、その結果を予測していたかのように、すぐさま自ら左後方に転がって琺瑠から距離をとった。「──ふむ。幽ゆう歩ほってやつか」

『ゆうふぉぉ……？』半魚人は九十度近くまで首を曲げた。明らかに曲げすぎだ。

　グレヒャがクルチバからマイクをかすめとった。『幽歩とは、東方の古武術〝死し道どう剣けん〟の奥おう義ぎですね。死道剣自体は絶えて久しいのですが、その流れをくむ流派がいくつかあり、秘伝、奥義のたぐいは現在にまで伝えられています。まあ、私に言わせれば、副長の幽歩は不完全ですが、ここは素す直なおに褒ほめておきましょう。私にはできない技わざですからね。もちろん、練習すればできますが』

　いちいち一言多い男だ。でも、観衆や番人たちはグレヒャの能書きなんてほとんど聞いていなかっただろう。試合場一帯は大盛り上がりだ。彼らの気持ちもわからなくはない。美人で、切れ者で、剣

の腕も立つ。それを前の試合で自ら証明してみせた珐瑠副長が、なんだかよくわからない技を駆く使しして、トマトクンと互ご角かくの勝負を演じている。これで熱ねつ狂きようしないほうがおかしい。マリアローズだって、ＺＯＯの一員でなければ、興奮して「珐瑠コール」に参加していたかもしれない。や、まあ、それはないけどね。さすがに。

「努力は認めるがな」トマトクンは腰こしを落として背を丸め、左手をだらりと下げて右手に持った木刀を右肩に担ぐという、とても構えとは言えない、それでいて威い圧あつ感かんたっぷりの構えをとった。「──お前の剣はまだまだ軽い。次で決めるぞ」

　わずかではあるものの、珐瑠の表情が変わった。珐瑠の顔をゆがませたのは怒いかりなのか。何か違ちがう。もしかして、羞しゆう恥ちか。いずれにせよ、珐瑠はトマトクンの言葉で乱された。それも一いつ瞬しゆんだった。珐瑠はまばたきをした。目を開けるともう、その面おもてには微笑が浮うかんでいた。

　トマトクンよりも珐瑠のほうが少しだけ早かった。そうはいってもほぼ同時だった。

　珐瑠は疾しつ風ぷうのように直進しながらも、やはり幽歩だ。トマトクンは山やま津つ波なみのように珐瑠めがけて押しよせ、いつ木刀を振りおろすのか。珐瑠が先手をとった。おそらく、そうせざるをえなかったのだ。トマトクンは身体ごと珐瑠にぶつかってゆこうとしている。マリアローズは幽歩の正体を知らないけれど──相手の剣筋を正確に見切り、独特の歩法と身のこなしでこれをかわして一気に肉にく薄はくする。たぶん、そういう技なのだろう。珐瑠は、たとえばあのバカみたいに人間の視覚を騙だましてしまうほどの俊しゆん敏びんさを備えているわけじゃない。幽歩は超ちよう人じん的な身体運動ではなく、あくまで技術でしかないはずだ。だとしたら、対象が大きければ大きいほどよけづらい。木刀はどうにかなっても、体当たりとなったらそう簡単にはゆかないだろう。

　珐瑠は木刀を両手持ちして突きを放った。狙ねらいはトマトクンの顔面だ。トマトクンはまっすぐ突っこんでいった。いくらなんでも、それは──マリアローズは声を出してしまいそうになった。目はつぶらなかった。でも、よくわからなかった。ただ、炎ほのおが奔はしった──そんなふうに見えた。トマトクンが身につけている、ほとんど道どう化け師しの装しよう束ぞくみたいな全身鎧よろいの炎模様フアイヤーパターンだ。炎が急旋せん回かいして、横合い、い

や、ほとんど背後から琺瑠に襲おそいかかった。琺瑠は肘ひじ打うちか何かで突き倒たおされて──それでもただちに起きあがろうとしたのか、横に転がろうとしたのか、とにかく何かしようとしたのだが、できなかった。トマトクンは琺瑠の背中を左足で踏ふんづけて、その横っ面つらに木刀の切っ先を押しあてた。「最後の突きは悪くなかったぞ」

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、ぺろりと舌先で唇くちびるの左ひだり端はしを舐なめた。血だ。額から一筋の血が流れ、眉み間けんを通って左ひだり頬ほおへ、左の口角から顎あごへと伝い落ちている。

　琺瑠は目をつぶって歯を食いしばり、微かすかにうなずいた。「……参りました」

　試合場一帯がどよめいた。それはさまざまな立場の者がいろいろなことを感じ、考え、思い思いの方法で表現した結果の、広がりはあるのだがまとまりのない、どこか不ふ穏おんな、凶きよう事じの前まえ触ぶれのようなどよめきだった。

『やれやれ……』グレヒャはわざとらしい溜ため息いきをついた。『女性を踏んづけるなんて、ＺＯＯの園長マスターはずいぶんと野や蛮ばんな方ですね』

「……トマトクンは……！」サフィニアは全身から冷気を迸ほとばしらせながらバンッと机を叩たたき、椅い子すから立ちあがった。「紳しん士しです……！　今の言葉、訂てい正せいしてください……！　想像を絶する苦しみを味わいながら……叫さけぶこともできずに……！　身体からだが少しずつ凍こおりついていく……恐きよう怖ふを味わいたくなければ……今すぐに……！」

『……あ……』グレヒャは鼻はな白じろんだ。本能的に本物の脅威を感じとったのかもしれない。性格はだいぶねじ曲がっているみたいだけれど、愚おろか者ものではないということだろう。『……す、すみませんでした。も、もう言いません。二度と。ええ。誓ちかいますとも』

　サフィニアは魔ま術じゆつなんか使わなくても見る者を凍りつかせる笑えみを浮かべて、椅子に腰を下ろした。「……命いのち冥加みようがな……人ですね……それも、いつまでつづくか……ふ、ふ、ふ……」

　マリアローズはユリカと顔を見あわせて、声を出さずに目つきと表情で会話した。（━や、やばかったね、今のは。かなり）（ほんとね……）（てゆうか、次はもう無理だよね）（しょうね……。ちょっと、止められしょうにないわ……）（死人、出ちゃうかもね。試合じゃなくて、この実じつ況きよう席で……。まあ、自じ業ごう自じ得とくではあるんだけどさ……）（ええ……。しぇいじぇい、しょうならないことを祈いのりましょう……）（だね……。うん……）



　トマトクンが琺瑠の背中から足をどけて、さっと左手一本で助け起こした。その瞬間、マリアローズとユリカの間に緊きん張ちようが走った。サフィニアの目から冷れい凍とう光線めいたものが放出されたが──きっと触しよく媒ばいをとりだそうとしたのだろう、魔術士衣のポケットに突つっこまれかけた手は、危あやういところで止まった。琺瑠がすぐにトマトクンの手を放し、二歩下がって一礼

するなり、すたすたと試合場から出ていってくれたからだ。

　ほっとした。

　いや、安あん堵どなんかしている場合じゃない。『……むほっ！』カタリが素すっ頓とん狂きようで奇きっ怪かいな声を発した。『気がついたらぜぇーんぜん実況できてへんやん、わし！　展開が早ぁーて早ぁーて……頼たのむでしかし！　まあ！　そんだけ我らがＺＯＯの園長マスター！　トマトクンがむちゃくちゃ強すぎるっちゅうことなわけなんやけどもな！　むおほほほほほ！　──て、睨にらむなや！　悪あつ口こう雑ぞう言ごんもやめとき、秩ちつ序じよの番人隊士諸君！　みっともないだけやで！　だってなあ？　しょうがないやろ？　現に銀の軍団ザ・シルバリイ選えりすぐりの勇士たちが、そろいもそろってトマトクン一人にいてこまされとんのやさかい！　わしがゆうとること、なんや間違っとるか!?　間違ってへんやろ!?　せやろ!?　──そしてェェェッ！　ついにィィィィッ！　最終決戦ッッッッッ……！　そのときがきてまいよったアアアアァァァァァァッ……！』

　キイイイイイイイイイイイイイイ
イィィィィィィィィィィィィィィィィン……！

『──っとォッ！　久しぶりにやってもうた。ご愛あい敬きようや、ご愛敬。なあ？　さあて、ちゅうわけでっちゅうたらちゅうわけで、秩序の番人二代目総長ォォッ！　死神ィィィッ！　羅叉の入場ぉぉぉおおおおおおぅぅ……!?』

　半魚人の半魚眼が飛びだした。

「なん……」マリアローズはそこまで言って、自分が何を言おうとしたのかさっぱりわからなくなった。眩暈めまいがして、なぜだかちょっぴり泣きたくなった。や、泣かないけどさ。

　そいつはいったい、いつから試合場のほぼ中央、やや北寄りの場所に立っていたのか。

　無から生じた幻げん影えいみたいに、あまりに突とつ然ぜん、何の前まえ触ぶれもなく出現したようにしか思えないけれど、もちろん、そんなわけがない。あのバカはそういう奇術めいた芸当が無む駄だに得意だったりするのだ。

やつは深い青のフード付きの外がい套とうと、チュニックと、スカートとズボンの中間みたいなもの──しかも、どれもこれも左右非対たい称しようで、なんとも混こん沌とんとしたデザインの衣類を身にまとい、フードを被かぶった上に黒くて長い布をぐるぐるぐるんぐるん巻いて口から上を隠かくし、目の部分だけに隙すき間まを作って、余った布は身体中に巻きつけていた。

見覚えがある恰かつ好こうだ──なんて、白々しいよね。うん。自分でもそう思うんだけどね？　そりゃあね。ばっちり覚えてるよ。なんていうかこう、目立つしね。あれは。あの夜もアホみたいに目立ってたし。バカだよね。完全に。しょうがないのかもしれないけど。何しろ、馬ば鹿か一号だしね。本家本元なわけだし。ほんっとぉぉぉぉぉーに、どうしようもないよね。

なんで出てくるかな？　てゆうか、何しにきたわけ？

馬鹿一号は「フッ……」と笑い、どこからか一輪の青い薔ば薇らをとりだした。

試合場一帯が、ざわっ──とした。

マリアローズは、ぞくっ──とした。

すごいよ。マジで本格的にきもいよ。おかげで、見てよ。や、べつに見てくれなくてもいいけど。見せたくもないけど。全身、鳥とり肌はだ立ちまくりだよ。

馬鹿一号は青い薔薇をトマトクンに向けた。「──いきなりといえばいきなりだけどネ。真の英雄ヒーローの登場はいつだってそんなものだろう？　というわけで！　誰だれが呼んだか神秘のミステリアス・仮面男マスクマン──〝青い薔薇ブルー・ローズ〟見けん参ざんッ……！」

トマトクンは「むう……」と低く唸うなって実況席を振ふり返った。というか、マリアローズを見た。片方の眉まゆを思いっきりつりあげ、目つきで何か訴うつたえている。たぶん（この場合、俺はどうすればいいんだ……？）みたいなことをマリアローズに尋たずねたいのだろうが──僕に訊きかないでくれる？　なんか、馬鹿一号関連は僕の担当、みたいに思ってるのかもしれないけど、そんなことないし？　てゆうか、知ったこっちゃないし？　僕にはどうにもできないし？　どうもしたくないし？　むしろ、どうにかして欲し

いのはこっちのほうだったりするし……？

　マリアローズは顔をしかめて、ふるふるふるっと首を横に振ってみせた。

　トマトクンはけっこう重苦しい溜息をついて、それでもうなずいてくれた。「──で、何の用だ、アジアン」

　試合場一帯が静まりかえった。

　次の瞬間、今まさに試合場に足を踏ふみ入れようとしていた羅叉以下の番人たちが色をなした。実況席のクルチバは目を細めただけだが、グレヒャは椅い子すから少し腰こしを浮うかして、モトロール刀の柄つかに手をかけている。人を食ったような顔つきは変わらないものの、きっと抜ぬきたくて抜きたくてうずうずしているのだ。そんな気配がひしひしと伝わってくる。性しよう根ねは腐くさっていても番人だということなのか。

「……フッ」馬鹿一号は両りよう腕うでを広げて肩かたをすくめてみせた。「何のことかな？　ボクは……アレだヨ？　名乗っただろう？　神秘のミステリアス・仮面男マスクマン〝青い薔薇ブルー・ローズ〟と──」

「ああ」トマトクンはいやそうな顔をして、木刀で肩をぽんぽん叩たたいた。「ようするに、変装して嘘うその名前を使わなきゃならん事情があるってことだな。まあ、それもそうか。えーと、何だったか。ヒステリーマン・ブルブルースクン？」

「違ちがうヨ！　ミステリアス・マスクマン、ブルー・ローズだッ！　よりにもよって、わざわざクンをつけないでくれたまえ！　キミじゃあるまいし！」

「ミステリアン・マスクドメロン……？」

「もういいッ！　ボクの名はブルー・ローズだ！　これくらいなら、いくらなんでも覚えられるだろう！」

「ふむ。ブルー・ローズ、か……」トマトクンは顎あごを撫なでて「おお」と言った。「そのローズってのは、もしかしてマリアからとったのか？」

「ま、ま、ま、ま、ま、マリア……？　な、な、な、なぁーんのこ

とかな……？　だッ、誰なんだい、そのいかにも素す敵てきそうな重要人物は……？　どうも世界中で一番美しい響ひびきのような気がして仕方ないが、ボクにはとんと見当がつきかねるヨ……？」

　トマトクンは眉まゆ根ねを寄せて口をへの字に曲げた。「……いつまでもこんな茶番につきあってなきゃならんのか？　面めん倒どうだな」

「ちゃ、茶番とは何だ！　ボクは真ま面じ目めだっ！」

「だから、真面目に何の用なんだ」

「ボクは……！」馬鹿一号はぐるりとあたりを見まわすと、またぞろトマトクンに青い薔薇を向けた。「──野菜男！　キミに挑ちよう戦せん状を叩きつける！　今！　ここで……！　まさか、拒こばんだりはしないだろうネ!?　そうサ！　キミは拒きよ絶ぜつしない！　キミはとんだ唐とう変へん木ぼくだが、少なくとも腰抜けじゃあないはずだヨ……！」

「……やるのか？」

「ああ！」

「お前と？」

「そうサ！」

「ここで？」

「もちろんだとも！」

「なんで、また……？」

「ボクはキミを倒たおす！　軽々と！　華か麗れいに！　完かん膚ぷ無なきまで叩きのめす！」馬ば鹿か一号はクフハハハッ──と芝しば居いめいた高笑いをした。「そうすれば、当然のことながら!?　このボクが死神クンに挑戦する権利をえるはずだ！　そうしてボクが死神クンに勝ったら……!?」

　トマトクンはてんでやる気のない声で「……どうなるんだ？」と訊いた。

「それは……！」馬鹿一号は青い薔薇を鼻の前で揺ゆらしながら性しよう懲こりもなく「フッ」と笑ってみせた。「──秘密だヨ。それは、そのときになったら明かそう。とにかく、ボクは実力で障害を排はい除じよする──いや、乗り越こえるつもりサ。正々堂々とネ。何せ目的は同じだし、過去は過去でしかないわけだから、いがみあうことはないだろう……？」

　トマトクンは納なつ得とく顔とは程ほど遠とおい、むしろ呆あきれ顔にかぎりなく近い表情を浮かべて、首筋をボリボリ掻かいた。「……そういうことか」

　馬鹿一号はその場で無意味にターンして、トマトクンに人差し指を突つきつけた。「──そういうことなのサッ！」

　マリアローズはカタリからマイクをぶんどった。『真面目に考えてるんなら、ね？』

「──ハッ!?」馬鹿一号がこっちを向いた。変装のせいで、顔は見えない。見たくもない。なんでだろ。どうしてあのバカは肝かん心じんなところでどうしようもなく間抜けなのかな。だから馬鹿一号なんだけど。わかってるんだけど。そういうところが情けないっていうか、頼たよりないっていうか。僕はまあ、どうでもいいんだけどね。そのはずなのに、こうやっていちいち絡からんでくるからさ。無関係だとか言ってられなかったりもするし。だからうざいんだよ。

　マリアローズは一度、深呼吸をして気を静めた。冷静に。冷静にいこう。とにもかくにも、落ちついて。『──きみが真しん剣けんに秩ちつ序じよの番人との関係を改善しようと思ってるなら、そういうふざけたことしないでさ？　もちろん、顔も隠かくさないでね？　ちゃんと手続きっていうか、そういうのを踏んでさ？　面会して話しあいたいって言ってきたら、僕らだって仲ちゆう介かいしたりとか、考えなくもないわけでしょ？　でも、そんなふうに乱入とかバカげたことされたらさ？　誰だれが信用すると思う？　しないよ？　普ふ通つう？　あたりまえでしょ？　だいたいさ？　今回のこと、誰かに相談した？　ベティさんとか、頭のいい、常識もわきまえてる人だって、きみの仲間にはいるわけじゃない？　意見とか聞いた？　聞いてないよね？　聞いてたら、こんなことになってないもんね？　そういうところがガキだっていうんだよ？　わかる？　僕が言うようなことじゃないし、言うべきじゃないし、言いたくないんだけど、やっぱり言いたいから言わせてもらうけど

ね？　きみは頭領マスターでしょ？　一つの、しかもけっこう有名なクラン率いてるわけじゃない？　いいかげん成長したら？』

　馬鹿一号はうなだれた。「……はい」

『じゃあ、帰って』

「え……？」馬鹿一号は顔を上げて、すぐに下を向いた。「……で、でも……」

『でも、じゃないから。どうしてもっていうなら出直して。てゆうか、そういう態度じゃどうせ無理だと思うよ。出直す前に、自分を見つめ直したほうがいいかもね』

「……じ、自分を……」

『はい。帰って。退場』

「……た……退場……」

　アジアンは「悄しよう然ぜん」というタイトルの絵みたいな有様になっている。ちょっと厳しすぎるだろうか。いや。ここで甘い顔をしてはいけない。だいたい前々から──というか、いつも思っていることでもあるのだ。昼飯時ランチタイムは結局、アジアン好き好き同盟みたいなもので、あのクランの連中はとにかくアジアンが好きで好きでたまらなくて、放ほうっておけなくて、支えて、もりたててやらずにはいられないのだろう。少なくとも、外野からはそんなふうに見える。自覚があるのか、無自覚なのか。アジアンはそんな仲間たちに甘えているのだ。べつにそれはそれでいい。勝手にすれば？　僕は部外者だし。クラン対クランではそうでもないけど、僕個人としては昼飯時の人たちとそんなに良好な関係を保ってるとは言いがたかったりもするし──ほんとにもう、余計なお世話だとは思うんだけど、やっぱりさ。そろそろちょっとしっかりして欲しいっていうか。あのバカがルーズだったりテキトーだったりしてケジメをつけないせいで、こっちまでとばっちりを食うっていうかね。あのバカがなし崩くずし的に曖あい昧まいにしてるから、きっと昼飯時の人たちだってどう受け止めていいやら、みたいな、そんな心境だったりもするんじゃないかな、とかさ。いいんだけどね。どうでも。まあ、だけど、見も知らぬ人とはさすがに言えないし？　何年も知りあいやってるわけだし？　あくまで知りあいだけど？　いろいろ──けっこういろいろあったのに、そのわりにいまい

ち人間的に進歩がないって、それってどうなのとか、どうしても思っちゃうでしょ？　こういうのって、普通だよね……？

　アジアンはおずおず「あ、あの……」と言って、頭を下げた。「ごめんなさい……次からは、もっと考えて……自分の立場や、諸しよ般はんの事情を考こう慮りよした上で行動しようかな、と……」

　マリアローズはごくごく小さな咳せき払ばらいをした。『そうしたほうがいいと思うよ？』

「そう……だネ。うん……もっともだヨ。ボクは少々浅はかだったかもしれないネ……」

『そのとおり。はい。じゃあ、退場。さっさと。ほら』

「うん……」

　アジアンはとぼとぼ試合場から出ていった。その後ろ姿には哀あい愁しゆうすら漂ただよっていて、試合場一帯は微び妙みようとしか言いようがない空気に包まれている。最終決戦にふさわしい、不安と期待、反感と熱ねつ狂きようがない交ぜになって最高潮の一歩手前まで達しようとしていた雰ふん囲い気きを、あのバカが見事にぶち壊こわしてくれた。

『いや、しかし』いつの間にサフィニア・ショックから立ちなおったのか、グレヒャが、む、ふ、ふ、といやらしい笑い方をした。『面おも白しろかったですよ。今のは今ので』

　一部の観衆が苦く笑しようのさざ波を立てた。途と端たんにマリアローズは強きよう烈れつな羞しゆう恥ちの念に駆かられて、とても前を向いていられなくなった。

『──ですが……』グレヒャの声こわ音ねがわずかに真剣味を帯びた。『私は正直、あの方とは剣を交えたくはないですね。勝つか負けるか、という問題ではありませんが、なんというか……違うでしょう？　私レベルの、真の達人にはわかるんですよね。そういうことが。わかってしまうんですよ。その意味では、ＺＯＯの園長マスターどのも似たり寄ったりかもしれませんから、勝負が始まったら始まったで見み物ものだったでしょう。少し残念ですが、さて、我らが総長は私たちにどんな戦いを見せてくださるんでしょう

ね……？』

　マリアローズは「はい」とカタリにマイクを渡わたした。

　カタリはマイクを受けとると、心の目にはばっちり見えるエラを駆く使しして『すぅぅぅぅぅぅぅはぁぁぁぁ……』と深呼吸をした。『──ちゅうわけで、おそらくこれが最後のちゅうわけでになるやろッ。わからんけどもッ、あらためていくでえッ！　いってまうでえェエッ！　ええか!?　ええんやなッ!?　よっしゃァッ！　秩序の番人二代目総長ォォッ！　死神ィィィッ！　羅叉の入場ぉぉぉおおおおおおぅぅノオォゥッ……!?』

　試合場のすぐ外にいた羅叉は、もしかしたらずっとそうするつもりでいたのかもしれない。迷いは微み塵じんも感じられなかった。羅叉はまっしぐらに駆けていった。あっという間にトマトクンを射程にとらえ、右下から左ひだり斜ななめに木刀を振ふりあげた。空気が叩たたっ斬きられる恐おそろしい音がした。まるで鋼鉄の塊かたまり同士が正面衝しよう突とつしたかのような、極きよく端たんに耳みみ障ざわりな破は滅めつ的な音がそれにつづいた。トマトクンが木刀を振りおろして羅叉の木刀を弾はじいたのだ。羅叉はすぐに手首を返して右からトマトクンの左ひだり脇わき腹ばらを、それから左肩、左ひだり腿ももときて、さらに左肩を狙ねらい、また左肩、右肩、左肩、左肩、左肩、左脇腹、右肩、左肩を矢や継つぎ早ばやに攻せめた。トマトクンはことごとく木刀で受けてみせたが、羅叉は止まらない。今度は突つきだ。股こ間かん。鳩尾みぞおち。喉のど頸くび。三連続の突きはどれも見るからに一いち撃げき必殺だった。どこも急所だし、あんなものを食くらったら、かなり頑がん丈じような人間でも命が危あやうい。トマトクンは木刀を出さず、まず後退して、それから左へ、そこからもう一歩飛びすさって羅叉の突きをかわした。そうして生まれた二人の間の距きよ離りは一いつ瞬しゆんで無になった。トマトクンの対処を羅叉は読んでいたのか。それとも、トマトクンが誘さそったのか。あるいは、死神と称しようされる羅叉の戦せん闘とう者としての本能がそうさせたのだろうか。羅叉はスッ──と踏ふみこんで、大上段から大振りの斬ざん撃げきを繰くりだした。「──壊カイッッッッッッッッ……！」

「ふうあっ……！」トマトクンは腰こしを沈しずめて、両手持ちした木刀を振りあげた。

　二本の木刀が激突して、だが、いずれかが撥はね返されることも、反発しあうこともなかった。ほんの瞬間ではあったけれど、間

ま違ちがいなくがっちり嚙かみあって静止した。トマトクンの馬ば鹿か力ぢからを知っている身としては、ちょっと信じられない。でも、事実だ。その間、上から木刀を押しつける羅叉の力と、下から押しあげるトマトクンの力が拮きつ抗こうしたのだ。

　両者とも飛び離はなれた。

　トマトクンは自然体で木刀をだらりと下げ、羅叉は諸もろ手て左上段に構えた。『武技概がい論ろん』によると、上段は「火の構え」ともいう。気位を高くして揺ゆらがぬ心を持ち、相手を見下ろして強烈な気き迫はくで呑のみこみ、渾こん身しんの攻めで焼き尽つくす、超ちよう攻こう撃げき的な構えだ。羅叉はトマトクンより十サンチほど背が低いはずだが、そこまでの体格差は感じない。構えが大きいからだろう。

「人は俺を死神と呼ぶ」羅叉の息は乱れていない。それどころか、呼吸している気配さえ感じさせない。「だが、俺はそんな上等なものじゃない。ただの狂きよう犬けんだ」

　トマトクンはほんの少しだけ目を細めた。「せめて死神くらいにはなってみせないと、俺には勝てんぞ」

「勝敗を、狂犬の俺は考えぬ」羅叉は足を進めると見せかけて、動かなかった。「ただ目の前にいる敵を殺す。それが俺の剣けんだ」

「やってみろよ」

「貴様は俺の主あるじではない」羅叉は微かすかに笑った──ように見えた。「俺に命じるな」

　その瞬間、羅叉自身が抜ぬき身みの刀と化した。一振りの刀となった羅叉がトマトクンに斬りかかった。あんな斬撃、見たことがない。肉体と木刀が一体となり、ある流れとなって、うねりをなす。右、左、右、左、右、左。すべて上段からの打ち下ろしで、単調だし、その挙動はしっかりと見える。マリアローズの目でもとらえられるのに、速度がつかめない。あれは速いのか。遅おそくはないはずだ。右からの打ち下ろしと左からの打ち下ろしが、ほぼ同時に行われているようにも見える。とにかく息つく間もない連撃中の連撃だ。一撃必殺の連打の嵐あらしだ。まばたきができない。呼吸をすることも忘れてしまう。心臓さえ止まってしまいそうだ。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。

殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。殺。羅叉は間違いなくトマトクンを殺そうとしている。──無理。

　あんなの、絶対、無理だから。死ぬって。死んじゃうってば。

　わかっている。羅叉の相手をしているのはトマトクンだ。わかっているのに、まるで自分が攻めたてられているような感覚に陥おちいってしまう。マリアローズのみならず、観衆も、番人たちさえも、恐れおののいている。羅叉が発しているあの濃のう密みつな殺気には、それほどものすごい威い力りよくがあるのだ。

　トマトクンだから、あの動きというか勢いに対たい抗こうして、しのぐことができている。最初は押され気味のようにも見えたけれど、今は押し返している。防ぐだけじゃない。トマトクンが羅叉の木刀を打ちあげた。そこから振りおろし、羅叉が受けるほうに回った。羅叉はすぐにまた攻めに転じようとしたが、トマトクンも同時に木刀を振りかぶった。二人の顔と顔の中間で木刀同士が激突した。何かが飛び散った。互たがいの木刀が削けずれて、木き屑くずが飛んだのだ。二人はさらに打ちあった。さっきとまったく同じ地点で二振りの木刀がぶつかった。さらに、もう一度。二度。三度。何か変化をつけたり、小こ技わざを出せばいいのに。傍ぼう観かん者の浅あさ知ぢ恵えだ。できっこない。そんなことをしようとした瞬間、押しきられる。今はただひたすら全力で自分の木刀を相手の木刀に叩きつける以外にすべはない。

『漢おとこじゃあああああああああああああああああああああッッ……！』カタリの絶ぜつ叫きようが響ひびき渡った。キィィィィィン──と鳴ったが、カタリはかまわなかった。『これこそまさしくッ！　漢の勝負やああああああああああああああああああああッッ……！』

　トマトクンと羅叉の木刀が衝突するたびに、誰だれかが「おお！」と掛かけ声をかけた。誰かがそれに倣ならった。「おお！」他ほかの誰かも追従した。「おお！」声はどんどん高まっていった。「おお！」「おお！」「おお！」「おお！」「おお！」「おお！」「おお！」「おお……！」

　さながら数百の太たい鼓こが打ち鳴らされているかのようだ。地面が、空気が振しん動どうしている。そんな具合に人々が一体感を増してゆけば増してゆくほど、マリアローズは冷静になってしまう。つまらないやつだと思われることもあるけれど、そういう性し

よう分ぶんなのだ。

　二人は気づいてるのだろうか。たぶんもう限界だ。そのときは間近に迫せまっている。

　いや、今だ。

　トマトクンは真上から振ふりおろし、羅叉が右みぎ斜ななめに振りあげた木刀と木刀が、ぶつかりあった瞬間、砕くだけて折れた。

　そこかしこで悲鳴があがった。凍こおりつく者がいた。息をのむ者もいた。

　羅叉は、でも、そうなることを予想していたようだ。すぐさま手に残った木刀の残ざん骸がいを放ほうって、トマトクンに体当たりを仕し掛かけた。トマトクンも慌あわてなかった。腰が入った肘ひじ打うちで羅叉を吹ふっ飛ばした。羅叉は地面に叩たたきつけられはしなかった。くるっと身体からだを回転させ、四つん這ばいの姿勢で着地して起きあがった。何だ、あれは。

　羅叉の背中だ。死神の鎧よろいも純血の司祭のプロヴィデンス・シリーズだが、一いつ般ぱんの番人たちが身につけているものとは違う。隊長や隊長補クラスのファイネスト、あるいはファイネスト・アドバンスといった、カスタマイズされたものとも異なる。かつてデニス・サンライズが着用していたＷＸ-Ｐ〝有ゆう翼よく天てん将しよう〟ほどごてごてしていない。あれよりはだいぶすっきりしているものの、明らかに特とく殊しゆ仕様の鎧だ。いったいどんなふうに折りたたまれていたのか。見当もつかないが、羅叉の背に八枚の銀色に輝かがやく羽が展開された。

『□□ＷＸ-Ｄ２〝有ゆう翼よく魔ま人じん〟……！』グレヒャの声は微かすかにうわずっていた。『先代の〝有翼天将〟と同時期にデザインされたＷＸ-Ｄ〝有翼天人〟の後こう継けい！　世界に一つしかない、あれはもう、現代に生みだされた数少ない秘宝の一つといっても過言じゃない……！』

　半魚人が叫さけんだ。『ヌ魚ウオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォウゥゥ……！』

　羅叉が高く跳とんで、八枚の羽がはばたいた。いや。違ちがう。そうじゃない。羽は大きく広がり、次の瞬しゆん間かん、弾はじけ

た。そう見えた。羅叉がトマトクンを指さした。「行け、翼つばさよ……！」

　何か光った。どこだ。上空。移動している。やたらと高速だ。ピンパーネルが伏ふせた。それとほとんど同時だった。トマトクンも腰こしを屈かがめた。何かがその頭上を、すれすれの位置を通りすぎていった。それは地面に突つき刺さった。トマトクンは自分から転がった。今の今までトマトクンがいた場所に、また何かが突き立てられた。その次はよけられなかった。トマトクンは起きあがりながら左ひだり腕うでを振って弾はじいた。恐おそろしい音がした。でも、まだだ。まだ終わっていない。それは次々と押しよせてきた。トマトクンは両腕を頭の上で交差させて膝ひざを曲げ、両足を踏ふんばった。「──ぐうううううううううああああああああああああああああ……！」

　五つのそれが立てつづけにトマトクンを襲おそった。五つのうちのどれが、どこに、どんなふうに当たったのか。そんなことはわからないけれど、ぜんぶ命中した。それだけは間違いない。

　トマトクンは両腕を下ろした。左腕には力が入っていないようだ。折れているのか。トマトクンの全身鎧は何で出来ているのかわからないが、おそらく金属製じゃない。そのわりにはとてつもなく頑がん丈じようだ。見たところ、傷ついている様子はないものの、どんな衝しよう撃げきも吸収してしまうということはさすがにないだろう。たぶん、左腕だけじゃないはずだ。他にも骨折くらいはしていてもおかしくない。トマトクンは、だが、前に出た。羅叉を迎むかえ撃うつためだ。羅叉は低い姿勢で突っこんできた。「──我ガ亞ア亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……！」

「むん……！」トマトクンは右足で羅叉を蹴け飛とばそうとした。羅叉はかわさなかった。まっすぐ向かっていって、トマトクンの右足にしがみついた。トマトクンはすかさず身体を傾かたむけ、羅叉が絡からみついている右足で地面を蹴りつけた。羅叉が地面に叩きつけられる恰かつ好こうになった。それでも羅叉は離はなれなかった。関節だ。きっと膝か足首を狙ねらっている。トマトクンは右手を握にぎり固めて羅叉の頭を殴なぐりつけた。二度、三度とぶん殴った。羅叉の顔面はあっという間に血ち塗まみれになったが、それだけだった。羅叉はびくともしない。トマトクンは舌打ちをし、右手で羅叉の頭を鷲わしづかみにした。そうして力をこめた。トマトクンは握あく力りよくだって尋じん常じようじゃない。それなのに、羅叉は嗤わらってみせた。「ハハハハハァァァァァァァァッ

……！」

「──しぶといやつめ……！」トマトクンは自分から後ろ向きに倒たおれた。羅叉の頭から右手を離して、左足で羅叉をドカドカ蹴った。むちゃくちゃに蹴ったくって、めちゃくちゃに蹴りまくった。羅叉はようやく離れた。いったん飛び離れて、でも、ふたたびトマトクンに躍おどりかかった。トマトクンはこれを見み越こしていたようだ。右足を伸のばして羅叉を押し返し、立ちあがった。両者の間に二メーテルかそこらの距きょ離りができて──普ふ通つうなら数秒間は睨にらみあい、お互い相手の出方をうかがう状じょう況きょうなのに、そうはならなかった。やはり羅叉だ。羅叉が動いた。

　羅叉はトマトクンに詰つめよって、矢や継つぎ早ばやに突きと蹴りを繰くりだした。トマトクンの左半身を集中的に狙っている。トマトクンは左腕が使えないからだ。それでも、右腕を伸ばして羅叉の拳こぶしや足を打ち払はらったり、足あし捌さばき、体捌きでかわしたりしているが、ちょっと窮きゅう屈くつそうだし、だいぶ苛いらついているようだ。

「羅！　叉！」番人の一人が野太い声で叫んだ。「羅！　叉！」さらに低くて大きな声がそれにつづいた。「羅！　叉！」番人たちが唱和しはじめた。「羅！　叉！」「羅！　叉！」「羅ッ！　叉ッ！」「羅ッ！　叉ッ！」「羅ッ！　叉ッ！」「羅ッ！　叉ッ……！」

　なんだか勝手に盛りあがっている。べつにいいけどさ。有翼魔人。あんなもの使ってくるなんて。武器は木刀だけのはずじゃないか。卑ひ怯きょうだ。抗こう議ぎしたい。それだけじゃ足りない。罵ののしりたい。徹てっ底てい的にこき下ろしてやりたい。でも、口に出すべきじゃない。時と場合によって、何を言っても効果覿てき面めんなこともあれば、何を言ったって無む駄だなこともある。今は後者だ。

　マリアローズはユリカ、サフィニアと目を見み交かわした。二人ともマリアローズと同じ思いでいてくれているようだ。一応、カタリのほうも見てみた。カタリは半魚眼を見開いて、試合場を凝ぎょう視ししている。表情は硬かたいけれど、決して暗くはない。試合場の中にいるピンパーネルも落ちついている。

　トマトクンは大だい丈じょう夫ぶだ。負けない。羅叉ごときに、という言い方はあえてしないでおこう。相手が誰だれでも関係な

い。僕らの園長マスターは、勝たないといけない勝負には、絶対に勝つんだ。

　トマトクンの右手が羅叉の蹴りを受け損そこねて──羅叉の右足がトマトクンの左腕を強打した。一瞬、トマトクンの動きが止まった。羅叉は嵩かさにかかってトマトクンの左腕に右足の回し蹴りを連続で叩きこんだ。サフィニアが悲鳴をあげた。ユリカがサフィニアを抱だきしめた。マリアローズは歯を食いしばり、カタリは『ごきゅり』と唾つばを飲みこんだ。羅叉コールがいっそう高まった。あーもう、うるさい。うるさい。うるさい……！

　不意にトマトクンが左腕を持ちあげた。曲がっている。肘ひじと手首の中間あたりだ。本来関節なんか存在しない位置で、トマトクンの左腕は折れ曲がっていた。

　羅叉の右足がトマトクンの左脇腹にめりこんだ。その瞬間、トマトクンは折れている左腕と脇腹で羅叉の右足を挟はさみこんだ。たぶん反射的な動作だろう。羅叉は左足を踏んばって、右足を引き抜ぬこうとした。そこにトマトクンの右拳が襲いかかった。羅叉は顔の前で両腕を交差させて、トマトクンの鉄てつ拳けんを防いだ。なんとか防いだものの、ガードはたやすく粉ふん砕さいされた。羅叉の顔面がガラ空きになった。

　トマトクンは右手で羅叉の左耳をひっつかんだ。あれは痛い。というか、ちぎれそうだ。もう半分くらいちぎれている。

　そうしてのけぞるようにして反動をつけ、自分の額を羅叉の額に打ちつけた。

　頭と頭がごっつんこした音にしては大きすぎるし、破は壊かい的すぎる。そんな音がしていいはずがない。怖こわすぎる音がした。

　羅叉の全身から力が抜けた。トマトクンが左腕をゆるめると、羅叉はこんにゃくで出来た人形みたいに崩くずれ落ちた。少なくとも一瞬は気を失っていたはずだ。でも、完全に倒れ伏す寸前で持ちなおした。羅叉はゆらりと立ちのぼるように起きあがって、首を左右に曲げた。

「目が覚めた」

「そいつはよかった」トマトクンは右手の人差し指で自分の額を叩

たたいてみせた。さすがに無傷ではない。ぱっくり切れて、流血している。「こいよ、羅叉。お前の覚かく悟ごを見せてみろ」

「貴様を打ち砕くだいてやる」

「その意気だ」

「上から物を言うな」

「腹が立つなら、俺の膝ひざを叩き折ればいい」

「今からそうする……！」

　羅叉は全身をしなわせた。

　トマトクンは腰こしを低くして受け止める構えだ。

「憤フンッ……！」

　羅叉の額とトマトクンの額が正面衝しよう突とつして、またあのおぞましい音がして、両者の血がバッシャバシャ飛び散った。

　トマトクンは小こ揺ゆるぎもしなかった。羅叉は撥はね返されたが、なんとかこらえた。

「━羅ラ亞ア亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞ッ……！」

　すぐに体勢を立てなおして、羅叉は頭ず突つきを放った。

　音はさっきよりも控ひかえめだったが、撒まき散らされた血液の量はおびただしかった。

　トマトクンはやはり揺らがず、羅叉はふらついた。

「どうした」トマトクンは鮮せん血けつに染まった顔を笑わせた。「お前は所しよ詮せん、この程度か」

「巫ふ山ざ戯けるな」羅叉は己おのれの頭を剣けんの先にして振ふりかぶった。「━無ム于ウ亞亞ッ……！」

　マリアローズは思わず耳をふさいで目をつぶってしまいそうに

なった。今度の音はそうとうやばかった。気のせいかもしれない。でも、何かが潰つぶれた。そんな響ひびきが混じっていたのだ。

　トマトクンの身体からだがほんの少しだけ後退した。

　羅叉は二歩、三歩とあとずさって、どうにか立っているという様子だ。それでもまだつづけるつもりなのか。

「……まだ、まだだ……」

「じゃあ、次は俺もちょっとだけ本気を出すか」トマトクンは唇くちびるの端はしをぺろりと舐なめ、息を吸いこみながら胸を反らせた。「──ちょっとだけだぞ。友だちの養い子を殺すわけにはいかんからな」

　羅叉が燃えあがる炎ほのおと化したように見えた。「舐めるなァァァァァァァァァァッ……！」

　見たくない。聞きたくもない。でも、見届けないといけない。絶対に。

　岩がん盤ばんに巨きよ大だいな鉄てつ槌ついを打ちつけたような音がした。

　トマトクンは少し身を屈かがめて前頭部を矛ほこみたいに突きだした。羅叉は渾こん身しんの力をこめて振りかぶり、向かってくるトマトクンの額に自分のそれを叩きつけた。

　羅叉は弧こを描えがいてひっくり返った。

　そのまま仰あお向むけに倒たおれて、あとはもうぴくりともしなかった。

　トマトクンはうるさそうに右手で目の周りをぬぐい、小さな溜ため息いきをついた。

『──っとッ……』カタリは絶句した。

　勝ち名乗りを上げるべきピンパーネルもぼんやりしている。

　試合場一帯は妙みように静かだ。

「どうやら、俺の勝ちみたいだな」トマトクンはあたりを見まわした。「誰だれか異存のあるやつはいるか。いるなら、勝負してやってもいいが――」

　左ひだり腕うでをぶらぶらさせている人間の台詞せりふじゃない。一連の試合を見て、そんなふうに考えられる者がどれだけいるだろう。

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、肩かたをすくめてみせた。「いないらしいな。文句がないなら、これで決まりだ」

　マリアローズは椅い子すから腰を浮うかせた。「え……ちょっ――」

　止めようとしたのだけれど、間に合わなかった。

　トマトクンはさらっと言ってのけた。「秩ちつ序じよの番人は俺のものだ」

　マリアローズは中腰の姿勢で、どんな表情をしていいものやらわからず、ただただ「……うわー。うわぁー。うっわぁー……」と無意味な声をもらした。

「む？」トマトクンはマリアローズのほうを見て、ぽかんと口を開けた。「……あ」

　あ、じゃないよ。

Omenage 899 6th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

chapter.9

せつなくて嬉しくて

どうせみんな、ぼくのことなんて、どうでもいいんでしょう。

何度も何度もこみあげてきて、呟つぶやいてしまいそうになる言葉をのみこむたびに、ぼくは最低だ、最悪の──そう、こういうやつのことを、この街ではクモソウ野フ郎オっていうんだ──そんな思いが頭の中を駆かけ巡めぐって、眩暈めまいが、頭痛が、吐はき気けがして、おなかが痛くなって、汗あせが噴ふきだして、歯を食いしばって、我が慢まんして、なんで我慢しなきゃいけないのかわからなくて、生きているのがいやになる。

わかっているのに。そうだ。ちゃんとわかっている。それどころじゃない。今は大変なときなんだ。大きな事件が起こって、ＺＯＯのみんなも無関係ではいられなくて、ぼくになんか構っていられない。そういう問題でもない。ぼくのせいだ。自分の気持ちを整理して、ぼくも、ぼくだって──と言うことさえできたら、みんなきっと、じゃあおいで、と手招きしてくれるだろう。手を引いて、連れていってくれさえするかもしれない。

ぼくのせいなんだ。ぼくが悪い。だいたい、ぼくにだって関係がないわけじゃない。いや、大ありだ。ありすぎるくらいだ。

そのせいで、身動きがとれない。これは比ひ喩ゆじゃない。実際、家に、ほとんど自分の部屋に閉じこもっている。部屋から出るのは、食事や入浴や用を足すときくらいだ。本当は一歩も出たくない。でも、「ご飯だよ」とドアを叩たたかれて、無視すれば心配されるか、拗すねていると見なされるだろう。本心では心配してもらいたい。これっぽっちも拗ねていない、とは言えない。だけれど、みんな忙いそがしい。余計な気苦労を増やしたくない。嘘うそじゃない。そう思っているから、食事は一いつ緒しよにしている。話だってちゃんとする。「どうする？」と訊きかれても、黙だまりこんだりしない。「ちょっと、今はまだ……」と答えを濁にごす。

誰も「はっきりしたら？」とは言ってくれない。いっそのこと、「いいかげん、決めたほうがいいんじゃないの？」と叱しかりつけてほしい。みんなぼくより年上だし、人生経験が豊富なんだから、助言くらいしてくれたっていいはずだ。「こうしたら？」「ああしたらどう？」「これは？」「こういう方法もあるよ？」──そうしたら、ぼくだってその中から選ぶよ。少なくとも、選ぼうとするはずだよ。

何もない。何も。思いつかない。ぼくはどうしたいのか。どうすればいいのか。わからない。考えても、考えても、考えれば考えるほど、わからなくなる。

だから、教えてほしい。

ぼくはどうすればいいんですか？

でも、みんなそれどころじゃないんだ。ぼくなんかのことよりも大事なことがあるんだ。ぼくは二の次、三の次、四の次、五の次、それ以下なんだ。

どうせみんな、ぼくのことなんて、どうでもいいんでしょう。

きゅーの「くう！」という制止の声（？）を無視して家を飛びだしたのは夕方だった。みんな、なかなか帰ってこなくて、まだかな、もう少しかな、そんなふうに思いながら待って、待ちくたびれて、とうとう我慢できなくなった。そんなの言い訳だ。いや、言い訳にすらなっていない。何が我慢だ。我慢なんかしていない。ただ部屋の中でぐずぐずしていただけじゃないか。ぼくが、こうしたい、ああしたい、そう言えば、みんな励はげましてくれたはずだ。助けてくれただろう。それなのに、ぼくは何も決めなかった。誰かに決めてほしかったんだ。こうしろ、ああしろと命じてほしかった。

だって、ぼくは未熟で、頭もよくなくて、強いわけでもないし、とくに何の取とり柄えもない、ただのガキで、ぼくが何かを決断したとしても、それが正しいとはかぎらない、きっと間ま違ちがっている、自信がない、責任なんてとれない、だから、この道が正解だって教えてもらいたい、導いてもらいたい、地図を作ってもらって、道案内をしてもらって、そばにいてもらわないと、ぼくには何もできない。怖こわいから、何もしたくないんだ。

ぼくは逃にげたんだ。

おしりを叩かれているわけじゃない。腫はれ物ものにさわるような扱あつかいを受けているわけでもない。一人で勝手に追いつめられたような気分になって、とうとう逃げだしてしまった。

第十二区にあるトマトクン邸ていを出たルーシーは、環かん状じよう通どおりを渡わたって第九区へと足をのばした。クァラナド歓

かん楽らく街がいの近くまで行ったが、おっかないので引き返し、闇やみ市いちのそばを通って環状通に戻もどった。第二区をうろついて、第一区に入った。それから第十三区と第五区の間を行ったり来たりした。

　総長争そう奪だつ戦せんとやらはどうなったのか。気になるし、場所が第十一区にある北ほく斗と門の近くだということは知っている。見にいこうとも思った。嘘だ。それなら、自然とそっちの方向に足が向いたはずだ。

　ルーシーは第十三区の高層寺院と高層寺院の間にいる。人がすれ違うのもやっとといったかんじの細い路地だ。日はとっくに暮れている。真っ暗だ。なんだかじめじめしている。足を踏ふみ入れたとき、鼠ねずみが走り去ってゆく気配がした。きっと地面も建物の外がい壁へきもひどく汚よごれている。腰こしを下ろすのはためらわれたけれど、歩きどおしで足が棒になっていた。地べたに座って背中を外壁にもたれさせると、もう動けない、動きたくない、と思った。一秒たりともじっとしてられない。そんな気分でエルデンを歩きまわっていたのに、いくらでもこうして黙っていられそうだった。

　実際、何も考えず、指一本動かさずに数十分、いや、おそらく何時間も、ただそこにいた。

　今、何時なのだろう。時計を持っていないので、わからない。

　路地の外には街灯がある。人通りはないから、もう夜中なのかもしれない。

　おなかがすいた。空腹を感じて我に返ったのだ。

　見つけてくれなかったな。そもそも、ぼくのことなんて、誰だれも捜さがしていないのかな。

　期待していたのか。そんなことはない。こんな場所にいて、見つけてもらえるわけがないじゃないか。本当に見つけてほしければ、もっとわかりやすいところにいる。そうだ。そこまで図ずう々ずうしくない。見つけてほしくないから、隠かくれているのだ。そのへんをうろうろしていたら、つかまえられてしまうかもしれないから。

「ははははは……」ルーシーは気の抜ぬけた笑い声を立てて、両りよう腕うでで抱かかえこんだ膝ひざに顔を押しつけた。「……だめだ……これじゃあ。わかってるけど、そんなことは。でも……だめだよ。いじけてる場合じゃないのに。そうだよ。ようするに、ぼくはいじけてるだけじゃないか」

　どうせみんな、ぼくのことなんて、どうでもいいんでしょう。

　結局、それが本音なのだ。みんなが自分に注目してくれないから、気にくわない。それだけなのだ。もちろん、こんな状じよう況きようでなければ、いじけたりしない──と思う。ぼくだって、お父さんのことさえなければ。

　絞首刑ハング執行人マン99。悪徳再生リヴアイスの披露宴レセプシヲン。父によく似た男。彼は死んだ。秩ちつ序じよの番人の死神に殺された。褒めて、俺のこと。お父さん。それが最さい期ごの言葉だった。彼はＳＩＸという男の影かげ武む者しやだったらしい。彼はルーシー・アッシュカバードの父ではなかった。ＳＩＸの影武者で、しかも、息むす子こだった。ＳＩＸは大悪人らしい。ルーシーは話を聞いただけだが、息子を影武者にするなんて、ひどい。ひどすぎる。やはり本当に大悪人なのだろう。

　ぼくのお父さんかもしれないんだ。

　影武者の人は、ぼくのお兄ちゃんだったのかもしれない。母親は違うだろうけれど、お父さんの息子なら、血は半分繋つながっている。

　確かく認にんする方法は、だけれど、もうない。影武者の死体は秩序の番人が運んでいった。そのあとどうなったのか。ルーシーは知らない。知りたいけれど、やはり知りたくないような気もする。とりあえず、丁てい重ちように埋まい葬そうされたとは考えにくい。だから、わからない。本当のところは。嘘うそだ。大嘘だ。ルーシーはすでに確信している。

　あれはお兄ちゃんだ。名高い大悪人が──ＳＩＸが、ぼくのお父さんなんだ。

　ぼくはとんでもない悪党の息子で、その悪党は昔、秩序の番人や、それからＺＯＯとも戦った。悪党は大勢を、秩序の番人の前の総長までも殺した。前の総長はトマトクンの友人だったらしい。激

しい戦いがあった。その果てに、トマトクンが友の仇かたきをとった。悪党を殺したのだ。そのはずなのに、どういうわけかふたたびエルデンに姿を現した。

　ルーシーは硬かたい地面に右の拳こぶしを叩たたきつけた。
「……なんでだよ？　どうしてみんな、ぼくの前で平気な顔をしてられるんだよ？　おかしいじゃないか、そんなの。ぼくだったら……ぼくなら、とても無理だよ。心の狭せまいぼくとみんなを比べちゃいけないよね。わかってるけど。でも、ぼくは平気じゃない。平気じゃいられないんだよ」

　もう一度、地面を殴なぐりつけた。手加減した自分に腹が立って仕方なかった。「……秩序の番人の人たちと一いつ緒しよに行動なんてできない。できないよ。どんな顔をしていればいいのかわからないし。何を言われるかわからないし。何かされたって、文句は言えないし。怖いよ」

　だから、どうか大だい丈じよう夫ぶだと言ってほしい。何かあったら守ってあげるから、と。何も心配しなくてもいいから、おいでよ。このままじっとしてるつもり？　何もしないで？　それじゃどうしようもないだろ。こなきゃダメだよ。さあ、くるんだ。そう言ってほしい。みんなだってわかってるはずだ。ぼくの望みなんてお見通しなんでしょ？　それなのに、なんで。つまり、どうせみんな、ぼくのことなんて、どうでもいいんでしょう。結局、そういうことなんだ。そうに違ちがいないんだ。

　ここにいたら、見つけてもらえないよ。どこか別の場所に行こう。捜してくれているかどうかもわからないのに。みんな、そんなことをやっている場合じゃないんだよ。わかっている。でも、ＺＯＯの人たちなら──心のどこかでそう思っている。期待しているだけじゃない。

　信じている。

　まだ出会ったばかりなのに。

　みんなのことをよく知っているわけでもなくて、たいした根こん拠きよもないのに。

「ぼくは、どうしようもない甘ったれだ」

ルーシーは立ちあがった。路地から出ようとしたら、人の気配を感じた。それがどうした。関係あるか。そう思いはしたのだけれど、勝手に足が止まった。ルーシーは外壁に背中をつけて、ちょっとだけ顔を出してみた。男だ。一人じゃない。複数。二人か。あの恰かつ好こうは。黒を基調にした色合い。暴力の匂においがする、かっこいいデザイン。すぐにわかった。間違えようがない。男たちは悪徳再生リヴアイスの衣服を身につけている。

場所によっては深夜営業している高層寺院もあるようだけれど、このあたりはもうどこも閉まっている。男たちは何をしているのか。どうやら、二人とも大きな紙の束のようなものを小こ脇わきに抱えているようだ。それから、手に何か棒状の物体を持っている。男たちは建物の壁かべに、その棒状の物体で何か書く──というよりも、絵の具か何かを塗ぬるような仕し種ぐさをした。そうして紙の束から一枚抜きとり、建物の壁に押しあてた。そうか。男たちはあの棒状の物体、おそらく刷は毛けで壁に糊のりを塗りたくり、その粘ねん着ちやく力でもって紙を貼はりつけているのだろう。

一人の男は道のあっち側に、もう一人はこっち側にいる。貼ることができそうな場所があれば、二人がかりで手当たり次し第だいにべたべたべたべた紙を貼っつけているというかんじだ。

あれは何の紙なのだろう。気になったが、男たちが近づいてくる。ルーシーは足音を忍しのばせていったん路地の奥へと引き返し、男たちが通りすぎるのを待った。十分かそこらはじっとしていたと思う。男たちの気配がだいぶ遠ざかった。路地を出ると案の定、男たちの後ろ姿はかなり小さかった。ルーシーは壁に貼られている紙に目を向けた。「──あっ……！」

思いっきり顔を近づけて凝ぎよう視しした。ダメだ。近すぎる。かえってよく見えない。少し離はなれた。ルーシーは手を伸のばして紙をさわった。これはただの貼り紙だ。わかっている。

貼り紙の上では、上半身裸はだかの男が豪ごう華か絢けん爛らんで禍まが々まがしい椅い子すに座り、素す肌はだの上に黒い鎖くさりを身体からだ中に巻きつけられた男を踏ふみつけている。

踏みつけられている男は何者なのか。ルーシーにはわからない。

でも、椅子の男は知っている。

白い肌。肩かたまで届く黒くろ髪かみ。奥行きのある輝かがやきを宿した瞳ひとみから放たれる、どこまでも鋭するどい眼光。彼の前ではすべてが餌えさにすぎない。こっちから、どうか食べてほしい、と願いたくなってしまうような面めん貌ぼうだ。その胸はあまりにも広く、広大といってもいいほどで、腰こしは妖あやしく
きゅっと締しまっている。

「お父さん……」

絶対に間違いない。左肩に「６」の字がある。ＳＩＸ。これは父だ。

何か赤い字が書いてあるけれど、読むことなんてできなかった。震ふるえが止まらなかった。気がつくと、泣いていた。両手で顔をぬぐうと、涙なみだだけじゃない。よだれが垂れている。鼻水も出ている。我が慢まんできなくて、貼り紙の父に口づけをした。舐なめると変な味がして正気に返った。何をしてるんだ、ぼくは。なんてことを。

洟はなを啜すすりながら手を服にこすりつけて、ルーシーの唾だ液えきやら鼻はな汁じるやらでふやけていない、隣となりの貼り紙を丁てい寧ねいに剝はがした。折り目なんかつけられない。くるくるっと丸めた。

「へへへ……」

これでいつでも父と会うことができる。

でも、いいのだろうか。これで。

「……よくはない、よね」

念のため、貼り紙をもう一枚剝がして、やはり丸めた。

これからルーシー・アッシュカバードはどうするつもりなのか。

「帰る」と声に出して言ってみた。帰る。素敵な響ひびきだ。心配されているかもしれない。そんなはず、ない──わけがない。ルーシーが知っているＺＯＯの人たちなら、ルーシーがあんな形で家出を──そう、家出をしたことを知れば、怒おこったり、呆あきれたりも当然するだろうけれど、必ず心配するはずだ。

　怖こわいよ。誰だれかを信じるのは。でも、ぼくは信じてるんだ。自分の気持ちに嘘うそはつけない。

　ルーシーは第十二区を目指して歩きはじめた。

　間もなく呆あつ気けにとられる羽目になった。そこらじゅうで例の貼り紙を見かけたからだ。きっとあの二人だけではない。大勢がこの貼り紙を貼って歩いているのだろう。それらしき者の姿も何度か目にした。第十三区を出て第十二区に入ると、さすがに貼り紙を見かけることはなくなったが、時間の問題なのではないか。彼らはエルデン中を悪徳再生リヴアイスの貼り紙で埋うめつくそうとしているのではないだろうか。なんとなくそんな気がした。

　ルーシーは第十二区の街角にともる常夜灯の下で立ち止まり、丸めて抱かかえていた貼り紙を一枚、広げてみた。父の顔や裸はだかの胸や腹はできるだけ見ないようにして、赤い字を読んだ。

　世界を変える剝むきだしの魂たましい　掃はき溜だめを浄じよう化かする穢けがれの炎ほのお　燃え　燃えて

　君を犯おかす罠わな　濡ぬれる君　一個の生せい殖しよく体　交合しろ　破は壊かいの響き　貫つらぬかれる　──悪徳再生Ｒｅｖｉｃｅ

「……わ、わかるような、わからないような……なんか、かっこいいけど……」

「何がかっこいいって？」

　その声は雷かみなりのようにルーシーを打ち、破壊の響きをともなって全身を貫いた。

　ルーシーは振ふり向いた。ただちに全速力で走りだしたかった。不可能だ。膝ひざが笑っている。笑いすぎだ。おかしいことなんて、何もないのに。いや、違ちがうから、それは。膝が笑うって、そういうことじゃないから。

「あう……」ルーシーは目を見開いてうつむいた。「えと……そ

の……ですから……なんていうか、つまり……」

　そんな意味のないことを言っている間にも、聖女は──いや、女の人じゃないんだった、でも、やっぱりとてもそうは思えなくて、他ほかに適当な表現も思いつかないから、この際、聖女でいい、聖女で──聖女は近づいてくる。

　もうけっこう近くにいる。すぐそばだ。足音でわかる。気配でわかる。匂においがする。これがもう、花とも香こう水すいとも甘いお菓か子しとも果くだ物ものとも違う、ちょっと嗅かいだだけで胸がーいつ杯ぱいになってくらくらしてしまう、素晴らしい香かおりなのだ。

「きゅーにどこに行くとも言わないで、家を飛びだして──それで？　何を見てたの？」

「……こ、これは──」ルーシーは貼り紙を持っている右手を後ろに回した。「な、な、何でも……何でもないんです、これは、何でも……」

「見せて」

「はうあっ……！」

　聖女は少し身を屈かがめて、まるでルーシーの胸に飛びこんでくるような恰かつ好こうで、でも、もちろん、その頭はルーシーの身体からだにふれてはいないのだけれど、もう少しで、あわや、というところで、聖女の芳ほう香こうがふわあっ──と広がって、意識が飛んでしまいそうになって、その体勢から伸のばされた聖女の手がルーシーの右みぎ腕うでをつかんだ瞬しゆん間かん、一秒未満、たぶん〇・五秒くらいだが、気絶してしまった。目が覚めたときには、聖女はルーシーから適切な距きよ離りをとって、例の紙を眺ながめていた。とてつもなく口くち惜おしかったけれど、聖女マリアローズの表情がやけに硬かたくて、残念がっている場合じゃないことを悟さとらされた。

「あ、あの……それは、第十三区で、例の、リヴァイスの服を着た男の人たちが、建物に貼はりつけていたもので。見てのとおり、その……」ルーシーは唇くちびるを舐めてうなずき、思いきって言った。「ぼ、ぼくの、お父さんが！　しゃ、写真、でしたっけ。う、写ってて……今度こそ、間違いないと思います！　その人、ぼくの

お父さんです！」

　マリアローズはルーシーを一いち瞥べつして、また紙に目を落とした。「──そう。まあ、そのへんはね。だいたいわかってたことではあるから、いいんだけど」

「あの！」

「ん？」マリアローズは少ぉしだけ首を傾かしげて、またルーシーを見た。疲つかれているのだろうか。いつもよりほっそりしているような。髪かみがちょっとだけほつれている。

　い、色っぽい──と思ってしまった！　頭がおかしくなりそうだけど、ダメだ……！

　ルーシーは歯を食いしばり、自分自身に気合いを入れた。

　マリアさんはそんな目で見られたくないんだ！　ぼくはマリアさんのことがやっぱり大好きだけど、だからこそ、いやがることをしちゃいけないんだ！　それが男っていうものだ！

「あの！　度胸がなくて、今まではっきり訊きけなかったんですけど！　本当に、いいんでしょうか⁉　ぼくがＺＯＯにいて！　ぼくのお父さんと、いろいろあったんですよね、因いん縁ねん浅から
ぬっていうか！　迷めい惑わくじゃないですか⁉」

「それは」橙だいだい色いろの瞳ひとみがまっすぐルーシーを見すえた。「きみ次し第だいだよ。きみはどう？　僕らと仲間でいたい？」

　ルーシーは即そく座ざにうなずいた。「はい！」

「もう曖あい昧まいにしといてもしょうがないから断言するけど、きみのお父さんは僕らの敵なんだ。きっと僕らはきみのお父さんと戦うことになる」マリアローズは、おそらくわざとだろう、そこで一呼吸置いてから、はっきりと言った。「──殺すために」

　ルーシーは唾つばをのみこもうとしたのだけれど、喉のど仏ぼとけが動いただけだった。

「それに」マリアローズは少しだけ目を細めた。「相手は異界生物フリークスじゃない。人間だから、今までみたいにはいかないよ」

「人間……」我知らず視線が地面に落ちた。

「それでもきみが戦場に立つつもりなら、僕らはできるかぎりサポートする。やっぱりできないっていうなら、やめたほうがいい。べつにそれならそれでいいんだよ。ＺＯＯうちはそのへん、けっこう自由だしね。エルデンにいない人もいたりするし」



「あ……髭ひげさん、ですか？」

「や、他にもね。そっか。まだ話してないんだっけ。ま、いいや、それは。そのうち会うこともあるだろうし。口ではちょっと説明しづらい人たちだったりもするし」

「説明しづらい……」ルーシーは首をひねりながらうなずいた。考えてみれば、ルーシーが知っているメンバーにしても、名状しがたい人ばかりだ。ＺＯＯはそういうクランなのだろう。

　そんな中に、ぼくみたいに何の取とり柄えもない、平へい凡ぼんな田舎いなか者ものがいるなんておかしい。

　平凡とは言えないか。父親が大悪党なのだ。でも、本当にそうなのか。まだ信じられない。これは現実なのか。何か悪い夢でも見ているんじゃないのか。違う。嘘うそだ。そんなふうにあやしんでいるわけじゃない。これは現実だ。わかっているけれど、何か理由があるんじゃないか。よっぽどの理由が。ないわけがない。せめて、それを知りたい。

　お父さん。

　どうしてお父さんは稀き代たいの大悪党なの……？

「ぼくは……」ルーシーは上うわ目め遣づかいでマリアローズを見た。「お父さんに会いたいです。ただ会いたいんじゃなくて──確かめたいんです。ぼくが知っているお父さんは、お父さんの本当の姿じゃないのかもしれない。だとしたら、そうなんだってことを、できればお父さんの口から聞きたいです」

「そんなことしてる余よ裕ゆうはないかもしれないよ」

「そう……ですよね。でも、そうなったらそうなったで、仕方ないと思います」

「きみの目の前で、僕らはきみのお父さんを問答無用で殺すかもしれない。逆に、僕らのうちの誰だれかが、きみのお父さんに殺されるかもしれない」

「ぼくの、知らないところで」ルーシーは一度口を閉じて、鼻で深呼吸をした。「──ぼくの知らないうちに何かが起こって、終わってしまうよりも……ぼくはやっぱり、それを……この目でちゃんと、

見なきゃいけないし……見届けたい、です」

「命令には必ず従ってもらわないといけない。たとえ、それがどんな命令でも」

「わがままは、言いません！」

　マリアローズは少しだけ顔をほころばせた。「信じるよ」

　ルーシーもがんばって微笑ほほえんでみた。「ありがとうございます！」

　でも、本当に信じられない。この人が女の子じゃないなんて。だけど、ぜんぜんいい。女の子じゃなくてもかまわない。まったく関係ない。一いつ緒しよにいればいるほど、そのあたりはどんどんどうでもよくなってくる。ぼくはそうだけど、マリアさんは違ちがうんだ。きっと、どうでもいいとは思っていない。

　だから、なのかな。

　あの恐おそろしいほどにきれいな昼飯時ランチタイムの頭領マスターと、ときどき明らかにいい雰ふん囲い気きだったりもするのに、それでいて、マリアさんはあの人を遠ざけようとしている。そんなふうに見えるんだ。

　でも、いい雰囲気、か──そんなことない、と思いたいけれど。

　胸が痛いなぁ。

　マリアローズが微かすかに眉まゆをひそめた。「どうかした？」

　ルーシーは首を横に振ふった。「──いえ。なんでもないです」

「そ」マリアローズは夜空を見上げて、小さく息をついた。
「じゃ、帰ろっか。みんなそのへんできみを捜さがしてるはずだけど、適当にトマトクンの家に戻もどることにしてるからさ」

「……あ。やっぱり、捜されちゃってるんですね……」

「そりゃあそうだよ」マリアローズは肩かたをすくめた。「何しろ、お人ひと好よしばっかりなんだから。あんまり見くびらないほうがいいよ」

　わかってますよ。甘えっぱなしだし。

　居い心ごこ地ちがよくて、よすぎて、ぼくは悲しいほどに嬉うれしくなってしまう。

　ルーシーは言いかけた言葉をのみこんでうなずいた。「はい」

「でも……」マリアローズは紙をちらりと見て、わずかに顔をしかめた。「これはちょっと予想外だったかな。考えてみれば、ありうることではあるんだけど、まいったな……」

「その貼はり紙が、何か……？」

「うん、まあね」マリアローズは貼り紙を手早く丸めた。「まあ、いいよ。このことは、あとで。それより……そうだ、きみに言っとかなきゃいけないことがあるんだった」

「え？」ルーシーは胸に手をあてた。違う、違う、違う、何を期待してるんだ、そんなわけない、そういうことじゃない、あたりまえだ。そんなの、当然のことなのに、どぎまぎしてしまう自分がせつない。「……な、何ですか？　言っておかないといけないことって」

「言いにくいんだけどね……」マリアローズは少し顔をうつむけて、丸めた貼り紙で頭の横側を、ぽん、ぽん、と叩たたいた。

　ルーシーは思わず、フッ──とニヒルに笑ってしまいそうになった。

　かわいいじゃないですか。かわいすぎるじゃないですか。そんなかわいい仕し種ぐさをぼくに見せつけて、いったい何のつもりなんですか。ないんですよね。どんなつもりも。そうなんですよね。無自覚なんですよね。それが一番タチが悪いんですけどね。でも、無自覚だからこそ、そういうかわいすぎる仕種がナチュラルにボーンしちゃうわけで、それをぼくなんかが拝ませてもらえるチャンスもあったりするんですよね。そこは感謝ですよね。素す直なおに感謝です。

　マリアローズは唇くちびるの端はしを軽く嚙かんだ。「ＺＯＯのことなんだけど」

「え」ルーシーはまばたきをした。「ＺＯＯの……？」

「うん」マリアローズは斜ななめ下に視線を投げつけて、ぽつりと言った。「なくなっちゃった」

「なくなっ──」ルーシーは首を傾かしげた。「……なくなっ……た……？」

「手違いがあって、さ……」マリアローズはルーシーと目をあわせようとしない。「なくなっちゃった」

「えええ……!?」

Omenage 899 6th revolution 13th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.10

最後かもしれないから

第一回秩ちつ序じよの番人総長争そう奪だつ変則トーナメントの翌日──朝十時から、第二王立銀行内の動物園事務所改め大だい円えん卓たくの間で、ある重要な会議が行われることになっていた。

会議の出席者は、秩序の番人の幹部と元ＺＯＯの構成員だ。

大円卓は何しろ円いテーブルなので、上座だの下座だのといったものはない。ＺＯＯではそれで何の問題もなかった。みんなその日の気分で適当に席を決めていたものだが、これからはそういうわけにもゆかないだろう。ということで、マリアローズがぱぱっと席順を決めた。

入口から一番遠い席にトマトクン、その左にマリアローズ、カタリ、ユリカ、サフィニア、ルーシー、ピンパーネル。トマトクンの右には羅ラ叉サ、琺瑠フオール、アサイラムから駆かけつけてきたマシュー・シュナイデル以下、シュナイデルに代わってアサイラム守備隊の指揮をとっている十七番警けい邏ら隊たい隊長スチュアート・モルグレー以外の隊長、隊長補が、隊の番号に従ってずらずらと座る。トマトクンがそう命じると、逆らう者は誰もいなかった。あたりまえだ。

状じよう況きようが状況なので、二代目の折の襲しゆう名めい式みたいなことは執とり行われていないし、その予定もないけれど、トマトクンは今や秩序の番人三代目総長なのだ。

あと三分ほどで十時になる。いや、あと二分か。

三代目総長は目をつぶって腕うで組ぐみをしている。

大円卓の間は吐はき気がしてくるほど静かだ。

マリアローズはいかめしい──と自分では思っている表情を崩くずさずに、前を向いたまま、隣となりの三代目総長を肘ひじで小こ突づいた。三代目総長は「むう……」と低く唸うなって半分くらいまで目を開け、マリアローズのほうに顔を向けた。「何だ。もう時間か？」

マリアローズは三代目総長に身体からだを寄せて声をひそめた。「……まさか、寝ねてたの？」

「いや」三代目総長は咳せき払ばらいをした。「寝てないぞ」

「ちょっとの時間も無む駄だにしないっていう心がけは立派だと思うんだけどね。居い眠ねむりだけじゃなくて、もう少し有意義な時間の使い方をしてくれると、こっちとしては助かるんだけど」

「気をつけよう」

「……もういいよ。みんなそろってるし、始めちゃって」

「うむ──」三代目総長はうなずいてから、あくびを嚙み殺した。マリアローズは小突くのではなくて、三代目総長の脇わき腹ばらに肘打ちを見み舞まった。三代目総長は小こ揺ゆるぎもしなかった。そうだろうけどね。頑がん丈じような人だし。

「じゃあ──」三代目総長は一同を見まわした。「やるか」

　琺瑠が挙手した。「総長」

「何だ」

　琺瑠は立ちあがった。「その前に、一つお尋たずねしておきたいことがあります」

「言ってみろ」

「彼のことです」琺瑠はルーシー・アッシュカバードに視線を向けた。「単刀直入に申しあげますが、彼がＳＩＸの関係者であるという噂うわさがあります。真しん偽ぎをお伺うかがいしたく存じます」

「ああ、そのことか」三代目総長は片方の眉まゆをつりあげて軽く肩をすくめた。「そいつは噂じゃない。関係者というか、血けつ縁えん者だな。ルーシーはＳＩＸの倅せがれだ」

　大円卓の間が騒そう然ぜんとなった。マリアローズはルーシーを見た。ルーシーはうつむいているので、表情はよくわからないけれど、さぞかし居い心ごこ地ちの悪い思いを味わっていることだろう。それどころではないか。でも、我が慢まんしてもらわないといけない。きっと大だい丈じよう夫ぶだ。ああ見えて、あの子は芯しんが強い。わりと簡単にへし折れてしまうけれど、あっさり再生する。脆もろいのに、同時に強くもある、というべきだろうか。

　羅叉が大円卓を拳こぶしで叩いた。その途と端たん、大円卓の間は静まりかえったが、死神の視線は抜ぬき身みの刀のごとくルーシーを貫つらぬいている。「あの男の血を引く者を我らに信じろとの仰おおせか」

「そうだ」三代目総長は事もなげに首しゆ肯こうした。「ルーシーは父親の素す性じようを知らなかった。母親が死んで、父親を捜さがしにファー・セルジナの片かた田舎いなかからこのエルデンまで旅してきて、縁えんあって俺の仲間になった。そうしたら、父親がやつだって事実を突きつけられたわけだ」

「ぼくは」ルーシーは顔を上げて、一度、歯を食いしばった。「……ぼくは、父に訊ききたいんです。なんで、ひどいことを……悪いことをするのか。ぼくにとっての父は悪い人じゃなかったけど、ＳＩＸという人のやっていることは……よくない。ＳＩＸは悪い人です」

「貴様は」羅叉は眼まな差ざしだけでルーシーを斬きり殺そうとしているかのようだ。「父に刃やいばを向けられるのか」

「わかりません」羅叉から目をそらさないだけでも大変だろう、声は震ふるえているけれど、ルーシーはよくがんばっている。「でも、父が悪い人なら、罰ばつせられるべきです」

「俺はルーシーを信じる」三代目総長はどこまでも悠ゆう然ぜんとしている。「仲間だからな。お前たちもルーシーを信じてやってくれ。責任は俺が持つ。この話はここまでだ。いいな」

　大円卓の間は静せい寂じやくに押し包まれている。誰だれも声を発しない。身じろぎもしない。

　三代目総長は軽く笑った。「どうした。返事がないな。俺は結論を出したんだぞ。お前たちにできることは二つだ。俺に従うか。俺に逆らうか。黙だまってないで、態度を示せ」

　琺瑠が大円卓に両手をついて身を乗りだし、三代目総長をじっと見すえた。「総長のご判断に従います」

「私も総長のご判断に従い申す」謹きん厳げん実直を絵に描かいたような風ふう貌ぼうのマシュー・シュナイデルが力強くうなずいてみせた。

「異論はない」と羅叉が短く言うと、隊長、隊長補たちが次々と「応」「応」「応」「応」とつづいた。

　琺瑠が椅い子すに座ると、三代目総長はルーシーに目をやった。三代目総長が唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせると、ルーシーは顔を真っ赤に染め、くしゃくしゃにして下を向いた。

　マリアローズはそっと息をついた。まず一つ片が付いた──とは思わない。ルーシーはこれからも針のムシロに座りつづけないといけないだろう。でも、トマトクンや他ほかのみんなと前もって話しあい、これが最善だという結論に達した。じつを言うと、琺瑠の発言も打ちあわせどおりだ。これで事情は明らかになったわけだから、あとはルーシーに耐たえてもらって、マリアローズたちが守り、支えてやればいい。ずいぶん状況がシンプルになった。それだけでもよしとするべきだろう。

　ホントにね。とんでもない要素が一つ加わりはしたものの、それでも決して複雑きわまりない状況に置かれてるってわけじゃないんだよね。

　極論すれば、やるか、やらないか。問題はそれだけなんだよ。でも、何かを決めるってことは、何かを捨てるってことでもあって──一挙両得の選せん択たく肢しがあればいいけど、必ずしもそうじゃないから、単純な二者択一だとしても、たやすく選べるわけじゃない。

「さて──」三代目総長がマリアローズに目配せをした。マリアローズは脇に置いてあった貼はり紙を広げて立ちあがった。

「これを見てくれ、なんて、言うまでもないだろうな」三代目総長は大だい円えん卓たくの上に大きな右手を置いた。「もうみんな知ってるだろう。昨夜、エルデン中に張りだされたこの貼り紙の写真には、ＳＩＸとあいつが写っている」



　マリアローズはちらりと三代目総長の様子をうかがった。平然としているように見えるけれど、きっとそんなことはないはずだ。でも、リーダーたる者、何があってもうろたえてはいけない。いちいち苛いら々いらしたり、キレまくったりしてもいけない。できれば自信満々、威い風ふう堂どう々どうといったかんじで、どん、と構えていてくれないと困る。この人の言うとおりにしていれば大丈夫

なんだ。そう思わせることが重要だ。

　三代目総長はさらりと言った。「ヨハンだ。あいつは死んでなかった。ＳＩＸに囚とらわれて、生きている。そういうことだ」

「その写真が撮さつ影えいされた場所は……」琺瑠の声こわ音ねには精せい彩さいがなかった。「銀の砦とりで内部、おそらくは総長室だと思われます。撮影にあたったアニー・ポリステルという人物に確かく認にんをとりましたので、まず間ま違ちがいないでしょう」

「これで……」シュナイデルは呻うめくような声を出した。「さらに難しくなりましたな。敵は確実にヨハン副長の身み柄がらを人ひと質じちとして利用するでしょうから」

「いや」三代目総長は、やはりあっさりと言った。「人質には使えん」

「それはまた」シュナイデルは鼻はな白じろんだように眉を上げた。「なにゆえでしょうか」

　三代目総長は片方の眉をつりあげた。「ヨハンに人質としての価値はないからだ」

　大円卓の間は沈ちん黙もくに支配されている。大半の番人は三代目総長の真意を測りかね、困こん惑わく気味に黙りこんでいるようだが、少なくとも琺瑠だけは違った。目を瞠みはり、顔を青ざめさせている。あの表情。察しのいい琺瑠副長は悟さとったのだ。三代目総長が何を言わんとしているのか。

「俺たちは」三代目総長の口調はなお淡たん々たんとしている。「ヨハンの奪だつ回かい、ないし救出を目的とした行動はとらん」

「な、何だとッ……!?」羅叉が大円卓を叩たたいて立ちあがりかけた。「それはいったいどういうことなのだ！　ヨハンを見捨てるというのか！」

　三代目総長はゆっくりとうなずいた。「そうだ」

「莫ば迦かな……！」と叫さけんだ羅叉だけではない。多くの番人が語気を荒あらげて口々に何か言いながら、三代目総長を睨にらみつけている。予想していた反応ではあるけれど、正直、これだけの

数の番人が、しかも実力者たちが殺気立っていると、さすがにちょっと怖こわい。でも、三代目総長はどこ吹ふく風といった態度だ。今にかぎったことじゃない。ちらっと思った。トマトがおっかながる相手って、誰かいたりするのかな。

「ひどい様ざまだな」三代目総長は大きな溜ため息いきをついてみせた。「これが秩ちつ序じよの番人か。三代目総長の俺としては、初代のデニスに顔向けができんぞ」

　気け圧おされたのか、あるいは屈くつ辱じよくのためか。たぶん理由はそれぞれだろう。番人たちが口をつぐんだ。そうしてできた空白に向けて、三代目総長はずばっと斬りこんだ。「──もう一度、考えろ。秩序の番人がなすべきことは何だ。仲間を救いだすことか。違う。義を貫つらぬくことだろうが」

「しかし……！」と大声を出したのは十番遊ゆう撃げき隊たい隊長の太臺子タイダイシーだ。獲え物ものに飛びかかろうとしているのだが、首輪を嵌はめられているせいで、なんとか鎖くさりで繋つなぎとめられている。そんな体勢だ。「志を一にする仲間の一人すら！　しかも！　副長の要職にある方をお助けすることもできずして、何の義か……！」

「その副長の要職にあった男が──」三代目総長はわずかに目をほそめた。あった。トマトクンはわざと過去形で言ったのだ。「身をもってお前たちに示してきたんじゃないのか。義の道を進む者がどうあるべきか。俺はあいつをずっと見ていてやったわけじゃないが、餓が鬼きのころを知ってるんでな。だいたい想像はつく。義の道を突つき進もうとしているお前たちを、自分が邪じや魔まする。そんなことをあいつが望むとでも思うのか」

　ぐうの音も出ない、とはこのことだ。

　太臺子は飼い主に叱しかられた犬みたいにしゅんとなった。いきり立っていた他の番人たちも似たり寄ったりの有様だ。

「わかりきったことを言わせるな」三代目総長は静かに、だが、凄すごみを感じさせる重たい声を出した。「二度と、だ。いいな」

　椅子に座って貼り紙を丸めながら、不ふ謹きん慎しんかもしれないけれど、うまい、とマリアローズは思った。今の言い方は絶ぜつ妙みようだ。

　トマトクンは表情を変えていない。動じている様子はこれっぽっちもうかがわせない。冷れい徹てつな印象さえ受ける。それでいて、決して平気なわけじゃない。心を鬼おににし、私情を押し殺して、この決断を下したのだ。おそらく、番人たちはそんなふうに受けとっただろう。そして、それはきっと事実だ。だからこそ、余計に効果的なのだ。

「己おのれを利するために、他を害する、悪。これを斬きるが、義」三代目総長はざっと一同を見まわした。「俺たちの大目標はＳＩＸを斃たおすことだ。そのために、やつの目もく論ろ見みを挫くじく。銀の砦を攻せめるぞ。そこにやつがいようがいまいが関係ない。こいつは害虫駆く除じょだ。総員が全力を尽つくして、まずは巣を叩く。刻限は明後日だ。今日、明日で計画をまとめて、明日の二十一時、この場で俺が全員に決定事じ項こうを伝える。琺瑠副長」

「はい」琺瑠はまだ顔色が少しすぐれないけれど、それ以外は平素と変わらない。

「お前が中心になって、必要な者を計画の立案にあたらせろ。計画のための調査、確認もお前の独断で人を使ってかまわん」

「承知しました」

「羅叉」

「応」羅叉はつめたい死神の面相を取り戻もどしている。

「お前は琺瑠副長と連れん絡らくをとりあいつつ、総長代理として実戦部隊の編制と統制にあたれ」

「承知」

「シュナイデル副長はこれを補ほ佐さ。アサイラム守備隊は引きつづきモルグレー隊長に任せろ」

「了りよう解かい致いたしました」

「よし──」三代目総長が立ちあがると、番人たちは一糸乱れずこれに倣ならい、マリアローズをふくめた元ＺＯＯの面々は彼らにつづく恰かつ好こうになった。こういうところは軍隊に近いところがある番人たちには敵かなわない。

「あ」三代目総長は一いつ瞬しゅん、トマトクンの顔をのぞかせたが、すぐに表情を引きしめた。「そうだ。一つ言い忘れてたことがある。副長代理を一人置いて、珐瑠副長の補佐をしてもらう」

「え」マリアローズは首を傾かしげた。「誰だれ？」

　背高のっぽのトマトクンは、隣となりのマリアローズを見下ろした。「お前だ」

「へえ……」マリアローズはあたりに視線を巡めぐらせた。どういうわけか、やたらといろんな者と目があう。というか、一人の例外もない。皆みな、マリアローズを見ている。「……あれ？」

　トマトクンは何と言ったのだったか。

　もしかして、お前だ、と言わなかったか。

　マリアローズはおそるおそるトマトクンを見上げた。「……僕？」

　トマトクンはまばたきをしてうなずいた。「ああ」

「……副長代理？」

「そうだ」

「秩序の番人の……？」

「うむ」

「そんな──」

　何いきなりバカなこと言っちゃってるわけこの人ってばホントわっけわかんないんだけどもうよしてよふざけてる場合じゃないんだから理解してる？　そこのところ？　──と言いたいのは山々だけれど、ぐっとこらえた。感情的になってはいけない。理性だ。ここは理性的な判断を下すべきだろう。ＺＯＯの中でなら、好き勝手なことを言っても、どんな振ふる舞まいをしても、ある程度は許される。みんな認めて、許してくれる。でも、トマトクンはもう、とりあえず今のところは、ＺＯＯの園長マスターじゃない。秩ちつ序じょの番人の総長なのだ。あくまで一時的な措そ置ちだと信じているけれど、ＺＯＯは秩序の番人に吸収された。マリアローズ以下ＺＯ

Oの面々も、逆立ちしたってそんなふうには見えないに違ちがいないけれど、形式的には一応、番人なのだ。当然、一人の番人として、トマトクンに接しないといけない。そうしないと、トマトクンの面子メンツにかかわる。組織が乱れてしまう。だとしたら、マリアローズは今、総長から直々に副長代理を務めよとの命令を承うけたまわったのであるから、これに逆らうことなどできようはずもない。

マリアローズはうつむいてしまわないように努力したが、眼球が勝手に下方向へ動いた。結果、顔は上を向いているのに、下を見ているという奇きっ怪かいな状態になった。「……がんばらせていただきます」

トマトクンはマリアローズの肩かたにばかでかい手を置いた。
「頼たのんだぞ」

頼まないでよ。

とはいえ、引き受けてしまったからには、やるべきことをやらないわけにはゆかない。それに、そのやるべきことは目の前に山積している。そうした事々を片かたっ端ぱしから片づけてゆくことに集中していれば、余計なことを考えずにすむので、気分的にはかえって楽だ。

会議が終わると、珐瑠副長を本部長に据すえた作戦本部はさっそく動きだした。作戦本部室は大だい円えん卓たくの間だ。すべての情報はここに集約され、仕分けされて、吟ぎん味みされ、判断材料となる。そのあたりはアーニャ・クルチバの二十七番無名隊が担当して、実際に情報収集や各種手配のために動くのは、ハインツ・クルエルフォートの二十五番無名隊とベレニアス・〝褐色のブラウン〟・ウォンドードの二十六番無名隊、さらにレーメン・ステヅロバの二十八番無名隊だ。

大円卓の上には銀の砦とりでの見取り図が広げられている。

「──結局、壁かべを越こえたり門を破る以外の方法で侵しん入にゅうできる経路は、第四支し塔とうの地下納骨堂にある隠かくし通路

だけってことでいいのかな」

「わたしが知るかぎりにおいては、そうね」琺瑠は第四支塔に人差し指の先を置いた。「でも、わたしたちが撤てつ退たいするときに使ったから、封ふう鎖さされているものと見るべきでしょう」

「今、確かく認にんに行ってもらってるんだよね？」

「ええ。わたしの直属隊をつけて、二十五番に」

「僕だったら、封鎖するにしても、いつでも破れるようにしておくかな。もしくは、封鎖しないか」

「攻められることを考えて、攻め手の戦力を分散させるために？」

「こっちは銀の砦を知ってるわけだからね。そこに出入口があるってわかってたら、無視するわけにはいかないでしょ」

「でも、相手もそちらに戦力を割さかないといけなくなるわ」

「隠し通路だから狭せまいでしょ？　守るだけなら楽だよ。だけど、下水道に通じてるわけだから、逃とう走そうに使われると厄やつ介かいだしね。やっぱり無視はできない」

「二手に分かれるとして、正面突とつ破ぱか、裏口から押し入るか。どちらを本命にするか、ね」

「うーん……」マリアローズは腕うで組ぐみをして、見取り図とにらめっこをした。「……あんまりまともに考えないほうがいいのかな。真ま面じ目めにやろうとしすぎて制限かけちゃうと、よくないのかも。発想は自由にしないと。反発はあるだろうけど、そんなのいちいち気にしてたってね。誰かに気に入ってもらいたくてやってるわけじゃないんだし。あくまで目的を達成することが最優先なんだから。てことは……」

　視線を感じて顔を上げると、琺瑠に凝ぎよう視しされていた。マリアローズは思わず目をそらしてしまった。「……え？　な、何……？」

「な、何でもないわ」

「……そ、それならいいんだけど。なんか、すっごい見られてたか

ら」

「ええ。ただ──」

「た、ただ？　何？」

　珐瑠はやけに小さな声で言った。「……その髪かみ型がた、とても似合っていると思って」

　そうだった。この人、見かけによらず、かわいいもの好きなんだった。でも、てことは──何？　僕がかわいいってこと？　それって──どうなの？　や、かわいいものは、僕だってべつに嫌きらいじゃないけどね？　かわいくないものよりは、かわいいもののほうがずっといいし。だけど、僕がかわいいかっていうと、それはちょっと──かわいいとか思われても、ぜんぜん嬉うれしくないし。かわいくないよりはいいかもしれないけど。

「あの……」マリアローズはちらりと珐瑠を見た。ここは話題を変えるべきだ。「珐瑠さんは、平気なのかな？」

「何が？」

「ほら、僕なんかがいきなりこんなふうに副長代理とかになってさ。こういう作戦立案みたいな、大事な作業に携たずさわったりとか」

「ＺＯＯは現在、秩序の番人に合流している形になっているけど──」珐瑠は切れ長の目をほんの少し細めて口くち許もとを微かすかにゆるめ、微び笑しようと呼ぶにはやや鋭するどすぎる、怜れい悧りさをうかがわせる表情を浮うかべた。「わたしたちがあなたがたを戦力として十分に使いこなせるとは思えない。いずれにしても、ＺＯＯの側から誰だれか中ちゆう枢すうに参加してもらわなければならないだろうと、わたし個人としては考えていたわ。あなたは適任よ」

「そう言ってもらえると、ね」マリアローズは小さく息をついた。「ほっとするかな」

　正直、安あん堵どと、こそばゆさと、プレッシャー。どれが一番強いかといえば、間違いなくプレッシャーだけれど、もっと厳しい状じよう況きようはこれまでいくらでもあった。いろいろ込こみ入った事情はあるものの、自分自身や友だち、心の底から仲間だと

思える人の命が危険にさらされているわけではないのだ。これくらい、なんてことはない。

　珐瑠のほうが、ずっとつらいはずなのだ。

　よく知らないけどさ。僕はそういうの、疎うといっていえば、疎いほうだったりするし。でも、なんとなくわかる。

　きっと珐瑠は、ヨハン・サンライズのことを憎にくからず思っているのではないか。だとしたら、平静を取り戻もどしているように見えても、その心中は決して穏おだやかではないだろう。ヨハンが死んだ。それだけでもたいそうな痛手だったろうに、生きていた。それなのに、救うことができない。見捨てることを前提に、ＳＩＸ一党を倒たおすための戦術を練らないといけないのだ。

　ヨハン・サンライズ。あの男なら、トマトクンが言っていたとおり、自分の命よりも秩ちつ序じよの番人の勝利を重んじるだろう。マリアローズでもそう思うくらいだ。おそらく珐瑠はもっとわかっている。たとえＳＩＸがヨハンの身み柄がらと交こう換かんで何か要求してきたとしても、絶対に応じてはいけない。ＳＩＸは、あるいはヨハンを盾たてにするかもしれないけれど、決して怯ひるんではダメだ。頭では理解していても、割り切れるものだろうか。

　僕にはきっと無理だ。

　もし救出できそうなシチュエーションがあったら──と、つい考えてしまう。

　珐瑠はどうなのか。

「……あ」という自分の声で目が覚めた。

　やたらと暑い。毛布にすっぽりくるまって眠ねむっていたのだから、当然だ。

　何か夢を見ていた。それとも、人の話し声や歩く音、さまざまな物音が絶えないので、そんな気がするだけだろうか。

ここは大だい円えん卓たくの間、作戦本部室の隅すみっこだ。眠ねむ気けはピークを過ぎていたけれど、集中力が持続しない状態だったので、仮か眠みんをとることにした。それが二時過ぎだったか。今は何時だろう。このだるさからすると、三時間までは眠っていない。二時間といったところか。

毛布の向こうは明るい。音も聞こえる。二に度ど寝ねするつもりはないのに、瞼まぶたを閉じてしまった。だるいし。身体からだが痛いし。床ゆかだし。でも、起きなきゃ。わかってるよ。そんなこと。ちゃんと起きるよ？　起きるってば。嘘うそじゃないから。マジで。

目を開けて一つ息をつき、毛布から顔を出した。

すぐそこだ。こっちに背中を向けて、床に腰こしを下ろしている。三人だ。マリアローズがここで毛布にくるまったときは、誰もいなかった。寝ついたあとで、ここに集まってきたのだろう。真ん中はカタリで、その左にルーシー、右にはピンパーネル。三人は横並びになって座っている。あたかもマリアローズの前にバリケードでも築いているかのようだ。

まさか、ね。そんなことして欲しいなんて、誰も頼たのんでないし。必要ないしさ。

マリアローズは起きあがった。「おはよ」

最初に振ふり向いたのはピンパーネルだった。「おはようございマス」

「おお」カタリはちょっと眠そうだ。「起きたんか。どや。ちょっとは休めたか」

「うん。まあね」

「お、おはようございます！」ルーシーはがばっと身体をこっちに向けた。「——だ、だけど、マリアさん、まだ二時間も寝てないですし、もう少し眠っていたほうが」

「や、大だい丈じよう夫ぶ——」と言ったそばからあくびが出そうになったけれど、なんとか嚙かみ殺すことに成功した。「意外とね。長い時間、休めばいいってものでもなかったりするし。頭はすっきりしてるような気もするから、十分だよ」

「そういうものですか……？」ルーシーはぐぐっと首を曲げてマリアローズの顔をのぞきこんできた。その目の下にうっすらと隈くまができている。

　マリアローズは少しだけ笑ってみせた。「きみこそ、休んだら？　疲つかれてるんでしょ。今がんばってもあんまり意味がないし、休めるときに休んどいたほうがいいよ」

「でも……」ルーシーはうつむいた。

　マリアローズは半ば身体に巻きついていた毛布を剝はぎとって、ルーシーに差しだした。「寝といたほうがいいって。寝られるなら、だけど」

　ルーシーは目を剝むいて毛布を見た。「え……い、いいんですか。それ、使っても」

「なんで？」マリアローズは首を傾かしげて、毛布に目を落とした。「……あ、そっか。僕が使ってたからね。ちょっと汗あせとか、かいちゃったかな。えっと、たしか、毛布は他ほかにも用意してあるはずだから……」

「い、いいです！」ルーシーはマリアローズの手から毛布をひったくった。「こ、こ、こ、これで！　大丈夫なので！　大丈夫というか、ぼくにはもったいないくらいですけど！」

「お前じぶん……」カタリは若じやつ干かん引いているようだ。

　ピンパーネルは、やれやれ、といったかんじの目つきでルーシーを見ている。

　マリアローズは後頭部を搔かいた。そっか。そうだった。この子は僕のことを。注意っていうか、配はい慮りよしないと━いけないんだろうけど、どうやって？　変に突つき放すのも、ね。仲間だし。今はとくに状じよう況きようが状況で、微び妙みような時期だったりもするし。

　マリアローズは溜ため息いきをついて、作戦本部室を見まわした。すぐにトマトクンが目に入った。ここからだと、後ろ姿だ。大円卓を囲んでいる椅い子すの一つに座って、腕うで組ぐみをしているのか。うつむき加減だ。「……もしかして、トマト、寝てる……？」

「だいぶ前からやで」カタリはカラカラと笑った。「まあ、琺瑠はんがバビバビバビッと捌さばいてくれたってるから、平気やろ」

「総長なのに……」マリアローズは立ちあがった。「起こしてくる」

「わしは一眠りさせてもらおかのう……」カタリは伸びをしながら「ふあぁーおう」と大きなあくびをした。

「ぼ、ぼくは……」ルーシーは毛布を胸に抱いだいて、腰を浮うかせたり座ったりしている。「ど、どうしようかな……」

「寝なさい」とマリアローズが言うと、ルーシーは「はい」と素す直なおにうなずいた。

　ピンパーネルはマリアローズについてきた。トマトクンに近づいて、その肩かたに手を置こうとしたら、資料を片手に地図を見ていた琺瑠に声をかけられた。「マリアローズ副長代理」

　マリアローズがまばたきをして小首を傾げると、琺瑠は左手の人差し指を唇くちびるにあててみせた。静かに。起こすな。たぶん、そういうことだろう。マリアローズは腕組みをして目をつぶり、寝息を立てているトマトクンをそのままにして、琺瑠のところへと向かった。

「あの……ごめんなさい」

　琺瑠は目許をゆるめた。「なぜあなたが謝るの？」

「まあ、なんとなく」

「謝ることはないと思うわ」

「そう、かな」

「不思議な方ね」琺瑠はちらりとトマトクンに目をやった。「そこにいるだけで、周りの者たちを安心させてしまう。先々代を思いだします。あの方にもそういうところがありました。どこか、父親のような」

「ずいぶんねぼすけなお父さんだけどね……」と言ってしまってから、しまった、と思った。三代目総長様の威い厳げんを損そこねる

ような発言は慎つつしむべきだ。

　琺瑠はくすりと笑った。「無理をすることはないんじゃないかしら」

「や……」マリアローズはピンパーネルと目を見あわせた。ピンパーネルはそっと微笑ほほえんでくれた。思わず癒いやされてしまった。「……でも、ね。そういうわけにもいかないよ。こうなった経いき緯さつが経緯だし」

「時が経たてば、誰だれもが彼以外に総長はいないと思うようになるわ」

「え？　そ、それは……」ちょっと困るんだけど――という本音を口に出すべきではないだろう。先のことはいい。今は目の前の事態に集中するべきだ。トマトクンが秩ちつ序じよの番人の総長になるなんていう、めちゃくちゃな手に打って出たのも、そのためなのだ。

　琺瑠は何も言わずに左手でマリアローズの背中を軽く叩たたいた。

　きっと、この人には見み透すかされてるんだろうなぁ。

　作戦本部室のドアが開いて、ユリカとサフィニアが入ってきた。二人とも、大きな盆ぼんを三つ、いや、四つずつ持っている。盆の上には大量のおにぎりとサンドイッチが並んでいて、それを見た無名隊の隊士たちが小さな歓かん声せいをあげた。

「皆みなしゃん、お疲れしゃま！　夜食よ、食べて！」ユリカは隊士たちの前に次々と盆を置いていった。サフィニアも四つのうち、三つの盆を隊士たちの近くに置いて、残りの一つだけはこっちまで持ってきた。「……あ、お、お休み中みたいです……ね」

「そのうち起きるんじゃない？」

「はイ」

「そう……ですね」サフィニアは盆をトマトクンの前に置いた。「よかったら、どう……ですか？　あの……琺瑠さん、も」

　琺瑠はサフィニアに笑いかけた。「あとでいただくわ」

　マリアローズはサフィニアの耳みみ許もとで囁ささやいた。「これ、作ったのサフィニア？」

「ユリカも、手伝ってくれた……けど？」

「わたしはお米をといだり、材じやい料りようを切ったりしただけでしゅ！」いつの間にかユリカが近くにいた。「味ちゅけはじぇんぶサしやフィニアにしてもらったから、心配しなくても大だい丈じよう夫ぶよ」

「や、心配なんて、ねえ？　べつにしてないよ？　ユリカだって、最近、けっこうマシなもの作ったりもするようになったし」

　ユリカはほっぺたを膨ふくらませた。「けっこうマシって、ひどい言い方だわ」

「嘘うそ、嘘。ごめん、ごめん。こないだの焼き飯はかなりおいしかったよ。あの東方風のやつ」

「あ、あれは……」ユリカは急にうつむいた。顔が赤い。

　サフィニアが手で口を覆おおった。「……まさか……」

「へ？　まさかって？」

「作り方を……誰かに、習ったんじゃ……」

「誰か？　あっ──」

「わ、わたしはただ！　作ちゆくり方を教えてもらっただけで……！」

「手トリ・足トリ……」

「もう！　ピンパーネル！　しょんなことないったら！」

「……あやしい……むきになって、否定するあたりが、余計に……」

「ちょっと、ユリカ、ダメだよ？　そういうのはさあ。何？　ほら、あるでしょ？　何だろ。だから、順序っていうか……」

　ユリカは愛らしい顔をマリアローズに向けてまばたきをした。

「順序を踏ふめばいいの？」

「え」マリアローズは手を左右に振ふった。「ち、違ちがう、違う。そういうことじゃなくて。ダメだよ。順序とか踏んだりしちゃったりとかしても。なに言っちゃってるわけ、ユリカ？」

「というか」ユリカは顎あごに人差し指をあてて、首を傾かしげた。「順序って……？」

「順序……」サフィニアはひどく難しい顔をしている。

　マリアローズは腕うでを組んで眉まゆをひそめた。「うーん……」

　ピンパーネルが小さな溜ため息いきをついた。「お子サマ……」

　マリアローズはユリカ、サフィニアと見つめあってから、三人で一いっ斉せいにピンパーネルを注視した。「お──」「……おと……」「大人……!?」

　ピンパーネルはたじろがなかった。考えてみれば、ピンパーネルの過去について知っていることは決して多くない。でも、大人の恋こいの一つや二つ、経験していてもおかしくない年ねん齢れいではあるだろう。言動の端はし々ばしにそういう匂においが漂ただようこともたまにあったりする。

　ぷっ、ではない、ふっ──と誰か小さく吹ふきだした。見れば、琺瑠だった。

「あ……」琺瑠はマリアローズと目があうと、顔を少し赤らめて下を向いた。「なんでもないわ。気にしないで。ただ……かわいいな、と思って」

　近くで仕事ぶりを見ているとわかる。琺瑠は秩序の番人の頭脳だ。ヨハン・サンライズが健在だったころは、二人が両輪となって秩序の番人を動かしていたのだろう。かなりのかわいいもの好きらしいのに、かわいいもの蒐しゆう集しゆうに明け暮れたり、かわいいものを愛めでて癒いやされたりする余よ裕ゆうは、きっとそんなにないはずだ。

　だからどうってことはないんだけどね。一応、今は仲間だけど、友だちになったわけじゃないし。ずっと年上だし。ヨハンのことも

あるから、そりゃあ気にはなるけどさ。僕なんかに心配されたくないだろうし。

「む……」というトマトクンの声が聞こえた。起きたのだろうか。必ずしもそうとは言いきれないようだ。トマトクンは目をつぶったまま鼻をひくつかせて、右手を伸のばした。その先には盆がある。トマトクンは盆の上からおにぎりをつかみとって、ひと齧かじりで半分くらい口に入れた。ゆっくりと咀そ嚼しやくして、のみこんだ。トマトクンはぼんやりと薄うす目めを開けた。「……うむ。この味は、サフィニアか」

「わっ……！」マリアローズは慌あわてててサフィニアに両手を差しのべた。「──しゃ、サしやフィニア……！」ユリカのほうがサフィニアの近くにいたので、少しだけ早かった。

　マリアローズとユリカの腕の中で、サフィニアは茹ゆでたタコみたいな状態になって目を回している。寝ねぼけているトマトクンが、おにぎりの味だけでサフィニアだとわかった。サフィニアにはあまりにも刺し激げきが強すぎたのだ。ちょっと、気をつけてよ。トマトクンにそう言いたいのは山々だけれど、言ったところでおそらく「むう？　何に気をつければいいんだ？」と訊きかれるのがオチだろう。そこまで単刀直入に尋たずねられると、こっちとしても答えにくい。

　マリアローズはまだ半分眠ねむっているらしいトマトクンに非難の視線を送りながら、ユリカと二人がかりでサフィニアを介かい抱ほうした。でも、頼たのむよ、ホント。サフィニアには今回、けっこうがんばってもらわないといけないんだからさ。

　まあ、サフィニアはそんなの関係なく、やることはきっちりやってくれるに決まってるけど。そういう問題でもないわけだし。

　いつ、何が起こってどうなるか、わからない。

　こんな街で暮らしているのだ。平へい穏おん無事に天てん寿じゆを全まつとうできる可能性は高くないだろう。そんなことはわかっているけれど、目の前に終わりが迫せまっているわけじゃないから、意外と考えないものだ。

　棚たな上あげにしているうちに、死んでしまったり、のっぴきならない状じよう況きように陥おちいったりして、二度と会えなく

なってしまう。明日あした、いや、次の瞬しゅん間かんそうなったとしても、ぜんぜんおかしくないんだ。

　難しいだろうけれど、サフィニアはできるだけ急いだほうがいいのかもしれない。できるうちに、どんな手段でもいいから、とにかく自分の思いを伝えたほうがいいのかもしれない。後こう悔かい先に立たず、というけれど、後悔できればまだいいほうだ。後悔さえできない場合だってありうる。

　あいつの顔が脳のう裏りをよぎった。

　なんか、でも、実感がわかないよ。

　ひょっとしたら、もう会えないかもしれないなんて、とても思えない。

　考えが甘いのかもしれないけど、どうしてかちっともそんな気がしないんだよ。

Omenage 899 6th revolution 14th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.II

夢幻

「ンンンン～ＥＥＥＥＥＥＥＥ風だＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……」

　旧銀の砦とりで、現極ごく悪あく城じようの主しゆ塔とう屋上階は、かつて〝義の灯台〟なんていうサッチャワンダフルワァールドボヘミアァァァアンで糞クソたれな名前で呼ばれ腐くさっていた。

　尻しりをぷりっぷりさせている裸ら形ぎようの男を鎖くさりでがんじがらめにして肩かたにぶらさげ、彼ともあろう者がわざわざそんな場所まで登ってきてやったのだ。

「いやはや……ここの眺ながめはちょっとしたものだねえ。どうだい、ヨハァァァァン。朝焼けに燃ゆるエルデンは美しいだろう？　この眺ちよう望ぼうを手に入れたってだけでも、この砦を落とした価値はあった。我わが輩はい、今このときばかりは本心からそう思っちまってるよ。まったく、美ってやつは……」彼は海より深い溜息をついた。「──美ってやつは厄やつ介かいなことこの上ないねえ。三千世界のありとあらゆる醜みにくいものを拝んできて、純じゆん粋すいな美なんざァーどこにもない、美なんてものァーまやかしにすぎないと固く信じてる我輩でも、そこにある美には猶なお、心こころ惹ひかれてやまない。とりわけ、決して手に入らぬ美がいい。手に入っちまったらその途と端たん、それがちんけな玩具おもちやにすぎないってことに気づかされて、興ざめするばかりだからねえ」

　彼は思いきり全開バリバリの伸びをした。「──ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！　真実を知ってる我輩でもねえ、本物みたいに感じる瞬間があるんだよ！　何もかもがねえ！　繰くり言ごとみたいなこの世界の総すべてが！　それは、でもねえ、それは……所しよ詮せん、夢にすぎないんだなＡＡＡＡＡＡ。現実★パーフェクト★無視スルーして見たい夢を見つづけるほど我輩、乙女おとめチックじゃないんだなＡＡＡＡＡＡＡＡＡ。覚めないファンタジーはないんだなＡＡＡＡＡＡＡＡＡ。最後のファンタジーなんてものもありゃしないんだなＡＡＡＡＡＡＡＡＡ。悲しいが、終わりにやってくるのはいつだって現実なんだなＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ。わかるかい、ヨハァァァァン！　勉強してるだけじゃいい大人になれない！　マスかいてるだけでもダメだッ！　子供たちはファックしなきゃならない！　ファック！　ファック！　ファック！　滑こつ稽けいな共同作業の果てに絶対的な隔かく絶ぜ

つと冷静な割り切れなさを感じて、子供たちは大人になり年老いて、希望をぜんぶ置き去りにして死んでゆく！　死んでゆく！　死んでゆく！　死が永遠に通じる唯ゆい一いつの道だったらよかったのにねえ！　でもレインドゥラス・ヴィシュクラトーかく語りき実際は魂たましいすら分解されて再利用される質量のない材料でしかない！　どこまで！　どこまで！　どこまで！　どこまで望みがないんだＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!?　ゼロか、ゼロ！　ゼロなのかい!?　それどころかムアアァァァイナスッ!?　そうさ、俺たちはいつも笑ってるしかないってことさ……！」

彼は彼が今一番気に入っている玩具であるところの鎖ぐるぐる尻ぷりぷり全ぜん裸ら男を高々と持ちあげた。「見ろよ、ヨハァァァァン。この虚むなしく陽気な街の姿を。そして笑っておくれ、ベイベー。楽しいねえ！　楽しいねえ！　楽しいねえ！　そう思いながら毎日を過ごすのが健康と長生きの秘ひ訣けつってやつだよ。決して理解を求めちゃいけない。キミノコトガワカルヨなんてほざく者は詐さ欺ぎ師しかただの阿あ呆ほうだ。何も信じるな。己おのれ以外。願わくは常に己が信じるに足る己でいたいものさ。この世界は己を映す鏡なんだよ。我輩は世界を変えるだろう。それが我輩自身なんだ。手始めにこの街だ。エルデェェェェェン。スウィートエンジェェェェル。サンランド無統治王国首都エルデンなんて銘めい打うたれてるわりには街角には楽しげにはしゃいじまってる女子供が溢あふれてるよ。これがキング・グッダー、貴様の望みなのかァァァァい？　計画どおりかい？　クソッタレだ！　クソッタレだ！　クソッタレだ！　我輩は貴様の髭ひげ面づらにたっぷりのクソを塗ぬりたくって食わせてやるよ。我輩の色に染めるんじゃあない。我輩がこの街になるんだ。この街が我輩になるんだ。我輩、理解なんか求めやしない。だいたい、苦労して理解しなけりゃならないほど価値あるものが、いったいどこにあるっていうんだ……？」

遠いな──と彼は思った。遠い。すべては遥はるか彼方かなたにある。飢うえと渇かわきでさえ、夢で見た夢の、そのまた夢のように感じられてならない。

彼は息むす子こか娘むすめを呼びつけようとして思いとどまった。彼らは今、彼の許もとにいない。彼の言いつけに従って仕事をしている。失念していたというのか。彼ともあろう者が。

「ジェェェェェェイ」

　呼ぶと、彼の忠実な犬は、すぐに梯はし子ごを登って姿を現した。犬は実用的なガルベル・ダのスーツを身にまとい、表情は無い。自分を一人の密みつ偵ていとして使ってほしい。生意気にもそんなふうに申し出てきやがったので、いいだろうと言ってやったら、ふてくされて出ていった。そうかと思ったらほどなく帰ってきて、何があったのか知らないが、やはり我が主マイ・ロードのお側にお仕えしたい、なんてことをまるで似合わない殊しゅ勝しような顔でぬかすものだから、勝手にするがいい、と許してやった。犬は跪ひざまずいた。「ここに」

「こいつをこのへんに」彼はこの屋上階が義の灯台と呼ばれるゆえんになっていた巨きよ大だいな半永久灯をぺしぺし叩たたいてみせた。「くくりつけておけ」

「仰おおせのとおりに」

「ヨハァァァァン」彼はお気に入りの玩具の顔に顔を近づけて首を傾かたむけた。「今からここがお前の居場所だ。ちょっと寂さびスィィィーかもしれないが、心配しなくていい。たまに様子を見にきてやるよ。そのときはたァァァァァァーんまりと可愛かわいがってやるからねえ」

　玩具には馬の轡くつわに似た猿さる轡ぐつわの一種であるビットギャグを嚙かませてある。顔面の筋肉は全体的に緩ゆるみまくっていて、口も轡の部分を嚙むというよりは軽く咥くわえているだけだ。唇くちびるの端はしからは唾だ液えきが垂れ流されている。それでいて、瞼まぶたは閉じていない。半分ほど開いた瞼からのぞいている瞳ひとみはビー玉みたいだ。これだけ近づいて、彼が舌先でその唇をなぶってやっても、彼の姿を映さない。それどころか、どこにも焦しよう点てんが合わない。まるでその機能が備わっていないかのようだ。

　それでも息はしている。定期的に医術士の診しん断だんを受けさせているので、すぐに死ぬことはなかろう。いや──そもそも、自死するつもりなどこの玩具にはないのだ。本当はビットギャグを嚙ませる必要もない。そんなことをしなくても、玩具は舌を切ったりしないだろう。

　玩具は生きるつもりでいる。

　こんな様ざまになっても、ただ生きつづけることで、彼に抵てい

抗こうしている。

　彼は目を細めた。「お前は美しい。今のお前が一番美しい。げに美ってやつは厄やつ介かいだよ。幾いく星せい霜そう生きてきて、すっかりすり減っちまった──それにしたって質量なき我わが輩はいの魂をときめかせる。数ある幻げん想そうの中で、美はもっとも凶きよう暴ぼうで手に負えないのかもしれないねえ」

　彼は玩具をジェイに渡わたして、ふたたびエルデンを見下ろした。

　北東に光り輝かがやくシャイニンググローリーパレスがある。キング・グッダーは今日もあの悪あく趣しゆ味みな王城の中心にある水晶様材クリスタリンで造られて漆しつ黒こくに輝く異界の真影石ネクロダイトや緋ひ色いろの液体金属ファガナグヌスなどで飾かざられた高さ十メーテルを超こえる竜りゆう形がたの玉座〝天から災カラミ厄時代をテイジ・告げる者エンジエル〟で飽あきもせずにクソをひねっているのだろう。〝魔人アモン〟ルヴィー・ブルームことネクス・アークは何やらごちゃごちゃやっていたらしいが、どこへ行っちまったのか。りりぃ。剣けん聖せいヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟なんて呼ばれていたあの娘は、相も変わらずアンダーグラウンドでアルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス〝緋ノ魂滅〟を振ふるっているに違ちがいない。ジュジはお得意の陰いん謀ぼうで大おお忙いそがしのはずだ。竜となったレインドゥラス・ヴィシュクラトーはＭ．Ｔ．Ｄ．の深奥ザ・デプス・聖殿オブ・デプスで何を思うか。

　そして、ディオロット。

　魔ま導どう王おうたちの時代、皆みな殺ごろしの騎き士し、破は壊かいの主と恐おそれられて、全魔導王に「卿サー」と呼ばれ、畏い敬けいと恐きよう怖ふの念をこめて〝大マいクなスるペ痛イみン〟の名を贈おくられた男は、どういうわけか大の野菜好きみたいな戯たわけた名前を名乗って、彼を邪じや魔ましようとしている。銀ぎん虱じらみどもを引き連れて、明日にも攻せめてくるだろう。

　誰だれも彼もだ。どいつもこいつも、彼を侮あなどり、クソミソに罵ののしって、山さん賊ぞくの親分程度にしか見なそうとしなかった。

彼は連中を妬ねたんだ。羨うらやんだ。憎にくんだ。恨うらんだ。見返してやろうと思った。いつか跪かせて、足の指の間を舐なめさせてやる。

今もその怨えん嗟さは彼の胸の奥に渦うず巻まいているし、消えることは決してないだろう、が──彼は乾かわいた笑い声を立てた。「もっと大切なことがあるのさ。我輩にはねえ」

Omenage 899 6th revolution 15th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.12

わたしは死なない

空に雲の絨じゆう毯たんが敷しきつめられている。厚い絨毯だ。あくまでも厚くて、おかげで暗い。もうすぐ十三時なのに、暮れ方みたいだ。

そういえば、泉セン里リ決戦のときも天気が悪かったっけ。験げんがいいのか、悪いのか。どっちでもいい──違う、そうじゃない。マリアローズは頭かぶりを振った、どっちでもないのだ。昨日は昨日、今日は今日、明日は明日だ。それぞれ状じよう況きようが違う。余計なことは考えるな。縁えん起ぎかつぎなんてしている場合じゃない。そんな暇ひまがあったら、今だ。今に集中しろ。

約五十メーテル前方にそびえ立っている銀の砦とりでは、原形をとどめていないわけでは決してないけれど、現状から元の姿を想像しようとすると、少し難しい。

まず、白に近い灰色だった高さ七メーテル以上の防ぼう壁へきが、今は真っ黒だ。ジェノシドを名乗るＳＩＸ一党は、大量の塗と料りようを費ついやして、人海戦術で半日とかけずに銀の砦を真っ黒けにしたらしい。

それから、防壁の上に、ずらずらずらっと無数の白い物体が並べられている。遠目からでは、それが何かわからない。双そう眼がん鏡きようで見ても微び妙みようだ。でも、偵てい察さつで判明している。それはどうやら、人間の頭ず蓋がい骨こつらしい。何しろものすごい数だ。ぜんぶが本物だとはちょっと思えないが、いかにも偽にせ物ものというかんじの模造品ではないという。

そして、あの旗──第一、第二、第三、第四、つまりはすべての支し塔とうの上で風にはためいている、大きな、黒地に稲いな妻ずまと竜たつ巻まきを組みあわせた紋もんが赤く、でかでかと描えがかれているあの旗は、もちろん秩ちつ序じよの番人とは何の関係もない。そもそも、秩序の番人は固有のしるしを持たないのだ。番人たちの装備に刻まれている、あるいは刺し繡しゆうされている紋もん章しようは、彼らの装備品を一いつ括かつ受注して製造している純血の司祭のものでしかない。秩序の番人の義は手にした剣で、それを振るう力で、流した血でのみ表される。初代総長〝太たい陽よう鬼き〟デニス・サンライズの、それが決意であり、信念でもあったのだ。

あの建造物を銀の砦と呼ぶことはもうできない。あれはジェノシドの根城だ。

極ごく悪あく城じようだ。

──てゆうか、極悪城って。ギリギリの綱つな渡わたりに、きっと成功する気もないんだろうと思わざるをえない、ほんっとにひどいネーミングセンスだけど、そんな名前をつけられて、あんなふうに魔改造されちゃったかつての家を見る番人たちの心境って、どんなかんじなんだろ。少なくとも、不快、不ふ愉ゆ快かい、そんな言葉では言い表せない気持ちでいるはずだ。是ぜ非ひその思いを盛せい大だいにぶつけまくって欲しい。そのために彼らはここにいるのだ。

三代目総長トマトクン率いる秩序の番人本隊二百五十三名は、環かん状じよう通どおりを挟はさんで斜ななめ前方に極悪城を見る位置で整列して、そのときの到とう来らいを今か今かと待っている。

マシュー・シュナイデル副長率いる別働隊五十九名は、すでに第四支塔の地下納骨堂へと通じる隠かくし通路の至近に位置しているはずだ。

本隊と別働隊、それからアサイラム守備隊の戦力配分については、作戦本部内で激しい議論があったが、最終的にはアサイラム守備隊から別働隊の分の人員を割さくという結論になった。本隊の戦力は最大限確保されねばならないし、別働隊の目的は隠し通路からの侵しん入にゆうではなく、あくまで封ふう鎖さすることなわけだから、落ちつくべきところに落ちついたのだろう。マリアローズはそう思っている。

我が秩序の番人──我が、とつけるのは面おも映はゆいっていうか、慣れないっていうか、慣れたくもないんだけど、今は僕も番人だから──その僕をふくめた元ＺＯＯの面々は装備も以前と変わらないから、見た目からして外と様ざま中の外様なんだけど、とにかく番人なので──てゆうか、僕に至っては、あれなんだけどね？　副長代理、なんていう肩かた書がきまでついちゃってるわけだから、我が秩序の番人って言わざるをえない、言わないといけない立場だったりもするんだけど、そうはいってもやっぱり、堂々と口に出すのは恥はずかしかったりもするから、心の中でこっそり──我が秩序の番人の目的は至ってシンプルだ。

　第一に、極悪城を攻こう略りやくして占せん拠きよする。

　第二に、極悪城内にＳＩＸがいた場合は、これを捕ほ縛ばくするか、可能であれば殺害する。

　当然、最終的な目標はＳＩＸ以下ジェノシドを壊かい滅めつさせることだ。この一戦で片が付けばいい。でも、そんなにうまくゆくとはかぎらない。すでに我が秩序の番人は失点している。一気に挽ばん回かいしようとして焦あせってはならない。着実に、明白な勝利を積み重ねて、ＳＩＸを追いつめ、その果てにジェノシドを滅ほろぼす。これが正道だろう。銀の砦奪だつ回かいはその端たん緒ちよなのだ。

「……静か、ですね」と後ろのほうでルーシーが呟つぶやくように言った。

　ユリカが「しょうね」と、サフィニアが「……はい……」と応じただけで、会話にはならなかった。いつもやかましいカタリが一言も発しなかった。それがちょっとだけ意外だった。

　マリアローズは時計を見た。十三時まで、あと五分だ。横を見ると、琺瑠も時計を確かく認にんしていた。

　敵が秩序の番人に気づいていないわけがない。それなのに、ルーシーが言うとおり、極悪城はあまりにも静かだ。これはもう、さっさと攻こう撃げき開始してしまったほうがいいんじゃないか。すぐ前にいるトマトクンに進言しようとしたら、何か低い声が聞こえた。ピンパーネルの声だと思った。マリアローズは振ふり返った。ピンパーネルは目を凝こらして遠くを見ていた。どうかしたの、と訊きく前に、ピンパーネルは右手を持ちあげてどこかを指さした。マリアローズはピンパーネルの人差し指の先に視線を向けた。
「……え？　どこ？」

「あそこデス」ピンパーネルの眉まゆが少しひそめられている。冷静沈ちん着ちやく、不ふ撓とう不ふ屈くつの元アッサシンにしては険しい表情といってもいいだろう。その人差し指は、おそらく極悪城の主塔を示している。

　周りがざわつきだした。マリアローズは双眼鏡を出して目にあてた。主塔。見えた。その屋上には巨きよ大だいな半永久灯が設置されている。あの半永久灯のおかげで、主塔は「義の灯台」と呼ばれ

ているのだ。いや、呼ばれていた、というべきか。かつて夜間も煌こうこうとあたりを照らしていた純白の大半永久灯は、何やら紫むらさきっぽく着色されて、薄うす暗ぐらい昼下がりに禍まが々まがしい光を放っている。マリアローズは息をのんだ。「──あ……」

　極悪城の防ぼう壁へきまでは五十メーテルくらいだ。主塔まではさらに数十メーテル離はなれているだろう。主塔は五階建てだけれど、たとえば同じ五階建ての集合住宅とは比ひ較かくにならないほど高い。その屋上だから、けっこう距きょ離りがある。肉眼で見えないわけではないはずだが、あれはなかなか気づかないだろう。ピンパーネルは目がいい。だからわかったのだ。

　大半永久灯だ。何かがくっついている。人だ。服を着ていないのか。黒い紐ひもみたいなものでぐるぐる巻きにされた上、大半永久灯に括くくりつけられているようだ。遠いから、顔まではわからない。わからなくても、なんとなく予想はついた。マリアローズが双眼鏡を目から離すと、ピンパーネルが近づいてきて耳打ちした。
「──ヨハン・サンライズだと思いマス」

　こんなときはどんな表情を浮うかべたらいいのだろう。

　周りの連中がこっちを見ている。どこかに何か注目すべきものがあり、それをピンパーネルが発見して、マリアローズが確認した。そのことはみんな察しているようだ。マリアローズは結局、無表情のままトマトクンを手招きして屈かがんでもらい、その耳みみ許もとで囁ささやいた。「主塔屋上にヨハン・サンライズが」

「うむ」トマトクンは一つうなずいて、主しゅ塔とう屋上にちらりと視線を投げかけた。どうするつもりなのか。何もしなかった。トマトクンは前に向きなおった。それだけだった。

　珐瑠がこっちを見て、それから主塔のほうに一いち瞥べつをくれて、またこっちを向いた。

　マリアローズは目を伏ふせた。珐瑠はたぶん、もうわかっているだろう。彼女だけじゃない。大半永久灯に人間が縛しばりつけられている。そのことに気づいている者は、きっと他ほかにもいるはずだ。それは誰だれなのか。何の関係もない者を、あんな場所に、あんな恰かっ好こうでさらし者にする必要はない。ヨハンが生きていることを知らない番人はいないわけだから、見えなくても想像がつくだろう。そして、よほどの好機に恵めぐまれないかぎり、ヨハン

の救出より目的の達成を優先する方針も皆みな、納なつ得とくしているかどうかは別としても、承知しているはずだ。

　羅叉が押し殺したような声で「静まれ」と言った。ざわめきはすぐに収まった。

　マリアローズは時計を見ようとした。その寸前だった。一いつ瞬しゅんで極悪城の防壁の上に人ひと垣がきができた。どいつもこいつも黒を基調とした派手な衣い装しようを身につけている。リヴァイス製品か。ジェノシドだ。連中は手にした思い思いの武器を振りあげて一いつ斉せいに叫さけんだ。何を言っているのかわからないが、人数が多いし、けっこうな音量だ。迫はく力りよくがないとはいわないけれど、番人たちに動どう揺ようの色は見られない。

　マリアローズはあらためて時計を確認した。十三時まで、あと二分だ。トマトクンが右手をあげた。「サフィニア」

「……はい……」サフィニアはマリアローズの脇わきを通ってトマトクンの隣となりまで進みでた。

「前進、用意」トマトクンが低い声で言うと、総長代理、副長をふくめた各隊長、隊長補たちが「前進、用ォー意」と号令をかけた。番人たちが舗ほ装そうされた硬かたい地面を踏ふみしめる音がした。マリアローズは深呼吸をした。トマトクンが右手を前に振った。「前進」

「前進」「前進」「前進」「前進」「前進」「前進」「前進」「前進」各隊長、隊長補がほぼ同時に合図した。トマトクンが歩きだした。皆、それに倣ならった。マリアローズは足を動かしながら唇くちびるを舐なめた。さっきからずっと防壁の上を見ている。ジェノシドの雑ぞう兵ひようどもは、飛んだり跳はねたりして騒さわいでいるだけじゃない。一部の雑兵が何か作業をしている。あれは何をやっているのだろう。防壁の向こう側から何かを引っぱりあげようとしているのか。

　十メーテルほど前進したところで、その何かの正体が判明した。雑兵どもは防壁の上でそれを抱かかえて、こっちに向けている。
「……回転式ラニング連発弩フアイヤ」

　有名なはぐれ機術士〝ピンクショット〟が開発した連装連発の弩いしゆみだ。さる国の軍隊が制式装備として採用しようとしたこと

もあったが、あまりにもコストが高くて断念したらしいとか何とか。他にもたくさんの兵器を生みだしたという鬼きオさい〝ピンクショット〟は、その後、行方ゆくえ知れずになって、現在に至るまで生死も不明だ。

　ＳｍＣも回転式ラニング連発弩フアイヤを持っていた。またか。性しよう懲こりもなく──とは言えない。マリアローズが知っているものと仕様が同一だとしたら、一分間に三十射以上、矢の装そう塡てん数は最大百二十本に及およぶ。あれは脅きよう威いだ。しかも、数が多い。正確な台数はさすがにわからないけれど、ざっと見たかんじだと、数十台──ひょっとしたら、三桁けたに届くかもしれない。

　しゃがんだり腰こしを低くしたりして回転式ラニング連発弩フアイヤを抱えている一人をもう一人が支えて、雑兵どもは射しや撃げき体勢に入ろうとしている。トマトクンが「盾たて、構え！」と叫んだ。隊長、隊長補が唱和した。番人たちは盾をかざして互たがいの距離を狭せばめた。盾は即そく席せきの屋根と化した。マリアローズのように盾を持っていない者たちも、ほとんど完かん璧ぺきに屋根の下に入ることができた。先頭のトマトクン、それから羅叉だけは違ちがう。トマトクンは悠ゆう然ぜんと、羅叉はそのトマトクンと張りあうかのように、堂々と我が身をさらして歩いている。

　そのまま十メーテルほど進んだ。屋根のせいか。矢が風を切る音は聞こえなかった。いきなりバツバツドズドズきた。始まった。回転式ラニング連発弩フアイヤの射撃だ。何、この雨音。怖こわすぎ。まあ、雨じゃないんだけど。ちょっと心臓に悪い。でも、大だい丈じよう夫ぶだ。純血の司祭の盾、銀色に輝かがやくエルナムクロム製のプロテクション・シリーズは、軽量のわりに防ぼう御ぎよ性能が高くて、耐たい久きゆう性もすぐれている。矢は盾の屋根に撥はね返され、地面に降り積もる。その矢を、大量の矢を踏んづけて、番人たちは前進する。カタリが「ワオ、ワオ、ワオッ！」と叫んで笑った。その気持ちはわかる。こういうときって、なぜか笑いたくなるものだ。マリアローズは、だけど、副長代理だったりもする。笑うのは我が慢まんした。でも、テンションは上がった。放ほうっておいたら、無む駄だに、無性に上がって、天まで昇のぼってしまいそうだ。それはよくない。落ちつかないと。

　極ごく悪あく城じようの防壁まで二十メーテルくらいだ。トマトクンが「止まれ！」と叫ぶと、番人たちは一斉に停止した。さあ、サフィニアの出番だ。声はかけず、心の中で応おう援えんするだけ

にしておいた。サフィニアはもう、トマトクンの脇で魔ま術じゅつのための特殊なチヤネ精神集中リングに入っている。

　あれが銀の砦とりでだと思っていると、ちょっと採用しづらい。すなわち、生きつ粋すいの番人にはなかなか思いつかない。それ以前に、サフィニア・クラスの魔術士がいないと、そもそも不可能だ。マリアローズが提案して、激論の末に了りよう承しようされた。これが防ぼう壁へき突とつ破ぱのための作戦だ。

「術式アムラル……連鎖アコルド──」

　杖つえを持つサフィニアの両手には、ジャドースパインＧＤとドグランジック、トルマルクボーンとマホトムツリー炭が握にぎりこまれているはずだ。錬れん金きん術じゅつによる生成物にしろ、天然物にしろ、いずれも貴重、高価な代しろ物もので、簡単には手に入らない。そういった触しよく媒ばい、秘薬のたぐいが高等な魔術には必要となる。一発数千ダラー、ときには数万ダラー、あるいはそれ以上の経費がかかるのだから、魔術は恐おそろしい。もっとも、真に恐ろしいのは費用じゃない。本物の魔術士に行使された大いなる魔術の破は壊かい力だ。

「Ｓｅａ櫓Ｇｅａ虞Ｒｅａ出Ｎｅａ芯Ｌｅａ怒Ｃｅａ宴Ｋｅａ辯Ｍｅａ尽Ｓｅａ」

　三文魔術士と比ひ較かくすると、サフィニアの詠えい唱しようには独特の雰囲気がある。青白い光として常人にも目視できるほどの激げき烈れつな魔力が、その華きや奢しやといってもいい身体からだから放散されている。それだけでは決してない。

「ＹｄｅｏＬ観星冥凌ＧｕｎｄａｅＬ陰性ＭａｘｉＧＺＧ驗廟乘廼稟坤靜匪ＱｙＱｙＢｅＬ」

　呪じゅ文もんを唱える声にまで、侵おかしがたい何らかの力が宿っているかのように感じられるのだ。

「銑翫ＨｉｄｅＬ拇Ｒｕ狗ＹＬＹＬＶｏｕｓＲａｙｅｓ蹈暉喘快楽ＧｙＧｙＤｙＬ怨霊ＶＡ」

　サフィニアは杖の先で地面を叩たたいた。「──ＧｅＢａＬＴ」

　地面が揺ゆれた。揺れは一度きりだった。震しん源げんは防ぼう壁へきだ。重く揺れ動いて、防壁の上部が──幅はば十五メーテルく

らいにわたって、破は裂れつするように砕くだけた。大小様々な防壁の破は片へんと一いつ緒しよに、そこにいたジェノシドたちも飛び散った。そのうちの五、六人が番人たちの列の前に──三人か四人は盾の屋根めがけて降ってきた。回転式ラニング連発弩フアイヤの射撃がやんだ。でも、まだだ。防壁は七メーテル以上ある。その上の部分がぶっ壊こわれただけだ。いかに気霊Ｏｐｔと気霊Ｊｙｅ、土霊Ｄａｋと土霊Ｄｉｋ、土霊Ｎｉｋを使し役えきして放たれるサフィニアの強力な高等魔術「大地爆ばく裂れつ無情」でも、あれだけ頑がん丈じような防壁だと一発で破は砕さいすることはできない。一発では。わかっている。そんなことは。想定内だ。だから、サフィニアは次を準備している。

「Ｓｅａ櫓Ｇｅａ虞Ｒｅａ出Ｎｅａ芯Ｌｅａ怒Ｃｅａ宴Ｋｅａ辯Ｍｅａ尽Ｓｅａ」

　違う。もう詠唱に入っている。連続呪法セリエスマグデル。一度の特殊なチヤネ精神集中リングで二つの魔術を用意する。

「ＹｄｅｏＬ観星冥凌ＧｕｎｄａｅＬ陰性ＭａｘｉＧＺＧ驗廟乘廼稟坤靜匪ＱｙＱｙＢｅＬ」

　天オサフィニアはそんな離はなれ業わざもやってのけることができるのだ。

「銑翫ＨｉｄｅＬ拇Ｒｕ狗ＹＬＹＬＶｏｕｓＲａｙｅｓ蹈暉喘快楽ＧｙＧｙＤｙＬ怨霊ＶＡ」

　ふたたびサフィニアの杖が地面を叩いた。「──ＧｅＢａＬＴ」

　揺れがきた。一度目よりも直接的で遠えん慮りよ会え釈しやくのない衝しよう撃げきだった。防壁の、さっき上部が破壊された箇か所しよ──その下だ。弾はじけ飛んで、一帯に粉ふん塵じんが撒まき散らされた。大地爆裂無情の重ね掛がけだ。知ってるけど。わかりすぎるくらいわかってるけど。すごい。サフィニア、偉えらい。まだ塵ちりやら埃ほこりやらが立ちこめてよく見えないけれど、これで防壁の一部が崩くずれたはずだ。

「──よし！」マリアローズは思わず叫さけんでしまった。番人たちも歓かん声せいをあげた。間かん髪はつを容いれずトマトクンが怒ど鳴なった。「──まだだ！　まだ動くなよ！」

　そのとおりだ。サフィニアの仕事は終わっていない。さらにもう一つ、やってもらわないといけないことがある。役割を果たすべく、サフィニアはローブの中から細く長い銀の鎖くさりをとりだした。多種多様な宝石が嵌はめこまれている。まるで高価な装身具のようだ。サフィニアは素す早ばやくその両りよう端たんを結んで環わとなし、前方に放った。

　敵が射撃を再開した。何人か盾を下げてしまっていたようだ。数名の番人が倒たおれ、そこかしこで「盾、上げい！」と命じる隊長、隊長補たちの声が聞こえた。サフィニアは集中している。長い。まだか。しょうがない。大きな魔術だ。粉塵の幕はだいぶ薄うすまっている。その向こうに何か見えたような。「来まス」とピンパーネルが言った。気のせいではないということだ。番人たちが──全員ではないにしろ大勢が腰を低くした。剣けんの柄つかに手をかける者もいた。トマトクンが叫んだ。「動くなと言ってるだろうが！」それと前後して、詠唱が始まった。

「罪ＷＯ罪ＴＯ思ＷＡＺＵ罪悪ＷＯ快楽ＴＯＳＩ膿ＮＤＡ軀ＮＩ猥ＲＡＮＡ愛撫ＷＯ受ＫＵＲＵ事ＷＯ恥辱ＴＯＭＯ思ＷＡＺＵ淫楽ＮＩ溺ＲＥ腐臭ＷＯ好ＭＩ死者ＷＯ愛ＳＩＴＥ犯ＳＩ天ＹＯＲＩ放逐ＳＡＲＥＳＩ王女」

　あの銀鎖の環も触媒の一種で、人工触媒カタリステイツク魔道具アーテイフアクトと呼ばれるものだ。なんでも、ああいった品物を専門に扱あつかっている店が一いつ軒けんだけエルデンに、しかも、魔術士しか立ち入ることのできない第十区のミラーヒルにあるらしい。何しろ、めったなことでは使われない魔術用の触媒だから、ほとんど売れない。材料費が馬ば鹿か高だかい。手間もかかる。そんなわけで、あの銀鎖の環の値段はなんと──千九百九十八万ダラー。うん。ふざけてるよね。かなり。

　その超ちよう高価な銀鎖の環から黒い光がわきあがった。黒い光。そんなもの、この世界には存在しない。でも、別の世界には存在する。その世界では、夜の闇やみはどこまでも白く、太陽は真っ黒なのだという。当然、黒い太陽から降りそそぐ日ひ射ざしは、その世界の住人たちを黒く照らす。一説によると百以上あるという異界アウトランドの中には、そんなわけのわからない世界もあるのだ。

「来ＴＡＲＥ禍禍ＳＩＫＩ王女来ＴＡＲＥ醜ＫＩ王女然ＳＩ汝既ＮＩＳＯＮＯ位ＮＩ在ＲＡＺＵ汝ＷＡ堕ＳＥＲＩ汝ＷＡ狂ＥＲＩ汝Ｗ

Ａ乱ＲＥＲＩ汝ＷＡ貪ＲＩ汝ＷＡ腐ＲＩ腐ＲＩ尽ＫＵＳＩ蠅集ＲＩ穢ＲＡＷＡＳＩＫＩ姫」

　今、銀鎖の環を境にして、その異界とこの世界との物理接続が確立しようとしている。境界である銀鎖の環から噴ふきだす黒い光がどんどん拡散する。そうして渦うずを巻く。大きな円となる。円の中に入り組んだ紋もん様ようが次々と浮うきでた。粉塵の幕はすでにほぼ晴れている。その向こうから敵の群れが飛びだしてこようとしていた。さっきまでは。今は違ちがう。立ちすくんでいる。

「汝ＫＯＲＥ贄也今ＫＯＳＯ此処ＮＩ来ＴＡＲＩＴＥ償ＩＷＯ為ＳＥ」

　そして、サフィニアの詠唱が終わり、黒き光の円の果てなき底から、それは━まずは大きな、巨きよ大だいな、真っ白い右手という形で、姿を現した。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。

　その叫び声を、悲鳴、と呼ぶべきなのか、苦鳴、というべきか、あるいは、絶鳴、とでも表現すればいいのか。マリアローズは答えを持たない。とにかくそれは、そんなおぞましい、聞いていると脳がぎゅうぎゅう搾しぼられてしまいそうな声をあげながら、白い手で黒き光の円のへりをつかみ、腕わん力りよくで、一気に、力ずくで全身を引きあげた。

「久しぶり」とマリアローズは呟つぶやいた。こみあげてくる吐はき気けを我が慢まんしながら。

　彼女とは━そう、それはやたらとでかくて、身みの丈たけは明らかに十メーテル以上あるけれど、人の形をしている上に、どこからどう見ても女性で、しかも━彼女とは初対面ではなかった。何を隠かくそう、これが二度目だ。三度目はないといい。正直、この二度目もなければよかった。素直にそう思えるくらい、とてつもなくインパクトのある女性だ。

　いったい誰だれが彼女の身体からだを花畑と間違えたのか。それとも、風で飛ばされてきた種が偶ぐう然ぜん、彼女の身体を住すみ処かと定めたのか。身体中だ。びっしりじゃない。まばらだが、彼女の身体のそこかしこに真っ黒い奇き怪かいな花が咲さいている。

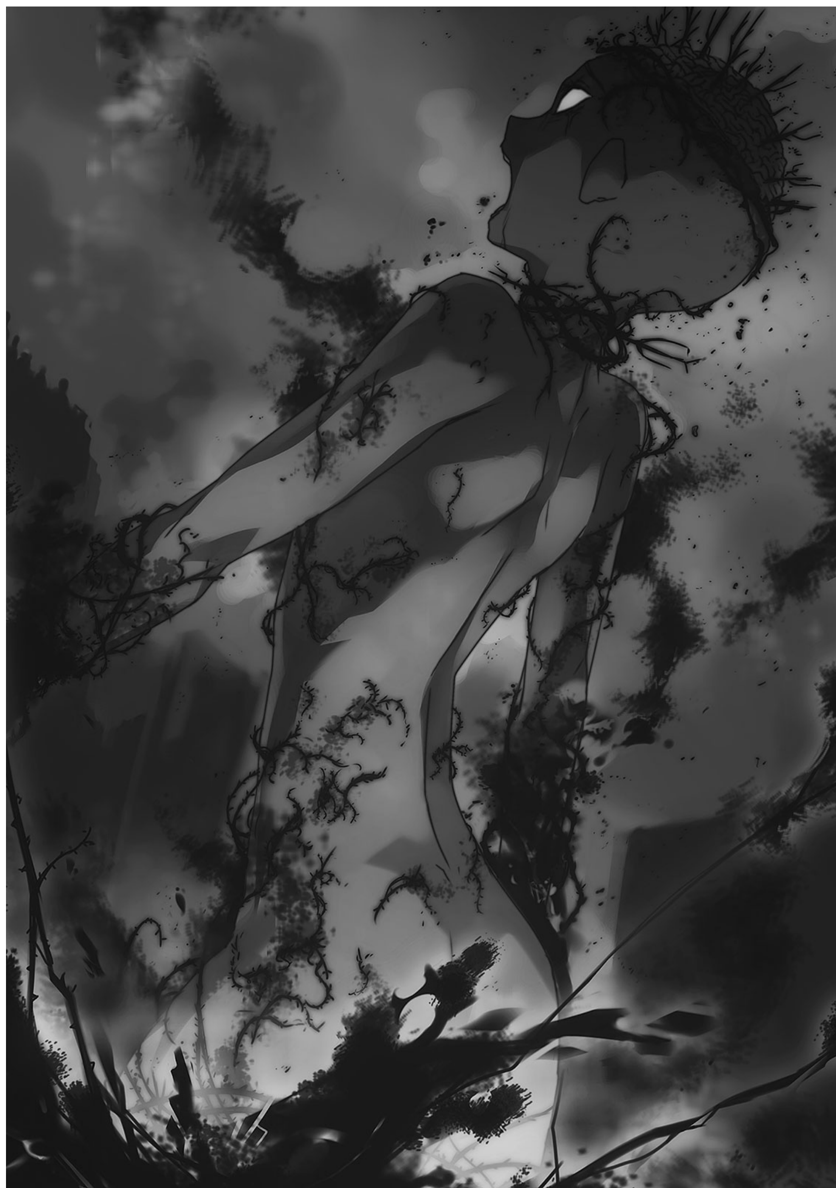
全身に絡からみついている黒い縄なわのようなものは、もしかしたら花の茎くきなのかもしれない。彼女は大変に色白なのだが、その皮ひ膚ふはとりわけ首から胴どう体たいまでが無残に、ギジャギジャに斬きり裂さかれ、それらのむごたらしい傷からは、血液とも膿うみとも何ともつかない液体が垂れ流されている。とても直視できない。目を背そむけたくなる惨さん状じようだ。それでいて、彼女の顔ときたらもう、びっくりするほど美しく整っていて、あの悲ひ哀あいと寂せき寥りようで黒々と潤うるんだ双そう眸ぼうに見つめられたら、うっかり同情してしまいかねない。まあ、かわいそうなことはかわいそうだ。とんでもなく。だって、彼女には頭とう髪はつがない。髪かみの毛けだけじゃない。頭皮もない。頭ず蓋がいさえ取り除かれていて、ぐずぐずに腐くさっていそうな露ろ出しゅつしている脳みそに、数百本の長くてぶっとい針のような物体が突つき刺さささっているのだ。それはいい。いや、ちっともよくはないけれど、彼女の脳みその周りにかかっている黒い靄もやみたいなものは何なのか。じつは、その黒い靄こそが、彼女の名の由来なのだ。

あれは蠅はえだ。数千とも数万ともそれ以上ともつかない数の蠅がたかっているのだ。蠅どもはただああやって飛びまわっているだけじゃない。彼女の腐った脳や傷口に卵を産みつけているのだ。よく見ればわかる。十中八九夢に出てくるようになるので、見ないほうがいいのかもしれないけれど、怖こわいもの見たさ、というやつか。ついじっくり見てしまう。彼女の身体は蠅と蛆うじだらけなのだ。

異界〝贄のサクリフアイス・園プレーン〟の高貴にして下げ賤せんな罪ざい業ごう多く罪深い姫ひめ君ぎみ──蠅たかり姫。

贄の園に堕おとされる前は花の恋こい乙女おとめと称たたえられ、多くの神々に求愛された王女神メイクレール・ティアドルァＫＺＫだったともいう。そんな女神さまがなぜ贄の園に追放されて、蠅たかり姫に成り果ててしまったのか。そのあたりは謎なぞに包まれているらしい。というか、そもそも神さま絡がらみの話なんて、人間にわかるはずもない。神さまと知りあいだったりする変な人間も、なかにはいたりいなかったりするけれど、そういう非常識な者は圧あつ倒とう的少数派だろう。だいたい、彼女を前にすると、そんな些さ末まつなことはどうでもよくなってくる。とにかく臭くさくて、怖くて、それどころではない。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞──って、こっちがイヤアアアアアアアアアアアアア

アって言いたいかんじだから。はっきり言って。



「ひいやあぁっ……！」とルーシーが悲鳴をあげた。ちょっと遅おそい気もするが、しばし呆ぼう然ぜんとしていて、ようやく、あ、そうだ、びっくりしなきゃ──と思いだしたのだろう。まあ、無理もない。鼻をつまんで「行っけええ！　蠅たかり姫えええっ！」とか叫

さけんでいる半魚人がむしろ異常なのだ。番人たちだって、泉里決戦で蠅たかり姫を目にした者もいるかもしれないけれど、だいたいぎょっとしている。敵方に至ってはもう大混乱だ。防ぼう壁へきの一部が崩くずれているとはいえ、それ以外の部分は健在だから、大半のジェノシドは無傷なのだが、どいつもこいつもぼんやりしていたり、何か喚わめいていたり、あたふたしていたり、周りの仲間を突き飛ばして逃にげようとしたりで、「迎げい撃げき」の「げ」の字も頭に浮かんでいないように見える。当然、こっちにとってはありがたいことだし、狙ねらいどおりだ。

　厭亞亞……、厭亞亞……、厭亞亞……──と比ひ較かく的小さな声をもらしながら、蠅たかり姫が防壁の崩れている箇か所しょに近づいてゆく。尻しりを振ふりつつ──というよりも、身をよじりつつ、というかんじの、なんだか変な歩き方だ。どうやら、ただ歩くだけで、真っ黒い花の棘とげやら縄めいた茎やらが身体に食いこんで、ひどく痛むらしい。

　ジェノシドどもが一いっ斉せいに、わっと逃げ散ろうとした。でも、残念ながら、そこは防壁の上だ。狭せまいので、押しあいへしあいすることになる。七メーテル以上の高さがあるから、うっかり飛び降りるわけにもゆかない。防壁の崩れている箇所の向こうから飛びだしてこようとしていた敵はどうか。いない。引っこんだようだ。

　蠅たかり姫はもう防壁のすぐ前にいる。どうするのか。

　跳とびあがった。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。両足跳びだ。そうして着地した。防壁の上に。崩れている箇所をまたぐ恰かっ好こうになった。けっこう足を開いている。肩かた幅はばなんてものじゃない。両りょう脚あしがぷるぷるしているけれど、大だい丈じょう夫ぶなのか。あまり大丈夫でもないらしい。つらいようだ。蠅たかり姫は両手で頭を抱かかえた──って、ダメだってば、そんなことしちゃ。

　ほら。刺さった。両手に。脳に突き刺さっている釘くぎみたいなものが、グザグザと。蠅たかり姫ひめは悲鳴をあげた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。そうして頭を振った。そのせいで腐った脳みそが飛び散って、蠅たかり姫の両手を釘がさらに痛めつけた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。

「……もうちょっと、どうにかならんのか」とトマトクンが低く呟いた。まったく同感だけれど、サフィニア曰いわく、贄の園の住人を意のままに操あやつることは、閃せん光こうの魔ま女じよマチルダでさえ不可能らしい。そもそも召しよう喚かん魔術とは、召喚生物を操作するのではなく誘ゆう導どうするもので、召喚対象が強大な力を持っていればいるほど、ろくすっぽ言うことを聞いてくれない。下手をすれば、術者がぷちっと殺されてしまいかねない危険な魔術なのだという。これくらいで満足しておくべきだ。いや、実際、大満足だ。

　とうとうこらえきれなくなったのか。蠅たかり姫は左足で防壁を蹴けって、右側の防壁の上に両脚で立った。でも、まだその両手は頭を抱えて、たくさんの釘に貫つらぬかれている。厭亞亞。厭亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。もういや、いや、いや。蠅たかり姫の声はそんなふうに聞こえなくもなかった。彼女は両りよう眼めから真っ黒い粘ねん液えきのような涙なみだをあふれさせながら駆かけだした。まだ大勢のジェノシドどもが逃げようとして逃げられないでいる防壁の上を、彼女は猛もうダッシュしたのだ。もちろん、ジェノシドどもはグッチャグッチャ踏ふみ潰つぶされた。踏まれまいとする仲間に押されて、防壁から落下する者もいた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞。蠅たかり姫は叫びながら、痛みを、苦しみを訴うつたえながら、ジェノシドを踏みにじりながら、それが何なのか考えたくない色々なものを撒まき散らしながら、走った。防壁を一周して、崩れている箇所までくると、その手前でジャンプした──って、え？　何それ、なんで、やめ、ちょっ──こっちにこないでよ……！

　マリアローズは思わず回れ右をしそうになった。多くの番人たちも同じだった。トマトクンが「突とつ撃げき用意！」と叫んだ。腹の底に響ひびく太い声だった。その声にはある種の威い力りよくがあった。有う無むを言わせぬ強制力が備わっていた。おかげでマリアローズは、そして番人たちも自制できた。それでも怖かった。蠅たかり姫が着地する直前には、高いところから落下するときのような感覚に襲おそわれた。すべてが後ろのほうに吹ふっ飛んでゆく。自分の存在すらなくなってしまう。そんな感覚だった。地じ響ひびきが起こった。身体からだが一いつ瞬しゆん、浮うきあがった。でも、大丈夫だった。

　蠅たかり姫は隊列の先頭にいるトマトクンのすぐ前に着地した。

安心した瞬間、涙が出てきた。誰だれかが、それも一人ではなくて複数が「くさっ……」と言った。完全に同意できる。この臭しゅう気きはやばい。鼻じゃない。目にくる。それから、肺を刺さす。内臓が冒おかされる。人間性が汚けがされる。

危あやうく嘔おう吐とするところだった。その前に、サフィニアが杖つえを地面に突つき立てた。

蠅たかり姫の足あし許もとに黒き光の円が生じた。それは底なし沼ぬまのように蠅たかり姫をのみこみはじめた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……？　蠅たかり姫は突然の出来事に戸と惑まどっているようだ。肩かたあたりまで黒き光の底なし沼に沈しずんだころ、やっと事情を理解したらしい。蠅たかり姫は両手を黒き光の底なし沼のへりにかけた。そうしてなんとか身体を引きあげようとした。厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞厭亞亞亞亞亞。そうはさせじとサフィニアがもう一度、地面を杖で突くと、黒い光の底なし沼が一段階拡大した。手がかりを失った蠅たかり姫は、すとん、と底なし沼に落ちた。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……。

黒き光の底なし沼もまたたく間に収縮して消え失うせた。それと一いつ緒しよに、あの強きよう烈れつな臭気もほとんど感じなくなった。助かった──なんて言ってる場合じゃない。

トマトクンが「突撃……！」と号令をかけるなり駆けだした。即そく座ざについてゆくことができたのはピンパーネルとカタリだけだった。マリアローズは一瞬遅おくれた。トマトクンの右に位置している羅叉隊、左の琺瑠隊も似たようなものだった。番人たちは全員、走りだしてから声を出した。「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」トマトクンの隣となりにいたサフィニアは、でも、反応が遅れたわけじゃない。あえて足を止めている。お役やく御ご免めんというわけではないけれど、とりあえずサフィニアには少し下がってもらう。ユリカとルーシーが護衛役だ。マリアローズはサフィニアを追い越こす際に「おつかれ」と声をかけた。サフィニアは笑え顔がおで何か言ったけれど、よく聞こえなかった。

秩ちつ序じよの番人は突き進む。

トマトクンとピンパーネル、カタリが三角形をなして突出し、そ

のあとにマリアローズ、一番羅叉隊、五番珐瑠隊、二番親衛隊──その中段あたりにユリカ、ルーシー、サフィニアが位置して、六番から九番までの突撃隊、十番から十二番までの遊撃隊、十九番、二十九番警けい邏ら隊がつづき、後こう尾びは二十五番から二十七番無名隊が固めている。

　トマトクンはもう防ぼう壁へきを目前にしている。

　サフィニアが大地爆ばく裂れつ無情の重ね掛がけで崩くずした箇か所しよが侵しん入にゆう口だ。

　そこから敵が出てきた。あれは。あいつらは。皮ひ膚ふが赤っぽかったり、青っぽかったりで、体毛はやたらと強こわそうだ。棘とげ付つきの剣けんを右手に持ち、やはり棘付きの、大きいというよりも長い盾たてが、左肩から左ひだり腕うでを覆おおっている。着ている防護服はリヴァイス製のようだ。体格は人間とそれほど違ちがわない。筋骨逞たくましい男たちといったかんじにも見えなくはないけれど──違う。明らかに人間とは異なっている。

　銀の砦とりでを襲ったジェノシドの部隊の中に、相当数がふくまれていたという報告は聞いている。人間と鬼人オーガの混血。ようするに、鬼人どもが人間の女を食わずに犯おかして産ませた。そんな出自の種族がどこかにいるらしいという話は耳にしたことがある。連中は半鬼人ハーフオーガだ。

　マリアローズは足を止めずに両手でそれぞれ剣を抜ぬいた。

　トマトクンが背中の大剣に手をのばした。

　半鬼人どもが雪崩なだれを打って侵入口から飛びだしてきて、トマトクンに殺さつ到とうした。

「ぬうううううううううううああああああああああああああああああああ……！」トマトクンは大剣を抜き放ちつつ横回転した。一回転して一歩進み、二回転してまた一歩、三回転すると十人以上の半鬼人がバラバラになってそのへんに飛び散り、降り積もっていた。トマトクンが討うちもらした──というよりも、たまたま大剣の届く範はん囲いにいなかった一人の半鬼人に、カタリが身体ごとぶつかっていった。「──どっせいッ……！」

　我がＺＯＯの──じゃなかった、我が秩序の番人のカタリは、一言

でいえば勇者だ。膂りよ力りよくはもちろん、トマトクンに遥はるかに劣おとる。速度でピンパーネルに勝てるわけもない。技量ではユリカに劣るだろう。サフィニアみたいに魔ま術じゆつが使えるわけでもない。ただし、クソ度胸だけは天下一品だ。

　半鬼人はきっと、相手がそこまで無造作に距きよ離りをつめてくるとは予想していなかったのだろう。普ふ通つう、もうちょっとあるはずだ。慎しん重ちようさとか、警けい戒かい心しんとか、躊ちゆう躇ちよとか、知性とか、理性とか。あるいは、半鬼人の頭にそんな思いが去来したかもしれない。あいにく半魚人にはどれも無む縁えんだ。半魚人なだけに。

　カタリは半鬼人の胸むな元もとに飛びこんでいって、小石くらいならやすやすと嚙かみ砕くだいてしまいそうながっちりした顎あごに、あろうことか頭突きを見み舞まった。半鬼人はのけぞった。そのぶっとい首の両側にカタリの変形斧おのがズダダッと食いこんだ。カタリは半鬼人を蹴け倒たおして「ワオ！　ワオ！　ワァーオッ……！」と叫さけびながら次の標的めがけて突っ走った。そのときにはもう、元アッサシンの華か麗れいで酸さん鼻びをきわめるショーが始まっていた。

　彼がどうやってその場所まで到達したのか。マリアローズにはわからない。見えなかった。速度の問題だけじゃない。人の知覚の死角に入りこみ、察知されずに事を行う。そのための技術が彼には染しみついている。すでに彼の血肉と化してさえいるのだ。

　トマトクンよりさらに前方──侵入口の向こう側だった。つまり、敵の真っ直中だ。

　雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを手に、彼は優ゆう雅がに舞った。どんなに速い動作も、ありえない無茶な体勢も、彼にとってはごく普通だ。比ひ較かく的やわらかい箇所を抉えぐったり斬きったりして、傷をつける。その傷を切り開く。剝はがす。切断する。そうして解体する。敵を殺す彼の方法はいつも残ざん虐ぎやくきわまりない。それにもかかわらず、優雅に見える。目でとらえられるわけでもないのに、その美しさがわかる。それは芸術だ。人殺しのための芸術。混じりっけのない殺意の産物。原動力が純じゆん粋すいであればあるほど、真っ白な狂きよう気きにより近いほど、作品の完成度は高まる。極限まで高められた芸術は、その分野に無知な者すら魅み了りようしてやまないのだ。その価値は、誰だれであろうと見ればわかる。ただ接す

るだけで。そのとき命があれば。

　ピンパーネルは血の旋せん風ぷうを巻き起こし、物の数秒で三人か四人の半鬼人を肉につ塊かいに変えた。それからさらに二人の半鬼人がおぞましくも美しい芸術作品の材料にされた。半鬼人どもは浮うき足立った。トマトクンが大剣をかつぐように構えて進んだ。
「──ひねり潰つぶすぞ……！」

　トマトクンの前にいた半鬼人どもが左右に割れた。ピンパーネルの周りにいた半鬼人どもは、恐おそろしい元アッサシンから少しでも距離をとろうとした。カタリがまた一人の半鬼人を突つき倒たおすと、完全に流れが傾かたむいた。

　半鬼人どもは退いてゆく。その後尾にトマトクンが大だい斬ざん撃げきを食くらわせて、ピンパーネルは血ち煙けむりを巻きあげながら敵軍の中を駆かけまわり、カタリも敵に食らいついた。番人たちは一気に押しだした。マリアローズはその流れに乗りながら、でも──胸の底のほうじゃない、もっと表面に近いところで疑念が芽め吹ぶいている。妙みょうだ。敵の退き方、それにタイミング。敵は意気を挫くじかれて、戦列を維い持じできなくなった。形としてはそうだ。それにしては、揃そろいすぎていた。きれいすぎた。

　まるで引きこまれるようにして、番人たちはどんどん極ごく悪あく城じょうの中に入りこみつつある。

　考えすぎか。そうかもしれない。

　敵は、半鬼人の部隊は、正面の第一支し塔とう前に固まっている。

　何か音がした。バアァーンと──たとえば、大きな、重い鉄板のようなものが撥はねあげられるような、そんな音だった。

　左だ。違う。右も。左右だ。

　マリアローズは右を見た。「盾」「──盾だ！」「構え、盾！」という声が飛び交かった。それと同時だった。この音は。射しゃ撃げきだ。回転式ラニング連発弩フアイヤか。

　極悪城は改築されたわけじゃない。建物の配置は銀の砦だったころのままだ。環かん状じょう通どおりに面している正面の防壁の向こうは第一支塔、その左右に第二、第三支塔、奥に第四支塔、中央

に主塔という具合の並びなのだが、第一支塔と防壁の間は前庭となっている。マリアローズたちは今、そこにいる。

　前庭に穴を掘ほって、板か何かで覆おおい隠かくし、回転式ラニング連発弩フアイヤを持たせた兵を伏ふせておいた。頃ころ合あいを見計らって、そいつらが出てきた。そういうことか。

　いきなり側面から射撃されて、羅叉隊と琺瑠隊の動きが止まった。そうなると当然、後続の部隊も止まるしかない。マリアローズは羅叉隊と琺瑠隊の間にいるので、どうにか平気──だと思ったのも束つかの間まだった。なんか、地面が揺ゆれたような。ぴんときて、後ろを見て、ユリカとルーシー、サフィニアに向かって「下がって！　早く、急いで……！」と叫びながら、防ぼう壁へきの方向へ全力疾しつ走そうした。三人はすぐに反応してくれた。周りの番人たちの動きはちょっと鈍にぶかった。そうこうしているうちに、ミシッ、ベリッ、バアアァァーンという音がした。マリアローズは振ふり向いた。案の定だ。地面に穴を掘って、その上に頑がん丈じような板を載のせ、土を被かぶせてあったらしい。その上を走っていたのに、ぜんぜん気づかなかった。迂う闊かつだ。

　何人かの番人が板ごと吹ふっ飛ばされた。穴は二メーテル四方くらいで、いくつもあった。五つか、六つか。とにかく、その中にやつらは身を潜ひそめていたのだ。半鬼人ハーフオーガどもだった。一つの穴に、五、六人。ぜんぶで三十人といったところか。たいした数じゃない。でも、あいつ。一人だけやけに目立つ、肌はだが赤く、体毛は緋ひ色いろの半鬼人がいる。

　その半鬼人は、他ほかの半鬼人よりも露ろ出しゆつ度どの高い防護服を身につけている。気味が悪いほど美しい、青い宝石のごとき両眼だ。もっとも、体格はほぼ並だ。よく引き締しまってはいるけれど、他の半鬼人どもと大差ない。武装も、棘とげ付つきの剣けんと、同じく棘付きの盾たてだ。それなのに、何かが違ちがう。しかも、圧あつ倒とう的に。

「我ガ名ワ、ござぶろ！　がっぞノ族長ナリ……！」

　──てゆうか、喋しやべったよ？　今。共通語。聞き違いじゃないよね……？

　ちょっと呆あつ気けにとられてしまった。その間にゴザブロは、牙きばと表現したほうがよさそうな歯が並んでいる口を大きく開け

て、大だい音おん声じようをあげた。「〝狂乱マドネス〟ッッッッッッッッ……！」

次の瞬しゆん間かん、ゴザブロの目の色が変わった。あんなに青かった瞳ひとみが、赤みがかって紫むらさき色いろに近くなった。「ＩＲＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

声も違う。まるで野や獣じゆうの咆ほう吼こうだ。マリアローズは知らずに防ぼう御ぎよ姿勢をとっていた。ゴザブロは、でも、こっちにはこなかった。羅叉隊に襲おそいかかった。あっという間だった。一人を剣で。もう一人を盾で。二人の番人が倒たおされた。三人目の番人は棘付きの剣を銀色の盾で受け止めた。簡単に押しきられて、体勢が崩くずれたところを蹴け倒たおされた。ゴザブロは番人の顔面に剣を叩たたきこんだ。兜かぶとがひしゃげた。あの棘付きの剣。形は剣みたいだけれど、むしろ打撃武器だ。それに尖とがった棘がついていて、突き刺さる。抉る。タチの悪い武器だ。

ゴザブロは四人目を餌え食じきにしようとしている。族長の獰どう猛もうな戦いぶりに勇気づけられて、他の半鬼人どもだって勢いづく。今や秩ちつ序じよの番人の先頭集団は、前面と両側面、それから懐ふところの中にまで敵を抱かかえている。マリアローズはゴザブロ隊の向こうにいるトマトクンを見た。トマトクンたちも前面の敵に囲まれている。敵は必死だ。捨て身でトマトクンとピンパーネル、カタリを押し包もうとしている。どうしよう──じゃない。どうにかしないと。

ほんの二、三秒間、逡しゆん巡じゆんしている間に、李童晏がゴザブロめがけて突とつ進しんしていった。彼の率いる二番親衛隊は羅叉隊と琺瑠隊の後ろに位置していたので、マリアローズやユリカ、サフィニア、ルーシーと入り交じるような恰かつ好こうになっていたのだ。李童晏は途と中ちゆう、一人の半鬼人を斬きり捨てて、そのままの勢いでゴザブロに斬りかかろうとしたのだが──ゴザブロは速かった。跳とんだ。飛び蹴りだ。李童晏はまともに食らって吹っ飛ばされた。それでも受け身をとって即そく座ざに起きあがろうとした。そこに棘付き剣が襲いかかった。李童晏は逃にげる。逃げる。逃げる。逃げるしかない。トマトクンが雷らい鳴めいのごとく叫さけんだ。「──やつを殺とれ、羅叉……！」

「応……！」羅叉隊の番人たちが道を空け、羅叉は文字どおり飛んでいった。低空飛行する銀色の凶きよう鳥ちよう。有ゆう翼よく魔ま人じんの羽を展開しているせいか、そんなふうに見えた。李童晏を追いまわしていたゴザブロが、振り返りざまに棘付き剣を振りまわした。ゴザブロの剣は羅叉をとらえた。その直前だった。羅叉は身体からだを回転させた。翼つばさだ。有翼魔人の翼が羅叉を守った。八枚ある羽のうち、半分くらいが棘付き剣の一撃で砕くだけ散ったが、羅叉は無事だった。そうして突つっこんだ。残った羽がゴザブロの剣持つ右みぎ腕うでを打ち払はらい、左手でゴザブロの盾を装着している左腕を押しのけて、羅叉は体当たりした。「──怒ヌアアアアアアアアアァァァ……！」

名めい匠しようダグラス・トゥースが鍛きたえたる「日輪」の切っ先がゴザブロの背中から突きだした。それがどうした。そう言わんばかりに、ゴザブロは獣けもののように吼ほえながら羅叉に噛かみついた。頭だ。がっぷり噛んで、牙を突き立てた。血が出た。ドッと溢あふれた。頭ず蓋がいにまで達しているかもしれない。それがどうした。羅叉も言葉にならない声でそう言い放ち、全身の力でもってゴザブロを押した。ゴザブロは突き飛ばされて、日輪が抜ぬけた。羅叉は「嚇カッ……！」と日輪を水平に振った。銀白の閃せん光こうが奔はしり、ゴザブロの生首がごろりと地面に落ちた。ゴザブロはそれでも生きていた。少なくとも数秒間は。その首から下は敵を求めているかのようにさまよい、生首は不気味に蠢うごめいていた。間もなく死んだ。

誰だれかが指図するまでもなかった。番人たちは攻こう勢せいに転じた。先頭集団の懐の中で、ゴザブロを失ったゴザブロ隊はたやすく押し潰つぶされた。ユリカはマリアローズとルーシーにサフィニアを任せて羅叉に駆かけよった。羅叉はユリカの手を振り払おうとしたが、可か憐れんな最強の女医術士ナースは許さなかった。「──このあとも戦いたいなら、応急処置だけは受けなしゃい！」

観念したらしい羅叉がユリカの治ち療りようを受けているその脇わきを通り、マリアローズは前へ前へと進んだ。もはや両側面の敵も駆く逐ちくされつつある。主しゆ塔とうに直接入ることのできる扉とびらは銀の砦とりで陥かん落らく時に閉へい鎖さしたとのことなので、使い物にならないはずだ。第二支塔、第三支塔と主塔とを繋つなぐ通路も防衛のための装置によって封ふう鎖さされた。だから秩序の番人は前面の敵を突破して第一支塔に突入し、支塔と主塔とを繋ぐ通路を突っ切る。だめなら、第四支塔に回る。いずれにし

ても、まずは第一支塔だ。

「一気に押しきるぞ……！」トマトクンの声だった。番人たちが声を揃そろえてそれに応こたえた。わっと前面の敵が崩れた。いける。そう思った瞬間、マリアローズの頭に血がのぼって沸ふつ騰とうしかけ、すぐに冷えた。たぶん、習性だ。調子に乗ると、足をすくわれる。そういう経験が何度もある。思い知らされているから、有う頂ちよう天てんにはなれない。ふっと冷静になってしまう。

　マリアローズはあたりを見まわした。考える前に声を張りあげた。「盾たて、構え……！」

　そういえば、こんなことが前にもあったような。気のせいかもしれない。どうでもいい。

　防壁の上だ。蠅たかり姫ひめはよくやってくれた。でも、防壁上の敵を全ぜん滅めつさせたわけじゃない。残存部隊がようやく態勢を立てなおして、回転式ラニング連発弩フアイヤをこっちに向けた。そして射しや撃げきを開始した。それよりちょっとだけマリアローズのほうが早かった。全員ではないにしても、それなりの数の番人たちが、副長代理の指示に従ってくれた。彼らは盾で屋根を作った。矢が降ってきた。バツバツズダズダ降っては盾の屋根に撥はね返された。一部は番人の鎧よろいに弾はじかれた。あるいは貫つらぬいて傷を負わせた。むなしく地面に突き刺さった矢もある。半鬼人ハーフオーガに、つまり、敵にしてみれば味方に命中してしまった矢もある。矢の雨が流れを変えることはなかった。

　秩序の番人は前面の敵を押し破って濁だく流りゆうのように第一支塔に傾なだれこんだ。マリアローズが第一支塔に足を踏ふみ入れたときにはもう、トマトクンたち先頭集団は主塔への通路に入りこもうとしていた。ユリカと羅叉が追いついてきた。羅叉が「どけ！」「のけい！」と番人たちを押しのけた。これ幸いとばかりに、マリアローズは羅叉についていった。もっと前へ。前へ行かないと、状じよう況きようがわからない。把は握あくしづらい。

　やがて最前列近くまできた。第一支塔と主塔を結ぶ通路は、幅はばが六メーテルくらい、高さは四・五メーテルといったところだろうか。完全に敵で埋うめつくされている。トマトクンが大たい剣けんを振ふるい、振るって、そいつらを肉につ塊かいや骨こつ片ぺんや何がなんだかわからない残ざん骸がいに変えて、変えまくっても、後ろから新あら手てがどんどん押しだしてきた。おかしい。

ちょっと変だ。

　通路の敵は半鬼人じゃない。人間だ。リヴァイスの装備に身を包んでいて、人相が悪くて、いかにも凶きよう悪あくそうな、ただの悪党たちだ。そのわりに、むちゃくちゃだ。やつらは味方の肉片を踏み越こえ、血ち塗まみれになってトマトクンに飛びかかってゆく。当然、斬られる。たやすく。ぶった斬られる。それなのに、やつらは怯ひるまない。これっぽっちも。笑いながら、味方の腕うでやら足やらを投げつけてくるやつまでいる。

　完全にイッている。

　薬か。ドラッグ。薬物か。

　これはきっと凄せい惨さんなことになる。負けはしない。こっちの被ひ害がいは決して大きいものにはならないだろう。でも、悲ひ惨さんな戦場になる。

　そのとおりになった。トマトクン以下、前列の番人たちは、休みなく剣を振りまわし、突きだして、ひたすら人間を破は壊かいした。その上を、番人たちは進んだ。血肉の海と化し、血と臓物と糞ふん尿にようの臭しゆう気きが充じゆう満まんした通路を、半ば泳ぐように少しずつ進んでいった。一度ならずマリアローズは思った。何だよ、この行進。いったい何なの？　秩ちつ序じよの番人は、勝利を目指して力強く歩を進めている。油断するとやられる。押し返されるかもしれない。そんな危き惧ぐは一つも浮うかんでこないし、終着点までの距きよ離りは別として、一歩ずつ勝利に近づいている。それは間ま違ちがいないのに、まったくそんな気がしない。むしろ、無む駄だなことをやっている。とてつもなく馬ば鹿かげたことを。そんなふうにさえ思える。何の意味もなく、人が死ぬ。死んでいる。死んでゆく。違う。秩序の番人が、自分たちが、殺しているのだ。何だよ。何なんだよ、これ。

　トマトクンやピンパーネルは最初と変わらない。平然と殺して、殺して、殺しつづけているけれど、他ほかの番人たちはさすがに嫌いや気けがさしているようだ。そこは番人なので、出すまいとしているはずだが、それでも顔に、態度に、動作に出てしまうくらい、彼らは耐たえがたいものを感じている。

　これが狙ねらいなのか。ＳＩＸの計算か。こんなことのために、これだけの人間を犠ぎ牲せいにするのか。連中はもしかしたら、最

近ＳＩＸの手下になった──ひょっとしたらファッション感覚で、流行に乗り遅おくれまいとして、なんとなくかっこいいからとか、そんなくだらない理由でジェノシドの一員になった男たちなのかもしれない。ＳＩＸはそいつらに薬を飲ませるか、打たせるかして、捨て石に仕立てたのかもしれない。だから、べつに惜おしくないのかもしれない。どれだけ死のうと、全滅してしまったところで、痛くも痒かゆくもないのかもしれない。

　違う。そうじゃない。ＳＩＸはそういう男なんだ。自分以外はどうでもいい。自分の子供さえ駒こまみたいに使う。でも、何のために？　ＳＩＸの目的は？　本当にＳＩＸの狙いは、悪徳とやらを再生する、実現すること、それだけなのか？　これが悪徳なのか？　この有様が？　行こう為いが？　結果が……？

　とうとう通路を抜ぬけた。秩序の番人は一人の例外もなく血みどろだった。おそらく、全身を隈くまなく洗っても、この臭においはしばらく消えないだろう。

　主塔一階はがらんとしていた。いや、そんなことはない。階段のところに敵が密集している。その奥にやつがいた。

「ＳＩＸッッ……！」トマトクンがそう叫さけんで駆けだすと、ＳＩＸはすっといなくなった。逃にげたのだ。階段を上っていった。番人たちは一いつ斉せいに階段へと押しよせた。今度の敵はまともだった。生意気にも、槍やり衾ぶすまを作って番人たちの突とつ撃げきを防ごうとした。小こ賢ざかしい、とばかりに、トマトクンが大剣の一振りで十本以上の槍を叩たたき折った。そこにカタリが突つっこんでいった。羅叉も負けじと日輪で敵を斬り刻んだ。李童晏がつづいた。琺瑠も食くらいついた。ピンパーネルが敵を飛び越えて、その後ろの敵の肩かたを蹴けり、そのさらに後ろの敵に躍おどりかかって、手早く解体した。敵は動どう揺ようしたものの、退かなかった。馬鹿の一つ覚えみたいに階段の上から槍を突きだしてきた。狭せまい階段では、この一つ覚えがなかなか厄やっ介かいだった。トマトクンさえ、上から突き下ろしてくる槍が頬ほおをかすめて、薄うすい傷を負った。

　秩序の番人は少しずつ敵を削けずりとり、食い破って、一段一段、階段を上った。

　ようやく二階だ。百八十度曲がって、その先が三階への階段になっている。

　マリアローズは上を見た。白い顔。黒い服。薄うす気き味み悪わるい眼光。ＳＩＸ。いた──と思ったら、やつはこっちに背を向けて階段を上がっていってしまった。くそ。あーもう苛いら々いらする。ハーレム・ゴードン──爆ばく弾だんを使えれば。無理だ。槍が邪じゃ魔まだ。どれかの槍に当たったら、そこで爆発して、味方にも被害が及およびかねない。落ちつけ。冷静に。第一の目的はあくまで極ごく悪あく城じょうの攻こう略りゃくだ。ＳＩＸは第二だ。それを忘れるな。着実に上っていって、主しゅ塔とうを制圧してから、極悪城内の掃そう討とうにとりかかる。いいんだ、それで。マリアローズは振り返って叫んだ。「無名隊！　二階の捜そう索さく、お願い！」

　クルチバやクルエルフォートが何か返事をした。階段での抵てい抗こうは予想されていたが、他の場所にも兵が伏ふせてあるかもしれない。打ちあわせで、無名隊がその警けい戒かいにあたることになっていた。彼らにしてみれば、言われるまでもない、といったところだろう。でも、前もって決めていたことが守られるとはかぎらない。確かく認にん、念押しは、できるだけしておくべきだ。

　少しずつでいい。確実に片づけてゆく。絶対に焦あせってはいけない。秩序の番人よ、上れ。一段。また一段。そうして、三階──四階。ここは、分厚い。抵抗が。今までとは違う。ＳＩＸが上にいる。何か命じた。何だ、あれは。上のほうのジェノシドが、槍とは違う──そもそも、武器じゃない、鍋なべのようなものを持っている。というか、鍋だ。湯気を上げている。

　マリアローズは「──盾たて！」と叫んだ。それと前後して「盾！」「盾だ！」「盾！」と何人もが怒ど鳴なった。ジェノシドどもが次々と鍋を放ほうり投げた。鍋は中身をぶちまけながら飛んできた。液体だ。色からして、水じゃない。油か。マリアローズはとっさに外がい套とうを引っかぶった。悲鳴がこだました。「あづっ！」「ぢいっ！」「あっぐ！」「うああ……！」

　やばい。油──それって。でも、敵と味方がほとんど密着してるのに。相手はＳＩＸだ。関係ない。マリアローズは外套をはねのけて、見た。上を。火。細い松たい明まつ。二人だ。二人のジェノシドが一本ずつ松明を持っている。投げようとしている。こっちに。僕は無力だ。何もできない。熱した油。火。考えれば思いつきそうな手なのに、頭になかった。甘い。甘すぎる。僕は無力だ。僕は。

　彼は違った。砂色の元アッサシンは。

　彼の前にも敵がいて、槍の壁かべが立ちふさがっていた。でも、彼には関係なかった。彼には道があった。彼にとって、道は必ずしも平へい坦たんである必要はない。細くても、曲がりくねっていても、でこぼこしていてもいい。傾けい斜しやがきつくてもかまわない。ある程度の距離なら、垂直の壁すら、彼には道になりうる。

　彼は壁を道にして疾しつ走そうした。そうして、今まさに松明を投とう擲てきしようとしていたジェノシドの右みぎ腕うでを斬きった。松明ごと斬って、斬って、斬りまくった。炎ほのおまで斬ってしまった。すごい。見事だ。でも、松明を持っているジェノシドは、もう一人いた。

　そのもう一人がピンパーネルのほうを見た。何か喚わめきながら、松明を投げた。その手から松明が離はなれた。離れてしまった。その直後だった。

　ピンパーネルが二人いる。違ちがう。ピンパーネルじゃない。逆側の壁だ。彼も壁を道にして走り、そこまで到とう達たつしたのだ。

　彼は銀色の鎧よろいを脱ぬいでいた。総長争そう奪だつ変則トーナメントのときのクルエルフォートと同じように、暗色のぴったりしたボディスーツ姿だった。中肉中背か、やや痩やせ型で、撫なで肩がた。どうってことのない金きん髪ぱつ。八番突撃隊隊長シャット・〝神しん剣けんグレヒャ〟だ。

　グレヒャは左手で松明をつかんだ。同時に、近くのジェノシドの頭を踏ふんづけた。それを足場にして、跳とんだ。松明を投げたジェノシドに飛びかかって、その口の中に、はい、お返ししますよ、とばかりに突っこんだ。もちろん、松明を。それから、グレヒャは右手のモトロール刀を閃ひらめかせた。タタタン・タタン・タンタン・タタタン。剣でそんなリズムを刻んでみせた。マリアローズの目では、その剣筋はほとんどとらえられなかったが、リズムは感じた。明確に感じられた。その間、グレヒャは上を見ていた。恍こう惚こつとした表情だった。剣だけがリズムを刻みながら敵を刻んだ。加えて、ピンパーネルも休んでいなかった。雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣は刃ブレードの旋せん風ぷうと化して次々と敵を解体した。

　敵の只ただ中なかに穴があいた。

　マリアローズは見た。ＳＩＸだ。逃げた。まただ。その瞬しゅん間かん、敵は崩ほう壊かいした。番人たちは雄お叫たけびをあげて、一挙にジェノシドを蹂じゅう躙りんした。五階へ。五階へ。五階へ。ついに到達した。五階だ。秩ちつ序じよの番人は後退する敵を蹴け散ちらしながら廊ろう下かに出た。

　ずっと向こうに総長室がある。

　ピンパーネルとグレヒャは先行している。

　ＳＩＸ。いた。総長室の前だ。足を止めて、こっちに身体からだを向けている。やるつもりなのか。迎むかえ撃うつ気か。望むところだ。そんなことは言わない。ピンパーネルも、グレヒャも。言葉は無用だ。彼ら二人には。番人たちは吼ほえた。殺やれ。討うちとれ。やつを。ＳＩＸを！　ＳＩＸ、ＳＩＸ、ＳＩＸ！　あの外げ道どうを……！　それらの声が彼ら二人を後押しすることもない。彼らには必要ない。彼らはすでに放たれた矢だ。放っておいても飛んでゆく。まっすぐ飛んでゆく。そうして貫つらぬこうとする。標的を。ＳＩＸを。

　ピンパーネルはまたもや壁走りを披ひ露ろうして、斜ななめ上からＳＩＸに襲おそいかかった。

　グレヒャは低い姿勢でまっしぐらに突っこんでいった。

　ＳＩＸは黒を基調として青と赤の紋もん様ようが配されたボディスーツを着ている。その手首から、肘ひじから、肩口から、胸から、腰こしから、腿ももと腰の付け根から、膝ひざから、無数の細い紐ひもが垂れさがっていて、それらはただの飾かざりでは断じてない。ＳＩＸはまず両腕を振ふりあげた。その動きにあわせて細い紐が凶きよう器きと化す━はずだった。その前に、ピンパーネルが雄おすのグレアデと雌めすのリレッザでやつの両腕を斬った。何度も何度も斬りつけた。抉えぐった。剝いた。野菜の皮かわ剝むきをするように。ＳＩＸの両腕は、あっという間に腕とは呼べないものに成り果てた。

　そしてグレヒャがＳＩＸの脇わきを通り抜ぬけた。疾しつ風ぷうのごとく駆かけ抜けて、止まった。

　ＳＩＸは崩くずれた。腰のあたりで両断され、上半身が下半身に別れを告げた。ＳＩＸは二つになって地面に落ちた。

　グレヒャは振り返り、血ち振ぶるいをして、首を横に振った。この成り行きに、結果に、げんなりしている。そんな表情だった。「……違う」と言った。ただでさえ八の字気味の眉まゆなのに、もっと眉根を高くして、呻うめくように。「──これは、違う。ＳＩＸじゃありません」

　ピンパーネルがこっちを向いた。「これ、女デス」

「な──」マリアローズは絶句した。

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」というかんじの哄こう笑しようが弾はじけた。ＳＩＸの──いや、ＳＩＸじゃない。それは明らかに女の声だった。ＳＩＸだと思われていた女が、激しく胸を上下させながら「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」と笑っていた。もし腕や足が健在であれば、ばたばたさせていたかもしれない。それは叶かなわない。とにかく女は笑った。

　番人たちは、逃にげ惑まどう、もしくは悪あがきをするジェノシドどもを斬り伏ふせて、蹴け倒たおし、突つき殺しながら、その声を聞かされた。マリアローズもようやく、この日初めて一人しとめた。女の笑い声を聞きながら──くそ、なんで、くそ、騙だまされた──そんなふうに思いながら、怒いかりに支配されそうになりながら、一人のジェノシドを二本の剣で殺した。血ち塗まみれの死体を見下ろして、ダメだ、冷静にならないと、思う壺つぼだ──そう自分に言い聞かせた。八つ当たりのように人の命を奪うばった自分に、嫌けん悪お感かんなんて抱いだかなかった。そこまで初う心ぶじゃない。自分自身をふくめて、手を汚よごさずに生きてきた者なんて、この場にはいないのだ。

　マリアローズはルーシーをちらりと見た。ルーシーはユリカとサフィニアに両脇を挟はさまれて立ちつくしていた。その手にはモトロール刀が握にぎられている。血に濡ぬれてはいるが、血を吸ってはいない。無む垢くな刃はだ。あの子も侵入者クラッカーとしてアンダーグラウンドでたくさんの異界生物フリークスを殺してきた。とはいえ、基本的に人間と敵対関係にある異界生物フリークスだ。人間相手とはまた違う。女の声を聞いて、おののいているあの子は──その手は、まだそこまで汚れてはいない。

　女は長い笑い声の果てに、血を吐はきながら「ざーんねーんでしたぁー」と言って笑った。弱々しい笑い声だった。それは唐とう突とつに途と切ぎれた。女は大きく息を吐いてから、ひっ、と吸いこ

んだ。「──お、とお……さん……な……な、な……ナナミ、は……いう、とおり、に……ほめ、て……お、とお──」

　ナナミ。それが女の名前なのかもしれない。もはやナナミに残されている命は、決して長くはなかったはずだ。その命を最後まで使い切ることはできなかった。許されなかった。

　グレヒャが跳とびあがって、両足でナナミの顔面を踏んだ。そのままもう一度跳ちよう躍やくして、さらに踏んだ。それから右足だけで踏ふんだ。何度も踏んだ。踏み潰つぶした。

　グレヒャは血やら脳のう漿しようやらでぐちょどろに汚れた右足を床ゆかにこすりつけた。「あーあ。きったないなぁー。頭にきちゃいますよ。まったく。あんまりふざけないでほしいなぁー。こっちは真しん剣けんなんですから。神剣だけに。なんてね。いいかげんにしないと、冗じよう談だん抜きで殺しちゃいますよ、ほんとに」

「いや……」ルーシーの顔は真っ青で、声は震ふるえに震えまくっていた。「も、もう、殺してるじゃないですか……」

　そこでつっこむのか。地味に筋金入り？　もしかして、つっこみ役としてはマリアローズより優ゆう秀しゆう？　ちょっとショック……？　や。そんなことないけど。てゆうか、それより──

「やつはいないのか！」と羅叉が叫さけんだ。

　ピンパーネルが総長室の扉とびらを開けた。すぐに顔をこっちに向けて、首を横に振った。

「──ヨハン……！」珐瑠が駆けだした。総長室の前を通りすぎて、さらに向こうへ。秩序の番人は追った。何も言わずに、トマトクンすら無言で、珐瑠につづいた。廊下を曲がって、その突きあたりに扉があった。開けると、狭せま苦くるしい階段室だった。五階までの階段とは違ちがう。二人が横並びになるのがやっとだ。そんな階段を上ると、屋根裏部屋に出た。マリアローズも図面で確かく認にんしたから一応、知っている。屋根裏部屋は五階と屋上の間にある。そこは何の設備もない。窓すらない。がらんとした、埃ほこりっぽい、ただの部屋だ。いや、部屋というより通り道なのだ。屋根裏部屋の端はしに、それはある。梯はし子ごだ。天てん井じようへと通じる金属製の頑がん丈じような梯子が壁かべに据すえつけら

れている。天井には扉がついている。今は開いている。開け放されている。

　琺瑠が梯子を登ろうとしている。トマトクンが「待て！」と制した。琺瑠はトマトクンのほうを見た。見ただけだ。止まらない。やはり登ろうとしている。トマトクンは諦あきらめずに止めた。腕うでずくだった。琺瑠の腕をつかんで引きずり下ろし、自分が先に登った。琺瑠はそのあとにつづいた。次は羅叉だった。マリアローズも梯子を登った。急いで、登った。

　屋上の端に出た。稲いな光びかりが曇どん天てんを切り裂さいた。遠くで雷らい鳴めいが轟とどろいた。雨はまだ降っていない。今にも降りだしそうだ。

　屋上のど真ん中には大半永久灯が設置されている。それは球体だ。直径二メーテル以上もある球形の半永久灯を、四本の鉄柱が囲んでいて、その上に屋根が被かぶせてある。

　やつは鉄柱の一本に左手をかけて立っていた。ナナミのそれと似たような、おそらく同じボディスーツを身にまとっている。その右みぎ肩かたに何かが担かつがれていた。何か。物じゃない。人だ。黒い鎖くさりでがんじがらめにされている。全ぜん裸らで、傷だらけの、しかも、じつにさまざまな種類の傷を身体からだ中に負っている──男だ。琺瑠が男の名を呼んだ。「──ヨハン……！」

　男は頭をもたげた。顔は無傷だった。それにもかかわらず、顔が一番ひどかった。あれは生者の顔じゃない。死者の顔でもない。死者の顔から型をとって作った死面デスマスクみたいだ。そこには顔の形をしたものがあるだけだった。他ほかには何もなかった。それでも男は唇くちびるを動かした。声を出した。「……ふぉー……る……」

　琺瑠は足を前に進めようとした。同時に、やつは鉄柱から手を離はなしてあとずさった。琺瑠は止まった。でも、やつは違った。ゆっくりと、一歩、二歩と、後退しつづけた。琺瑠がまた前に出ようとしたら、やつは後ろ歩きの速度を速めた。琺瑠が止まると、ゆるめた。やつは裂け目のような口を大きく開いて嗤わらった。「Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　マリアローズはトマトクンを見た。トマトクンはやつを睨にらみつけている。寒気がするような顔つきだ。でも、動かない。誰だれも動けない。

　やつ以外は。

　いや。

　やつも止まった。ついに。あたりまえだ。止まらざるえない。だって、そこはへりだ。屋上の端っこだ。その向こうには何もない。

「どうしたんだい……？」やつはえへらえへらしている。「どうしたんだい、反へ吐どが出るくらい愛らしい、賢さかしいつもりでいるのかもしれないが、猿さる並みの知能しか持っちゃいない、だからこそかわいくてたまらないベイビーたち？　我わが輩はいは一人きりだってのに、かかってこないのかい？　絶好のチャンスなのに？　なぜだい？　カモォォーン。こいよ、カワイ子キユーちゃんテイたちズ。きて、みんなで我輩の悪魔の塔デビルズタワーをぺろぺろちゅぱちゅぱしろよ。競うように。奪いあうように。それだけの価値はあるはずだよ？　でも━嗚あ呼あ、そうさ、そいつァーわかってるよ、我輩もねえ、小リさトなル愛ハ人ニたーちズ、お前たちはできない。できないんだ。そうだろう？」

「ＳＩＸ」とトマトクンは言ったのだろう。でも、そうは聞こえなかった。マリアローズの耳には「シィィィィィーックス」と聞こえた。低い、地鳴りのような声だった。「━貴様、何を企たくらみくさってやがる」

　ＳＩＸは左手の人差し指でこめかみのあたりを、ぽん、ぽん、と叩たたいた。「それくらい、自分で考えろよ、サー・ディオロット・マクスペイン」

　トマトクンは何か呟つぶやいた。ごくごく小さい声だった。近くにいるマリアローズにもはっきりとは聞こえなかったが、「すまん、ヨハン」と━たぶん、トマトクンは呟いたのだ。

　トマトクンは駆かけだした。

　二歩目にはもうトップスピードだった。

　三歩目に、ＳＩＸが後方へ身を躍おどらせた。

　後ろへ跳んだのだ。

　その向こうには何もないのに。

　ＳＩＸは叫んだ。「ジェェェェェェェェェーイ！」と。それはある男の名前だった。そのことはすぐにわかった。ＳｍＣ時代からの、ＳＩＸの側近、おそらく元アッサシン、鷲わし鼻ばなで灰色の目をした男の名だということは。

　ＳＩＸは側近の名を虚こ空くうに向かって叫んだのだ。

　そうして、落ちていった。

　その姿はすぐに見えなくなった。

　トマトクンはいったん足をゆるめた。また速めて、屋上の端まで行った。琺瑠が、羅叉が、ピンパーネルがつづいた。琺瑠は屋上から飛びだそうとした。羅叉がその胴どうに腕を回して止めた。琺瑠はヨハンの名を呼んだ。悲鳴のように。女の声で。ほとんど金切り声だった。その声が途と切ぎれる前に、何かが──屋上の向こうに、何か巨きよ大だいなものが、せりあがってきた。

　それは全体的には黒っぽかった。赤い部分と、緑色の部分、それから青い部分があった。それはどう考えても生き物だった。こっちに背中を──というよりも、尻しりを向けていた。それは腕と呼ぶには大きすぎるものを上下に動かしていた。羽ばたいていた。翼つばさだった。トマトクンが怒ど鳴なった。「──ギニェス大だい亜あ鳥ちようだと……!?」

　マリアローズは思わず「何それ!?」と言ってしまった。

　トマトクンは振ふり返って、前方を指さしてみせた。「あれだ」

「や、それはわかるけど……！」

　ギニェス大亜鳥は羽ばたきつづけている。翼よく長ちようは七、八メーテルほどもあるだろうか。巨体だ。紛まぎれもなく鳥以外の何物でもない姿だが、何か間ま違ちがっているのではないか。錯さっ覚かくか、幻まぼろしなのではないか。そんなふうに思えるほど、大きすぎる。その翼の運びは重々しい。きっと重いのだ。大きすぎて。自分の身体が。いや、仮にも鳥ならそんなわけがない。そうじゃなくて、重いのはあれだ。

　ギニェス大亜鳥の黄色い足に、やつがつかまって、ぶらさがっている。

　ＳＩＸだ。

　やつはもう、ヨハン・サンライズを担かついではいない。やつは左手でギニェス大亜鳥の足を握にぎりしめ、右手には黒い鎖くさりを持っている。その黒い鎖はヨハンをがんじがらめにしている。つまり、ＳＩＸはギニェス大亜鳥にぶらさがっていて、そのＳＩＸにヨハンがぶらさがっている。

「Ｇｙａａａｈ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａａａａｈ……！」

　ＳＩＸが馬ば鹿か笑いしている。やつはこっちに身体からだを向けているけれど、ギニェス大亜鳥は違ちがう。あっちを向いている。でかい翼を一いつ生しよう懸けん命めい羽ばたかせて、少しずつ高度を上げながら、遠ざかってゆく。徐じよ々じよに。でも、確実に。

　遠い。

　届かない。

　十分に助走をつけて、屋上の端はしから跳とんだとしても、無理だ。

　マリアローズは振り向いた。サフィニアはちょうどその瞬しゆん間かん、梯はし子ごを登ってきて、屋上に顔を出したところだった。ダメだ。間に合わない。今からでは。いくらサフィニアでも。

　何か、変なものが見えた。

　視界の隅すみに。そんな気がした。気のせいなんかじゃなかった。屋上の角だ。

　いつからそこにいたのか。おそらくちょっと前だ。たぶん、どうやってか知らないけれど、外がい壁へきを登ってきたのではないか。そうして、この場面に遭そう遇ぐうした。で、そいつは走った。ピンパーネルにまさるとも劣おとらない速度で。人間離れした、超ちよう越えつ的な速さで疾しつ駆くして、そいつは屋上の端からジャンプした。「──とうッ……！」

　そいつは見覚えのある恰かつ好こうをしていた。ただ、色違いだった。この前は青で、今日は赤みをふくんだ濃こい黄色だった。そんな色の衣い装しようを身にまとい、同じ色の仮面をつけていた。仮面は新しい試みかもしれないが、とにもかくにも今日は黄色い男になっていた。ただ、その右手には、毒々しい深しん紅こう色しよくの、長い──鞭むちのような、それにしては太い物体があった。その正体をマリアローズは知っている。あれは鞭じゃない。剣けんだ。何節にも分かれて、節ごとで自在に折れ曲がる刃は。数多くの秘宝を自らつくりあげたという哀あわれな夢追い女王──魔ま導どう王おうレディ・麟りん霊れいの最高傑けつ作さくの一つ、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガー。その真価を発揮する形態こそが、あれだ。

　断末魔デスクライの剣・ソードだ。

　黄色い男はものすごい跳ちよう躍やくを見せた。十メーテル以上。高さは二メーテル以上。そこが頂点だった。あとは弧こを描えがいて落下する。そのポイントで黄色い男は、断末魔の剣を振るというより、横手投げの要領で送りだした。「──覚かく悟ごォッ……！」

「Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」ＳＩＸは禍まが々まがしい両眼を驚きよう愕がくに見開いた。そうして、左ひだり腕うでを曲げて身体からだを引きあげ、腹筋の力で両りよう脚あしを持ちあげた。左右の脚と尻がほぼ完かん璧ぺきなＶ字形を形づくった。もう少しだったのに。あとちょっとだった。よけられた。断末魔の剣はＳＩＸの尻の少し下を通りすぎて、ひゅん、と黄色い男の手て許もとに戻もどった。黄色い男はおそらく、その結果を狙ねらったわけではないだろう。たぶん、偶ぐう然ぜんだ。

　断末魔の剣がＳＩＸをとらえることはなかった。でも、黒い鎖にあたった。その鎖はヨハンの全身に巻きつけられていた。ＳＩＸとヨハンを繋つないでいたのだ。それが断たち切られた。

「Ｋｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……！」ＳＩＸは唸うなりながらギニェス大亜鳥の足を両手でつかみなおした。ＧＩＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ……！　ギニェス大亜鳥が耳をつんざく鳴き声をあげた。大きな翼が空を叩たたいた。急きゆう上じよう昇しようした。

　黄色い男はもう降下している。まっすぐじゃない。まだ。とりあ

えず、今のところは。前方に進みながら──ようするに、斜ななめに落ちていっている。

　ヨハン・サンライズはまさしく落下している。完全な鉛えん直ちよく線を描いている。

　二人が一点で交わった。

　黄色い男は左腕一本でヨハンを受け止めた。そうして身体を反転させた。こっちに向けた。そのときにはもう、黄色い男は主しゆ塔とうの屋上よりも低い位置にいた。マリアローズはいつの間にか、自分でも気づかないうちに、屋上のへりにいた。トマトクンや、珐瑠や、羅叉や、他ほかの番人たちと一いつ緒しよに、身を乗りだした。

　黄色い男は「アルカーディア！」と叫んだ。その右手から──断末魔の剣を、握っているのではなくて、むしろ生やしている右手から、さらに別のものが飛びだした。それは黒い管のようなものだった。黒い管は伸のびた。水平方向に。そして突つき刺ささった。主塔の外壁にしっかりと食いこんだ。それから縮んだ。みるみるうちに縮んでいって、でも──黄色い男はその間もヨハンを抱だいたまま落下しつづけたので、結果として、斜めに振りおろされるように、黄色い男は外壁に激げき突とつした。いや。着地した。だいぶ短くなった黒い管と両足とで、自分自身とヨハン、二人分の体重をちゃんと支えていた。

「ファァァァーック！　ファック！　ファック！　ファァァァァァァーック……！」ＳＩＸの声はもう遠い。でも、まだ聞こえる。よく通るのだ。人の神経を逆さか撫なでしてやまない、不気味な低音に不快な高音が微び妙みようが入り交じっている、その声は。ＳＩＸは両脚をＶ字形に上げたまま、しばらく罵ののしり言葉を発していたが、やがて笑いだした。「Ｇｕ□Ｈａ！　Ｍｕ□Ｈａｈａｈａｈａｈａ！　Ｂｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ……！　いいさ、まあいい！　玩具おもちゃが一つなくなっただけだからねえ！　これからだ！　すべてはこれからだよ！　これから始まるんだ！　イッツ・ショオタァーイム！　Ｇｕｈｅｇｕｈｅｇｕｈｅｇｕｈｅ□Ｈｅｈｅｈｅｈｅｈｅｅｅｅｅｅｅｅｅｈｈｈｈ……！」

　その足にＳＩＸをぶらさげたギニェス大だい亜あ鳥ちようの姿は、どんどん遠ざかってゆく。

　もっとも、高度はなかなか上がらない。それどころか、次し第だい次し第だいに下がっている。どこかにＳＩＸを降ろすつもりなのか。それはいい。いや、よくはない。ぜんぜん。まったく。大事なことだ。とてつもなく。だけれど、それより今は──マリアローズは見下ろした。黄色い男はいた。外壁じゃない。下だ。地面にいる。ヨハンを横たえて、見上げた。

　相手も、こっちも、どうすればいいかわからない。何を言うべきか。奇き妙みような、気まずい沈ちん黙もくだった。とにかく、それをどうにかしたかった。

「……と、飛べばよくない？　どうせなら……」

　黄色い男との距きょ離りは、かなりある。それに、マリアローズの声は小さかった。よく聞こえたものだ。

「あ、あれは、その……」黄色い男は咳せき払ばらいをした。「ボクにも都合というものがあって、まあ……けっこう、テンションが高くないと、ネ……いや⁉　何のことかなァッ⁉　ボクは通りすがりの仮面の男〝黄色いゴールド薔薇マリー〟だヨ⁉　本当に偶然、ただ通りがかっただけなのサ！　というわけで、さらばッ……！」

　黄色い男は脱だつ兎とのごとく走り去った。

「あの、バカ……」

　頭が頭痛で痛い。

　そんな気分だった。

　いや、痛いとか言っている場合じゃない。ギニェス大亜鳥は。ＳＩＸは。もう遥はるか遠くだ。黒い豆まめ粒つぶにしか見えない。かなり低空飛行だ。黒い豆粒から、もっと小さな黒い豆粒が分離した──ように見えた。ＳＩＸがどこかの建物の屋上に降りた。そういうことか。

　ＳＩＸとおぼしき黒い小豆あずき粒つぶを降ろした黒い豆粒──ギニェス大亜鳥は飛んでゆく。

　高く。

　遠くへ。

　間もなく見えなくなってしまった。

　トマトクンが「むう……」と唸った。

「……と、取り逃にがしちゃった……」

　呟つぶやいた声が自分のものとは思えない。頭の中が真っ白だ。何も考えられない。

「ああ……」珐瑠が崩くずれ落ちるように座りこんだ。「ああ……ヨハン……ヨハン……」

　その肩かたが、背中が、小刻みに震ふるえている。珐瑠は両手で顔を覆おおって━泣いているのか。

「お、追わないと……！」マリアローズはそう叫んで、あたりを見まわした。仰ぎよう天てんしたように目を瞠みはった者もいる。かくかくとうなずいた者もいる。そうだ。追わないと。でも、どうやって？　具体的な方法は？　思いつかない。何も。歯がゆい。こんな自分が。

「下に降りるぞ」トマトクンの声こわ音ねは落ちついていた。「ヨハンを確保して、残敵を掃そう討とうしつつ追つい跡せき部隊を出す。マリア！　珐瑠！　被害状じよう況きようを把は握あくして、追跡部隊を編制しろ！　ピンプは先行して、やつを追え！」

「はイ」ピンパーネルは即そく座ざに駆かけだした。

　マリアローズは返事もそこそこに珐瑠を抱き起こした。珐瑠は「大だい丈じよう夫ぶ」と小声で言って、マリアローズの腕うでを振ふり払はらった。

　耐たえかねたように、小雨がぱらつきだした。

　マリアローズは一度だけ、深呼吸をした。

　切り替かえよう。

　そうだ。切り替えないといけない。

　腹立たしいことに、ＳＩＸが言っていたとおりだ。これからだ。すべてはこれから始まる。そして、終わる。

絶対に、終わらせてやる。

一度、動きを止めた──ＳＩＸのふざけた逃とう走そう劇で止められた秩ちつ序じよの番人は、動きだす。急速に。加速して、その活動を拡大させた。極ごく悪あく城じようは掃討だけしてひとまず打ち捨て、崩れた防ぼう壁へきの前を仮の本部として雨あま除よけの天幕を張り、マシュー・シュナイデル以下の別働隊はアサイラムへと戻もどって、本隊所属の突とつ撃げき隊、遊撃隊、警けい邏ら隊はエルデン中に散った。無名隊の隊士たちは鎧よろいを脱ぬいで一いつ般ぱん市民に変装し、二人一組でＳＩＸを捜さがしまわった。

半日経たった。成果は上がらない。ピンパーネルが仮本部に戻ってきたが、めぼしい情報はもたらされない。

一日経っても、状況は同じだ。雨は強まったり弱まったりしながら降りつづいている。何も変わらない。エルデンは静かだ。どの隊も、誰だれも、ＳＩＸの姿を目撃するどころか、ジェノシドらしき者も見られない。

おかしい、と感じはじめる。

仮本部は冷静さを保とうとしている。でも、現場の隊士たちは違ちがう。実際に動いている、ずっと動きまわっている隊士たちはきつい。肉体的な、精神的な疲ひ労ろう。苛いら立だち。焦あせり。限界だ。今はなんとか大丈夫でも、そのうち限界がくる。この態勢はまずい。すでに検討はされていた。この段階で決定した。ＳＩＸの逃走から、ほぼ丸一日経過して、各隊は計画的に運用されるようになる。索さく敵てき行動。休きゆう憩けい。索敵行動。休憩。食事も、睡すい眠みんもとる。強制的にとらせる。

銀の砦とりでから運びださせた仮本部のテーブルの上には、エルデンの地図が広げられている。区分けされ、色分けされて、記号が記入され、その隣となりには表がある。表と地図を見れば、各隊の行動計画がわかるようになっている。仮本部に隣りん接せつして設置された四つの天幕は仮眠所だ。仮本部に詰つめているトマトクン、琺瑠副長、マリアローズ副長代理、各無名隊の隊長以下二十数名が休むときに使う。その他ほかの隊士たちは奪だつ回かいされた

銀の砦内で眠ねむる。

　六巡じゆん月げつ十七番日。ＳＩＸの逃走から二日経って、ようやく雨が上がった。夕方、十八時、ついにシャルロット・リンデ率いる十二番遊撃隊がＳＩＸの姿をとらえた。

　場所は第五区、ブランドショップが軒のきを連ねるカンダヴァストリートの近くだ。黒山の人だかりができている。若い男女が喚わめいたり押しのけ突つき飛ばしあったりしながら何かに殺さつ到とうしている。男女の頭上を何かが飛び交かう。たくさんのものが。それは布だ。違う。衣服だ。それから、小こ瓶びんだ。人を象かたどった形状で、銀色の蓋ふたがついている。人だかりの中心で、一人の男がすっと台に跳とび乗った。歓かん声せいがあがった。男女は一いつ瞬しゆんで熱ねつ狂きようした。男は無言で人差し指一本を立てて空を示した。男女が連呼した。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ……！

　シャルロット・リンデ以下十八名の番人たちは、まさにその声を耳にした。そして、声の方向へと急行した。多くの男女は番人たちに気づかない。ごく一部だ。最初は数人の男女が振り返って、そこに番人の姿を認めた。番人だ！　銀の軍団ザ・シルバリイ！　若じやつ干かん名めいは逃げだして、他はとどまった。彼らには目的があった。悪徳再生リヴアイスだ。以前は頻ひん繁ぱんに、エルデンのそこかしこで行われていた服ふく飾しよく品の即そく売ばい会かい、あの奇ゲ襲リ劇ラが、極悪城陥かん落らく以来、行われなくなった。とうとう再開したのだ。しかも、リヴァイスのシンボルにしてジェノシド総統のＳＩＸがいる。話題の男が、闇のアイドルが、奇ゲ襲リ劇ラ再開記念と称しようして、ある物をばらまいていた。手ずから、あるいは付き従うジェノシドが、手て渡わたすというよりも投げ与あたえていた。それは━胸には悪徳再生リヴアイスの文字が、背中にはジェノシドの紋もん章しようがプリントされている、黒いＴシャツだった。もう一つは小瓶だ。若い男女はそれらを奪うばいあっていた。とりあい、引きちぎった。破れてしまったＴシャツを手に、別のＴシャツを求めた。いくつもの小瓶が割れた。小瓶の中身は液体だった。香こう水すいだ。頭の芯しんを焼くような、濃のう厚こうな、扇せん情じよう的な香かおりがあたりにたちこめた。

　十二番遊撃隊は突とつ進しんした。リンデ隊長が鋭えい利りな声で「のけい！」と叫さけぶと、ようやく人だかりの後こう尾びが左

右に割れた。それでもなお、若者たちはＴシャツに群がり、ＳＩＸに少しでも近づこうとしている。その大部分は、そもそも十二番遊撃隊の出現に気づいていない。ここで、リンデは決断した。彼女は果断だ。義を貫つらぬくにあたって躊ちゅう躇ちよしない。義に背そむく者のみならず、妨さまたげる者にも容よう赦しやしない。

　リンデは一人の若者を──悪党風のファッションに身を包んでいる、でも、ちょっと間の抜ぬけた顔をした、いかにもお調子者といった風ふ情ぜいの、エリック・グレグデンという名の二十一歳の男を、盾たてで一撃した。その瞬間、グレグデンの意識は飛んだ。グレグデンの身体からだも飛んだ。近くの男女も巻きこまれた。そうして、リンデは力強く宣言した。「──邪じや魔まする者は悪と見なします！　悪は悉ことごとく斬きる……！」

　男女の中には、番人に気づいていた者も当然いる。こいつはやばい、と逃にげだした者もいる。一方で、甘く見ていた者もいる。これだけ一般人がいるのだ。秩序の番人といえども、手を出せないだろう。まだＴシャツ、香水、ゲットしてねえし、レアかもしれねえし、自じ慢まんできっかもしれねえし、ゲットしたいし。そう考えて、人だかりの一部でいつづけた者もいる。彼らも、しかし、認にん識しきをあらためざるをえない。うわ。ひえっ。うお。きゃあ。どわぁっ。声、声、声が交こう錯さくして、若い男女が逃げ惑まどった。やべえ。あいつら本マ気ジだ。ＳＩＸに出し抜かれ、銀の砦を奪われて、すっかり腑ふ抜ぬけになっていた、そもそもあの太たい陽よう鬼きが死んでから、軟なん弱じやくっぽくなっていた、銀の砦を奪い返したといっても、ＳＩＸはまんまと逃げおおせたらしい、連中は見かけ倒だおしで、けっこうしょぼい──そんな評判だったのに、違うのか？　やべえ。冗じよう談だん抜きで殺される。死にたくねえ。死んでたまるか。一刻も早くその場を離はなれたい。でも、混こんでいて、人だかりの外側にいる者たち以外は、身動きがとれない。混乱が起こった。大混乱だ。

　リンデは容赦しない。最初に警告はなされた。次に行動で示した。もはや我らの前に立ちふさがる者たちは、積極的な敵ではなくとも、障害物である。生きつ粋すいの番人で、徹てつ底ていした性格のリンデは、障害物を人とは見なさない。人格を認めない。障害物を突き飛ばし、押しのけて、十二番遊撃隊は突き進んだ。この過程で二十二名の男女が重軽傷を負い、そのうちの十七名がモリー・リップス・アサイラムで手当てを受けることになる。治ち療りよう費は秩ちつ序じよの番人が負担する。謝罪はしないが、金だけは出

す。のちに作戦本部がその決定を行うが、リンデはひたすら障害物を駆く逐ちくしてＳＩＸに迫せまろうとした。

　ＳＩＸは二十人のジェノシドを連れていた。ジェノシドどもは荷物運びであり、Ｔシャツ配布係であり、それから即売会のためのスタッフでもあったが、即売会は行われない。もうそれどころじゃない。ジェノシドどもはＳＩＸの護衛となった。戦せん闘とう員となった。連中はリヴァイスの防護服と可変式の柄えを持つ槍やりとで武装している。槍の柄を適切な長さに伸のばして、十二番遊ゆう撃げき隊を迎むかえ撃うつ態勢を整えた。短時間で。ＳＩＸはもちろん、二十人のジェノシドも動どう揺ようしていない。まるで予期していたように。

　やがて障害物の自主的な退たい避ひと強制的な排はい除じょはおおかた終わった。十二番遊撃隊はひとかたまりとなってジェノシドどもに突っこんでゆく。ＳＩＸはその後ろにいる。ジェノシドどもを蹴け散ちらさなければ、番人の刃やいばはＳＩＸに届かない。ジェノシドどもがＳＩＸを守っている。

　激突した。ジェノシドは槍を、番人は盾を並べて、両軍は衝しょう突とつした。火花が散った。槍は盾に弾はじかれた。番人はそのまま前進した。盾による強打バッシユだ。ジェノシドどもは最初の一撃でその半数が突き倒された。リンデも一人を打ちのめしていた。さらにもう一人、盾でぶっ飛ばして、剣けんを振ふりあげた。
「──悉く殺せ……！」

　それと前後して、デートニッヒ・ボルボンゾルの九番突撃隊が到着した。垂れ目で眉まゆ太く顎あごが割れている男くさい風ふう貌ぼうで、総長争そう奪だつ変則トーナメントでは十番遊撃隊隊長の太臺子タイダイシーと相あい討うちになった。そのボルボンゾルは九番突撃隊を率いて、カンダヴァストリートから三ブロック離れた地点で索さく敵てき中、動物的な勘かんで何かを察知した。そして、カンダヴァストリートへと向かった。そこで交戦中の十二番遊撃隊とジェノシドを発見、ただちに参戦した。

　九番突撃隊の加勢もあって、ジェノシドはあっという間に打ち減らされ、残りは四人、あとはＳＩＸのみとなった。ＳＩＸも大振りのモトロール刀を抜いて応戦し、十二番遊撃隊の隊士三名が戦闘不能に陥おちいっていた。でも、この時点でリンデは疑っている。あのＳＩＸは本物か。

　ボルボンゾルは気にしていない。己おのれの目を持たぬ義の矛ほこである突撃隊を任されている彼は、目の前の敵を鏖おう殺さつすることしか考えていない。彼はリンデに声をかけた。「リンデ！　やつをやるぞォォォ……！」

　リンデも疑念はひとまずおいて、ボルボンゾルに呼応して動いた。すでに十二番遊撃隊と九番突撃隊は、ＳＩＸと四人のジェノシドを建物の外がい壁へきに追いこみ、包囲している。隊長補以下の隊士たちは四人のジェノシドを押し包んで殺す。リンデとボルボンゾルは左右からＳＩＸに斬りかかる。挟はさみ撃ちだ。申しあわせる必要はなかった。呼吸はぴったりと合った。

　ＳＩＸは下がれない。後ろには合成骨材コンクリートの壁かべがある。前にはジェノシドがいて、その向こうには番人の盾、盾、盾がひしめいている。盾の群れはジェノシドを押し潰つぶそうとしていた。右からはリンデが。左からボルボンゾルが。ＳＩＸは対処しなければならなかった。

　モトロール刀を突つきだした。右へ。リンデに向かって。リンデはこれを盾で払はらいのけた。その瞬間、ＳＩＸはモトロール刀を捨てた。そうして、回転した。独こ楽まのように回った。その動きにあわせて、風を切る音がして、何かが飛んできた。リンデは盾を前に出して、腰こしを落とした。ボルボンゾルも同じ姿勢をとった。二人の盾に、ガガッ、ガガッ──と何かがぶつかって、表面を削けずった。それがＳＩＸのボディスーツに備わっている細い紐ひも状の武器だということに、リンデもボルボンゾルも気づいていた。その情報は二人とも頭に入っている。二人は一いつ瞬しゅん、足を止めかけたが、怯ひるまない。純血の司祭が義の勇士たちに与あたえ給たもうた鎧よろいと盾たての防ぼう御ぎょ力を信じて、ＳＩＸにぶつかっていった。二人の盾は、鎧は、瑕きずだらけになった。それでも、純血の司祭の加護は二人を守りとおした。

　二人は盾でＳＩＸの胸と背中をしたたかに打ちすえた。間かん髪はつを容いれずＳＩＸにモトロール刀を突き刺さした。ＳＩＸはほぼ同時に二本の刀によって貫つらぬかれた。リンデの刀はＳＩＸの右みぎ脇わき腹ばらに近い背中から体内に進入し、臓ぞう腑ふを傷つけて左胸に達した。ボルボンゾルの刀はＳＩＸの左胸の下から背中へと抜けた。ボルボンゾルはすぐに刀の柄つかから手を放し、ＳＩＸの首を鷲わしづかみにした。ＳＩＸは血を吐はきながら笑った。それまでＳＩＸは声を発していなかった。一言も。その理由がわかった。声が違ちがった。高かった。明らかに。容姿は瓜うり二

ふたつだが、本物とは似ても似つかぬ声をしていた。「はぁーはははははぁー……！　ざぁーんねーんでしたぁー、ぼく、ハチベエ！　お父さん！　褒ほめて褒めて！　はぁーはははははぁー……！」

「──この……！　黙だまれェェッ……！」ボルボンゾルはＳＩＸモドキのハチベエを殴なぐった。何度も、何度も殴った。ハチベエが失神するまで殴った。

　ハチベエは人事不省に陥った状態で仮本部に運ばれ、装備を剝はがされて治療を受け、無名隊の尋じん問もんを受けることになる。でも、有益な情報はまったく引きだせない。ハチベエは戯たわ言ごとを口にする。笑う。大笑いをする。痛めつけられると、むしろ嬉き々きとしている。殺して、殺して、ぼくを殺して、と叫さけびながら、泣いて喜ぶ。そんな調子だから、何の役にも立たない。

　ともあれ、これ以後、ジェノシドはエルデンの各所で奇ゲ襲リ劇ラを開かい催さいするようになった。敵が再始動したのだ。作戦本部はこの事実を冷静に受け止めた。秩序の番人の目標は当面、奇ゲ襲リ劇ラの発見となる。奇ゲ襲リ劇ラの関係者は始末し、秩序の番人の妨ぼう害がい者、敵対する者は躊ちゆう躇ちよせずに排除する。ＳＩＸについては、最優先の標的とする。偽にせ物ものであっても、必ず拘こう束そくするか、殺す。

　六巡じゆん月げつ十七番日のハチベエ捕ほ獲かくから同巡月十八番日が果てるまでの間に、秩序の番人は三度、奇ゲ襲リ劇ラを目撃した。そのうちの二度は奇ゲ襲リ劇ラの終わりしなで、番人が駆かけつけたときにはもう、ジェノシドは撤てつ収しゆうしていた。一度は戦闘になった。十二名のジェノシドと、ジョービー・カラマー率いる十一番遊撃隊の隊士三名が死亡し、市民をふくめて負傷者は三十一名、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキには逃にげられた。隊士三名は高層寺院で蘇そ生せい式を受けて二名は成功し、一名は永久死。ジェノシドの死者十二名の遺体は埋まい葬そう業者に引き渡わたされた。

　十九番日はいくつもの戦闘が仮本部に報告された。

　まず十三時三十分。場所は第十三区と第一区の境界あたり。チェス・ピード率いる七番突撃隊が奇ゲ襲リ劇ラとおぼしき群衆を発見。解散を求めながら即そく攻こう撃げき開始。ジェノシドは右往左往する市民を利用しつつ応戦。七番突撃隊は三名の負傷者を出し

たが、七名のジェノシドを殺害。十名ほどのジェノシドは逃とう走そうした。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿は確かく認にんされなかった。

　十四時四十七分。第二区の香水市場セントマート、環かん状じよう通どおり沿いの一角で、太臺子の十番遊撃隊が奇ゲ襲リ劇ラを発見。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキはいなかった。十番遊撃隊は五名のジェノシドを殺害。隊に被ひ害がいは出なかった。

　十六時二十二分。第十三区に程ほど近とおい第五区の追い剝バンデツぎ横丁ドレーンを埋うめつくすおびただしい数の男女を、二十六番無名隊隊士テリー・インスが目撃。インスはこれを近くで索さく敵てき中だった羅叉総長代理率いる一番隊と李童晏の二番親衛隊に伝えた。ただちに一番隊は北から、二番隊は南から、追い剝ぎ横丁へ。さらに、移動しながら情報収集を指揮していた二十六番無名隊隊長ベレニアス・〝褐色のブラウン〟・ウォンドードの手配により、ラッド・ワーノンの六番突とつ撃げき隊、シャルロット・リンデの十二番遊撃隊が応おう援えんに駆けつけた。その直後、一番隊と十二番遊撃隊が北から追い剝ぎ横丁に進入。驚きよう愕がくと恐きよう怖ふが拡大しながら入り交じって、あっという間に恐きよう慌こうの体てい裁さいを整えた。男女は雪崩なだれを打って南に逃のがれようとした。二番親衛隊と六番突撃隊は路地にひそんでこれをやりすごした。男女を先に行かせ、ある程度、人の流れが落ちついた段階で、追い剝ぎ横丁の南を封ふう鎖さする。そういう手て筈はずだったが、人がとにかく多すぎた。その移動はまるで濁だく流りゆうだ。二番親衛隊と六番突撃隊はなかなか路地から出られない。その間に、一番隊と十二番遊撃隊はジェノシドと戦せん端たんを開いた。この戦せん闘とうではＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿が確認された。ジェノシド側の戦闘員は四十六名。それまでの奇ゲ襲リ劇ラとは規模が違っていた。ジェノシドは一番隊と十二番遊撃隊を迎むかえ撃うったが、すぐに退たい却きやくを始めた。ジェノシドも、そしてＳＩＸもしくはＳＩＸモドキも、市民の濁流に紛まぎれようとした。この目もく論ろ見みはほとんど成功した。二番親衛隊と六番突撃隊は、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿を認め、路地から飛びだそうとしたが、手間取った。一番隊と十二番遊撃隊の追撃もはかばかしくなかった。ついにＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは追い剝ぎ横丁から出た。そして、そのまま行方ゆくえをくらました。四隊はジェノシド七名を殺害、一名を生け捕どりにしたが、市民の負傷者は七十名に達した。捕ほ虜りよは、銀の砦とりでに連行されるまでの間に口内に仕し込こんだ毒物で自殺を図はかり、これ

を果たした。彼は筋金入りだった。自殺に用いられた劇毒は、物の数分のうちに彼の臓器と中ちゆう枢すう神経を完かん膚ぷ無なきまで破は壊かいしていた。蘇生はきわめて困難か、不可能とされた。実際、失敗した。

　十七時四十分。第九区のクァラナド歓かん楽らく街がいにある「少女のメイお手伝いデン・さんメイド」の近くで、ジョービー・カラマー率いる十一番遊撃隊が奇ゲ襲リ劇ラを目撃。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは確認されなかった。十一番遊撃隊は九名のジェノシドを殺害した。隊の負傷者は二名だった。

　十九時十分。シャット・〝神しん剣けんグレヒャ〟率いる八番突撃隊が、第八区と第二区を隔へだてる環状通上で奇ゲ襲リ劇ラを発見。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは確認されなかった。八番突撃隊は十九名のジェノシドを全ぜん滅めつさせた。隊の負傷者は三名だった。

　二十時三十分。太臺子の十番遊撃隊が第六区で奇ゲ襲リ劇ラを察知、ジェノシド五名を殺害した。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは確認されなかった。

　二十二時五分。チェス・ピードの七番突撃隊が第十一区で奇ゲ襲リ劇ラを目撃、ジェノシド六名を殺害した。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは確認されなかった。

　二十三時二十分。羅叉の一番隊が第三区で奇ゲ襲リ劇ラを見つけ、これを殲せん滅めつした。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは確認されなかった。

　十九番日には、他ほかにも無名隊の隊士が計十三件の奇ゲ襲リ劇ラを確認した。うち四件では、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿が目撃されたとのことだった。

　日付が二十番日に変わってからも、交戦二件、目撃のみが四件、計六件の情報が、三時過ぎまで断続的に仮本部にもたらされた。それ以後は絶えた。

　作戦本部は情勢の分ぶん析せきを進めた。奇ゲ襲リ劇ラが行われた地点を地図にマークし、位置的な関係性を探さぐるのだ。奇ゲ襲リ劇ラはいつも開かい催さい中ちゆうか終しゆう了りよう後ごに確認されている。それ以外のジェノシドの動きはつかめていない。

ジェノシドの、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの移動経路は？　奇ゲ襲リ劇ラのために、彼らは大量の物品を運んでいる。リヴァイスの商品を、配布用のＴシャツを、香水を。今もそれらを逐ちく次じ製造中だとしたら、そのための拠きよ点てんがあるはずだ。あるいは、製品はあらかじめ準備されていたのかもしれない。だとしたら、どこかにその集積所があるはずだ。ハインツ・クルエルフォートの二十五番無名隊が、その探たん索さくを受け持つことになった。

　二十番日早朝、五時半ごろ、ハチベエが監かん禁きん部屋の壁かべに激しく後頭部を打ちつけた。大笑いしながら何度も何度も打ちつけて、頭ず蓋がいが割れ、砕くだけて、脳が損傷した。ユリカが医術式で治ち療りようを試みたが、その甲か斐いもなくハチベエは意識不明の重体に陥おちいった。

　二十番日十二時三十四分、この日初めての奇ゲ襲リ劇ラが確認された。次が十三時十分。さらに十三時四十分。十四時台には三件。十五時台にも四件。十六時台も同じく四件。十七時台は二件。十八時台は三件━日付をまたぐまでに三十七件。それから、二十一番日の二時台までに七件。合計四十四件。そのうちの十一件、ちょうど四分の一でＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿が目撃された。奇ゲ襲リ劇ラの規模はいずれも大きくない。秩ちつ序じよの番人とジェノシドとの間で行われた交戦は八回。ジェノシドの死者は二十七名。秩序の番人は死者が二名、負傷者が八名。

　この時点で、六巡じゆん月げつ十七番日以後に確かく認にんされた奇ゲ襲リ劇ラは七十五件に達した。場所は第一区、第二区、第三区、第五区、第六区、第十一区、第十三区に散らばっている。七十五件のうち十七件で、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿が目撃されている。

　作戦本部は分析を進めている。いまだに予測は立たない。仮説は浮うかんでは消える。

　さらに二日が過ぎた。

　奇ゲ襲リ劇ラは百三十八件。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿は、うち三十件で目撃されている。

　ジェノシドは死んでゆく。作戦本部が把は握あくしているだけで、ジェノシドは二百五十八名が死んでいる。

番人も死んだ。二十三名が戦死を遂とげた。

そうはいっても、損害は圧あつ倒とう的にジェノシドのほうが大きい。それにもかかわらず、奇ゲ襲リ劇ラは一向にやまない。規模を大小させ、時間を短くしたり長くしたりしながら、エルデンの各所で開催されつづけている。

羅叉が仮本部に戻もどってきて、吐はき捨てるように言った。
「虚こ仮けにされているのか」

そう思いたくはない。でも、現実を見れば、まさしくそのとおりだ。

秩序の番人はＳＩＸに、あるいはＳＩＸモドキに、翻ほん弄ろうされている。

ジェノシドは秩序の番人を警けい戒かいしている。用心してはいても、恐おそれていない。

ジェノシドには二種類いることがわかっている。見た目では区別がつかない。戦闘になるとわかる。ようするに、骨のあるジェノシドと、そうではないジェノシドがいるのだ。

後者は逃にげ足が速い。意い気く地じのない戦せん闘とう者で、簡単に倒たおされ、たまに生け捕りにされる。厳しく尋じん問もんされると、彼らは吐く。簡単に吐く。でも、たいしたことを知らない。彼らは目立たない服を着てエルデン市民に混じり、リヴァイスの装備を持ち歩いている。命令に従って定められた場所へ行き、着き替がえをして、奇ゲ襲リ劇ラを手伝う。いわばサポートスタッフだ。彼らはＳＩＸもしくはＳＩＸモドキと会ったことがあり、声をかけられたり、肩かたを叩たたかれたり、抱ほう擁ようされたりして感激し、ＳＩＸに忠誠を誓ちかっている。けれども彼らは、組織の構造を知らない。計画を知らない。誰だれが自分たちを直接に指揮しているのかさえ知らない。彼らはＳＩＸの信しん奉ぽう者で、悪党クランの元構成員か、とるにたらない小悪党クランの現げん役えき構成員か、ちんぴらだ。ちんけな人生に嫌いや気けが差しているから、このままやってたってどうせうだつが上がらないに決まっているから、こんなお祭り騒さわぎに参加するチャンスは二度とないだろうから、何しろかっこいいから、粋ＣＯＯＬだから、そんな理由で彼らはＳＩＸの尻しり馬うまに乗っている。ただの雑ざ魚こだ。

骨のあるジェノシドは、決して多くはない。ただ、彼らは命知らずで、ときに番人たちとすら互ご角かくに渡わたりあう。捕つかまっても、生きて虜りよ囚しゆうの辱はずかしめを受けず、とばかりに自害する。彼らはだいたい刺青いれずみだらけだが、身体からだ中捜さがせば、意い匠しよう化した「ＳｍＣ」、あるいは「殺」と数字を組みあわせた刺青が見つかることが多い。つまり彼らは、ＳｍＣの刺青組か、ＳｍＣの中にあってＳＩＸの親衛隊的な存在だった殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスの一員だったということだ。そもそもジェノシドという名前自体、ジェノシドマックスと無関係とは思えない。ＳｍＣの古参構成員やジェノシドマックスの生き残りがジェノシドの中ちゆう核かくをなしているのだろう。

構図は見える。

ＳＩＸはＳＩＸモドキや忠誠心の篤あつい古参の者たちを直接指揮している。それ以外のジェノシドには彼らから命令が下る。下したっ端ぱは必要最低限の情報しか与あたえられない。秩序の番人に襲おそわれると、下っ端はよく死ぬ。それでもジェノシドは奇ゲ襲リ劇ラを繰くり返す。秩序の番人は嘲あざ笑わらわれ、弄もてあそばれる。それを見て、馬ば鹿かな輩やからが自分もこのイベントに参加したいと手を挙げる。ジェノシドに加わる。下っ端は増える。使い捨てにされては補ほ充じゆうされる。

奇ゲ襲リ劇ラは繰り返される。リヴァイスのＴシャツが、香こう水すいがばらまかれる。リヴァイスの衣類が、防護服が、靴くつが、武具用のストラップが売りさばかれる。馬ば鹿か者ものどもがそれを身につける。けばけばしいリヴァイス製品で飾かざり立てた男女がエルデンを闊かつ歩ぽする。もう誰がジェノシドなのか、見ただけではわからない。判別不能だ。

今のところ、目立った動きは奇ゲ襲リ劇ラしかない。でも、本当にジェノシドは奇ゲ襲リ劇ラの他ほかには何もしていないのか。わからない。断言はできない。

そして、六巡月二十四番日、琺瑠副長が倒れた。

少し前から顔色がすぐれなかった。言動に変わりはなかったが、

声に力がなかった。仮か眠みんをとる回数がずいぶん少なかった。時間も短かった。あとになってから、誰も彼もがいろいろなことを言った。

　どちらにしても、琺瑠副長は仮本部で昏こん倒とうした。すぐさまユリカが治ち療りようにあたったが、内視系の医術式では大きな異常は見つからなかった。鵺ヌエ流古式戦闘術の内気功を施ほどこすと、やがて意識は戻った。琺瑠は起きあがろうとした。叶かなわなかった。ユリカの見立てでは、不眠と極度の過労によって全身の機能が衰すい弱じやくしているということだった。深刻な状態ではない。ただ、無理をすれば、深刻な状態に陥おちいる可能性もある。琺瑠は大だい丈じよう夫ぶだと言い張った。トマトクンは認めなかった。琺瑠はモリー・リップス・アサイラムに運ばれ、精密な検査と適切な処置を受けることになった。

　そのアサイラムの一室に、彼はいた。寝しん台だいに身を横たえて、間ま違ちがいなく彼はそこにいるのだが、それが自分の身体だとはとても思えなかった──思う？　思うとは何だろう？

　彼の思考も彼のものではない。彼と、彼の思考、それから彼の身体、すべて離はなればなれだ。

　彼は両足のアキレス腱けんを、切断されただけではなく、ほとんどむしりとられていた。両肩の関節は外されただけではなく、ひしゃげて、元の形状を失っていた。脊せき椎ついが何箇か所しよも砕くだけていた。他にも彼の身体は、重大な、甚じん大だいな、深刻な損傷をいくつも受けていた。

　彼は以前、夢と現うつつの間をさまようことで、猛もう烈れつな苦痛をやわらげていたはずだ。今は薬物によって、苦痛から遠ざけられている。

　彼の肉体と精神は、かつて危あやういところで繫つながりを保っていた。今は切り離されていた。

　彼は刻一刻と破は壊かいされていった。壊こわれた身体が、医術式と最さい先せん端たんの機術によって再形成されようとしている。

　治るのだろうか？

　彼は考える。考えたそばから、その彼が誰だか、彼にはわからなくなる。わからないが、彼はここにいる。

　治療を受けていないとき、彼はたいてい一人でいる。たまに介かい添ぞえ人にんが部屋に入ってくる。くすんだ金きん髪ぱつ。白い医術士用の服を着て、帽ぼう子しを被かぶっている。深い青の目。彼は彼女を知っている。彼女を知っていると、明確に思う。彼は気づいている。

　彼には他者が必要だ。他者がいることで、彼は彼を取り戻す。彼の身体と心と彼という存在は統合される。彼は彼らしくなる。彼はみじめだと思う。ひどい有様だ。彼は自じ嘲ちようする。彼は不安に駆られる。治るのだろうか？　彼は自分を叱しつ咤たする。奮い立たせる。彼は介添人に問いたくてたまらない。状じよう況きようはどうなっているのか。知りたい。彼自身のことではない。彼の命である、彼が心血をそそいできた、彼の愛するもの、彼のすべて、それがどうなっているのか。彼は知りたいと欲ほつする。だが、訊きけない。知ったところで、どうする。何もできない。彼は無力だ。彼は寝ね返がえりを打つこともできない。薬物のせいで、まともな思考力もない。あれからどれくらい経たったのか。何日過ぎたのか。そんなことすら、彼にはわからない。介添人に尋たずねればいい。それくらいは教えてくれるだろう。だが、訊けない。そんなことは訊けない。愚おろかな矜きよう持じが邪じや魔まをする。おれは愚かだ。彼はそう思う。おれは無力で、愚ぐ劣れつだ。自己憐れん憫びんに溺おぼれそうになる。励はげましなどいらない。誰かおれを慰なぐさめてくれ。絶望が噴ふきだす。きっとおれは駄だ目めだ。もう駄目だ。おれには何もない。失った。おれ自身を。それがこれほど大きな打だ撃げきだとは。もっと大切なものがおれにはあって、そのためならどんなことにも耐たえられるつもりでいた。それがどうだ。何という為てい体たらくだ。ぜんぶ封ふうじこめて、かろうじて黙だまっている。そんな自分がひどく滑こつ稽けいに思える。

　介添人は寝台の脇わきに椅い子すを置いて座った。

　彼は天てん井じようを見ている。白い天井を。

　介添人はどこを見ているのか。彼にはわからない。その視線の先を探さぐっただけで、彼の誇ほこりは粉々に打ち砕かれてしまいそうだ。

「副長」と介添人が彼を呼んだ。彼は安あん堵どした。それは理想的な第一声だった。冗じよう談だんめかした返事ができる。余よ裕ゆうをうかがわせて。彼は自分を保つことができる。彼は内心で介添人に感謝すらした。

「君はもう、我が団の一員ではなかろう」

　薄うす笑わらいを浮うかべたつもりだった。彼は皮肉っぽい口調で言った。ひどい声だった。張りがなく、濁にごっていて、芯しんが通っていない。自分の耳でも聞きとりづらい声だった。彼は傷ついた。彼は崩くずれそうになったが、彼の身体からだは寝台に支えられていた。心を繋ぎとめるものはあるのか。ないとは言えなかった。それは彼にとって恥はじだった。

「申し訳ありません」介添人は言いにくそうに言いなおした。「ヨハンさん」

　彼はうなずいた。うなずくことくらいはできた。声を出したくはなかった。あの声はひどい。あまりにも。おれを引き裂さく声だ。

「あの……」介添人はそこまで言って、しばらく躊躇ためらっていたが、やがて思いきったように口を開いた。「どうか驚おどろかないで聞いてほしいんです。それから、前もってお断りしておきますが、危険な状態では決してありません。その点は、母様が──モリー・リップスが保証しています。ヨハンさんに言おうか言うまいか、迷ったんですが、やっぱり、話しておいたほうがいいと思って──」

「回りくどいな」つい声を出してしまった。さっきよりはいくらかましな声だった。考えてみれば、しばらく発声していなかった。それだけのことだったのだろう。彼は感じやすい己おのれを恥はじて嗤わらった。「話してくれ」

「はい」介添人は一つ息をついた。「──今、琺瑠副長がアサイラムにいらっしゃいます」

　彼は目をつぶった。開けて、ふたたび閉じた。「無事なのだな」

「過労で内臓機能が低下していて、貧ひん血けつ、徐じよ脈みやくなどの症しよう状じようが見られます。安静にしてもらい、点てん滴てき注射を行って経過を観察していますが、大だい丈じよう夫ぶ

です」

「そうか」

「……珐瑠副長に、訊かれたんです。ヨハン副長の容よう態だいについて。お恥ずかしい話ですが、どう説明していいか、わたしには判断がつかなくて。モリー・リップスとも相談するつもりですが、副長の意見も伺うかがっておいたほうがいいのではないかと思いまして」

　彼は薄く目を開けて、顔を横に向けた。介添人はうつむいていた。「ベアトリーチェ」

「はい」介添人は顔を上げた。はっとしたようだった。

「君はもう我が団の一員ではない」

「あ……」介添人の頬ほおが微かすかに赤らんだ。「は、はい。ヨハン、さん……でも、なんだか、呼びづらくて。わたしの中では━副長はやっぱり、副長ですから」

「そうだろうな」彼は咳せきをしたかった。今の彼が咳せきこめば、さぞかしみっともない様ざまをさらすことになるだろう。介添人は彼を世話しようとするだろう。彼はこらえた。「私にとっても、君はただの医術士ではない。君を同志と見なさぬことは、やや困難だ」

　介添人は相そう好ごうを崩した。以前は生せい硬こうな少女だったが、ずいぶんと変わった。やわらかく、女性らしくなり、そしてまた、しなかやに、強くなった。「嬉うれしいです。秩ちつ序じよの番人での経験があってこそのわたしですから。あの日々は、我が身の血となり肉となって、わたしを支えてくれています。でも、副長、わたしは医術士じゃありません。医術士見習いです」

「そうか」

「はい。まだまだ未熟です」

「ベアトリーチェ」

　介添人は無言でうなずいた。

彼は顔を上に向けて、天井を見た。「琺瑠副長に伝えてくれ」

「何と、お伝えすればいいでしょうか」

「おれは……」彼は、ふ、と小さく笑った。「──私は大丈夫だ。また立ちあがる。君は行け。君らしく、まっすぐに。そう伝えてくれ」

介かい添ぞえ人にんは頭の中にその言葉を刻みつけるように、数秒間、黙っていた。それから「わかりました」と明るく言って、立ちあがった。「また参ります、副長。ご用がありましたら、遠えん慮りよなさらずにお呼びつけください」

「そうさせてもらう」

「失礼します」

介添人は颯さつ爽そうと出ていった。そのとき、介添人の胸にはある決意が秘ひめられていたことを、彼は知らない。他者が去った途と端たん、彼の意識はたちまちのうちに混こん濁だくする。彼は揺ゆり動かされ、流されて、ばらばらになる。彼は嬲なぶられる。彼はじっと耐える。抵てい抗こうする。

君はそこにいるのか。近くに。それだけでいいと彼は思う。強く、強く、思う。君は生きている。それだけでいい。

彼は義ち父ちが打ち立てた義と秩序の番人にすべてを捧ささげることができた。彼にとって、それは当然であり、必然であり、簡単だった。迷う余地はなかった。義は、しかし、彼の心を支えなかった。彼の心を支えるものは女だった。ただ一人の女だった。彼は己を恥じた。己の脆ぜい弱じやくを嘆なげいた。それでも、その弱さを捨てようとは思わなかった。

琺瑠。おれは君に会いたい。一目でいいから、会いたい。会えなくてもいい。

おれは君に焦こがれている。

　マリアローズの脳は焦げている。何しろ身体からだはいくら動かしてもたいしたことがないので、頭を働かせるしかない。いつものことだ。そうはいっても、使いすぎはよくない。でも、珐瑠が倒たおれてしまった。珐瑠が受け持っていた仕事は、二十七番無名隊の隊長アーニャ・クルチバが半分以上、こなしてくれている。ぜんぶじゃない。仮にも副長代理なので、マリアローズもクルチバを手伝っている。さらに、今までやってきた仕事も怠おこたるわけにはゆかない。

　大おお雑ざつ把ぱに言うと、珐瑠は実際的な人的、物的な差配を主に担当しつつ、情報のとりまとめをしてくれていた。マリアローズはそれらの情報を整理したり分ぶん析せきしたりして、作戦を練るグループの座長みたいな立場で、各種決定はトマトクンを通して行われた。珐瑠はもちろん、作戦計画を立てる際にも意見を述べた。珐瑠の役割は包ほう括かつ的で、全体的なものだった。しかも細々とした雑用に近いことまでやっていた。珐瑠は遅ち滞たいなく、鮮あざやかに、抜ぬかりなく、すべてを的確に、着実に片づけていたので、周りは気づかなかった。でも、いなくなってからわかった。明らかに、珐瑠の負担は大きすぎた。

　一つのことに集中できない。絶えず頭の中はいくつにも分割されている。あれを考えながら、これを考えて、口では別の指示を出す。地図を、表を見る。数字を追う。報告に耳を傾かたむける。聞いたそばから忘れる。確かく認にんする。何を考えていたのかわからなくなる。思いだそうとする。思いだす。代わりに、報告の内容があやふやになる。メモだ。メモをとろう。どこに何をメモしたか失念する。メモの内容が意味不明で腹が立つ。自分が無能すぎて、泣きたくなる。泣いてる場合じゃない。泣いたって何の解決にもならないし。有能になるわけじゃないし。

　一時間に一回くらいの割合で、ユリカとかサフィニアとかカタリとかピンパーネルとかルーシーに声をかけられる。「大丈夫？」「……疲つかれているんじゃ？」「お前じぶん、ちょっとあれやで。休んだほうがええで」「平気ですカ？」「マリアさん、あの……がんばってください」

　傍はたから見て、そんなにひどいのかな。ひどいのかもしれない。でも、トマトクンだってだいぶつらそうだ。いつも難しい顔をして重々しい雰ふん囲い気きを醸かもしだしているけれど、あれはきっと眠ねむくてたまらないのだ。それはそうだろう。何もなければ、トマトクンは日がな一日寝ねていることも多いのだ。僕だっ

て、気張らないと。それに、無理はしていない。睡すい眠みんはとっている。限界になったら、眠る。泥どろのように眠る。最低でも一回に三時間は寝る。そうしないと疲れがとれないことを、経験的に知っている。食事もとっている。間食もしている。疲れを感じたら、苛いら々いらしたら、甘い物を口に入れる。チョコレートの甘さを味わいながら、地図を睨にらみつけている。勝手に呟つぶやきがもれる。「第五区……第五区……」

　わかっている。奇ゲ襲リ劇ラはエルデンのほぼ全域で行われている。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキの姿が目もく撃げきされた奇ゲ襲リ劇ラはそのうちの約四分の一で、現在のところは二十三パーセントくらいだ。普ふ通つうの奇ゲ襲リ劇ラと、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキが加わった奇ゲ襲リ劇ラは、地図上でも区別されている。青いピンが普通の奇ゲ襲リ劇ラで、赤いピンがＳＩＸ奇ゲ襲リ劇ラだ。仮に普通の奇ゲ襲リ劇ラをＧ、ＳＩＸ奇ゲ襲リ劇ラをＳとする。地図を見ればわかる。ＳはＧほどの広がりを持っていない。Ｓの八割までは第五区とその周辺に集中している。そこまではわかっている。

　ＧもＳも、開かい催さい前に察知できた例は今のところない。直前はあるが、あまり意味がない。

　ジェノシドはどこからやってくるのか。製品の製造所、あるいは集積所は。連中のアジトは。いまだに何も判明していない。

　ジェノシドには二種類いる。何の情報も与あたえられず、言われたとおりに動く新しん参ざん。これを秩ちつ序じよの番人は〝世間グリ知らずーン〟と呼ぶことにした。そして、かつてＳｍＣの刺青いれずみ組やジェノシドマックスの隊員だった〝古参ベテラン〟。グリーンは多い。どんどん増える。そこらじゅうに潜ひそんでいて、奇ゲ襲リ劇ラとなれば集まってくる。番人の攻こう撃げきを受けると、さっと逃にげる。逃げまわって、そのうち群衆に紛まぎれてしまう。鍵キーはベテランだ。でも、やつらは口を割るまいとして自害までする。裏返せば、大事な情報を持っているということだろう。

　なんとかして、ベテランを捕ほ獲かくする。尋じん問もんする。拷ごう問もんする。情報だ。情報が欲しい。

　考えを進めながら、マリアローズは他ほかの仕事をこなしている。処理しないといけないことが山ほどある。物資の調達。損傷し

た装備の修理、補ほ充じゆう。これって、それ専門の部門を作って任せたほうがよくない？　でも、今はそんなことをやっている暇ひまがない。番人が係かかわった戦せん闘とうで損害を受けた者たちの請せい求きゆうにも、応じないわけにはゆかない。ただ、この機に乗じて金を騙だましとろうと企たくらむ不ふ逞ていの輩やからもいる。見分けないといけない──んだけど、今やることじゃないような……気はすれど、先送りにすると溜たまってゆく一方だ。それはそれで気持ち悪い。もちろん、もっと優先度の高い仕事もある。死者、負傷者が出たら、蘇そ生せい、治ち療りようを受けさせないといけない。消しよう耗もうが激しい隊は、他の隊と入れ替かえる。すると、どこかに穴があくから、また別の隊で補う。そうすると、またどこかに──ダメだ。こんなことをやっていたら、ダメだ。

　今。今。今。みんな目先のことをどうにかするだけで精せい一いつ杯ぱいだ。今に振ふりまわされている。このままじゃいけない。誰だれもがそう思っているはずだ。かといって、今をおろそかにするわけにもゆかない。これまでやってきたことを継けい続ぞくしないわけにはゆかない。代案がないと。その代案を考えるゆとりがない。本当にそうなのかな。どこかで満足しているんじゃないの？　自分の仕事をやっていれば、他の誰かがなんとかしてくれる。そういう気持ちが微み塵じんもないと言えるだろうか。たとえばマリアローズは……？　僕、は──だって、こんなに忙いそがしいし。危機感は持ってるよ？　これじゃいけないって、思ってる。でも──ほら、でも、だ。でも、じゃない。何か変えないといけない。わかってるなら、変えるんだ。

「提案があるんだけど」

　マリアローズは八時間以上かけて考えをまとめた。

　要点は、今までの態勢シフトを破は棄きして、いったんまっさらにする。それから、組みなおす。各隊は第五区とその周辺の人が集まりやすい場所を重点的に監かん視しする。戦力はできるだけ集中させる。第一の目標はＳＩＸもしくはＳＩＸモドキをしとめること。第二の目標はベテランを一人でも二人でも生きて捕ほ縛ばくすること。

　反論は出た。他の地域はどうするのか。奇ゲ襲リ劇ラがバンバン行われて、好き勝手にＴシャツが、やたらと匂においのきつい香こう水すいがばらまかれて、リヴァイスの製品が売りさばかれ、にわかのグリーンどもが増ぞう殖しよくする。これを捨て置くのか。

そのとおりだ。やらせておく。腹が立っても、頭にきても、放ほうっておく。

今まで秩序の番人は、敵の出方に反応する形で動いてきた。徹てつ底てい的に受け身だった。この姿勢を転てん換かんするのだ。能動的に動く。積極的に。攻せめに転じる。

クルチバが賛意を示した。ハインツ・クルエルフォートも賛同して、第五区に奇ゲ襲リ劇ラが複数回行われている場所があることに言げん及きゆうした。ベレニアス・〝褐色のブラウン〟・ウォンドードは、ただちに攻撃地点アタツクポイントを策定すると述べた。

トマトクンが「──よし」とうなずいた。「ただちにとりかかれ」

言いだしっぺはマリアローズだった。でも、そのうち誰かが言いだしていただろう。なぜマリアローズが最初だったのか。きっと組織人ではないからだ。秩序の番人の一員としてのプライドも、正直ない。番人たちは、いろいろなことを思いついても、諸般の事情を考えあわせて口に出さない。出せないのだ。仮本部の天幕の中を見まわすと、頭が切れて、勘かんが鋭するどくて、なおかつ一ひと癖くせも二癖もある者ばかりなのに、総体としてはどこか牙きばを抜ぬかれているような印象がある。良く言えば、まとまっているのだ。ふだんからそうなのか。それはわからないけれど、少なくとも危機に直面している現在は、程ほどよくまとまりすぎている。

性格の悪いヨハン・サンライズあたりがいると、ぜんぜん違ちがった集団になるのかもしれない。集団には、そういう存在がいたほうがいいのかもしれない。つまり、汚よごれ役が。

ともあれ、秩序の番人は六巡じゆん月げつ二十五番日の十八時をもって、無名隊による情報収集以外の活動を一時停止した。二十四時間以内に新方針に基もとづいた活動を再開させるべく、作戦本部は不眠不休で稼か働どうすることになる。

そのさなかの二十六番日七時だった。琺瑠副長が復帰した。それだけではなかった。琺瑠と一いつ緒しよに、アサイラムの医術士チームが仮本部を訪おとずれた。

アサイラム・チームは、番人のみならず、戦闘に巻きこまれて負傷した市民を現場で治療することを目的として組織された。医術士

五名。それから、看護師兼けん守衛としてアサイラムに雇やとわれている男たちが十名。主任チーフは、女性用ナース・医術士帽キャップを被かぶり、女性用ナース医術士服・ユニを着て、その上に銀色に輝かがやく純血の司祭の胸当てをつけ、モトロール刀を佩はいていた。

　ベアトリーチェだった。

　マリアローズは、どうして、とは問わなかった。こうなることを予想していたわけじゃない。でも、いざこうなってみると、すんなり納なつ得とくしてしまう自分がいて、友の決断は重いだろうし、決して揺ゆらぐことはないだろうし、モリーもすべて承知の上で送りだしたはずだし、だとしたら、しっかりと受け止めて、可能なかぎり支えるしかない。それくらいしか、マリアローズにできることはない。ベアトリーチェも、それ以外のことは望まないだろう。

　天幕の外に出て、短い時間だけれど、二人きりで話した。

　マリアローズはベアトリーチェの胸当てをつついた。「似合うね、これ」

「そうだろう？」と言ってベアトリーチェは笑った。「久しぶりにつけてみて、あらためて実感した。医術士の服よりも鎧よろいのほうが、やっぱりしっくりくる」

「ダメだよ。調子に乗って、前に出ちゃ。訓練は怠おこたってなくても、勘は絶対、確実に鈍にぶってるんだから」

「わかってる。わたしたちの仕事は、あくまで治ち療りようだ。その点、わたしはまだ、あまり役に立たないから、みんなのサポートが主になるけどな」

「心強いよ。ユリカ一人じゃあ、とても手が回らないしね。汎Ｐ大陸Ｃ医術Ｍ士会Ａは、いくら要よう請せいしても医術士を出してくれないし」

「五人とも、母様の信しん頼らいが厚い腕うで利ききばかりだ。頼たよりになるぞ」

「僕も作戦に参加することになると思うから、お世話になるかもね」

「お前が怪け我がをしたら、わたしが手当てしてやる。練習のための実験台だ」

「勘弁してよ。痛そうだし」

「痛くない、痛くない。神経系の操作は得意分野だからな。そこは大だい丈じよう夫ぶだ。ちゃんと傷が治るかどうかは別問題だけど」

　二人して、ひとしきり笑った。束つかの間まの息抜きになった。

　ジョービー・カラマーは息をつめて十一番遊ゆう撃げき隊の隊士たちに手と指で合図した。カラマーの顔は決してこわばることがない。常に緩ゆるんでいる。総長争そう奪だつ変則トーナメントでは、なすすべなくシャルロット・リンデに完かん膚ぷ無なきまで叩たたきのめされた彼だが、あれは本気の勝負ではなかった。彼が左手で握にぎる武器は、それが木刀であれ、真しん剣けんであれ、リンデのごときいい女を打ちすえることは決してない。彼の左手が一物を握った場合は別だが――なんてことをリンデの前で言ったら、また半殺しにされるだろうが、本気を出さなかったのは事実だ。だいたい、あんな試合は馬ば鹿からしい。つきあいで出ただけだ。我が剣は義のためにのみ振ふるわれる。あえてへらへらしながら、一本筋の通った生き方を貫つらぬいてみせる。そんな男こそが、女たちに愛されるのだ。つまり、それが〝夜の遊撃手〟ジョービー・カラマーだ。

　秩ちつ序じよの番人は二十六番日十四時に再始動した。同時刻をもって仮本部は撤てつ去きよされ、以降は移動本部制が採用されている。すなわち、琺瑠隊と行動をともにする三代目総長トマトクンの居場所こそが本部だ。連れん絡らくはすべて各隊に随ずい伴はんする無名隊の隊士を通して行う。無名隊が移動本部のスケジュールを把は握あくしていれば、情報の伝達に問題はない。

　十九時十三分。カンダヴァストリート近く。十七番日にＳＩＸモドキのハチベエが捕ほ獲かくされた場所から一ブロックも離はなれていない。一帯にはカラマーの十一番遊撃隊、太臺子の十番遊撃隊、デートニッヒ・ボルボンゾルの九番突とつ撃げき隊、それか

ら、デュナン・セプテンの二十九番警けい邏ら隊が配置されている。総員は無名隊の隊士をふくめて七十六名だ。

　最初に現れたのは、大きなバックパックを背負った侵入者クラッカー風の男たちだった。それが四名。彼らはバックパックを地べたに下ろし、一いつ斉せいに外がい套とうを脱ぬいだ。中にはリヴァイスの服を着ていた。途と端たんに通行人が奇ゲ襲リ劇ラを予感して足を止め、日がな一日、奇ゲ襲リ劇ラを求めて街をさまよう愚おろかな奇襲劇ゲリラ・探求者ハンターどもが男たちに群がっていった。それが合図だった。

　通りすがりに紛まぎれていたグリーンどもがバックパック組──おそらくベテランたちに合流して、Ｔシャツ、それから香こう水すいをばらまきはじめた。「奇ゲ襲リ劇ラだ！」という叫さけびがそこらじゅうであがり、あっという間に人だかりができた。銀白の鎧の上に、フードが付いた濃のう紺こんの外套を身にまとい、狭せまい路地に身をひそめ、息をひそめている秩序の番人たちは、だが、まだ動かなかった。彼らの標的の第一は、あくまでＳＩＸもしくはＳＩＸモドキだ。その姿が確かく認にんされるまで、あるいは、その姿が確認されることなく奇ゲ襲リ劇ラが終わるだろうという見通しが立つまで、彼らは剣の柄つかに手をかけたまま、微び動どうだにせずにいる。彼らは獲え物ものを狙ねらう肉にく食しよく獣じゆうだ。彼らは狩かる側で、敵は狩られる側なのだ。

　ＳＩＸモドキが──ＳＩＸの息むす子こ、もしくは息子と思われる者が何人いるのか。それはわからない。だが、無限にいるわけではないだろう。数は有限のはずだ。それを狩る。残らず狩る。最後には──それか、その過程で、必ずや本物のＳＩＸにたどりつく。ＳＩＸを始末すれば、ジェノシドがぶちあげた悪徳再生リヴアイスの金看板は潰ついえる。それこそが銀の軍団ザ・シルバリイの義である。

　そして、そのときは訪れる。ＳＩＸは──それはＳＩＸモドキなのかもしれないが、ＳＩＸとおぼしき者はすべてＳＩＸ本人であると考えてこれに対処することを、全隊士が確認している──人だかりの中心に、勃ぼつ然ぜんと出現した。カラマーは内心でＳＩＸの現れ方を男根にたとえたが、口には出さなかった。〝夜の遊撃手〟に従っている隊士たちは、その程度で眉まゆをひそめることはない。だが、今は声など不要だ。言葉はいらぬ。剣を抜ぬけ。カラマーがすらりと鞘さやからモトロール刀を抜くと、間を置かず隊士たちも無言で抜き連ねた。

「征ゆくぞ」カラマーは短く号令して駆かけだした。路地を飛びだした瞬しゅん間かん、彼は鬼おにとなっていた。義を貫くためには一いつ切さいの情け容よう赦しやをしない。義の鬼だ。

「秩序の番人である！」と彼は、隊士たちは声を張りあげた。「退のかねば除く！」と口々に叫びながら障害物を蹴け倒たおし、突つき飛ばした。それらの障害物は人の形をしていた。だが、障害物でしかなった。物だった。そう見なすべしと全隊士は作戦本部から言い渡わたされていた。カラマーは、しかし、男はともかく、女を突き倒す気にはどうしてもなれず、やむをえぬ、これは性しよう分ぶんだと言い訳しながら男を吹ふっ飛ばしつつ、女をひょいひょいよけて突き進んだ。一見しただけでは女と思えない生物に関しては、数人、足あし蹴げにしてしまった。そうはいっても女は女、心はいくらか痛んだが、その痛みもまたたく間に消えた。彼は、彼らは義の鬼だった。

　血も涙なみだもない鬼の集団だった。

　鬼たちがカンダヴァストリートに程ほど近ちかい第五区の一角を阿あ鼻び叫きよう喚かんの巷ちまたと化さしめた。

　カラマーの十一番遊撃隊は東から、太臺子の十番遊撃隊は西から、ボルボンゾルの九番突撃隊も同じく西から、セプテンの二十九番警邏隊は南から、障害物を物ともせずに、奇ゲ襲リ劇ラの中心へと、ＳＩＸへと押しよせてゆく。二十人ほどのグリーンはすぐさま逃にげる。配布用の物品、商品を放ほうりだして、障害物どもに紛まぎれようとする。秩序の番人はこれを無視する。グリーンは端はなから眼中にない。ベテランは四人──だと思われていたが、じつは八人いた。彼らは可変式の槍やりを構えて、ＳＩＸを囲む。防ぼう御ぎよ隊形。ＳＩＸは、だが、ベテランを押しわけて前に出てきた。その顔がん貌ぼう。鬼火を宿した双そう眼がん。細い紐ひものような武器が全身に配された黒と青と赤のボディスーツ。身体からだつき。カラマーは瞬間的に思う。もしかして、あれは本物じゃないのか。そうだ。あれは本物だ。仮に偽にせ物ものだったとしても、本物だ。「──やつを殺とれ……！」

　隊士たちはＳＩＸに殺さつ到とうして、ＳＩＸは回転した。細い紐状の武器。それはもちろん、ただの紐ではない。薄うすい。細い。だが、強度はすさまじい。見ただけではほとんどわからないが、各先せん端たんにおもりがつけられている。それらがＳＩＸの身体の動きにあわせて隊士たちを襲おそうのだ。隊士たちは盾たて

を前に出して、かまわず突っこむ。外套がズッタズタに引き裂さかれてガリガリバリバリ盾や鎧よろいが傷ついても、臆おくすることなくＳＩＸへ、ＳＩＸへ、ＳＩＸへ。

　三名の隊士がベテランどもの槍に突かれて重傷を負った。ＳＩＸが跳とびあがって隊士一名の頭を蹴飛ばした。その隊士は頸けい椎ついを骨折した。ＳＩＸはさらに隊士一名の首を両手でねじり折った。別の隊士一名の横っ面つらに飛び蹴りを叩たたきこんだところで、その脇わき腹ばらにカラマーのモトロール刀が突き刺ささった。ＳＩＸはワッヒャワヒャ笑いながら刀身を鷲わしづかみにしてカラマーの動きを封ふうじた。そうしてカラマーを殴なぐった。女好きのする色男の顔を殴った。殴った。殴った。カラマーは瞬間、意識を失った。すぐに正気づいて刀を手放し、脇わき差ざしを抜き放った。ＳＩＸは飛びのいて迂う闊かつな隊士一名を担かつぎあげ、やはりワッヒャワヒャ大笑いしながらぐるぐる回った。何人もの隊士がこれで撥はねのけられた。何なに糞くそ、とばかりに太臺子が、ボルボンゾルが、セプテンが、そしてカラマーが、体勢を低くして一斉にＳＩＸに襲いかかった。猛もう然ぜんと組みついていって、手に手に持っている刃やいばでＳＩＸを串くし刺ざしにした。ＳＩＸは血ち反へ吐どを吐はきながらワッヒャワヒャ笑った。
「──ざぁーんねーんでしたァーッ！　俺はシロウだァッ！　お父さん！　お父さん！　愛が！　愛が！　愛の光が遠くに見えるよ、お父さん！　近づいてくる、近づいてくるゥゥゥ！　ワヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャアアアアァァァァ……！」

　シロウを名乗るＳＩＸモドキは死んだのちに蘇そ生せい式を受けた。蘇生後の虚きょ脱だつ状態から回復するまでは、ほとんど生ける屍しかばねだ。時間が必要だ。時間が。時間──同日二十三時三分。やはり第五区。大食小路グラトン・アレイの外れ。七番突とつ撃げき隊を率いるチェス・ピードは、多た国こく籍せき大衆酒場「インガッツァ・ルァンド」の裏手で生ゴミに塗まみれていた。臭くさい。猛もう烈れつに臭いが、鼻をつまむことはない。小こ柄がらだが俊しゅん敏びんでよく気がつく。人当たりがいい。思考は柔じゅう軟なんにして剛ごう直ちょく。剣けんは度胸。小手先の技わざよりあらんかぎりの殺気を一ひと太た刀ちにこめる。彼の資質を見いだし、愛し、育ててくれた故人の顔が、声が、彼の脳のう裏りをちらついている。

　焔ホムラ隊長。本来、私は隊長の器うつわじゃない。隊長補がお似合いだ。焔隊長。あなたは私をゆくゆくは隊長にと考えていたか

もしれない。でも、私は違ちがう。私はずっと隊長補でよかった。あなたの下で働きたかった。あなたと共に死にたかった。私の艱かん難なん辛しん苦くはすべてそのためにあった。それなのに、焔隊長。あなたは先に逝いった。あなたの夫人を殺し、その腹の中にいたあなたの子を殺し、焔隊長。あなたを殺した。あの男を私は許さない。

　彼の中で一度は眠ねむりについた怒いかりが、恨うらみが、怨おん念ねんが、すっかり目を覚ましていた。義の鬼になれと命じられたときから、チェス・ピードは心に決めていた。私は違う。義の鬼じゃない。復ふく讐しゆうの鬼となる。

　それは六巡じゆん月げつ二十六番日二十三時三分。無名隊の隊士が生ゴミを飛び越こえて駆けてきた。そうして、息せき切って復讐の鬼に告げた。「閉店間ま際ぎわのプレ・ド・マルタンがジェノシドの一団に占せん拠きよされました！　一団にはＳＩＸもふくまれている模様です……！」

「出るぞ……！」復讐の鬼おには生ゴミを撥ね飛ばしながら駆かけた。その後ろに十五人の鬼たちがつづいた。中には前隊長を直接には知らぬ者もいる。しかし、話は聞いている。この七番突撃隊が〝焔隊〟だということはわかっている。

　七番突撃隊は大食小路をひた走った。ラッド・ワーノンの六番突撃隊、シャット・〝神剣グレヒャ〟の八番突撃隊、シャルロット・リンデの十二番遊撃隊もそれぞれの待機場所から飛びだして、七番突撃隊を追いかけてきた。「プレ・ド・マルタン」はラフレシア風のオープンカフェで夜はバーになる。高たか床ゆかの店てん舗ぽ。地上三メーテルのテラス。造りは洒しや落れている。警備は厳重だ。一いち見げんの客は入りづらい。小金持ちの男女が通ぶって茶を飲み、上品ぶって酒を酌くみ交かわす。そんな気どった店だ。有名店といってもいいだろう。チェス・ピードが知っているかぎりでは、開店が十一時、二十三時閉店。つまり、本来なら店はもう閉まっている時間だ。二十三時四分。今夜のプレ・ド・マルタンには店みせ仕じ舞まいできない事情があった。

　店の照明はついたままだ。テラスの手すりに、客らしい人間が洗せん濯たく物ものみたいに掛かけられていた。何人も。何人も。えらく騒さわがしい。テラスから大男がすっ飛んできた。大男は地面に落ちて、動かない。すでに死体だ。身なりはきっちりしているが、スーツが防護仕様なので、あるいは店の警備員か。

「踏ふみこめ……！」チェス・ピードは先せん陣じんを切って店の階段に足をかけようとした。そのときだった。一人の男がテラスからぬうっと身を乗りだした。チェス・ピードは目を瞠みはった。一いつ瞬しゅんで全身が燃えあがった。そんな心ここ地ちがした。
「──ＳＩＸ……！」

「ンンフウウゥゥゥゥ～……」ＳＩＸは蛇へびのような舌で薄い唇くちびるを舐なめた。「何だい。ちょっくら食事にきてみたら、銀ぎん虱じらみどもがお待ちかねってわけか。我わが輩はいはこの店のエレガント・キドニーパイがけっこう好きでねえ。今、奥で作らせてるんだよ。バリバリ営業時間内だとあれだろう？　我輩みたいなスゥーパ・スタアが来店したとなったら、大騒ぎだろう？　収拾がつかなくなっちまうだろう？　だからねえ。終わり間際にきてやったってわけさ。何しろ我輩、そのへんの気づかいにかけちゃあ、ちょっとしたモノだからねえ。ようするに、精神がノーブルなんだよ。ファインでマグニフィスァント。お前たちのような下品きわまりない糞ふん転ころがしとは違うってわけさ。Ｋｕ Ｆｕｆｕｆｕｆｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ」

　気がつくと、怨敵の忌いまわしい長ちよう広こう舌ぜつに耳を傾かたむけてしまっていた。その邪じや悪あくな舌には何か超ちよう常じようの力でも備わっているのか。魔ま物ものめ。チェス・ピードは自らの心の臓が、どくん、と大きく鳴る音を聞いた。やつは──あの魔物は、間違いない。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸだ。本物だ。チェス・ピードは、復讐の鬼は、駆けだそうとした。先を越された。

　男は「ははっ……！」と笑った。笑いながら飛んだ。実際には、テラスを支えている高さ約三メーテルの柱を垂直に駆け登った。神剣グレヒャだった。彼の鎧よろいはプロヴィデンスＯＦＲＲ。オフェンシブ・ファイネスト・ダブルアール。ダブルアールはラピッドリムーバブル。簡単に、素す早ばやく脱ぬぐことができる特注品だ。グレヒャは外がい套とうも鎧も兜かぶとも脱ぎ捨て、暗色のボディスーツ姿で、鞘さやを捨てて、愛刀「淫靡浪漫インヴイローマン」──新しん進しん気き鋭えいの鍛か冶じ士しローリー・アギャンスタの婀あ娜だっぽい逸いち物もつのみを手にしていた。あっという間だった。グレヒャはもうテラスの上にいる。

「我は汝Mo Loを愛すve yo……！」グレヒャはなぜか暗黒大陸の言葉で愛を告げながらＳＩＸに斬きりかかった。ＳＩＸはよけない。退かない。その場から一歩も動かず、顔の前で両りよう腕うでを交

差させた。その腕を中心として、例の細い紐ひものようなものが渦うず巻まいた。それだけではない。何かが巻き起こった。それが何かはわからないが、揺ゆらぎのようなものだった。小さくも激しい空間の振しん動どう。そのおかげなのか。

　グレヒャの剣はＳＩＸの両腕を傷つけなかった。止められた。受け止められてしまった。グレヒャはむろん、すぐさま剣を引いて第二撃を放とうとした。それより早かった。

　ＳＩＸが全身を柳やなぎのごとくしなわせた。非常識な柔軟性だった。骨があって腱けんがあって筋肉がある人間にあんな動きが可能なものか。ＳＩＸの右足が巻きこむようにグレヒャの脇わき腹ばらをとらえた。グレヒャは何か低い声をもらして吹ふっ飛んだ。吹けば飛ぶ紙かみ屑くずみたいに、グレヒャはテラスから遠く離はなれた通りの向こう側まで飛ばされた。そうして地面に叩たたきつけられた。やばい落ち方だった。それでもグレヒャはすぐに起きあがった。ぺっ、と血を吐はきだし、走りだそうとしたが、膝ひざが崩くずれそうになった。「━畜生シツト……！」

「けっこう速いじゃないか。だがねえ……」ＳＩＸは人差し指を左右に振ふって、チ、チ、チ、チ、と舌を鳴らした。「軽い。軽いねえ。軽いよ。剣にねえ。重みがない。重量が。ありふれた切れ味だけじゃあ、我輩には傷一つつけること能あたわんわけだよ。我輩にサプライズ一つ提供できやしないチ●カスお笑い潰つぶれキ●タマ野や郎ろうの域から出られんわけだよ。バッカじゃなぁーいのぉー？　Ｕ□Ｈｙａｈｙａｈｙａ……！」

　愚ぐ弄ろう。愚弄して。我らを、どこまでも。チェス・ピードの脳のう髄ずいが弾はじけた。ぶっ壊こわれた脳の中で焰隊長の声が響ひびいた。おいおい、お前がそんなことでどうする。

「八番、十二番は待機！」チェス・ピードは後ろを見ずに怒ど鳴なった。「六番、七番、私につづけ……！」

　秩ちつ序じよの番人は二手に分かれた。一方は階段を上がって店内に突とつ入にゆうし、テラスを目指す。もう一方はテラスの下で壁かべを作る。チェス・ピードの七番突とつ撃げき隊が先行して、ラッド・ワーノンの六番突撃隊もぴったりとついてきた。チェス・ピードは店内に入った。血の海だった。めかしこんだ男女が死んでいた。死し屍し累るい々るいだった。そのど真ん中に、ガルベル・ダのスーツを着た男が立っていた。鷲わし鼻ばな。灰色の髪かみ。

同じ色の目。印象は老ろう獪かいな猛もう禽きん類。ＳＩＸの腹心。ジェイはゆらりと両手を持ちあげた。その指と指の間に挟はさまれている釘ネイル。釘ネイル。釘ネイル。ジェイはそれらを投げた。見えなかった。チェス・ピードはとっさに盾たてで身体からだをかばって体勢を低くした。盾がバツッと鳴った。衝しよう撃げき。一本の釘ネイルが盾を貫かん通つうしていた。何名かの隊士が倒たおれた。チェス・ピードはかまわず突進した。突つっこめ、と叫さけびながら駆けた。店内にはジェイ以外にもジェノシドがいる。おそらく二十人かそこらだ。プレ・ド・マルタンは決して小さい店ではない。しかし、狭せまい。この人数が斬った張ったの大立ち回りを演じるには、いかにも狭い。狭すぎる。

　揉もみあい。そう称しようするしかない。あちこちで取っ組みあいが起こった。隊士が上になり、下になる。また上になる。ジェノシドに刃やいばを突き立てる。下から殴なぐられ、蹴けられる。別のジェノシドに兜を剝はぎとられ、さらに別のジェノシドが隊士の喉のどをかっさばく。そのジェノシドの後頭部をチェス・ピードが盾でぶん殴る。ジェイがくる。飛びかかってくる。釘ネイル。釘ネイル。釘ネイル。一本が左ひだり肩かたに食いこむ。太い釘ネイルが。左手がきかない。チェス・ピードは盾を捨て、刀で突く。突く。突く。ジェイは下がる。ジェノシドを、隊士をかきわけて下がる。そこに二メーテルを超こえる巨きよ漢かんのラッド・ワーノンが迫せまる。ジェイはワーノンの斬ざん撃げきをかわし、その背後に回りこむ。首筋に釘ネイルを埋うめこもうとする。ワーノンは前に転がって逃にげる。ついでに、その方向にいたジェノシドに体当たりしてぶっ倒す。チェス・ピードはジェイを追う。刀をコンパクトに振って、追う。追う。追う。ワーノンがチェス・ピードの背中を守ってくれている。その巨体で。

　ついにジェイはテラスに出た。チェス・ピードも飛びだした。ＳＩＸは椅い子すに腰こしかけて脚あしを組み、グラスを傾けていた。チェス・ピードの脳は再沸ふつ騰とうした。もはや隊長、焔隊長、あなたの声すら私を押しとどめることは叶かなわない。復ふく讐しゆうの鬼おには叫んだ。声をかぎりに呼んだ。宿敵の名を。
「──シイイイイイイイイイィィィィィィーックスッ……！」

　ジェイが復讐の鬼とＳＩＸとの間に立ちはだかった。「我が主マイ・ロード、潮時です」

「やれやれ。好物のエレガント・キドニーパイをまだ食ってやしないってのに」ＳＩＸはそう言いながらひらりと手すりの上に跳とび

のった。

　逃がすか。逃がすものか。逃がしてたまるものか。復讐の鬼は奇き声せいを発して突撃する。ジェイが向かってくる。「──貴様はどけ……！」復讐の鬼は吼ほえて刀を振る。会心の、いや、それ以上の斬り上げだった。身体の力が、体重が、前進の速度が、すべてが刀にこめられた。その刀身がぴたりと静止した。「──な……!?」

　ジェイの仕し業わざだった。やはり釘ネイルだ。やつの両手に一本ずつ、逆手に握にぎられた大振りの釘ネイルが刀を挟みこんでいた。そんな馬ば鹿かな。白しら刃は取どり、というやつだ。手ではなく、自じ慢まんの釘ネイルを使って。びくともしない。ジェイは、だが、微み塵じんも表情を変えず──嘲あざ笑わらいもせずに一言、「未熟」とだけ言った。死ぬ、とチェス・ピードは思った。死ぬ。私は死ぬ。確実に死ぬ。その瞬しゅん間かん、膝を折っていた。無ぶ様ざまに座りこんだ。頭上を釘ネイルが通りすぎていった。裂れつ帛ぱくの気合い。ワーノンの野太い声。剣けん光こう。一いつ閃せん。ジェイは下がった。

「チェス・ピードォッ……！」

　ワーノンに叱しつ咤たされ、チェス・ピードは横に転がって立ちあがった。ＳＩＸは手すりから跳ちよう躍やくしようとしていた。ジェイも手すりの上にいる。ワーノンがそのジェイめがけて刀を振りおろした。ジェイは後方宙返りをしてそれをかわした。そうして、ＳＩＸを追って手すりの向こうへ。チェス・ピードは手すりから身を乗りだした。「──ああ……！」

「Ｓ．Ｉ．Ｘトオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォムォ……」

　ああ。ＳＩＸが。八番突撃隊と十二番遊撃隊の真っ直中にいる、ＳＩＸが。ああ。回る。回転する。その全身から火花が、あるいは雷らい光こうのごときものが、バチバチバッチバチ飛び散っている。ＳＩＸは稲いな妻ずまを撒まき散らしまくる凶きよう悪あくな小旋せん風ぷうと化して猛もう威いを振るった。

「──〝雷電祭りサンダーフエスタ〟ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨッッッッッ……！」

　何人もの隊士が巻きこまれる。吹っ飛ばされる。そのそばでジェ

イが釘ネイルを手に一人一人、隊士たちの息の根を止めてゆく。シャルロット・リンデが兜かぶとから生やした羽をなびかせてジェイに斬きりかかった。ジェイはなんと、隊士から刀を奪うばってこれを防いだ。弾いた。受け流した。リンデは防戦一方になった。あの剣達者が。彼女以上の手て練だれである神剣グレヒャがＳＩＸに猪ちょ突とつ猛もう進しんして、撥はね返され、その身はズタズタのボロボロに斬り刻まれていて──隊士が、隊士たちが、同志たちが、無む為いに、すべてが無為であるかのように、蚊かや蠅はえよりもたやすく、あまりにも簡単に、呆あつ気けなく、みじめに、いいように蹂じゅう躙りんされている。

　耐たえがたい。耐えられない。耐える必要などありそうにない。チェス・ピードは喚わめきながらテラスから飛び降りた。ワーノンも「ぬうん！」とチェス・ピードの隣となりに着地した。そのときにはもう、ＳＩＸは十メーテル以上先にいた。ジェイもその後ろにいる。大笑いしながら、高笑いしながら、ＳＩＸは逃げようとしている。逃げるのか。なぜだ。我らを壊かい滅めつさせることもできるだろうに、逃げるというのか。いや、違ちがう。それは逃とう走そうではない。断じて違う。我らは見み逃のがされたのだ。生き残った者たちは命拾いした。チェス・ピードは地面に刀を叩たたきつけた。何度も、何度も。「──くそ！　くそ！　くそ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸめ！　ＳＩＸめ！　あの野や郎ろう！　畜生フアック……！」

時は無む慈じ悲ひに移ろう。無情に日が変わる。二十七番日。十二時七分。やはり第五区。鉄てつ鎖さの憩いこい場の西。ベンテン・カフェの二十五メーテル北。三代目総長トマトクン以下元ＺＯＯの構成員七名と琺瑠隊は角に立つ建物の二階。その対角にある建物の一階に、総長代理羅叉率いる羅叉隊と李童晏の二番親衛隊。近くの路地にプランク・〝教師テイーチヤー〟・フェニファーの十九番警けい邏ら隊。無名隊隊士の報告で奇ゲ襲リ劇ラの兆候を察知した各隊は、即そく座ざに潜せん伏ぷく場所から飛びだしてベンテン・カフェへ。各隊がベンテン・カフェ前に到とう着ちやくすると、明らかにジェノシドと思われる一団が店内に足を踏ふみ入れようとしているところだった。その中に目立つ男が三人いた。一人は立派な体たい軀くをジェノシドとガルベル・ダの折せつ衷ちゆうといったかんじのスーツで包み、顎あごが割れていて、嫌いや味みなほどの伊だ達て男おとこだった。もう一人はアフロヘアで、妙みように色白で、虹にじ色いろの色眼鏡サングラスをかけていた。三人目は非常なマッチョで、テカテカしていた。三人の姿を確かく認にんするなり琺瑠が叫さけんだ。「──デメトリオ・アルベルティーニ！　ゲフリー・ピーチマン！　それに、マスター・オニオン……！」

元ガルベル・ダのリードデザイナーで現リヴァイスのデザイナー、〝十二人殺し〟のデメトリオ・アルベルティーニ。元モン・ローのデザイナーで同じく現リヴァイスのデザイナー、ゲフリー・ピーチマン。元フェチ・バルのデザイナーで、やはり現リヴァイスのデザイナー、マスター・オニオン。それに加えて、ベテランとおぼしきジェノシドが十二名。連中は秩ちつ序じよの番人に気づくと、慌あわててベンテン・カフェに突とつ入にゆうしていった。やつらはもともと店内で奇ゲ襲リ劇ラを開かい催さいしようとしていたのだろう。ここに読み違えがあった。奇ゲ襲リ劇ラはベンテン・カフェの近くで行われるだろう。それが作戦本部の予想だった。ともあれ、奇ゲ襲リ劇ラが始まることはない。その代わりに秩序の番人が奇き襲しゆうをかけた。敵は防戦のため、店内へ。そこには侵入者クラツカーたちがひしめいている。はっきり言って、邪じや魔まだ。しかも、侵入者クラツカーは例外なく武装している。悪党そのものや悪党と大差ない者も多い。なかにはジェノシドのグリーンも混じっているだろう。面めん倒どうなことになる。誰だれもがそう思ったはずだ。少なくとも、マリアローズは暗あん澹たんたる気持ちになった。吹ふき飛ばされた。三代目総長トマトクンが店の出入口で吼ほえた。「秩序の番人だ！　死にたくなければ失うせ

ろ！　死にたいやつだけかかってこい……！」

　すごい声だった。音量だけじゃない。もともと声が低いから、腹に響ひびく。そして、威い圧あつ感かん。もっと言えば、殺気。侵入者クラツカーたちはただちに自覚した。自らの立場を。自分たちは草そう食しよく獣じゆうだ。獲え物ものにすぎない。肉食獣がやってきた。逃にげないと、食われる。食われてたまるか。そうとなったら、痩やせても枯かれても侵入者クラツカーだ。自身の腕うでで食い扶ぶ持ちを稼かせいでいる。一度や二度は修しゆ羅ら場ばだってくぐってきている。そのへんの市民とは違う。彼らはほとんど迷わない。右往左往したりしない。一目散だ。それでいて、どこかで冷静さを保っている。少なくとも、いくらかは。効率よく逃げないといけない。上手に逃げるのだ。生き残るために。

　混乱はあった。でも、最小限といってもいいだろう。みるみるうちに、潮が引くように、ベンテン・カフェの人口密度が低くなっていった。とくに現在、店の中央あたりにいるジェノシドの一団周辺には誰もいない。逃げずにジェノシドに合流する者たちはグリーンどもだろう。その数は五十人ほどだ。ただし、中ちゆう核かくは伊達男アルベルティーニとアフロのピーチマン、マッチョのマスター・オニオン、それから十二名のベテランどもに違いない。他ほかは雑ぞう兵ひよう。〝死神〟羅叉が先頭を切って突つっこんだ。そうかと思ったら、羅叉をピンパーネルが追い抜ぬいた。つづいて〝小しよう羅ら刹せつ〟李童晏。カタリ。羅叉隊、親衛隊。珐瑠隊。プランク・〝教師テイーチヤー〟・フェニファーの十九番警邏隊は別の出入口方面へと向かっている。敵を逃がさないためだ。肝かん心じん要かなめのトマトクンは、ところが、足を止めている。

　ユリカとサフィニア、ルーシー、そしてマリアローズも、トマトクンにつられて立ち止まっていた。戦せん闘とうはもう始まっている。マリアローズはトマトクンの顔を見上げた。「……どうかしたの？」

　トマトクンは後ろを振ふり返って鼻に皺しわを寄せた。「逃げられたな」

「逃げられたって……何に？」

「いや、とりあえずいい」トマトクンは前に向きなおり、肩かたをすくめた。「……だが、まあ、俺たちの出番はなさそうだな」

　そのようだった。羅叉、李童晏、ピンパーネルの三人による突とつ撃げきはすさまじい破壊力を発揮していた。カタリあたりは「わしも入れろや！」とか言いそうだが、殊しゆ勲くんはやっぱりあの三人ということになるだろう。一人でなんでもどうにかしてしまうピンパーネルに対して、羅叉と李童晏はその部下の隊士たちも効果的な働きを見せていた。彼らは慣れているのだ。自分たちの隊長が突っこむ。敵をかき乱す。めちゃくちゃにする。その機に乗じて敵に大打撃を与あたえる。的確に。着々と。珐瑠隊は珐瑠の指示で薄うすく広く展開し、二隊を補った。

　ピンパーネルが十二人殺しのアルベルティーニを十二以上の肉にく片へんに変えた。李童晏はマスター・オニオンにしがみつかれながらも滅めつ多た突づきにした。羅叉がピーチマンを袈け裟さ懸がけに斬った瞬しゆん間かん、勝利は決定的になった。ピーチマンは致ち命めい傷しようを掻かきむしりながら喚わめいた。「──何だァーよ、クソ畜生シツトフアツク！　ＳＩＸこねッて、そんなんアリかァーい……!?」

　マリアローズはすかさず叫んだ。「そいつは殺さないで……！」

　ピーチマンはＨＡＨＡＨＡＨＡ笑って口を閉じた。羅叉がその横っ面つらに肘ひじ打うちを食くらわせた。でも、間に合ったかどうか。ピーチマンは床ゆかに倒たおれて全身を不気味に震ふるわせた。きっと毒物のせいだ。口の中に仕し込こんでいたのに違いない。すぐさまユリカが飛んでいったけれど、治ち療りようは無理だろう。アルベルティーニとマスター・オニオンはとうに絶命している。ただ、ピンパーネルはうまく殺した。手足はバラバラだが、切断面が比ひ較かく的きれいだ。頭はちゃんと残っている。あれならもしかすると蘇そ生せいが成功するかもしれない。

　何にしても、ベンテン・カフェの奇ゲ襲リ劇ラ潰つぶしはほぼ完かん璧ぺきだった。表面的には。三代目総長の意見は違ちがった。トマトクンは苦虫を嚙かみ潰したような顔をしていた。「匂においを覚えられたかもしれんな」

「匂い……ですか……？」とサフィニアが訊きいた。

　トマトクンはうなずいた。「うむ」

　マリアローズは血なまぐさい店内を見まわして首を傾かしげた。「──って、誰に？」

　トマトクンは片方に眉まゆをつりあげて、ちらりとルーシーを見た。「やつに、だ」

　ルーシーは怯おびえるように身を硬かたくした。顔が真っ青だ。「お父さん……？」

「でも、匂いって、そんな。犬じゃあるまいし」

「俺はやつの匂いがだいたいわかる。やつはそんなに鼻の利きくほうじゃなかったが、今もそうとはかぎらんからな」

「ああ、そっちの匂いね」

　トマトクンには独特の嗅きゅう覚かくが備わっている。それは勘かんとか第六感に近いものなのかもしれない。その嗅覚は特定の物や人に反応するようだ。同じような嗅覚を、ＳＩＸも有しているのかもしれない。だとしたら、つまり、こういうことか。

　ＳＩＸはこの奇ゲ襲リ劇ラに参加するはずだった。でも、寸前でＳＩＸはトマトクンの匂いを感じた。やばい。あいつとはやりあいたくない。そう思って引き返した。それが死に際ぎわのピーチマンの恨うらみ言ごとに繫つながった。ＳＩＸこねッて、そんなんアリかァーい。

　トマトクンは顔をしかめて鼻から息を吐はいた。「ちょっとそんな気はしてたんだがな」

　ＳＩＸはトマトクンを避さけているのかもしれない。ＳＩＸはトマトクンを恐おそれている。トマトクンには勝てないと思っているのかもしれない。現時点では推測でしかないが、頭に入れておく必要はあるだろう。

　このあと秩ちつ序じよの番人は、ベンテン・カフェで討うち死にしたベテラン十二名のうち三名とデメトリオ・アルベルティーニの蘇生を試みた。結果は四分の二だった。ベテラン一名とアルベルティーニは成功。他は失敗。二人が喋しやべることのできる状態になったら、無名隊によって尋じん問もんが行われることになる。戦いはつづく。

　同二十七番日。十五時二十一分。第五区。第十三区傍そば。追い剝バンデツぎ横丁ドレーン。デートニッヒ・ボルボンゾルの九番突撃隊、太臺子の十番遊撃隊、ジョービー・カラマーの十一番遊撃

隊、デュナン・セプテンの二十九番警けい邏ら隊が奇ゲ襲リ劇ラを奇き襲しゅう。グリーン七名、ベテラン十名を殺したが、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは取り逃がした。ベテラン一名が蘇生式を受けて蘇生した。

　同二十七番日。十九時三十分。鉄てつ鎖さの憩いこい場の三ブロック北。裏市場ＢＡＭＰ（バンプ）前。近くに潜せん伏ぷくしていた羅叉隊、李童晏の二番親衛隊、ラッド・ワーノンの六番突撃隊、シャルロット・リンデの十二番遊撃隊が、無名隊隊士の報告を受けて奇ゲ襲リ劇ラを急襲。敵側は警けい戒かいしていた模様だ。ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキはただちにジェノシドを引き連れてバンプに逃げこんだ。

　バンプはただでさえ混こん沌とんとしている。裏市場という名で呼ばれてはいても、実態はほとんど廃はい品ひんの集積所だ。基本的に使い物にならないが、ある特定の用よう途とでは活用されることもなくはない。そんな代しろ物ものが無数の山を作っている。塵ゴミに埋うもれて日がな一日、寝ねているだけの者も少なくない。ただ、廃品同士の交こう換かんは盛さかんだ。裏バ市ン場パ人ー、という言葉がある。バンプに生息している者たちがいるのだ。それも、けっこう大勢いる。

　ジェノシドはそんな場所に逃にげこんで、Ｔシャツを、香こう水すいをばらまいた。バンパーたちは目の色を変えた。それらは彼らの商品よりも手っ取り早く金になりそうな品物だった。彼らはお宝めがけてダイブした。あるいは、他ほかの者から強ごう引いんに奪うばおうとした。廃品の山が崩くずれて、隊士たちの行く手をさえぎった。隊士たちは廃品を押しのけ、乗り越こえてジェノシドを追った。その過程でいくつもの事故が起きた。廃品はバンパーにとっては商品であり、財産だった。それを踏ふんづけられて怒いかりを露あらわにする者たちがいた。興奮のあまり、自らの財産であるはずの廃品を隊士に向かって投げつける者がいた。これに腹を立てて怒ど鳴なる隊士がいた。剣けんで威い嚇かくする隊士もいた。どこからともなく廃品が飛んできた。ビュンビュン飛んできた。それなりに重量のある物もその中にはふくまれていた。

　隊士たちはそれでも進まねばならない。ジェノシドを追い、ＳＩＸかもしれない男をしとめねばならない。しかし、事件は起きる。最大にして、くだらない事件が起きてしまう。

　先頭を行く羅叉はいつもどおり兜かぶとを被かぶっていなかっ

た。その顔面めがけて何か丸い物体が飛んできた。羅叉はそれを日輪で叩たたっ斬きった。それは斬れた。というか割れた。それはやわらかかった。中身はとくに。その中身が、黄色っぽい粘ねん液えきのようなものが、羅叉の短い頭とう髪はつや、一部は顔面にも降りかかった。羅叉は顔をゆがめた。それは生の卵だった。しかも、腐ふ敗はいしていた。バンパーたちが沸わいた。笑いも起こった。羅叉は舌打ちをしただけで、腐くさった卵をぬぐいもせず、かえって足を速めようとした。死神は激げき昂こうしなかった。親衛隊を預かる李童晏は違った。爆ばく発はつした。きっかけはあった。一人のバンパーが羅叉に近づいて「臭くせえ、臭え！」と叫さけんだ。その直後だった。李童晏がそのバンパーを、さすがに斬りはしなかった。顎あごに肘打ちをお見み舞まいして、昏こん倒とうさせた。「貴様らのごとき下郎に侮あなどられる謂いわれはない。下がれ」

李童晏の実力行使を伴ともなった恫どう喝かつは、嵐あらしのような怒号と廃品の雨あめ霰あられを招いた。さりとて、李童晏を責める向きは隊士たちの中にはなかった。彼らもバンパーたちの所業には腹を立てていた。バンパーたちもまた、秩序の番人に敵てき愾がい心しんを抱いだいていた。バンプは自じ堕だ落らく者の吹ふき溜だまりで、野放図者の楽土だった。秩序の番人のような集団は、そもそもバンパーたちとは相あい容いれないのだ。バンパーたちにとってはジェノシドも当然、迷めい惑わくな闖ちん入にゅう者だった。その点は秩序の番人と同じだった。しかし、秩序の番人はそこから格上げ、あるいは格下げされた。今や明確な敵と見なされていた。嫌いやがらせや腹立ち紛まぎれの所業は、積極的な妨ぼう害がいに変わった。

おかげで追つい跡せきはいっそう困難になった。ジェノシドとの距きょ離りがどんどん開いた。秩序の番人がバンプの真ん中あたりでもたついている間に、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキはバンプを抜ぬけようとしていた。

ついに抜けだした。

そこで仮面の男は待ちかまえていたのだろうか。ジェノシドがバンプを出る直前まで、そこにはいなかったという証言もある。ともかく、薄緑色ライトグリーンの仮面と衣ころもを身につけた男は、ジェノシドの行く手に立ちふさがった。「──仮面の男〝緑の薔薇グリーンアイス〟、只ただ今いま見参ッ……！」

「ヌォアッ……！」ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキは完全に不意を突つかれた。そうでなくとも仮面の男は速かったという。尋じん常じようではない速度だったらしい。

「ＳＩＸ！　覚かく悟ご……！」仮面の男はＳＩＸもしくはＳＩＸモドキに躍おどりかかり、手にした短たん剣けんでその右みぎ腕うでを斬り落とした。さらに右耳から左耳まで一直線に斬り裂さいた。そうして喉のど元もとから首筋にかけて刃やいばが走ると、その首は薄うす皮かわ一枚で繫つながっている状態になった。頭部は皮のみで胴どう体たいにぶらさがるざまと成り果てた。

　言うまでもなく、それはＳＩＸではなかった。ＳＩＸモドキだった。ＳＩＸモドキは末まつ期ごの言葉を残すこともできずに倒たおれた。ジェノシドたちは逃げ散った。羅叉隊以下秩序の番人は、バンプを出るなり白はく刃じんを振ふりかざして仮面の男に殺さつ到とうした。

「アジアン、貴様！　性しよう懲こりもなく、よくもぬけぬけと……！」

「──ち、違ちがッ！　ぼ、ボクは通りすがりの仮面の男〝緑の薔薇グリーンアイス〟で……！」

　仮面の男は死神が振るう日輪から「ムッ！」と逃のがれ「ハッ……！」と逃れ「……クッ！」と逃れた。「──ええい、なんて融ゆう通ずうがきかないんだ、キミは！　敵の敵は味方という言葉を知らないのかい……!?」

「知らぬ！　知りたくもない！」

「分からず屋だな！　やむをえない……！　ああ、言っておくけど、そいつは偽にせ物ものだヨ！　残念ながらネ！　さよならadieu、死神クン……！」

　仮面の男は背を向けて遁とん走そうした。あとにはＳＩＸモドキの死体だけが残された。確かく認にんしたところ、その胸の真ん中に数字の「３」が、それから左ひだり脇わき腹ばらに「サブ」の文字が刺青いれずみされていた。ＳＩＸモドキ（呼こ称しよう・サブ）は蘇そ生せいが叶かなわなかった。バンプの騒そう乱らんは、駆かけつけてきたアサイラム・チームがバンパーの負傷者を治ち療りようすることで、なんとか収拾がついた。

　その夜の空は雨上がりのように晴れ渡わたった。

　エルデンが嘘うそみたいに静かになった。

　奇ゲ襲リ劇ラがやんだのだ。

　やまない雨はない。でも、またいつか空に雲は立ちこめ、雨あま粒つぶが落ちてくるだろう。ひょっとしたら、次は単なる雨ではないかもしれない。いきなり雹ひようが降るかもしれない。雷らい雨うに襲おそわれるかもしれない。

　二十九番日十八時。三代目総長トマトクンと元ＺＯＯの面々、珐瑠隊、チェス・ピードの七番突とつ撃げき隊、アーニャ・クルチバの二十七番無名隊の主立った者たち、ハインツ・クルエルフォートの二十五番無名隊若じやつ干かん名めいは、鉄てつ鎖さの憩いこい場の公園に陣じんどっている。移動本部はこの二時間ほど移動していない。この場所にとどまって、各隊と連れん絡らくをとりあっている。

　エルデンは依い然ぜんとして静かだ。各所で奇ゲ襲リ劇ラが頻ひん発ぱつしていた前の状じよう況きようと比べれば、遥はるかに。ジェノシドに動きはない。少なくとも、目立ったものは。ただ、市民たちについていえば、皆みなが皆、おとなしくしているわけじゃない。秩ちつ序じよの番人は必ずしも好かれていないのだ。もともとそうだし、今はジェノシドに肩かた入いれしている者も多い。リヴァイスの衣い装しようを身にまとって、秩序の番人を挑ちよう発はつしようとする阿あ呆ほうも中にはいる。遠くから罵ば詈り雑ぞう言ごんを叫んで逃にげてゆく程度なら、実害はないので気にせず放ほうっておけばいい。でも、これにはちょっとまいっている。てゆうか、それなりにむかついてはいるよ？　そりゃあね。あたりまえでしょ？

　誰だれが始めたのだろう。いつの間にか一種の流行になってしまっているらしい。

　まただ。ひゅんっと飛んできた。トマトクンが顔の横にさっと右手を出して、見事にそれをキャッチした。その拍ひよう子しにべ

ちゃっと潰つぶれた。

　トマトクンはそれを口へと運んだ。慌あわててサフィニアが止めようとした。遅おそかった。

　食べちゃった。

　マリアローズは額を押さえた。「……あのさ。食べないでよ。無む警けい戒かいに。毒でも入ってたらどうするわけ？」

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、掌てのひらや指を舐なめた。「ぶつけるつもりで投げるものに、わざわざ毒なんか入れんだろう」

「まあ……」マリアローズは溜ため息いきをついた。「それはね。そうかもしれないけど。だからってね。食べることないでしょ……」

「そ、そうですよ……！」サフィニアはトマトクンに詰つめよった。「あ、危ない……かもしれないんですから！　す、少しは、気を……つけてください！　自分だけの、身体からだじゃ……ないんですから……！」

「わかった、わかった」トマトクンは苦く笑しようした。「だがな。トマトは好きなんだ」

「グワハハ！」カタリが笑った。「なんせ、名前にしとるくらいやからなあ！」

　ユリカは顎あごに人差し指をあてた。「身体にいいのよね。トマトは」

「はイ」とピンパーネルがうなずいた。

「え？」マリアローズはちょっとだけ目を瞠みはってピンパーネルを見た。「ピンパーネルって、そういうの詳くわしかったりするの？　野菜の栄養とか」

　ピンパーネルは下を向いた。その顔がわずかに引きつっている。「……いエ。あまり……という力、まったく」

　わざとだろう。ユリカはほっぺたを膨ふくらませてピンパーネル

を睨にらんだ。「じゃあ、適当に話をあわしぇてうなじゅいたの？　ひどいわ、ピンパーネル」

「ご、ごめんなサイ……」

　ユリカはぷっと吹ふきだして、うなだれているピンパーネルの背中を軽く叩たたいた。「怒おこってないわ。冗じよう談だんに決まってるじゃない」

　少しの間、みんなで笑った。

　まあ、みんなといっても、マリアローズとカタリ、サフィニア、ユリカで、トマトクンも微笑ほほえんでいたけれど━番人たちは白けきっていたり、いい気なものだと思っていそうなつめたい視線をそそいでいたり、疲つかれているのだろう、一いつ切さいの感情を失ったような顔つきでぼんやりしていたりする。真ま面じ目めすぎると思うんだけどね。正直。もうちょっとさ。どんなときも、心にゆとりみたいなものを持ってさ。てゆうか、きついときこそ、あれじゃない？　あえて冗談くらい飛ばしてみせるくらいの図太さは、ないよりあったほうがよくない？

　━なんてことを考えている間にもトマトが飛んできて、琺瑠隊の隊士が盾たてで防いだ。他ほかの隊士がトマト投げの犯人を見つけたのか、モトロール刀の柄つかに手をかけて駆けだそうとしたが、琺瑠に制された。その琺瑠めがけて何者かがトマトを投とう擲てきした。琺瑠が首を曲げてよけたトマトは、別の隊士の胸甲に命中した。その隊士が怒いかりを露あらわにする前に、琺瑠が月のような笑えみを浮うかべて言った。「迂う闊かつね。そんなものもよけられないなんて。精しよう進じんなさい」

　さすがは琺瑠副長だ。隊士たちは見習うように━なんて、言わないけどさ。そんな偉えらそうなこと。気持ちはわからなくもないしね。だって、よりにもよってトマトって。悪ふざけにも程ほどがあるよ。ほんと、誰が考えたんだか。

　案外、ジェノシドの仕し業わざだったりして。

　そんなわけがない、とは言えない。リヴァイス製品で着き飾かざっている者は少なくないのだ。というか、けっこう、かなり、多い。その中にはグリーンも紛まぎれているだろう。グリーン予備軍もいるだろう。証しよう拠こはない。きりがないので、いちいち

ひっとらえて問い詰めるわけにもゆかないし、そんなことをしたら、きっと今以上に膨ぼう大だいな数のトマトを浴びる羽目になる。

「まさか、こんなのが次の手ってことはないよね……」

　敵がどう出てくるか。どんな手を打ってくるのか。マリアローズをふくめた作戦本部はそのことばかり考えている。無名隊は情報蒐しゅう集しゅう及およびＳＩＸ、ジェノシドの捜そう索さくを行っているけれど、めぼしい報告は上がってこない。攻せめに転じて、ＳＩＸモドキのシロウを捕とらえ、サブをしとめた。リヴァイスの重じゅう鎮ちん、ゲフリー・ピーチマン、マスター・オニオンを殺し、デメトリオ・アルベルティーニを虜とりこにした。他にもベテランを捕ほ獲かくした。敵の戦力を削けずった。結果を出した。その途と端たん、敵は雲くも隠がくれしてしまった。そうなると、こっちとしては身動きがとれない。というより、動きまわっても疲れるだけだ。何の意味もない。

　また受け身に回るのか。相手の出方を見るしかないのか。それはそれで正しい選せん択たくなのかもしれない。焦あせりは禁物だ。こういうときは悠ゆう然ぜんと構えていればいい。何か起こったら即そく座ざに対応すればいいのだ。それが正解なのかもしれない。実際、作戦本部内にもそういう空気が流れている。二十六番日と二十七番日の二日間で、こっちも被ひ害がいを受けた。この時間を有効に活用して態勢を立てなおせばいい。そうなのかもしれない。

「……あれ？　そういえば、ルーシーは？」

「魚うおろぇ？」半魚人が怪かい声せいをもらして周囲を見まわした。「……おんやあ？　おらへんなあ。ちょっと前まではそのへんにおったはずやけど。おっかしいのう」

　サフィニアが下を向いて苦笑いを浮かべた。「……また……ですか……」

「しょうがないわねえ。あの子も」ユリカは可か憐れんな溜息をついた。

　マリアローズは唇くちびるをゆがめて人差し指で頬ほおを引っ掻かいた。

　ユリカが愛らしく首を傾かしげた。「どうかしたの？」

「や……ふと、ね。僕もそんなふうに言われてたのかな、とか、思ったりしてさ」

「そんなことは……」サフィニアは上うわ目め遣づかいでマリアローズを見た。「……なかった、とは言いきれない……部分も？」

「まあ、正直、ゆうとったな」カタリは腰こしに手をあててナハハハ笑った。

　トマトクンは片方の眉をつりあげた。「俺は言ってないぞ。よく覚えてないが」

「ワタシも言ってまセン」ピンパーネルはちょっとだけ目を細めた。「思ってたダケ」

　ユリカは笑いを噛かみ殺しながらマリアローズのおしりをぺちぺち叩いた。「しょんなの、昔の話でしょう？」

「まあ、ね……」マリアローズは頭を掻いて決まりの悪さを紛らそうとしてみたけれど、どうもうまくゆかなかった。てゆうか、ルーシー。あの子ってば、どこ行ったんだよ。放ほうっておくわけにもゆかない。「ちょっと捜さがしてきてもいいかな、トマト。十分以内に戻もどるから」

「うむ」

「わたしもーいつ緒しよに行くわ」

「ワタシも行きマス」

　こうしてマリアローズは、ユリカとピンパーネルという最強の護衛とともにルーシー捜しに旅立った。旅とも言えない旅だった。目的がすぐに達成されてしまったからだ。

　公園の隅すみだった。屋台だ。原色のけばけばしい看板に、血ち糊のりで書かれたようなおどろおどろしい「パロメロ・ニャニャーンズ」の文字が躍おどっている。ひどいセンスだ。売られている物はアイスクリームらしい。ルーシーはその屋台の前にしゃがみ、メニュー板に見入っていた。

　マリアローズはユリカ、ピンパーネルと顔を見あわせて肩かたをすくめた。三人で足音を忍しのばせてそっと近づいてゆき、マリアローズが肩を叩いた。ルーシーは「わあっ！」と叫さけんで跳とびあがった。「──なっ……ちょっ……な、ま、マリアさんじゃないですか！　ユリカ姉様も！　それに、ピンプさんまで！」

　ユリカが怒り顔をしてみせた。「びっくりしたのはこっちよ。ダメじゃないの。何も言わないで、勝手にどっか行ったりしちゃ」

「制裁しマスよ」ピンパーネルは無表情で右の拳こぶしを持ちあげた。あくまで拳だ。そんなわけはないのだけれど、鋭えい利りな刃は物もののような切れ味を秘ひめているように見えた。

　ルーシーは顔を青くしてあとずさった。「……ご、ごめんなさい。そ、そういうつもりはなかったんですけど……なんか、猛もう烈れつに、アイスクリームが食べたくなって。ここにきたときから、屋台が目に入ってて。それで……」

「いいけどね」マリアローズは息をついた。「や、よくないよ？　一応、僕らは今、秩ちつ序じよの番人なんだしさ。危ないでしょ。一人でふらふらしてたら──」何か飛んできた。ひょいとよけたら、それは屋台の柱にあたってべちゃっと潰つぶれて赤い果肉が飛び散った。ピンクのモヒカンにねじり鉢はち巻まきをした屋台主が、屋台の中から身を乗りだして「おいこら！」と叫んだ。マリアローズは眉まゆ根ねを寄せて口をへの字に結んだ。「……こんなこともあったりするしね」

　ルーシーは肩をすぼめて小さくなった。「す、すみません……」

「ていうかよぉ」モヒカン屋台主がこっちを見た。「あんたら、なんか買ってくれよ。おれっちの大事な屋台にトマトなんかぶっけられてよぉ。汚よごれっちまってよぉ。あんたらのせいなんだからよぉ。それくらいしてくれたってよくね？　罰ばちはあたらなくね？」

「はいはい」マリアローズはメニュー板を見た。一いつ瞬しゆんで決めた。「じゃ、僕はチョコミント。ダブルでお願い」

「わたしはバニラでいいわ。シングルで」

「ワタシはラムレーズン・お願いしマス。シングルで」

「えと、ぼくは」ルーシーはおそるおそるといったかんじでマリアローズを見た。「……い、いいですか？　ぼくも。あ、お金は自分で払はらいますけど！」

　マリアローズは軽く笑った。「いいよ。奢おごってあげるから。選んで」

「はい！」ルーシーはメニュー板を指さした。「ぼくはこれで！　ベリー・ベリー・ベリーをお願いします！　あの、し、シングル……」

　マリアローズは親指と人差し指を立ててみせた。「ダブルで」

「あいよぉ」モヒカン屋台主は満面に笑えみをたたえて、あっという間に注文通りのアイスクリームを仕上げた。勘かん定じようはマリアローズが支払った。ここに半魚人がいたら、やつに払わせるんだけどね。ユリカにもピンパーネルにも日ごろお世話になってるし。ルーシーは、かわいいかどうかはアレとしても、後こう輩はいだし。最近は泣き言一つ言わないで、がんばってたし。

「でも」マリアローズはベリー・ベリー・ベリーをぺろぺろ舐なめているルーシーのほっぺたをつまんだ。「ダメだからね。こういうのは。大目に見るのは今回だけだよ。わかった？」

　ルーシーは目をいっぱいに見開いて首を縦に振ふった。「……は、はい！　ほんとに、それはもう！　今後、気をつけます！」

　マリアローズはルーシーのほっぺたから指を離はなした。ルーシーはほっぺたを押さえて、アイスをぱくついた。その顔がちょっと赤くなっている。そんなに痛かったかな。軽くつまんだだけなんだけど。「……大だい丈じよう夫ぶ？」

「え？　な、何がですか？」

「や……いろいろ」

「だ、大丈夫……ですよ？　そ、そりゃあ、気になることはありますけど。その……」ルーシーは声をひそめた。「お父さんのことは、もうどうしようもないっていうか。なるようにしかならないっていうか。そんなかんじなんですけど。今のところは。でも、お兄ちゃんのことなんかは……」

「しょうよね……」ユリカは目を伏ふせた。「しょの存在しゃえ知らなかったとしても、兄弟は兄弟だし……」

「それもそうなんですけど……」ルーシーは眉み間けんと顎あごに皺しわを寄せた。「どうも、一人とか二人じゃないみたいでしょ？　ぼくの兄弟って。女の人もいたから、お姉ちゃんもいたのかな。もしかしたら──」

　ルーシーは口ごもって、言いづらそうにしている。マリアローズは先を促うながした。「もしかしたら？」

「ぼくも」ルーシーはきゅっと唇くちびるを嚙かんだ。「──ぼくも、ああいうふうになってたかもしれないって、そんなことも考えたりするんですよね。なんていうか、もしお父さんにこうしろって言われたら、やってたかもしれないっていうか。でも、ぼくはあんまりお父さんに似てないから、選ばれなかったのかな、とか」

「じちゅは、けっこういたりするのかしらね。ＳＩＸの子供って……」

「その中で、ＳＩＸに似てる息むす子こと娘むすめだけが集められて……影かげ武む者しやをしてる？」

「アッサシンには」砂色の瞳ひとみが微かすかに揺ゆれた。「血けつ縁えん者だけデ構成されている・のガいます。見分け・つかナイ。顔は少しずつ違ちがウ・でも体形トカ。規模がわからナイ。リーダーが誰だれかモ。実態ガ不明だと・恐おそれられマス」

「だけど」ルーシーは一度きつく目をつぶって、開けた。「変ですよね。ぼくがお父さんよりお母さんに似てることなんて、お父さんはずっと知ってたはずです。ぼくに利用価値がないなら、なんでお母さんのところに何度もきたりしたんですかね。どうしてお母さんにやさしくしてくれたんですかね。ぼくをかわいがってくれたんですかね。ぼくがお父さんにとって使えない子供だったなら、思い出なんか残してほしくなかったですよ。お父さんに会いたいなんて、思いたくなかったです。でも、お母さんはお父さんを愛してたし、お父さんと出会ってなかったより出会ってたほうが、やっぱり幸せだったと思うんです。そのことは……お父さんがどんなにひどい人でも、ぼくは感謝してるんです。それだけは、どうしても消せないんです」

　何も言えなくて、マリアローズはルーシーの肩かたをそっと抱だいた。ユリカはルーシーの背中をさすった。ピンパーネルはじっと見守っていた。さすがに元アッサシン以外は反応できなかったかもしれない。

　近くに茂しげみがあった。そいつはその中から飛びだしてきた。狙ねらいは、ひょっとしたらアイスクリームか。たぶん、茂みの近くにいたマリアローズのチョコミントだ。だって、そいつはこっちめがけて飛んできたから。ピンパーネルが阻そ止ししてくれた。左手で雌めすのリレッザを抜ぬいて、鋭するどく湾わん曲きょくした約四十サンチの剣けん身しんで、そいつをスパッと両断してくれたのだ。

「きゃあっ……！」マリアローズは思わず悲鳴をあげてルーシーに抱きついてしまった。ルーシーは「うにょっ」とか謎なぞの声を出して全身を硬こう直ちょくさせた。ユリカはアイスクリームを手にしたまま、極限クライマックス九手棍ナインポールを構えた。でも、そこまでする必要はなかったりする。てゆうか、迎げい撃げきしなきゃいけないような相手なら、僕だってね。いくらなんでもね。ちゃんとするしね。だけど、あれはさ。ちょっとね。苦手っていうか、生理的に受けつけないっていうか。

　ピンパーネルも少しいやそうな顔をして、雌のリレッザを見つめている。

　ユリカは極限九手棍を下ろした。「……大きめの—脂羽蟲ゴキ？」

「え、でも……」ルーシーはまっぷたつになって地面の上でプルプルブルブルしているそれを指さした。「なんか……変じゃないです？　脂羽蟲ゴキとはちょっと、形が違うような……？」

　マリアローズは勇気を振りしぼって、ルーシーの肩かた越ごしにそれを観察した。ぞっとする。もうマジで、本当に、どうしようもなく、いやだ。こいつらには憎にくしみと嫌けん悪おしか抱いだけない。ただ、憎ぞう悪おを再確かく認にんしただけではなかった。わかったこともある。たしかに、ルーシーの言うとおりだ。それは普ふ通つうの脂羽蟲ゴキじゃない。具体的には、ひれみたいなものがある。尾おびれ。それから、身体からだの両側に、腹びれ。触しよつ角かくはびよーんと長い。色も違う。全体的にちょっと緑色がかっている。「……あ」

「どうかしたんですか？　マリアさん」

「あれって……」マリアローズは眉まゆをひそめた。思いだしたくない。でも、思いださないと。なぜそう思うのか。きっと重要なことなのだ。変種の脂羽蟲ゴキが？　どうして？　わからない。わかりたくもない。ちょっと違うだけで、所しよ詮せん、脂羽蟲ゴキだし。ちょっと違う。その違いが、だけど、大事なんだ。思いだす。思いだせる。そんな気がする。ということは、初めてじゃない。前に見たことがある。いつ？　どこで……？

　マリアローズは半ば呆ぼう然ぜんと呟つぶやいた。「……下水道」

「あっ」ユリカはうなずいた。「しょうよ。しょう。あんな脂羽蟲ゴキが下げ水しゆい道どうにいたわ」

「ＳｍＣと・戦ったときデス」

「な、何のことですか？」とルーシーに訊きかれたけれど、かまっていられなかった。

「でも……いないよね？　てゆうか、いなかったよね。こんなの。地上には。いきなり進出してくるなんて、なんか変じゃない？」

「ふむふむ。これはこれは」

「──って……」マリアローズは横を見た。突とつ然ぜん、ユリカでもピンパーネルでもルーシーでもない声が割りこんできた。その声の主がそこにいた。中肉中背で、服装も髪かみ型がたも顔も地味だ。特とく徴ちようといったら眼鏡めがねくらいだろうか。男はこっちを向いて、にっこり笑った。「ああ。どうも。お久しぶりです。といっても、あなたの姿はよくお見かけしているのですが。一方的に」

「ヨグ──」ピンパーネルは男に目を向けてそこまで言うと、微かすかに眉まゆをひそめた。「ヨグ・ピーヒョロ……？」

「ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒです。昼飯時ランチタイムの」

「お、お久しぶりね」ユリカはちょっと面めん食くらっているようで、その表情も可か憐れんだ。「しょれで……何をしているの？

こんなところで」

「とくに、何も」ヨグは肩をすくめた。「強しいて言えば、人間観察でしょうか。あとは、そう、散歩ですね」

「ふーん……」マリアローズは半眼でヨグを見た。「ま、僕らはさ。ほら、いろいろ忙いそがしいから。散歩、つづけたら？」

「そんな。かつて一いつ緒しよに戦った仲じゃありませんか。水くさいなあ」

「成り行きでそうなっただけでしょ……」

「そうですかねえ。ある必然性があって、あのような顚てん末まつになったと僕は考えているのですが。それは、そう、いわゆる愛という名の、ですね」

「あい……？」ユリカはマリアローズに顔を向けて首を傾かしげた。「──ああ、しょうね。しょういうこと」

「ちょ、ちょっと、ゆ、ユリカ、な、何？　ど、どういうこと……？」

　ピンパーネルが「フッ」と笑った。何だよ、その変に気き障ざな笑い方。ピンパーネルらしくない。てゆうか、誰だれかさんに似てるような気もしない的な。ルーシーは不ふ審しんそうだし。僕の顔はあっついし。どうも真っ赤っかになっちゃってるような気もしないではないし。「──て、て、てゆうか、何だよ!?　何か用？　用がないなら去ってくれる？　きっと知ってるだろうけど、今は立場があれなんだからさ」

「そうでしたね。これは失礼」ヨグは踵きびすを返しかけ、途と中ちゆうでやめた。「ああ、その脂羽蟲ゴキのことですが」

「脂羽蟲ゴキがどうかしたっ!?」

「ええ。その変種、最近、たまに見かけますよ。第五区とその周辺ですね。普通の脂羽蟲ゴキよりも大きいですし、跳ちよう躍やく力がすごくて、悪あく臭しゆうを放つというので、大食小路グラトン・アレイの一部ではちょっと問題になっているみたいです」

「あっそ！　だからどうしたっていうんだよ！　もう行って！　は

い！　さよなら！」

「何か言こと伝づてでもあれば……」

「ないよ！　あるわけないでしょ!?　バカじゃないの!?　いっぺん死んだほうがよくない!?」

「ははは。それでは、また」

　ヨグ・フローヨ何たらクソかんたらは、忌いま々いましいほどにわざとらしい、爽さわやかで気持ち悪い笑い声を響ひびかせながら歩き去っていった。その背中に罵ば声せいをもう一つ二つぶつけてやろうとしたら、地面のマンホールが目に入った。若い男が近くを通りすぎていった。あの匂においがした。何度も嗅かいだ。嗅がされる羽目になった。ジェノシドが無タ料ダで配っている香こう水すいだ。甘くて、それでいてキリッとしているけれど、あまりにきつすぎて、頭が痛くなる。あの香かおりだ。マリアローズの頭の中でカキッと音がして、すべてが繋つながった。「……下水道だ」

　移動本部は移動した。第五区からいったん離はなれて、第十一区の第二王立銀行へ。どこにジェノシドの目が光っているかわからない。連中にこっちの動きを察知されたくない。協議は移動しながら、それから第二王立銀行内にある大だい円えん卓たくの間で継けい続ぞくして行われた。地図を広げ、みんなで額を集めてあれこれ考えても結論は出なかった。どこまでいっても、あくまで推論でしかない。それはやむをえない。知らないからだ。でも、ちゃんといる。秩ちつ序じよの番人が知りたいことを知っている者が。秩序の番人にはコネクションがある。

　琺瑠の手配で、早さつ急きゆうにその者が呼ばれた。二十時過ぎ。二十七番無名隊隊長補カロリーナ・シェルベリに伴ともなわれて、彼は大円卓の間にやってきた。

　見た目は少年だ。十二歳か、十三歳くらい。最初に彼の正体を見たときも、そんな印象だった。あれから成長したようには見えない。おそらく、外見どおりの年ねん齢れいではないのだろう。鳶とび色いろのやわらかそうな頭とう髪はつを横分けにしていて、品の

いい顔立ちをしている。服装もきちっとしているから、貴族の子し弟ていだと言われれば、信じる者もいるに違ちがいない。暗視鏡を装着してマスクを被かぶり、フード付きの外がい套とうで身体からだをすっぽり覆おおっているふだんの姿から、この中身はちょっと想像できない。

　溝鼠族ブラウニグのシデオはさっそく金を要求して、百万ダラーＺＧ合金貨一枚を渡わたされると、椅い子すの上で膝ひざ立だちになってエルデンの地図を眺ながめた。秩序の番人が欲しかった結論を出すための材料は、間もなくもたらされた。「う、うん。ち、近いな。青いのも、だいたいそうだけどな。とくに赤い印は、ほ、本線の、近くばっかりだぞ」

　移動本部制をとる前は、地図に赤いピンと青いピンを刺していた。でも、今は違う。色違いのペンで印を入れている。赤と青。赤い印はＳＩＸもしくはＳＩＸモドキが加わった奇ゲ襲リ劇ラ。青い印はそれ以外の奇ゲ襲リ劇ラだ。琺瑠がシデオの頭を撫なでた。「本線って？」

「う、うん……」シデオは鼻の下を伸のばしながら偉えらぶるという、なかなか器用な芸当をやってのけた。「ほ、本線ってのはよ。お、俺たちがな。そう呼んでんだよな。うん。本道は、あれだろ。ふ、太い、お、俺のち●ぽこみたいに太い、下水道のことだろ。シシシ……」

　大円卓の間に微び妙みような空気が流れた。

　琺瑠は少しも怯ひるまず、シデオの頭をやさしく撫でつづけている。「それで、本線は？」

「太さは、どうでもよくってな。まっすぐだったり、入りやすかったり、そういうのにな。目印をつけてんだ。塗と料りようでな。俺らの暗視鏡では見えるんだぞ。普ふ通つうのじゃ見えねえけどよ」

「赤い印はすべて、その本線のマンホールに近い場所にあるのね？」

「うん。そ、そうだよ。それも、あれだな。どれもけっこう、いい場所だな。うん」

「いい場所？」

「あ、あんまり、教えたくねえんだけどな」

「そう」琺瑠はシデオにもう一枚、百万ダラーＺＧ合金貨を握にぎらせた。マリアローズの金じゃないからどうでもいいのだが、いくらなんでもほいほいあげすぎなんじゃない……？

「へ、へへへ」シデオはＺＧ合金貨をポケットに突つっこんだ。「い、いい場所ってのはな。おっきい道のど真ん中とかじゃなくてな。目立たないとこにあるマンホールのことなんだよな。出たり入ったりするとき、見つかりづれえだろ。だから、いい場所なんだよな」

「きみたちは、下水道の専門家なわけだけど──」マリアローズは金属製の箱を地図のそばに置いた。「そうじゃなくても、つまり、地上の人間でも、その本線を把は握あくして自由に行き来するっていうのは、可能だと思う？」

「で、できねえこともねえな。い、いっぱいがんばれば、な。第五区の本線は、とくにぶっといからよ。お、俺のち●ぽこみたいにな。シシシ……」

　無視。無視。きもいけど。

「きみの仲間が地上の人間に協力してるって可能性はある？」

「お、俺を見ろよ。金さえもらえりゃ、な。いるんじゃねえか。そりゃ」

「だよね」

「で、でもな。下は、俺たちの縄なわ張ばりだぞ。ちょっと、使わせるくらいならいいけどな。お前らは、お、俺の友だちだし、下を自分たちの縄張りにしようとか、か、考えてねえだろ」

「もちろん」琺瑠は嫣えん然ぜんと微笑ほほえんだ。その必要があれば、ああいう顔をしてみせることもできる女性なのだ。

「じ、じつは、第五区はな。俺、あんまり行かねえことにしてんだ。よ、用があるときしか、使わねえ。あのへんは、ケズリヨの縄張りだからな」

　マリアローズは小首を傾かしげた。「ケズリヨ？」

「そ、そういうやつらがな。いるんだ。お、俺たちにも、いろいろあるからな。と、友だちもいるけどよ。でも、ケズリヨはケズリヨだからな」

　琺瑠がシデオの頭に顔を近づけて、目を細めた。「あなた、いい香りがするわね。香こう水すいをつけているの？」

「お、おう」シデオはまた鼻の下を伸ばしに伸ばした。「ま、まあな。上に出るときはよ。女と飲んだりするだろ。いい匂においしたほうが、女にもてるからよ。お、俺たちは気にならねえけど、し、下は臭におうって、上の連中は言うからよ」

　マリアローズは琺瑠と目を見あわせた。金属製の箱は開けなかった。報ほう酬しゆうをさらに上積みして、シデオにケズリヨの友人を紹しよう介かいしてもらうことにした。日付が変わり、三十番日二時前。十四、五歳に見える黒目がちで髪かみの長い少女を伴って、シデオが大だい円えん卓たくの間に戻もどってきた。

「と、友だち、いなくてよ……」もともと白いシデオの顔がいっそう青ざめていた。「と、友だちの、友だち、連れてきたんだけどよ……」

「ケズリヨの、マチャコだ」少女はぺこりと頭を下げた。彼女も顔色が悪く、表情がすぐれなかった。「よ、よろすく。つっても、わーには何がなんだか、わかってねんだけども……」

　カタリが「おほ」と奇き妙みような声を出した。半魚人は所しよ詮せん半魚人なのでいいとしても――や、べつによくはないんだけど、マチャコを見る琺瑠の目もけっこう熱を帯びている。マリアローズの視線を感じたのだろう。琺瑠は一つ咳せき払ばらいをした。「何かあったの？」

「ケズリヨが、やべえことになってる」シデオは今にも泣きだしそうだ。「い、いっぱい、こ、殺されて。お、俺の友だちも、殺されちまったみてえなんだ」

「捕つかまっとる仲間も、おるみたいなんさ……」マチャコは大きな溜ため息いきをついた。「ケズリヨは、もうだめかもしんねえ。わーは逃にげたけんども、逃げねえで、殺されちまやぁーよかったのかもしんねえ」

「誰だれにやられたの？」マリアローズは身を乗りだした。「どんな連中？」

「どんなって……」マチャコは顔をしかめて目を伏ふせた。「わーにはわかんねえよ。で、でも、いっぱいおったよ。今も、わーらの縄張りにおる。とにかく、いっぱいだよ」

　マリアローズは金属の箱を開けて、中から銀色の蓋ふたがついている小こ瓶びんをとりだした。「これに見覚えは？」

　シデオもマチャコも首を横に振ふった。マリアローズは蓋を開けて、二人の顔に小瓶を近づけた。シデオは眉まゆをひそめただけだったが、マチャコは息をのんで目を瞠みはった。「……これ、わーは知っとる。嗅かいだことあるわ。あいつらがきたとき、この臭いがしたで。えらい臭くさかったで、よう覚えとるもん」

　秩ちつ序じよの番人はマチャコに協力を要よう請せいした。当然、相応以上の対価を支し払はらう。そう申し入れたのだけれど、金はいらない。それがマチャコの答えだった。何でもする、金などいらないから、仲間の仇かたきをとってほしい。秩序の番人としては望むところだった。シデオも先に受けとっていた百万ダラーＺＧ合金貨二枚を出して、ぜんぶ返してよこすのかと思いきや、違ちがった。

「しゃ、しゃくまんはね。もらっとくよ。しゃくまんは、お前らに返す」シデオは一枚を琺瑠の手に握にぎらせて、もう一枚をポケットにしまおうとした。途と中ちゆうでやめ、少し考えこんでからマチャコに手て渡わたしした。「お、お前、べつに友だちじゃなかったけどな。俺はチマオと友だちで、お前はチマオと友だちだっただろ。でも、お前と俺も、今から友だちだ。い、いいか。俺のこと、友だちだと思っていいからな。わかったかよ」

　マチャコは百万ダラーＺＧ合金貨を握りしめて泣きだした。シデオがマチャコを抱だきしめて背中をさすった。そうしなければ、マチャコは泣き崩くずれていただろう。それはなかなか麗うるわしい光景ではあった。でも、のんびり眺ながめているわけにはゆかない。マチャコにも早く泣きやんでもらわないといけない。トマトクンが宣言した。「目標は第五区の下水道本線に潜せん伏ぷくしていると思われるＳＩＸだ。みんな、昨日、一昨日でだいぶ休んだだろう。三時間だ。三時間以内に作戦をまとめて、すぐ実行に移す。やつをしとめるぞ。そうすれば、戦いは終わる。俺たちの勝ちだ」

作戦本部はマチャコとシデオの手を借りて、さっそく第五区の下水道本線とそれ以外の主要な下水道の地図を作製した。これにいい場所とされているマンホールやその他ほかのマンホールを書き加え、地上の地図と比ひ較かくすることで、これまでのジェノシドの動きがよりはっきりと見えるようになった。

マチャコたちケズリヨの縄張りが侵おかされたのは六巡じゅん月げつ十三番日。総長争そう奪だつ変則トーナメントの翌日だ。それまでも上の人間が何度か目もく撃げきされていたというから、ジェノシドは密ひそかに準備を進めていたのだろう。考えてみれば、闇やみ市いちのおしゃぶサツクり人形ドールにあったＳＩＸの隠かくれ家がも、下水道から出入りすることができた。下水道を利用する傾けい向こうはＳｍＣ時代からあったのだ。

とにかく、ジェノシドはケズリヨの縄張りを奪うばった。彼らを殺した。おそらく、何名かは生いけ捕どりにした。道案内をさせるために。そうして、ＳＩＸとＳＩＸモドキ、ベテランどもは下水道に潜伏し、地上のグリーンどもと連れん携けいして、奇ゲ襲リ劇ラを開かい催さいした。たぶん、配布品や商品の集積所も下水道内に設けているのだろう。配布品の中の、香水。これはカムフラージュだと考えられる。下水道内は臭い。その臭いが身体からだに染しみついてしまいかねない。ごまかすために、下水道内に潜伏しているジェノシドは、匂いのきつい香水を全身に振りかける。捕ほ虜りよの所持品や死者の遺留品の中にも香水の小瓶があったので、まず間違いない。それだけではなくて、連中は同じ香水を市民にばらまいた。大勢がその香水を使用するようになれば、下水道潜伏者の匂いは特異なものではなくなる。なぜ連中はいつも同じ匂いをぷんぷんさせているのか。何かあるのではないか。そんなふうに勘かんぐられずにすむだろう。そこまで考えているかどうかはわからない。でも、その可能性がないとは言えない。

奇ゲ襲リ劇ラには二種類ある。ＳＩＸかＳＩＸモドキが参加するタイプと、参加しないタイプだ。前者はケズリヨの縄なわ張ばり内で行われている。赤い印がそのことを証明している。後者を示す青い印はエルデンの広域に分布している。

これは推測だが、ＳＩＸもしくはＳＩＸモドキが参加しない場合は、ごく少数のベテランが主導して奇ゲ襲リ劇ラを開催しているのではないか。その場合、ベテランは溝鼠族ブラウニグの恰かつ好こうをして、ケズリヨの道案内に先導させる。溝鼠族ブラウニグが五人とか十人といった人数で行動することはまずないが、二、三人な

らそれほどめずらしくない。シデオもマチャコもそう断言した。少人数であれば、他の溝鼠族ブラウニグに出くわしても不ふ審しんがられることはない。他の勢力の縄張りも、彼らなりの礼儀さえ守れば、通り抜ぬけることくらいは許される。ただし、第八区と第十二区で確かく認にんされている奇ゲ襲リ劇ラは一件ずつしかないのだが、第八区の下水道を縄張りとしているビクニル、第十二区の下水道を牛ぎゆう耳じっているアガチネは、わりあい閉へい鎖さ的で、警けい戒かい心しんが強いらしい。とりわけ、複数人で彼らの縄張りに立ち入ると、たいてい揉もめ事になるという。溝鼠族ブラウニグなら誰でも知っている。ケズリヨの道案内も当然、承知しているだろう。だから、避さけているのではないか。

ＳＩＸ以下ジェノシドは、ケズリヨの縄張り内であれば、比ひ較かく的てき自由に動きまわることができるのかもしれない。ケズリヨの案内がなくても奇ゲ襲リ劇ラを行うことができる程度に、第五区下水道の本線を知っているのかもしれない。連中は本線をそれなりの人数で移動する。地上に出るため、マンホールを開ける。いい場所のマンホールを使って出入りする。その際に——やつらは溝鼠族ブラウニグほど慎しん重ちようでも手て際ぎわがよくもないので、例の変種の脂羽蟲ゴキが地上に這はいだした。あるいは、飛びだした。そういうことなのではないか。

マチャコによれば、ケズリヨが大広間と呼んでいた場所がある。四本の本線が合流する場所で、その下に浄じよう水すい器きがあり、下水が渦うずを巻いている。渦に嵌はまったら一巻の終わりだ。絶対に浮うきあがってこられないから、脂羽蟲ゴキや怪かい魚ぎよスプーキィでさえも寄りつかない。ケズリヨはこの渦巻く下水の上に足場を組んで板を渡わたした。こうして出来た二十メーテル四方の大広間に匹ひつ敵てきするような広場は、少なくともケズリヨの縄張り内にはないはずだという。

大広間ではケズリヨの七しち賢けん、ようするにリーダー格の七人とその側近たちが寝ね起おきしていた。他のケズリヨたちは、下げ水すい溝こうの上に足場を組んで部屋を作るか、下水溝の両側にある通路を寝ね床どことしていた。大部屋として知られる部屋が四つあった。四つの部屋を頂点に見立てると、やや歪いびつな菱ひし形がたになる。大広間はその中心あたりに位置していた。地上でいえば、その場所は鉄てつ鎖さの憩いこい場の北、おおよそ裏バ市ン場プの真下にあたるらしい。

四つの大部屋から大広間までの距きよ離りはだいたい同じくらい

だ。そう離はなれてはいない。約五十メーテルだという。

　かつては大広間の近くにもマンホールがあった。でも、今はない。百年以上前に裏市場ができて、上から塞ふさがれてしまった。大部屋と大広間の間にもマンホールはない。大広間に行こうとしたら、大部屋を経由して本線を進むしかないということだ。

　できれば、大広間にＳＩＸがいるか、前もって確かめたい。そのために、デメトリオ・アルベルティーニ、シロウ、ベテランたちにこちらの推論をぶつけて反応を探さぐったが、確信できるような手て応ごたえはなかった。ピンパーネルを送りこむことも考えたけれど、最終的には思いとどまった。もし読みが当たっていても、こちらの動きが知れたら逃にげられてしまいかねない。いずれにせよ、物資の集積所として使えそうな場所は、大部屋か大広間しかないのだ。あのＳＩＸが狭せまい下水道の通路を寝床にしているとも思えない。やつの拠きよ点てんは大広間だ。他の可能性はひとまず捨てる。時間も戦力もかぎられているのだ。捨てたものを拾うのはあとでいい。

　大部屋は四つある。大広間を中心として、方角でいえば北北東、東、南南西、西北西の地点に一つずつ。おおむね北、東、南、西だ。秩ちつ序じよの番人は四隊に分かれた。東方の言い伝えに従い、天の四方を守護する神しん獣じゆうの名を冠かんして、北から攻せめる玄げん武ぶ隊、東からは青せい竜りゆう隊、南からは朱雀すざく隊、西からは白びやつ虎こ隊。以上四隊が時間差をつけてそれぞれ大部屋を攻こう略りやくし、大広間を衝つく。玄武隊の先頭は八番突とつ撃げき隊隊長シャット・〝神しん剣けんグレヒャ〟だ。八番突撃隊の後ろには、デートニッヒ・ボルボンゾルの九番突撃隊と太臺子の十番遊撃隊がつづいている。

　下水道の通路を進む隊士たちは皆みな、フードの付いた濃のう紺こんの外がい套とうで全身をすっぽり覆おおい、面めん頰ぽおを暗視鏡付きのものに交こう換かんしている。グレヒャも同じだ。その右手は鍛か冶じ士しローリー・アギャンスタが鍛きたえたる怪かい女じよの趣おもむきを備えた逸いつ品ぴん「淫靡浪漫インヴイローマン」の柄つかにかかっている。左手はプロヴィデンスＯＦＲＲの背中にある一発脱捨シングルダツシヤ装置のスイッチをまさぐって

いて、いつでも鎧よろいを脱ぬぎ捨てられる構えだ。

グレヒャはひたすら一つの言葉を胸中で唱えつづけている。Mo Love yo. Mo Love yo. Mo Love yo. Mo Love yo. 我は汝Mo Loを愛すve yo。我は汝Mo Loを愛すve yo。我は汝Mo Loを愛すve yo。

物心がつくと、彼は暗黒大陸にいた。母は彼に囁ささやいた。我は汝Mo Loを愛すve yo。我は汝Mo Loを愛すve yo。気がつくと船に乗っていて、ラフレシア第三帝てい国こくに着いた。やがて母とは別れた。八歳のときだった。そうしてエルデンにやってきた。十一歳のときだった。間もなく、船乗りだった、追い剝はぎだった、盗人ぬすつとだった、父は死んだ。金品目当てで闇やみ討うちを企くわだて、返り討ちに遭あって殺されたらしい。死体は全ぜん裸らで、滑こつ稽けいで、みじめだった。

それから彼は数えきれないほど盗ぬすんだ。奪うばった。殺した。ただ己おのれのために。生きるために。欲よく望ぼうのために。それを罪とは思っていない。微み塵じんも。彼は償つぐないのために秩序の番人に入団したのではない。断じてない。彼が殺すことで彼は生かされる。彼にふさわしい場所に収まった。それだけだ。彼の過去を知る者はいない。彼は盗んでも奪っても殺しても、禍か根こんを残すような失敗を一度たりとも犯おかさなかった。彼は父より優ゆう秀しゆうな追い剝ぎだった、盗人だった、殺人者だった。そして、腕うで利ききの秩序の番人となった。

軽い、と言われた。ＳＩＸに。あの魔ま物ものに。剣に重みがない、と。速いが、軽い。ようするに、速いだけの、なまくらである、と。

彼は知っている。彼は慎重だ。敗北を、過誤を恐おそれる臆おく病びような魂たましいが彼には宿っている。彼には才がある。彼の剣は冴さえている。だが、彼は感じることがある。この相手には負けるかもしれない。彼は恐きよう怖ふする。恐れをねじ伏ふせるより、逃とう走そうすることを選ぶ。生き残ることを。ＳＩＸ。あれは本物だった。殺とれる、と思った。一いつ瞬しゆんは。すぐに勘かん違ちがいだと知った。彼の剣は、鈍にぶりはしなかった。ただ、彼の心は半分逃げていた。そのぶん彼の剣は軽くなっていたはずだ。

あのとき彼の剣はＳＩＸの両腕を傷つけなかった。受け止められた。彼はただちに剣を引いて第二撃を放とうとした。恐怖に突つき

動かされて。彼は予感していた。殺やられる、と。ＳＩＸは右足で彼の脇わき腹ばらを蹴けった。彼は自分から跳とんだ。おかげで彼は死なずにすんだ。恥はじてはいない。命あっての物種だ。生きているからこそ、再戦の機会もある。そして己おのれはまた恐れ、逃げるのか。

恥じてなどいない。だが、憎にくんでいる。この身に宿る臆病な魂を。それは路ろ傍ぼうの糞くそ同然の屍しかばねをさらして果てた父が唯ゆい一いつ、彼に残したものだ。母は、我は汝Mo Loを愛すve yo、その言葉だけを彼の胸に刻みつけて去った。彼は暗黒大陸の言葉を他ほかには知らない。彼はなぜ、ＳＩＸに刃やいばを向けたとき、とっさにあの言葉を吐はいたのか。Mo Love yo. Mo Love yo. Mo Love yo.

彼は時計を見た。七時八分だった。十メーテル先の角を曲がり、十五メーテル進めば、北の大部屋があるはずだ。

隊士たちは隠おん密みつ用の外底を備えた靴くつを履はいている。息を殺して、互たがいにふれあわぬよう一列になり、気配を消そうとしている。とはいえ無音ではない。それにもかかわらず、敵に察知されているとは思えない。今のところ、この先に敵がいるかどうかもわからない。

彼は胸中で、我は汝Mo Loを愛すve yo、と呟つぶやき、後ろの隊長補アポローン・ギフカに手指の動きで合図した。停止し別命あるまでこの場にとどまれ。そうして一人、角を曲がった。前方に灯あかりが見えた。光源があれば、暗視鏡はかえって邪じゃ魔まだ。彼は面頬を上げて一歩ごとに、我は汝Mo Loを愛すve yo、と繰くり返した。彼は灯りを見ていなかった。そこにある部屋も見ていなかった。部屋に積まれている物資、設しつらえられた寝しん台だい、寝台の上で横になっている男たち、床ゆかに寝ねている男たち、それらのすべてを、彼は見ていなかった。我は汝Mo Loを愛すve yo。何度も何度も、声には出さずにそう言いながら、別のものを見ていた。それは顔と呼びうるほどはっきりしてはいない。女の顔のごときものだ。彼は呟いた。「──お母さん。あなたは誰だれを愛していたのですか。私を愛していたのなら、なぜ捨てたりしたのですか」

彼をじっと見つめている者がいた。もうすぐそこだ。男だ。リヴァイスの服を着て、可変式の槍やりを持っている。長ちよう髪はつで、まだ若い。男は目を見開いて、彼を凝ぎよう視ししている。幽ゆう霊れいにでも出くわしたように。それを、だが、幽霊とは信

じられず、目を凝こらして見ることで、幻まぼろし、錯さつ覚かくのたぐいを打ち消そうとしているかのように。

　彼は淫靡浪漫インヴイローマンを抜ぬき放って、男の頭部と胴どう体たいとを首の真ん中で斬きり離はなした。「──お母さん。お父さんは死ぬまで一度もあなたの名を口にしませんでしたよ」

　生首が、ぼとり、と部屋の床に落ちた。頭部を失った男の身体からだが倒たおれ伏す前に、床に寝ていた男二名がびくっとして顔を上げた。彼は二名の喉のど笛ぶえを正確に斬り裂さいた。「──お母さん。お父さんは野の良ら犬いぬよりも無残にくたばりましたよ」

　彼は二名にとどめを刺さし、さらに床から起きだそうとした三名を立てつづけに突いた。三名とも、狙ねらい過あやまたず急所を刺した。「──お母さん。私は誓ちかったのです。私はあんなふうには死ぬまいとね」

　寝台から四名が飛び起きて何か叫さけんだ。彼は「うるさいな」と言いながら、四名を撫なで斬りにした。「──お母さん。私は強いでしょう。私は負けたくない。死ぬのはごめんだ。私は強いでしょう。お母さん」

「……隊長！」アポローン・ギフカの声がした。シャット・グレヒャはさらに二名を斬り伏せて振ふり向いた。「何だ。きたんですか。待っていろと言ったのに」

　ギフカは答えず、「やれ！」と隊士たちに命令を下した。ほどなくデートニッヒ・ボルボンゾルの九番突とつ撃げき隊と太臺子の十番遊ゆう撃げき隊もやってきた。グレヒャは舌打ちをして先に進んだ。間抜けな話だが、寝ね込こみを襲おそわれて、敵はさぞかし驚おどろいたのだろう。早くも何人か逃にげにかかっている。もう部屋を出て、通路にいる。グレヒャはまたたく間に追いついて、その首筋に突きを見み舞まった。もう一人は追い抜きざまに素っ首を叩たたき落とした。三人目の背中を追いながら独りごちた。「──お母さん。私は怖こわかったんでしょうね。ただただ怖かった。何かにすがりたくなるほど、怖かった」

　グレヒャは三人目の腰こしを蹴った。三人目は下げ水すい溝こうに落ちた。このあたりの下水は流れが激しい。大広間の下にある渦うずとやらのせいだろう。ほとんど急流だ。三人目は流された。その前に四人目がいる。グレヒャは時計を見た。七時十三分。玄げん

武ぶ隊は七時十分に大部屋を攻こう撃げき開始すべし。大広間突入目標時刻は七時十五分。そう定められていた。まずまずだろう。四人目が振り返って、その額をグレヒャの淫靡浪漫インヴイローマンが割った。四人目は悲鳴を上げて転てん倒とうした。グレヒャは外がい套とうを剝はぎとりながら四人目を飛び越こえて、一発脱捨シングルダツシヤ装置を作動させた。あっという間だった。鎧よろいが脱ぬげて通路に転がり、いくつかの部品パーツは下水溝に落ちた。「――冗じよう談だんじゃない。私が恃たのむは私自身のみだ。我は汝Mo Loを愛すve yo。お笑い種ぐさですよ。私は愛など信じない。剣けんだ！　剣！　剣！　剣……！　この剣だけが、私にとっての真実だ……！」

　グレヒャは兜かぶとを脱ぎ捨てて駆かけた。大広間まで五十メーテル。距きよ離りともいえない距離だ。すぐだった。たどりついた。大広間。そこは濃のう密みつな香こう水すいの香かおりに満たされていた。蠟ろう燭そくに似た照明器具がいくつも置かれていた。床にはてらてらした黒い布が敷しきつめられていた。ソファーやベッドのようなものがいくつもあった。それらはすべて、やはり黒い布に覆おおわれていた。もしかしたら、物資の山の上に覆いをかけて、腰かけや寝台として使っているのかもしれなかった。檻おりがあった。鉄てつ格ごう子しの檻が。中には溝鼠族ブラウニグとおぼしき数名がいた。剣、ナイフ、鎚つち、鎖くさり、銀の食器、クリスタルのグラス、その他、何に用いるのかわからない道具類がたくさん散らばっていた。そこらじゅうに白い髑どく髏ろが飾かざられていた。壁かべや天てん井じようから恐おそろしく巨きよ大だいな鋲びようが何本も生えていた。それらの鋲には鎖が掛かけられていた。鎖には人間が吊つるされていた。どの人間も全ぜん裸らか、ほぼ全裸だった。生きている男も、死んでいる女もいた。身体が変にねじ曲がっている男がいて、全身の穴という穴から血を流している女がいた。彼ら、彼女らは、口に奇き妙みような形状のおぞましい器具を嵌はめられていた。彼ら、彼女らは、そのために声を出すことができないのだった。彼ら、彼女らは、そのまま死ぬか、なんとか生きながらえていた。

　すべての中心に、さながら玉座のような寝台があった。寝台の上にあの男が屹きつ立りつしていた。男の双そう眼がんからは魔ま界かいの妖よう炎えんが迸ほとばしっていた。男は裸形だった。男の肌はだは白かった。幽ゆう鬼きのごとく白かった。腰が細く、肩かたが広かった。男の下半身には素す裸はだかの女が四、五人まとわりついていた。股こ間かんのものはそそり立つというより反っくり

返っていて、馬ば鹿か馬ば鹿かしいほどでかく見えた。女たちは争うようにそれに向かって手をのばし、頰ほおずりをして、口づけしていた。男は、だが、女たちのことなど一いつ顧こだにしなかった。男はグレヒャを見ていた。グレヒャだけを。グレヒャもまた、男しか見ていなかった。陰いん惨さんな大広間の情景はあくまで視界に入っているだけだった。大広間には鎖で吊された者たちや男の一物に群がる女どもの他ほかにも人の姿があった。その中には男にそっくりな顔をした者もいた。何人かいた。鷲わし鼻ばなの男もいた。すでに剣やら槍やらを構えている男たちもいた。そうとうな数だった。だが、グレヒャにはどうでもよかった。あの男だけが問題だった。あの男のことだけが。「──我は汝Mo Loを愛すve yo」

身み震ぶるいした。これは恐れなのか。わからないまま一人、二人、斬った。その間もあの男だけを見ていた。彼は進んだ。また一人、斬った。片時でもあの男から目をそらせば、この足はすくむだろう。肩や肘ひじや手首は硬かたくなる。彼の太た刀ち筋すじは伸のびやかさや鋭するどさを失うだろう。

ただ、依い然ぜんとして彼にはわからない。

これは恐れなのか。

あの男が左手を挙げた。「いい。通してやれ。我わが輩はいの許もとまで」

彼は進んだ。もはや彼を妨さまたげようとする者はいなかった。あの男が命じたからだ。彼はそのことを理解していた。事実関係は。あの男の意図するところは測りかねた。彼は吸いよせられるように進んだ。だんだんと耳が聞こえなくなった。視野が狭せまく、狭くなった。あの男の存在だけが彼の頭の中を占しめるようになった。あと二歩だと唐とう突とつに彼は思った。あと一歩だ。飛びこめば、殺とれる。彼はそう思った。彼は恐れてなどいなかった。臆おく病びような魂たましいは彼の中で潰つぶれて消えた。彼は野の良ら犬いぬよりも無残な父の屍しかばねを踏ふみ越えた。我が子を捨てて行方ゆくえをくらました母の面おも影かげは払ふつ拭しよくされた。だから、今の彼は恐れていなかった。彼の心は逃げずに前へ前へと向かっていた。彼は先へ先へと進もうとしていた。最後の最後であえて足を止めるも一興だった。彼は確かめた。身体からだを。精神を。やはり殺れる、と彼は確信した。「──有あり難がたく食くらえ。我が神剣を。ＳＩＸ、貴様の悪運は私が断たち切る。このシャット・グレヒャが……！」

　彼は跳とんだ。雷らい光こうのように時は過ぎ去った。あの男はすぐそこにいる。淫靡浪漫インヴイローマンには今や彼の全身全ぜん霊れいが乗り移っていた。その切っ先が霊れい光こうを閃ひらめかせようとしていた。あの男は徒手だった。何も持っていなかった。さりとてよけるそぶりも見せなかった。彼の頭には、しかし、疑ぎ惑わくの欠片かけらもよぎらなかった。彼は、殺れる、と思っていた。殺る、という意志しかなかった。彼は恐れていなかった。度ど肝ぎもを抜ぬかれる羽目になった。

　あの男は徒と手しゆ空くう拳けんだった。全裸で、その周りに武具のたぐいはなかった。女だけだった。四人、いや、五人の女たちが男の下半身に絡からみついていた。

　あの男はそのうちの一人を、ボブカットの女を、その髪かみの毛を鷲づかみにして持ちあげた。

　淫靡浪漫インヴイローマンは斬きった。袈け裟さ懸がけに斬きった。ずっぱり断ち斬った。

　ボブカットの女の左肩から右腰までを斬った。一刀両断した。

　女の下の部分は寝しん台だいにずるっと落ち、上の部分だけがあの男の手に吊されていた。

「Ｋｅ□Ｈｙａ……！」あの男はその上の部分をグレヒャめがけて投げつけた。女は内臓と血液をぶちまけながらグレヒャに抱きついてきた。たしかに、女は両りよう腕うでに力をこめてグレヒャにしがみついたのだ。グレヒャはすぐさま撥はねのけた。その際、何か悲鳴のごときものをもらしてしまったかもしれない。不覚にも。女は床ゆかに叩たたきつけられた。それでも目を見開いてグレヒャを見上げていた。グレヒャはあの男ではなくて、女と見つめあっていた。

「イレーネＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ。マイ・ワイフ、マイ・ディアー。かわいそうにＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ。Ｋｕ□Ｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａａａａｈｈｈｈ……！」

　あの男の馬鹿笑い。聞こえた。衝しよう撃げき。グレヒャは横よこ倒だおしになった。わからない。わからない。わからない。何が起こったのか。パニック。一いつ瞬しゆんだ。グレヒャは正気に返った。あの男は横向きに倒れているグレヒャを見下ろしていた。

振ふりおろそうとしていた。何かを。それは人だった。女だ。別の女。あの男は右手で女の右足首をつかみ、思いきり振りかぶって、今まさに振りおろそうとしていたのだ。

　そんな──と彼は思った。否定しようもない。彼は怯おびえていた。身がすくんだ。動けなかった。女が降ってきた。彼は両腕で女を防ごうとした。女の頭が、顔が、その腕を強打した。女は何か声を出した。ぐわつんっ。どがごんっ。いひあっ。あぎゃあ。それから彼は自らが剣けんを握にぎっている、そのことを思いだした。剣を振りまわそうとしたが、ものすごい勢いで女がぶつかってきた。どぼぐんっ。じぎゃあ。ぐぼおんっ。ひえっ。

「Ａ□Ｈａｈａｈａｈａａａａａａａｈｈｈ！　どうだい、我が愛刀の味ＹＹＹＹＹ！　とっさの思いつきにしちゃあナァーイス・アイディーアだろお？　素晴らＣＹＹＹＹＹＹＹＹ刀だろお!?　そうは思わないかい、ええ、シュガーボーイ!?　何ィッ!?　物足りない!?　よろしい、じゃあ二刀流といこう……！」

　嵐あらしがやんだ。一秒にも満たない間だった。グレヒャは見た。まさしく二刀流だ。あの男は、ＳＩＸは、左右の手で足首をつかんでいた。それぞれ別々の女の足首を。めちゃくちゃだ、とグレヒャは思った。いつの間にか、潰れて消えたはずの臆病な魂が
シャット・グレヒャそのものになっていた。ごべっ。がぎゃっ。いぎっ。どごへっ。ぼごだっ。あびゃっ。どはげっ。ぼぐどっ。グレヒャは滅めつ多た打うちにされた。女だった。女に、いや、女で打ちすえられた。グレヒャは丸くなって身を守ることしかできなかった。恐おそろしかった。

　おっかない、と心の底から思った。

　怖こわくて、ものすごく怖くて、たまらなくて、知らぬ間にグレヒャは夢中で唱えていた。

　我は汝Mo Loを愛すve yo。我は汝Mo Loを愛すve yo。我は汝Mo Loを愛すve yo。

　彼女は愛を知らない。彼女はエルデン生まれではない。幼いころにエルデンに連れてこられた。そして置き去りにされた。彼女は捨てられた。彼女を捨てた父の名も、母の名も、顔も、今となっては

定さだかではない。事情もわからない。故郷の記き憶おくはどこまでもあやふやだ。彼女は幼くして一人になった。途と方ほうに暮れた。一日泣き暮らした。それからは生きた。ときには似たような境きよう遇ぐうの者と群れた。あるいは一人で生きた。泥どろを啜すすって生きた。泥以外でも、啜れるものは何でも啜った。彼女は愛を知らない。少なくとも、愛は一度たりとも彼女を守らなかった。やがて彼女の道を照らした光は義だった。義は彼女に誇ほこりを与あたえた。代わりに彼女は義にすべてを捧ささげた。義があってこその彼女だった。

シャルロット・リンデは東から攻せめる青せい竜りゆう隊の最先頭として東の大部屋を突破し、間もなく大広間に至ろうとしていた。青竜隊は彼女の十二番遊撃隊と、ラッド・ワーノンの六番突撃隊、プランク・〝教師テイーチヤー〟・フェニファー率いる十九番警けい邏ら隊の合計三隊だ。大部屋突入時に先せん陣じんを切ったのはラッド・ワーノンだったが、乱戦のさなかにリンデが追い抜いた。そのまま大部屋を飛びだして、彼女は通路を走った。ひた走りに走った。途中で濃のう紺こんの外がい套とうを脱ぬいで下げ水すい溝こうに捨てた。大広間は目前だった。彼女は一度、振り返って叫さけんだ。「義のために……！」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」
「応！」「応……！」

隊士たちが野太い声で応じて外套を脱ぎ捨てた。リンデの隊にも、ワーノンの隊にも、フェニファーの隊にも、女性隊士は一人としていない。女はリンデだけだ。だから何だ。

彼女も生きるために女の自分を利用した。かつては。今はもう女など捨てている。この身は義を貫つらぬくために振るわれる剣にすぎない。

隊長補のレオポルド・デュナンが「七時十六分です！」と大声を張りあげた。リンデは答えずに足を速めた。顔はまっすぐ前に向けていた。視線の先だ。大広間がある。出てきた。通路に。ジェノシドとおぼしき男たちだ。人数はよくわからない。数人ではない。もっと、それ以上だ。脅きよう威いではない。下水道の通路はせいぜい一・二、三メーテルの幅はばしかないのだ。とくに武装していれば二人並ぶのも至難で、ほとんど無理と言ってもいい。一列か、せいぜい斜ななめになって一列半か。これなら人数はほとんど問題にならない。

　暗視鏡付きの面めん頬ぽおは大部屋で上げたきりだった。リンデはそれを下ろした。敵は可変式の槍やりを持っている。突つきだしてくるだろう。こい。こい。くるがいい。リンデは少しだけ足をゆるめて息を吸いこんだ。止めて、盾たてを前に出した。腰こしだ。腰に力を入れろ。自らの身体からだを鋼はがねと思え。揺ゆるがぬ鋼鉄と。それ以外の何物でもないと信じた。

　突っこんだ。ガツバツガツッ。盾に二、三本の槍があたった。物ともしなかった。そのまま押し切った。あぐっ。リンデの盾に押された先頭のジェノシドが、背中や尻しりでその後ろのジェノシドを押した。すぐに隊長補以下の隊士たちが彼女の左右から剣を突きだした。ぐがっ。むあっ。一人、いや、二人のジェノシドが崩くずれて倒れた。リンデは彼らを踏ふみ越こえて、その後ろのジェノシドに盾の一撃を見み舞まった。途と端たんに敵は下がりはじめた。狭せまい場所で迎むかえ撃うつより、大広間に引き入れて一挙に殲せん滅めつするべし。そう判断したのだろう。

　後退する敵を二人、三人と下水溝に叩たたき落とした。リンデ以下青竜隊の隊士たちは間もなく大広間に傾なだれこんだ。敵は青竜隊を引きこみ、青竜隊は敵の真っ直中に飛びこんだのだ。当然、こうなる。前も、右も、左も、敵、敵、敵だ。大広間がどうなっているのか。敵の配置は。ＳＩＸは。それすらわからない。それがどうした。覚かく悟ごの上だ。リンデは絶ぜつ叫きょうした。「──各員奮戦せよ……！　見事、死に花を咲さかせてみせなさい……！」

　隊長に死ねと命じられて生きのびることを考える柔にゅう弱じゃく者ものは、少なくとシャルロット・リンデの隊にはいない。一人たりともいない。隊長補のレオポルド・デュナンが「ラッスヮァァァァレアァァァァァ！」と雄お叫たけびをあげた。本人にも意味がわからないというその声は十二番遊撃隊の名物だ。リンデは突とつ進しんした。正面のジェノシドが繰くりだしてきた槍を間かん一いつ髪ぱつ、身をひねってかわしてそのまま踏みこんで顔面に頭突きを食くらわした。同時にその土手っ腹に剣を埋うめこんで突き倒たおして、引き抜ぬきざまに左から突いてきた槍を盾で払はらった。ガアァン。ズダ。ザッ。バァッ。散る火花。噴ふきだす血ち煙けむり。立ちこめる熱。匂においというよりそれは熱気だ。まばたきを忘れる。呼吸は行われているが意識から完全に消える。彼女は剣を振ふるう間、極力兜かぶとを脱がない。どんな面相をして己おのれが剣を振るっているのか、彼女は知らない。だが想像はつく。彼女はおそらく笑っている。見開かれた目は血走り、口は裂さ

けて、彼女は笑っている。彼女は一振りの剣となって兜の奥で笑っている。声を立てずに笑いながら盾で受け剣で斬きり盾で撥はね返し剣で突く。さらに盾で防いで剣を振ると、手て応ごたえがひどく重たかった。鈍にぶくなった剣を手近な敵に叩きつけてそのまま捨てた。腰を低くして盾で身を守りながら脇わき差ざしを抜いた。その刹せつ那なだった。見た。見えた。大広間の中央あたりだ。寝しん台だいがある。黒い、巨おおきな寝台だ。その上に全ぜん裸らの男が立っていた。手に何か持っている。何か━違ちがう、あれは人か。女だ。やはり裸はだかだ。女。二人だ。その足首をつかんで、肩かたに担かついでいた。あの男は。ＳＩＸ。ＳＩＸだ。どこか蛇へびを思わせるＳＩＸの顔はこっちを向いていた。暗視鏡越ごしにはその両眼が光を放っているように見えた。ＳＩＸは何かを蹴け飛とばした。寝台からその何かが転げ落ちた。何か。人だ。金きん髪ぱつ。秩ちつ序じよの番人のアンダーボディスーツ。シャット・グレヒャか。ＳＩＸは禍まが々まがしい裂け目のような口を大きくシャアッと開けた。「━ジェェェェイ！　こォォォの盆ぼん暗くらめ！　さっさとあっちをどうにかするんだよ……！」

　ジェイ。側近のジェイか。どこだ。どこにいる。リンデはジェノシドを一人、二人、盾で吹ふっ飛ばしながら視線を巡めぐらせた。玄げん武ぶ隊。いる。でも、リンデ以下青竜隊と似たようなものか。大広間に入ってすぐのところで止められている。やや押し返されているか。敵は。数。百。いや、それ以上。どこだ。ジェイ。どこから━

「リンデ……！」

　怒ど声せいに近かった。引き倒された。無ぶ様ざま。迂う闊かつ。リンデは尻しり餅もちをついた。男は傘かさのごとく、リンデの頭上に、身を屈かがめて、覆おおいかぶさるように、その巨きよ体たいで、シャルロット・リンデを。

　ときならぬ雨が降ってきた。ばしゃばしゃと。リンデは面頬を上げた。降りそそぐ雨は熱く、赤かった。「━ワーノンッ……！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおう……！」

　六番突撃隊隊長ラッド・ワーノンは背中の重荷を撥ねのけようとするかのように身体を伸のびあがらせた。そして大刀を振った。盾を振りあげた。リンデは見た。まさしくワーノンの背に何かが乗っていたのだった。それはワーノンの動作によって撥ね飛ばされた━

というよりも自ら跳とんで、四、五メーテル離はなれた場所に着地した。鷲わし鼻ばな。灰色の目。髪かみ。ガルベル・ダの衣服。手には釘ネイル。リンデは弾はじかれたように起きあがった。「──ジェイ……！」

　ワーノンが「むううん」と唸うなって膝ひざをついた。その肩に、背中に、何本もの釘ネイルが突き刺さささっていた。釘ネイルの見あたらない穴もあった。プロヴィデンスの装そう甲こうがたやすく貫かれ、血が噴きだしていた。そうか。ジェイは、頭上から。猛もう禽きん類のように急降下してきたのだ。リンデをしとめるべく。見えなかった。ワーノンは気づいた。それで庇かばったというのか。余計な。余計なことを──考えている暇ひまなど、ありはしない。ジェイがくる。飛んでくる。釘ネイルが。四本。相手が相手だ。盾で己の視界を狭せばめては。とっさの判断だった。リンデは盾ではなく、脇差で叩き落とそうとした。二本は打ち払った。残りの二本は──一本は、左の肩口に。もう一本は、右の胸に。ジェイがくる。すでに迫せまっている。疾はやい。間に合わないか。両りよう腕うでが動かない。思うようには。傷。釘ネイルのせいか。だがたとえ、我が命、果てようとも──否いな。果てなかった。

「つえええええええええい……！」ワーノンが吼ほえた。吼えただけではない。立ちあがってジェイにぶちかました。体当たりだった。ジェイは撥ね飛ばされたのか。違う。また自分から跳ちよう躍やくしたようだった。ワーノンはすぐに片膝をついた。血の噴ふん水すいのようだった。ワーノンはその源だった。それでもワーノンは立とうとしていた。

　リンデは思わず叫さけんだ。「馬ば鹿か！」と。口を突ついて出たのだ。それにしても間の抜けた台詞せりふだ。ワーノンは笑った。「──女を、一身にかけて守るは、男子の、本ほん懐かいなり……！」

　この大男はもっと間抜けだとリンデは思った。女など、とうに捨てた身だというのに。どこからともなく力が湧わいてきた。私は、まだやれる。「立ちなさい、ワーノン！　死ぬのはもう一働きしてからです……！」

　ワーノンは盾を捨て、空になった左手で膝を押さえて立ちあがった。「応よ……！」

七時十八分。琺瑠隊、ジョービー・カラマーの十一番遊ゆう撃げき隊、デュナン・セプテンの二十九番警けい邏ら隊で構成される朱雀すざく隊は、予定どおり南の大部屋を突破した。損害はいまだ軽けい微びだ。死者は一人もいない。向かう先の大広間では、すでに激しい戦せん闘とうが行われている。琺瑠の心は波立たない。落ちついている。凪ないでいる。あくまでも。果たすべきことは明確だ。ひたすらそれに向かってゆけばいい。状じよう況きようはきわめて単純だ。心揺ゆらぐ理由がない。それだけではない。今の彼女は支えられている。ある言葉に。

—私は大だい丈じよう夫ぶだ。また立ちあがる。君は行け。君らしく、まっすぐに。

会わなかった。会いたかったのに。もしかしたら、彼女は会いたくて、どうしても会いたくて、この身はそのために卒そつ倒とうしたのではないか。そうあやしんでさえいる。でも、会わなかった。会うこともできたのに。彼は望むまいと思った。起きあがることすらままならない。そんな姿を見られたくはないだろう。もう十分、彼は屈くつ辱じよくを味わわされたのだ。これ以上はたまらないだろう。でも、会いたかった。できることなら、彼をただ、抱だいていたい。何もかもかなぐり捨てて、彼をずっと抱きしめていたい。自分にこのような激しさがあるとは知らなかった。自分がここまで彼を大切に思っているとは。

彼女は朴ぼく念ねん仁じんだ。人並みの恋こいなど無む縁えんだった。とはいえ彼女も恋をしたことはある。しかし相手は彼女の妹を愛していた。彼女にもそれくらいはわかった。妹のために胸の奥底に押しこめてしまえる程度の恋でしかなかった。正直に言えば、彼女は己おのれの曖あい昧まい模も糊ことした恋心よりも妹のほうが何倍も大事だったのだ。なぜなら釈拿シヤクナは血を分けた妹で、彼女にとってたった一人の肉親だった。妹だから当然、愛いとしかった。自分は単純なのだと彼女は思っている。いつも物事に優先順位をつけ、それに従う。状況が複雑になれば、身動きがとれなくなる。彼女は単純なのだ。だから、わからなかった。

男が養ち父ちを誰だれよりも敬い愛していることは知っていた。養父亡なきあと、義は男にとって優先順位の第一となった。男は何にも増して義を重んじた。義を貫つらぬくためならば、他ほかのすべてを犠ぎ牲せいにするだろう。義のために、男は最善の決断を常に下すのだろう。かといって、男がそれ以外を軽かろんじていたわけではない。義のために死んでいった者たちを、男がただの捨て石

と見なしていたわけでは決してない。男は判断した。男はときに切り捨てた。見捨てた。そのために、男は冷れい酷こく非情の仮面を被かぶらざるをえなかった。朗ほがらかに笑って過ごす日を、男は自らに許さなかった。それではあまりに厚こう顔がん無む恥ちであろうと男は考えていた。第一に優先されるべき義のために、男は自ら歩む道を選んだ。義のために、男は生きるのだろう。ただ義のために。

　だとしたら、男は生きなければならない。男は必要だった。デニス・サンライズ亡きあとの秩ちつ序じよの番人に、何があろうと欠くべからざるものがあるとするなら、それは彼だった。二代目を襲しゆう名めいした羅叉でも、副長の珐瑠でも、マシュー・シュナイデルでもなく、ヨハン・サンライズだった。口には出さずとも、心ある者は皆みな、知っていた。初代総長在りしころから、実際のところはそうだった。ヨハン・サンライズがいなければ、秩序の番人は立ちゆかない。それが実態だった。銀の軍団ザ・シルバリイを誰よりも、その細部まで知りつくしている彼が、その単純明快な事実を理解していなかったはずはない。

　彼女はそれゆえに、彼は必ずあとから追いかけてくるだろうと、愚おろかにもそう信じた。我ながら唖あ然ぜんとしてしまうほど、あの瞬しゆん間かんはそう信じて疑っていなかった。後うしろ髪がみを引かれる思いはしたが、彼と彼の隊とを残して退ひきながら、彼の冷れい徹てつな判断力と鋼はがねのごとき意志を信じていた。ただ単に、彼女よりも彼のほうがよりよく敵を食い止められる。彼はそう考えたのだろう。そう思っていた。彼女を逃にがそうとした。そんなふうには露つゆほども考えなかった。義のためならば、彼は彼女を犠牲にすることも躊躇ためらわないだろう。彼女はそう思っていたのだ。

　彼の視線は、ずいぶん前から彼女を追っていた。

　たまに、ではない。まれに。ひそかに。彼女はそのことに気づいていた。

　彼女もまた、彼を見ていたからだ。

　互たがいが立場が違ちがっていたら、何かの折に彼は彼女を抱きよせたかもしれない。唇くちびるを寄せたかもしれない。彼女は逆らわなかったかもしれない。正直、そう夢想したこともあった。

彼と彼女は、だが、身も心も義に捧ささげている。いざとなれば、彼は彼女を見捨てるだろう。そうせざるをえないだろう。なればこそ、彼は彼女を女とは見なさないだろう。そうすることはむごいことで、無責任で、結果的には彼女を傷つける。彼はそう考えるだろう。彼女はそんなふうに思っていた。

彼女は単純なのだ。だから、わからなかった。

──私は大丈夫だ。また立ちあがる。君は行け。君らしく、まっすぐに。

彼の言葉を伝言という形で聞いた。その瞬間、ようやくわかった。やっと彼の心にふれることができた。そう感じた。

生きろ、と彼は願っていたのだ。彼女に、どうか生きてくれ、と。彼は最初から彼女のために死ぬ覚かく悟ごだったのだ。彼女を逃のがれさせて、生かすために。それが彼の決断だった。秩序の番人にとっては、彼女より彼のほうが必要なのに。彼女にできて、彼にできないことなど一つもないのに。彼にできて、彼女にできないことはいくらでもあるのに。そんなことは彼もわかっていたはずなのに。それでもなお、彼は彼女を生かそうとした。

彼の判断はおそらく間違っていた。

彼女は、でも、生きようと思う。

まっすぐに進めると思う。

信じている。

彼は必ず立ちあがるだろう。

七時十八分。もうすぐ十九分になる。大広間はすぐそこだ。

彼女は一度だけ振ふり返った。彼女の隊にはコンラッド・アシャーがいる。ドーソン・サッティアーがいる。パンツェッタ・〝赤毛のレッドヘアード〟・エルランディーノがいる。ユキシ・庚コウもいる。彼らは預かりものだ。いずれ返す。彼らも仕えるべき主あるじのもとに戻もどりたがっているはずだ。だからヨハン、早く帰ってきて。そんなことは口が裂さけても言えない。思うことすら罪と感じる。でも、わたしはヨハン、あなたに会いたい。会いたくって、たまらない。あなたにふれたい。ふれて欲しい。この気持

ちもわたしを支えている。わたしはまっすぐに進める。揺ゆらがずに。恐おそれることなく。ヨハン。あなたが生きていてよかった。本当に、よかった。

　七時十九分。玄げん武ぶ隊に遅おくれること約四分、青せい竜りゆう隊のおよそ二分後に、秩序の番人副長琺瑠以下朱雀すざく隊は大広間に突とつ入にゆうしようとしていた。

「義のために……！」

　それが俺のすべてだから。我が身はただ、そのためだけに。

　死神は進む。ひたすらに進む。身体からだが軽い。足が。腕うでが。全身が。解き放たれている。まるで──そう、まるで、あのころのようだ。太たい陽よう鬼き健在なりしころ。死神と呼ばれた男は心のもっとも大事な部分を太陽鬼にすっかり預け、肉体をただの剣けんと──否いな、死神の大おお鎌がまと化さしめて、痴しれ者ものどもの、悪漢どもの、食わせ者どもの腐くさり果てた魂たましいを、思うさまに刈かりとったものだった。それだけでよかった。何がどうして何だと頭でごちゃごちゃ考える必要はなかった。基準など。善悪など。正せい邪じやなど。ない。そんなものは。死神には。斬きるべきか否か。ただそれだけでいい。よかったのだ。あのころは。そして今も──死神はただの死神として、下水道の通路を駆かけている。

　死神は面をつけている。ずいぶん前に作らせたものだ。兜かぶと代わりの、だが、顔面から頭頂部までのみを覆おおう、死神を模した面だ。太陽鬼に倣ならい、死神は決して兜を被かぶらなかった。しかし、もういい。今この場にいる死神は死神でしかない。この面は死神にふさわしい。死神に人としての顔などいらぬ。人と成り果てた死神はなまくらとなる。ヨハン。ヨハン・サンライズ。ずる賢がしこい貴様ともあろう者が、そんなこともわからなかったのか。この俺を人の檻おりに閉じこめて何とする。貴様は俺を死神として使うべきだったのだ。このように。

「異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異異……」

　死神の口から低い音がもれる。死神の目は緋あかく輝かがやいて

いる。死神は頭を上下させない。腰こしの高さは一定だ。脚あしだけが別の生き物のように動く。素す早ばやく動く。しかし。しかし━だ、ヨハン。貴様に語って聞かせたいくらいだ。どうせ貴様には理解できぬだろうが。思うのみで、貴様に語ることなどなかろうが。俺は━俺は、解き放たれたのだ。あの敗北で。敗れることで。あの男に、完かん膚ぷ無なきまで叩たたきのめされることで。俺には必要だったのかもしれぬ。そうとさえ思う。どこからともなくわいてくる闘とう争そう心しん。狂きよう気きにも似た戦意。それを制せい御ぎよするすべを太陽鬼は教えてくれた。義の剣となれ、と。ただ闇やみ雲くもに傷つける刃やいばになることなかれ、と戒いましめて。その器うつわではない、才覚もないのに太陽鬼の跡あとを継ついだ俺は、狂気を飼い馴ならそうとした。太陽鬼にはなれぬ。だが、近づこうとしたのだ。少しでも━徳高いあの人に、父とも慕したい、敬い、愛したあの人に、俺はやはり、一歩でも近づきたかった。それは俺の道ではないと知りながら。俺は俺をねじ曲げた。俺はなまくらになった。

俺はあの男と喧けん嘩かをしたのだ。全力で。そして叩きのめされたが、俺は思いだしたのだ。あの狂気を。押しとどめることの叶かなわぬ衝しよう動どうを。

最初は凰おう州しゆう難民の同どう胞ほうを守るためであったが、俺は徐じよ々じよに取り憑つかれた。斬ることに。血を見ることに。わかるまい、ヨハン。貴様には。俺は飢うえていて、斬らずにはいられぬ。渇かわいていて、血を流さずにはいられぬ。太陽鬼はわかっていた。俺がこらえきれずにいると、太陽鬼が誘さそってくれたものだ。為し合あうか、羅叉、と。俺たちは木刀で打ちあった。俺は決まって滅めつ多た打うちにされた。それでも俺は立ちあがった。立てなくなるまで打たれた。そうして俺は言われた。強くなれ、羅叉。もっと強く。誰だれよりも鋭するどく堅けん固ごな義の剣となれ、と。

強い人だった。正しい人だった。否。俺にとっての正しさとは、あの人の生き方だった。

俺には正しさがない。俺の中には。所しよ詮せん、俺は剣だ。死神だ。右も左もわからぬ。そもそも、俺には目がない。耳がない。だから、俺は完全に掌しよう握あくされて、振るわれねばならぬ。何者かによって━それがあの巫ふ山ざ戯けた男だというのか。

ヨハン、貴様ではいけないのか。いつの日か必ず立ちあがるだろ

う、戻ってくるだろう貴様ではいけない道理があるというのか。

　知らぬ。知らぬ。死神は知らぬ。どうでもいい。死神には。少なくとも、今は。

　誰かが後ろで叫さけんだ。「七時二十一分です！」

「羅ラ亜ア亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜異異異異異異異異異異異異……！」

　死神は吼ほえながら大広間に突つっこんだ。敵の防備はなかった。大広間の中はめちゃくちゃだった。乱戦。乱軍。大乱戦だ。中央に何か台のようなものがあって、そこに全ぜん裸らの──ＳＩＸ。檻が二つ。中には溝鼠族ブラウニグ。北の玄武隊。東の青竜隊。南の朱雀隊。どれがどれだか区別はつかない。そこらじゅうで敵が、味方が、入り交じり、斬りあって、突きあい、取っ組みあっている。生者がいれば死者もいる。死者の残ざん骸がいも転がっている。床ゆかには黒い布が敷しきつめられている。どろどろに濡ぬれて乱れている。ひどく足場が悪い。そのことだけは死神の頭をよぎった。西から攻せめ入る白びやつ虎こ隊の指揮については考えなかった。そんなものは李童晏とチェス・ピードに任せればいい。死神は瞬しゆん時じにその緋あかい眼めで見分けた。斬るべき敵。それ以外。死神の手はすでに、その忌いまわしい二つ名にふさわしからぬ大刀「日輪」を抜ぬいている。死神が敵の耳の下に日輪を滑すべりこませてくいっと手首を返すだけで敵の生首は飛び、だが、血ち飛沫しぶきを浴びる前に死神はするすると進んで別の敵の顎あごの付け根に日輪を埋うめこみ、やはり手首をくいっと返すと敵の生首は飛んで、肘ひじで敵を突き倒たおし、足あし払ばらいをかけて敵を転てん倒とうさせ、その首筋を踵かかとで踏ふんで神経を離り断だんさせ、日輪を振るって敵の生首を飛ばしざまに、敵を蹴けって、敵を殴なぐりつけて、敵を斬る。斬る。斬るごとに血ち脂あぶらでぬめり、あるいは刃が欠けて斬れ味を鈍にぶらせる並の刀と日輪とは違ちがう。日輪は斬れば斬るほど斬れる刀だ。血を吸って生き生きと輝きを増す刀だ。妖あやしくきらめいて自ら獲え物ものを引きよせる刀だ。夜の闇やみを焦こがす炎ほのおのように、蛾がを──

　飛んできた。蛾だ。躍おどりかかってくる。ＳＩＸ。否いな。顔はそっくりだ。身体からだつきも。だが、服を着ている。ボディスーツだ。そこかしこに細い紐ひも状の武器がついている。こいつは違う。ＳＩＸではない──が、敵だ。敵は斬る。

「──よせ、ジロウ……！」という声が聞こえた。あれはＳＩＸだ。

　偽にせのＳＩＸは空中で紐状の武器を全展開した。押しよせてくる。豪ごう雨う。嵐あらしのようだ。死神は嗤わらった。「──笑しよう止し……！」

　紐の群れは死神を襲おそった。正確には、有ゆう翼よく魔ま人じんの羽を。羽が死神を守った。八枚の羽は傷いたんだ。それだけだった。砕くだかれはしなかった。

　死神は日輪を直上に振ふりあげた。偽のＳＩＸの股こ間かんから頭のてっぺんにかけて、一本の線が引かれた。偽のＳＩＸは「あひぃ……」と声をもらした。その直後、偽のＳＩＸは二つになった。右半身は左半身に声なき別れを告げ、左半身は右半身に無言でさよならを言った。右半身は死神の左を、左半身は右を、それぞれ通りすぎていって地面に落ち、臓物だの何だのをそこらじゅうに撒まき散らした。

　熱い血をたっぷりと浴びた死神は、死神の面の奥にまで染しみてきたその液体を舐なめた。味などわからなかった。死神はもう次の敵を探していた。

「──敵も然さる者……なんて言いたかあないがねえ……！」舌打ちをするつもりだったのに、笑いがこみあげてきた。

　下水道に本ほん拠きよを構えていることはいずれ突き止められるだろう。そう考えてはいたが、その前に次の段階に進むつもりだった。予想より相手のほうが早かったのだ。しかも、あらかじめ探さぐりを入れてくることさえなかった。彼が知るかぎりにおいては。今やエルデン中にいるジェノシドの共鳴者──彼は、シンパ、と呼んでいるが、連中が張りめぐらしている情報網もうにも引っかからなかったのだから──いや、溝鼠族ブラウニグの協力者が？　ケズリヨの生き残りか。もともと秩ちつ序じよの番人と繫つながりのある溝鼠族ブラウニグがいるとか。ありうる話だが、いい。ともかく、何にしても、敵は一挙にきた。時間を無む駄だにせず。思いきりよく。大だい胆たんに戦力を大投入してきた。それは賭かけだったはずだ。そして、敵はその賭に勝った。ひとまずは。

　大広間はしっちゃかめっちゃかだ。四つある通路から、ほとんど

ーいつ斉せいに敵が傾なだれこんできたわけだから、我わが輩はいの不ッ細工なクソ手下ども、未熟也なり、大おお馬ば鹿か者もの揃ぞろい也、チキチキ★臆チ病キ者ンばかり也、情けなし、嗚あ呼あ情けなし、情けなし――とは思うものの、まあ、しょうがない。彼の愛いとしい使い捨ての息むす子こジロウが、妙みように気力充じゆう溢いつってかんじのお笑い死神野や郎ろうに斬きられちまった。よせと言うのに突っこんでいったりしたからだ。まあ、しょうがない。

　彼は両りよう肩かたに担かついでいた二振りの愛刀――といっても裸ら形ぎようの女だが、もはや邪じや魔まっ気けなそいつらを放ほうり投げ、下半身にしがみついてこようとする女二名を蹴り飛ばし、真っ二つにされたくせにまだアウアウ言っているボブカットのワイフを見下ろした。こいつァ――いかんねえ。ダメっぽいよ。もう使い物になりそうもない。いくらなんでも死ぬだろう。わざわざ蘇そ生せい式を受けさせてやるような余よ裕ゆうも残念ながら、まあ、そんなに残念でもないが、ありゃしない。

　それから彼は、寝しん台だいの下に転がっているシャット・グレヒャとやらに一いち瞥べつをくれた。白目を剝むいて泡あわを吹ふいているが、息はあるようだ。どうでもいいか。そうさベイベー、どうだっていい。イッツオーライ、たいした問題じゃあない。人生はＦ×ＣＫだ。いつだってそうなのさ。彼は悪戯いたずらな気分で唇くちびるをペロッと舐めた。「――ここは一つ、逃にげるとするかねえ……？」

　この場所にしがみつく必要はない。仕掛けは進行中だ。万ばん全ぜんとはゆかないまでも、事を起こすことはできるだろう。彼はそのへんに脱ぬぎ捨ててあったズボンを穿はいた。無理にファスナーを上げながら、大広間を見み渡わたした。我が軍はやや劣れつ勢せい。とりわけ、南と西の通路は押しまくられている。あのへんの敵はけっこう手て強ごわそうだ。ただし、東の通路の敵部隊はジェイに蹂じゆう躙りんされつつある。北の通路に至っては、彼の息子ロック以下の我が軍がほぼ制圧している。彼は檻おりの中に囚とらわれている哀あわれな溝鼠族ブラウニグどもを見やった。連中は彼の視線から逃のがれようとするかのようにあとずさり、その身を鉄てつ格ごう子しに押しつけた。檻は二つあって、そのうち一つの上に、彼の息子カズオがしゃがんでいる。

　彼はカズオに「殺やれ」と命じた。カズオは彼によく似ている。披露宴レセプシヲンで死んだスカル・エネム、彼が影法師シヤドウ

と呼んでいた息子に次いで、彼の外見的な特とく徴ちようを受け継ついでいる。見た目は。性質はそうでもない。おとなしくて従順だ。カズオは背中からすらりとモトロール刀を抜くと、まったく表情を変えずに鉄格子の隙すき間まに突き入れた。かわいそうな溝鼠族ブラウニグが悲鳴をあげた。彼は勢いよく寝台から飛び降りた。
「──ジェェェェイ！　お遊びはお開きにするよ！　我輩についてこい……！」

　彼はまっすぐ北の通路めがけて駆かけた。息子のロックが彼を迎むかえて、糞クソ生意気にも無言で先導役を買って出た。ロックは陰いん気きで目立たない。ただ、やれと言われたことはやる子だし、言われずともそれと察してやろうとする。彼の実子で構成された彼の親衛隊シックスナインズもカズオとロック、二人のみとなった。彼はちょっぴりおセンチな気分に浸ひたろうとしてみたが、無理だ無理無理インパッシボー。彼はこれまで三桁けた、もしかすると四桁に達するかもしれない子を女たちとの間になしてきたが、どれもこれもただの息子か娘むすめでしかなかった。真情を吐と露ろするならば、彼はほんの少し期待していたのだ。ひょっとしたらひょっとする。彼の分身のような子が生まれるかもしれない。夢はあえなく破れた。ざらん、ざららん、ひらひら、ひららと破れて散った。彼は子をなすたびに失望した。絶望すらした。それにも、だが、もう慣れた。すっかり慣れちまった。我輩の悲しみはとうにすり減っちまったのさ。ラランラン。

　鼻歌なんぞ歌いながら、彼は北の通路に足を踏ふみ入れた。ジェイが、それからカズオが追いかけてきていることは、振り返らずとも彼には知れた。他ほかのチ●カス手下どもも、そのうち雪崩なだれを打ってこの北通路に詰つめかけてくるだろう。銀ぎん虱じらみどもだって、金魚の糞ふんみたいについてくるのだろう。それがどうした。彼は余裕をぶっこいていた。足どりも軽くラランラン。彼の息子、陰気なロックは彼より五メーテルほど先行している。ここは一つロックを追い抜ぬいてやろうという思いが彼の中に起こった。彼はなんだかやけに胸が躍おどっていたのだラランラン。足を速めてから、どうもおかしいねえこいつは変だと訝いぶかった。それでもラランラン、彼は依い然ぜんとして陽気だった。違ちがう。違ァーう。違ァァーうだろう？　そうじゃあるまいよ。

　彼は興奮していた。異様に昂たかぶっていた。彼の肉体に果たして例のドーパミンといふ名の神経伝達物質を分ぶん泌ぴつしやがる器官があるや否いなや、彼には判然としないのであるが、それに類

するものがドッパドッパ出まくっているような状態だった。脳の隅すみのほうでパッパと光のようなものが明めい滅めつして、目がチカチカして、鼻の奥に何かツンと焦こげくさい匂においのようなものを感じてもう、泣きたくってたまらないのだ。しかし当然のことながら、涙なみだなんざァー一いつ滴てきたりとも流れ出やしない。我輩の悲しみはすり減っちまってるんだから。とにかくこの感覚には覚えがあった。彼は最近、それが何を示す感覚なのか理解したのだ。ラランランとかいってる場合じゃないよラランラン。彼はぬいっと手を伸のばしてロックの肩かたをガッとつかんだ。「──待てロック、ウェイ、ウェイ、ウェーイトッ！　止まれ止まるんだ止まりやがれ……！」

「──お父さん……!?」ロックは振ふり向きながら立ち止まった。

　後ろでオバカ・盆ボン暗クラァーノ・〝ハチ公〟・ジェイと我マがイ息サ子ン・〝糞つまらないほど〟・従順ナール・カズオが足を止める気配もした。

　臭くせえ……！

　彼は舌打ちをした。臭え！　臭え。臭え。臭え。なんて──ひでえバッド・臭いスメルなんだ。

　くる！　くる。くる。くる。きやがる。近づいて。すげえ勢いで。

　光の速さで彼の脳内を駆けめぐる思考、それは──やばい。ここじゃあまずい。やつとは。ダメだ。ダメダメ。こんな場所であの鬼き畜ちくと死力を尽つくしてやりあうなんざァー御ご免めんだ。少なくとも今はダメだ。大おお怪け我がでもしたら、御破算になっちまいかねない。

　くそ。シット。ファック。ガッデム。謀はかったな。謀りやがった。まんまと嵌はめられた。そうか。同時じゃない。時間差。時間差攻こう撃げきか。四方からの。間抜けめ。バーカ。我わが輩はいのバーカ。変だと思わなかったのか。やつがこないなんて。くるはずじゃないか。いの一番に。それなのに。時間差攻撃。最初の部隊から順に潰つぶされる。北の通路。結果的に、そこが空くわけだ。我輩はそこから離り脱だつしようとするわけだ。まあ、我輩がとどまる決心をしたのなら、連中にしてみれば大広間で決着をつけりゃあいいわけだ。どっちにしても、思う壺つぼってわけだ。

　くるよ。きちゃうよ。やつがくる。足音が聞こえるよ。なんだかこうオーラ的なものが迫せまってくるよ。感じるよ。ひしひし感じるよ。ビンビン感じるよ。あれは間違いなく皆みな殺ごろしの騎き士しだよ。破壊の主だよ。人間どもをひれ伏ふさせていやがった魔ま導どう王おうたちがこぞって卿サー、卿サー、卿サー、卿サー呼んでいた。あの男だよ。鬼おにがくるよ。当時ほど怖こわくはないよ。見違えるほどやつはしょぼくなっちまったのさ。でも、油断はできない。そう。甘く見ちゃあいけない。何かをえるために、何か捨てなきゃならない。そんなときだってあるさ。そうだろう？

　彼は一いつ瞬しゅんのうちに決断を下していた。「ジェイ。ここがお前の死に場所だよ」

「承知しました、我が主マイ・ロード」ジェイは半秒の躊ちゆう躇ちよもなくそう答えるなり──否、答えながら彼のすぐ横をすり抜けていった。

「お前ほど馬ば鹿かなやつにはお目にかかったことがないよ」彼はそう声に出して言ったのだろうか。彼自身にもわからなかった。

「光栄です」というジェイの返事が聞こえたような気がした。

　おそらく空耳だろうさ。

　彼はもう踵きびすを返していた。

「──逃にげる……!?」

　見間違いではなさそうだ。前方約十五メーテル。ＳＩＸらしき人ひと影かげがこっちに向かってきていたのに。四人いて、そのうちの三人が引き返してゆく。残りの一人は？　突つっこんでくる。あれは──ジェイか。

　トマトクンはマリアローズより五メーテル、いや、七メーテルくらい先行している。そのすぐあとにピンパーネル。マリアローズの後ろにはカタリがいて、ユリカがいて、サフィニアがいて、ルーシーがいる。少し離はなれて、北の大部屋にはハインツ・クルエルフォートの二十五番無名隊が控ひかえているけれど、彼らはあくまで後ご詰づめだ。大部屋までは行かせない。できればこの通路で、最低でも大広間まで押し返して、そこでＳＩＸをしとめるつもり

だった。

　玄げん武ぶ、青せい竜りゆう、朱雀すざく、白びやつ虎この四隊が二分ごとの時間差で激しく大広間を衝つけば、一番消しよう耗もうが激しいだろう━もしかすると壊かい滅めつの憂うき目に遭あうかもしれない玄武隊が攻せめ入った北の通路から、ＳＩＸは逃とう走そうを図はかるに違いない。そこでトマトクン以下元ＺＯＯ組の出番だ。元ＺＯＯ組は玄武隊に遅おくれること十分、七時二十五分到とう着ちやくを目標に、大広間目指して北の大部屋を進発した。ＳＩＸが逃げてくれれば通路で鉢はち合あわせするだろう。もし逃げなければ、そのまま大広間に突っこんで、みんなで包囲して、なんとしても討うちとる。

　確実性が高いとはいえない作戦だが、秩ちつ序じよの番人は大きな賭かけに打って出たのだ。行く手にＳＩＸの姿が見えたときは、その賭に勝った、とマリアローズは思った。すぐに、まだ早い、と打ち消した。ＳＩＸ以下三名が立ち止まって身を翻ひるがえした瞬間、猛もう烈れつに八つ当たりしたくなった。たとえばカタリあたりに。もちろん、半魚人なんかに当たり散らしている場合じゃない。

　ジェイとトマトクンとの距きよ離りが限りなく無に近づこうとしている。ピンパーネルは壁かべ走ばしりを敢かん行こうするつもりか。下水道の通路は何しろ狭せまいのだ。しかも、前に百九十サンチの男がいるせいで、見えにくい。ただ、下水道自体がけっこうぐいっと湾わん曲きよくしているから、マリアローズはそのぶんいくらか視界を確保することができている。ピンパーネルはトマトクンを追い抜ぬいて、自分がジェイをどうにかしようという腹なのだろう。でも、間に合うか。その前に。

　ジェイが急停止した。いや。それだけじゃない。後ろに跳とんだ。バックステップ。ぞわっとした。何、この寒気。トマトクンが「━防ぼう御ぎよ……！」と吼ほえた。短い命令だった。マリアローズは従った。とにかく素す早ばやく迅じん速そくにすぐさま命令に従え。それ以外は何も考えなかった。身体からだが動くままに任せた。マリアローズは壁に身を寄せて腰こしを低くして両りよう腕うでで頭を守った。やばい音がした。何かが飛び交かっている。下水道の空気を切り裂さいてヒュンヒュンビュンビュン飛んでいる。壁や通路や天てん井じようにそれがぶつかっている。ガツガツバツバツぶつかりまくっている。水音もする。「━痛つうっ……」これは、自分の声。息が詰まった。右の脇わき腹ばらに何かが。サ

フィニアの悲鳴が聞こえた。カタリの半魚声も。ルーシーも何か叫さけんでいた。ユリカはどうだろう。わからない。てゆうか──何これ。なんか、痛いんだけど。何がどうなって……？

　トマトクンが怒ど鳴なった。「──またくるぞ……！」

　マリアローズは防御姿勢を崩くずさずにそれを見きわめようとした。怖かったからだ。正体不明のものが──というより、何がなんだかわからない、その状態が一番怖い。暗視鏡は目の上にずらしている。暗い。でも、見えた。何かが。光。火花。浮うかびあがる直線。たくさんの。そのうちの一つが──飛んでくる。斜ななめ上から。マリアローズはとっさに身を引いた。鼻先だった。すれすれだ。いや、掠かすった。痛みというより、熱。次の瞬間、右みぎ肩かたに衝しよう撃げき──今度は紛まぎれもなく激痛だった。マリアローズはちらりと右肩を見た。釘ネイル。ジェイの釘ネイルだ。刺さっている。さして大きいものではない。立ちあがろうとしたら、その右肩と右の脇腹が軋きしむように痛んだ。脳天まで鈍にぶく響ひびく痛みだった。マリアローズは右肩の釘ネイルに手をかけて前を見た。ピンパーネルがジェイに飛びかかろうとしていた。つまり──ジェイは二度、後ろに跳んだ。そのたびに大量の釘ネイルを投じた。ありとあらゆる方向に。一部はまっすぐ飛んできた。一部は壁やら通路やらに当たって跳はね返りつつ、マリアローズたちに襲おそいかかってきた。そういうことか。ピンパーネルも釘ネイルを食くらったのだろうか。わからない。でも、ピンパーネルはジェイをとらえた。

　ジェイはほとんど無防備だった。お得意の釘ネイルも持たずにピンパーネルを迎むかえ撃うった。というよりも、抱だきついていった。そんなふうに見えた。

　二人はぶつかった。

　絡からみあって、くるっと回った。

　さながら二人で踊おどっているかのようだった。

　ジェイは両手でピンパーネルの左腕をがっちりつかみ、両りよう脚あしをピンパーネルの下半身に巻きつけていた。おかげでピンパーネルの動きはかなり制限されていた。具体的には、左手に持っている雌めすのリレッザは封ふうじられていて、足あし捌さばきで位置関係や距離を変えることもできなかった。ただ、右手の雄おす

のグレアデは自由だった。雄のグレアデは刺し突とつ、斬ざん撃げき、両方に使える短たん剣けんで、雌のリレッザは湾曲している斬撃兼けん解体用短剣だ。雌のリレッザは使えない。それもあってか、ピンパーネルは一撃で片を付けようとしたようだ。ジェイの顔面の──たぶん、目だ。右の眼球に雄のグレアデをぶっ刺した。深々と。頭の裏側から剣先が飛びだすまで。ジェイは何か声を発した。言葉じゃない。それは単なる声だった。断だん末まつ魔まの叫びか。違ちがう。

　ジェイはピンパーネルの左腕から両手を放した。そして、今度こそ抱きついた。ピンパーネルの背中に両腕を回してがっちりとしがみつき、激しく身をよじった。

　通路の幅はばは一・三メーテルくらいしかない。落ちる。二人が。下げ水すい溝こうに。落ちた。濁だく流りゅうの下水に。落ちてしまった。

　マリアローズは「あっ……」と声を出すことしかできなかった。

　トマトクンはそうじゃなかった。「──ピンプッ……！」

　跳んでいった。

　膝ひざをついて、手をのばした。

　何かつかんだようだ。腕か、衣ころもか。

「ぬうううううううううううううううううううああああああああ……！」

　そうして一気に引きあげた。ずぶ濡ぬれの、ピンパーネル──だけじゃない。ジェイはまだピンパーネルにすがりついていた。トマトクンはジェイの肩を蹴けって、頭を蹴って、ピンパーネルから蹴り剝はがした。ピンパーネルはすぐに起きあがった。「……すみませン」

「追うぞ！」トマトクンは駆かけだした。ピンパーネルも汚お水すいを振ふりまきながらそのあとにつづいた。マリアローズも走りだそうとした。その途と端たん、右肩と右脇腹が激げき烈れつに痛んで、思わず泣いてしまいそうになった。泣かないけど。むしろ頭にきて、右肩と右脇腹に刺さっていた釘ネイルを立てつづけに引き抜ぬいて捨てた。抜いたってまだ痛い。でも、身体を動かすことはな

んとかできそうだ。振り返ると、サフィニアがユリカとルーシーに支えられていた。心配だけれど、今は時間が惜おしい。急がないと。

「無理はしないで！」言うだけ言ってマリアローズはトマトクンとピンパーネルを追った。足音からすると、カタリはついてくるようだ。サフィニアはきっと怪け我がをした。大だい丈じよう夫ぶだ。ユリカがいる。一応、ルーシーもいる。

　通路に横たわっているジェイを飛び越こえるときに、その顔が目に入った。

　やつは笑っているように見えた。濡れそぼっているせいか、泣いているようにも見えた。

　いずれにせよ、死んでいた。それだけは間違いなかった。

　マリアローズは口く惜やしさを嚙かみしめて足を速めた。時間稼かせぎだ。ジェイは捨て身でＳＩＸが逃にげる時間を作ったのだ。短い時間ではあった。せいぜい十秒くらいだろう。でも、その十秒が大きい。十秒あれば、たとえばピンパーネルなら、百メーテル以上移動できるのだ。

　実際、ＳＩＸたちの姿はもう見えない。やつらは大広間にとって返して、それからどうしたのか。考えるな。考えたってしょうがない。すぐわかることだ。トマトクン、ピンパーネルに遅おくれること三秒か四秒、マリアローズは大広間に足を踏ふみ入れた。

　大広間は、一言でいえばどろっどろだった。

　二言でいえば、ぬっちょぬちょのぐっちゃぐちゃだった。

　嗅きゆう覚かくは半分麻ま痺ひしていて、臭においなんてもうよくわからないけれど、黒い布が敷しきつめられた大広間の床ゆかには、死体、体液、臓物などが溢あふれかえっている。その上、天てん井じようやら壁かべやらに裸はだかの人間が鎖くさりで繫つながれていて、そこかしこでまだ血みどろの戦せん闘とうがつづいているのだから、なんともひどい眺ながめだ。修しゆ羅ら場ば慣れしていなかったら、卒そつ倒とうしてしまいかねない。トマトクンたちは。いた。あっちは西の通路か。秩ちつ序じよの番人の隊士たちも、そっちに流れてゆきつつある。ＳＩＸは西の通路から逃げたと

いうことか。

　マリアローズは振り返った。カタリはいる。ユリカ、サフィニア、ルーシーの姿は見えない。遅れているというよりも、サフィニアを治ち療りようしているのだろう。

　西の通路へと向かうマリアローズの足は少し重かった。甘かったのかな。作戦。うまくいかなかった。僕が一人で考えたわけじゃないけど。僕だけのせいじゃない。でも、そういう考え方って、なんか違うよね。だからって、今、こんなときに悔くいても。

　西の通路の前で、マリアローズとカタリは琺瑠隊と合流した。マリアローズは琺瑠の後ろについて、短い言葉で話しながら走った。

　琺瑠が言うには、大広間に戻もどってきたＳＩＸらは西の通路に突つっこんでゆき、トマトクンとピンパーネルがそれを追って、羅叉隊、李童晏の二番親衛隊、チェス・ピードの七番突撃隊で構成される白びやつ虎こ隊がつづき、その後ろがこの琺瑠隊というかんじになっているらしい。残りの隊の指揮については、二十九番警けい邏ら隊の隊長デュナン・セプテンに任せた。セプテンは遠えん慮りよ深い男だが、前身はさる国の騎き士しで謹きん厳げん実直、実戦経験も豊富だ。うまく差配して、余よ剰じよう戦力を西の通路に送りこみつつ、大広間のジェノシドを殲せん滅めつしてくれるだろう。戦せん況きようについては、ジェノシドに壊かい滅めつ的な打だ撃げきを与あたえたものの、秩序の番人もまた、甚じん大だいな被ひ害がいを受けている。死者、負傷者は数知れず。隊長ではシャット・グレヒャ、ラッド・ワーノンが戦死して、シャルロット・リンデ、デートニッヒ・ボルボンゾル、太臺子が重傷を負って戦闘不能。隊長補も数名が討うち死にした。

　琺瑠は事実だけを手短に、箇か条じよう書がきでもするように教えてくれた。何か感じていないはずはない。でも、感情らしきものは少しもうかがわせなかった。マリアローズは、すごい、と心の底から思った。激戦のさなかに、そこまで状況を把は握あくしている。まずそれがすごい。一いつ喜き一いち憂ゆうせず、落ちついて行動している。そこがもっとすごい。僕はダメだ。まだまだ未熟だ。こうやってすぐ落ちこんで、ああでもないこうでもないと考えたがる。そういうところがダメなんだ。集中しないと。集中。集中だ。

　西の通路から大部屋に入った。

　そこを抜けて、三百メーテルくらい曲がったりまっすぐ行ったりした。

　地下下水道の地図は頭に叩たたきこんである。そのつもりだったのに、確信を持ってここがどこだとは言えなかった。ともあれ、この上らしい。梯はし子ごがある。マンホールは開いていた。当然だ。みんな次々と登っているのだ。マリアローズも珐瑠につづいて梯子を登った。途中、一度だけ足が滑すべって、カタリの顔を蹴ってしまった。「──魚ぎよえっ!?　い、痛いがな！」「あ、ごめん。ちょっと足が。わざとじゃないよ？」「わざとでたまるかい！」そんなやりとりもあったりして、マリアローズは地上に出た。珐瑠はもう走りだしていた。「──こっちよ！」

　地へ獄ルという名の異界がある。言うまでもなく、悪あく魔またちが棲すむ世界だ。アンダーグラウンドのＤ１は辺境地じ獄ごくと呼ばれていて、その地獄へと通じている。でも、実際、地獄に行ったことのある者がどれだけいるのか。少なくとも侵入者クラッカーの間では、竜界ドラガンドよりも足を踏み入れることが難しいとされている。それでいて、人間は昔から数ある異界の中で地獄をもっとも忌いみ嫌きらい、恐おそれていて、地獄に落ちろ、だの、地獄の苦しみ、だのといった表現がごく普ふ通つうに用いられてきた。不思議といえば不思議な話だ。でも、こんなときはつい使いたくなってしまう。

　これが地獄の始まりだった。

　最初のうちは、とにかく珐瑠についてゆくだけだった。珐瑠にしてもそうだろう。ひたすら前を行く仲間のあとを追う。その仲間も先行している仲間を追いかけている。その仲間も──という具合で、先頭の、たぶんピンパーネルあたりはＳＩＸを捕ほ捉そくしているだろう。我が秩序の番人は一列に並んでＳＩＸを追つい跡せきしているはずだ。そう信じるしかない。だって、あっちで曲がり、こっちで逆に曲がって、さらに曲がり──これでは、前の状況なんてわかりっこないからだ。でも、ＳＩＸを見失ったのなら、前の動きが止まるか鈍にぶるかするだろう。列がばらけるだろう。その気配はない。今のところは。だったら、行くしかない。進むしかない。走るしかない。それはそうなんだけど──人間には限界ってものがあって。

　体力的にも、もちろんきつい。それに加えて、痛い。右みぎ肩かたが。右の脇わき腹ばらが。地面を蹴けるたびにズッグンズッグン

痛む。気にするな。平気だ。へっちゃらだ。気の持ちようだ。気持ち次し第だいでなんとか━ならないって。呼吸が乱れる。勝手に速度が落ちる。いけない。がんばって足を動かす。腕うでを振ふる。痛い。痛い。痛いってば。カタリに声をかけられた。お前じぶん、大丈夫か、とかなんとか。怒ど鳴なり返したくなった。やめておいた。痛いだけだ。声なんか出したら。だから、うなずいた。自分がなんでうなずいているのかわからない。なんか、もう━なんかもう、なんか、もう━なんで走ってるの？　どうして走らなきゃいけないの？　やめたほうがよくない？　てゆうか、無理じゃない？

　そんなことを思いながら、それでもマリアローズは懸けん命めいに走っていた。もうどれくらい走っているのか。よくわからない。時計を見る余よ裕ゆうはなかった。たぶん五分とか、十分とか、それくらいだろう。次第に脱だつ落らく者も出はじめた。ひいはあへえひい言いながら、よろよろ歩いている隊士を、マリアローズは何人も追い抜ぬいた。追い越こすマリアローズも、へえはあひいはあ言っていたけれど、まあ、普通の隊士たちは鎧よろいとか着てるし━ずいぶん軽量化が図はかられてるっていっても、あれ、やっぱり重いし━でも、こっちは怪け我がしてるのに、だらしない。ほんとに。痛いんだからさ。こっちは。マジで━やばいんだから。

　意地だけだった。気力だけがマリアローズを支えていた。カタリがすぐ前にいる。その背中を追いかけた。カタリはしばしば振り返って、マリアローズに何か言った。マリアローズは聞いていなかった。そんなことで体力を消しよう耗もうしたくない。もったいない。てゆうか、聞こえない。またカタリが振り向いた。止まった。いきなり腕を━つかまれた。

「もうあかん！　へろへろやないか！　お前じぶんはここで休んどれ！　ええな！」

　無理やり座らされた。でも、抵てい抗こうしたわけじゃない。できなかった。へなっと座りこむと、身体からだのどこにも力が入らなかった。

　カタリは行ってしまった。

　建物と建物の間に青い空が見えている。

　雲はないのに、なんだかやけに白っぽい空だ。

もしかして、死ぬのかな。唐とう突とつにそんなことを思って、マリアローズはちょっとだけ笑った。や、死なないから。これくらいで。死ぬわけないし。でも━痛い、なあ……これ。

傷を見てみた。ボディスーツのせいで、傷口の状態はよくわからない。ただ、出血は止まっていないようだ。

こうやってじっとしていると、まだ楽だ。さっきまではひどかった。気が遠くなりそうだった。とうに遠くなっていた。今のほうが楽だ。ずっと楽なぶん━なんか、眠ねむい。眠い？　そんなわけない。眠いってより━重い、みたいな。頭も、身体も、心も、何もかも。引きこまれそうだ。地面に。地の底に。

ダメだ。起きないと。立って、歩かないと。走らないと。

膝ひざに力を入れようとしたら、名前を呼ばれた。マリアローズは声のしたほうに顔を向けた。あれ、と思った。なんでこんなとこに。なんでもクソもない。作戦の開始にあわせて、アサイラム・チームも地上に━鉄てつ鎖さの憩いこい場の近くに布ふ陣じんして、秩ちつ序じょの番人の要よう請せいがあればすぐ、負傷者の治ち療りようにあたることができる態勢を整えているはずだった。騒さわぎを聞きつけたか、琺瑠か誰だれかの手配で、ここまで移動してきたのだろう。

「マリアローズ……！」ベアトリーチェは駆かけよってくるなり、マリアローズの首に手をあてて脈を測った。それから、顔を近づけてきた。瞳どう孔こうの反応でも確かめているのだろう。ベアトリーチェは笑えみを浮うかべた。「━大だい丈じよう夫ぶだ！　脈は弱っていない！　傷を手当てするぞ！　いいか！」

マリアローズはうなずいた。「右肩と、右脇腹。血だけ、止めてくれればいいから」

「ばか！　できるときにちゃんと治療しておかないでどうする！　麻ま酔すいだけ、わたしがやるからな！　━うん、鼻は麻酔しなくてもよさそうだ！」ベアトリーチェはマリアローズの右肩と右脇腹に指をそえた。その瞬しゆん間かんだけ痛かった。でも、間もなく感覚が薄うすれだして、すぐに何も感じなくなった。すごい。迅じん速そくで的確だ。医術式の修しゆ業ぎようを始めて、まだ二年も経たっていないのに。神経系の操作は得意分野だと言っていた。どうやら本当らしい。ベアトリーチェは振り返った。「━ジャッター

医士！　処置をお願いします！」

「任せろ！」

　ウィルネム・ジャッターのことはマリアローズも知っている。アサイラムの医術士の中では、モリーに次いで腕がいいと目されている黒い肌はだの大男だ。ジャッターはまず右脇腹を、それから右肩、鼻の順に治療した。マリアローズは黙だまっているだけでよかった。鼻以外はぜんぜん痛くなかった。

「──いいぞ、ベアトリーチェ！　麻酔解除！」

「はい！」

　素す早ばやくジャッターと交こう替たいしたベアトリーチェは、またマリアローズの右肩と右脇腹に指をあてた。わずか二秒くらいで感覚が戻もどってきた。マリアローズは身体をひねってみた。痛みはない。もちろん、傷もふさがっている。立ちあがって、あたりを見まわした。何人かの隊士が地べたに座っていて、アサイラム・チームの治療を受けている。それ以外に敵や味方の動きは見えない。「──超最低ＳＵＣＫ！　見失っちゃった！」

「おそらく、南のほうだ！」ベアトリーチェはマリアローズから見て左ひだり斜ななめ後ろの方向を指さした。「ここにくるまでの間に、それらしい姿を見たから！　そういえば、ユリカさんたちとすれ違ちがった！　そっちに向かったぞ！」

「わかった！　──あ、リーチェ、ありがと！　ジャッターさんも！」

「おう！」

「わたしたちも負傷者を拾って治療しながらそっちへ向かう！　あまり無茶するなよ！」

「了りよう解かい！」

　疲つかれはある。でも、痛みはない。それだけでこんなにも違うんだ。

　マリアローズは南へと走った。ここはどのへんだろう。この道。通ったことがある。たぶん、鉄鎖の憩い場の北西。もう三ブロック

くらい西に行って、同じくらい南へ行けば、ベンテン・カフェがある。マリアローズは息を弾はずませながら、四方に目を配りながら、頭を回転させようとした。アサイラム・チームは鉄鎖の憩い場の近くにいた。そこから、このへんまできた。ベアトリーチェは途と中ちゆうでそれらしい姿を見かけた。アサイラム・チームは北西に移動していたはずだ。ということは──どういうこと？　ダメだ。わからない。南。ただ南に向かうだけでいいのか。なんか違うような。ＳＩＸ。やつはただ逃にげているだけなのか。何か企たくらんでいたりしないのか。何かって、何？　あんないかれぽんちの考えることなんて想像もつかない。だいたい、それがわかればこんなに苦労してな「──い……っ!?」

　一瞬、わけがわからなかった。無む警けい戒かいだった。迂う闊かつだった。向かって左側の路地だ。何者かが飛びだしてきた。そいつに体当たりをぶちかまされて、倒たおされて──組み伏ふせられた。

　何だろう、こいつ。服装は茶色い革かわのジャケットにパンツ、グローブ、ブーツ。どれもリヴァイス製品じゃない──と思う。黒い髪かみを三つ編みにしているけれど、男だ。刺青いれずみだらけの顔はまだ若い。二十歳そこそこ。ひょっとしたら、十代かもしれない。何。誰。何者。てゆうか、このなんてことのない男に組み敷しかれちゃってる僕って……？　マリアローズは呆ぼう然ぜんとしていた。男の肩かたから剣けんの柄つかが飛びだしている。体当たりだったから、今もこうしてマリアローズは生きている。あの剣でバッサリやられていたら、やばかった。死んでいたかもしれない。

　こんなところで、こんなやつに殺やられていたかもしれないのだ。

「お、おまえ、あれだろ！」男の声はひどくうわずっていた。「ず、ＺＯＯの──ま、マリアローズだなっ！　そうだろ……！」

　ここまで間の抜ぬけたへまをしでかしたのはけっこう久しぶりだ。マリアローズは正直、だいぶ動転していた。その自覚はあったから、極力気持ちを落ちつけようとした。冷静に。冷静になれ。冷静に。「──どいて」

　言ってから、どいて──じゃないよ、そんなこと言ってる暇ひまがあったら、実力行使──しようとしたら、都合よく左ひだり腕うでが自由になった。ということは、その左手を押さえていた男の右手も

同じく──その右手が拳げん骨こつとなって降ってきた。マリアローズはとっさに左腕で顔面を防ぼう御ぎよした。おかげで顔は殴なぐられずにすんだ。男の拳こぶしは左腕の上を滑すべり、マリアローズの頭をゴリッとこすった。その直後、右腕も解き放たれた。マリアローズは両腕で顔を守った。腕の上からガッツガツ殴られた。男は叫さけびながら両の拳を振ふりおろしつづけた。「マリアローズ！　おまえは！　マリアローズだろうが！　今は、秩序の番人の、アレだ、アレ！　俺はなあ！　知ってんだよ！　一人でうろつきやがって、馬ば鹿かが！　死ね！　死ねよ！　ＳＩＸのために！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ最高ォーッ！　俺たちのＳＩＸ！　おまえは死ね！　死ねッ……！」

　何だろう。こいつ、僕を知って……？　ＳＩＸ？　ＳＩＸのため……？　何それ、どういうこと……？　考えている場合じゃない。それはそうだ。殴られまくっているのだ。男はかなり興奮している。動作が大きい。隙すきはある──と思う。でも、けっこう力が強い。



　このままだと、まずい──かも？　や、まずいよ、これ。こんなことで。情けない。だけど、どうにかしないと。どうにか。男はマリアローズの腰こしのあたりにまたがっている。これでは膝ひざ蹴げりを見み舞まうことさえできない。だったら──まず一気に全身に力を入れて、撥はねのける。うまくゆかなくても、男は一いつ瞬しゅん、気をとられるだろう。その間に、あの剣だ。男の右肩から突つ

きだしている剣の柄。あれを握にぎる。できれば、奪うばう。これでいこう。よし、今だ、身体からだ中に、とりわけ背筋に力を入れ──たら、呆あつ気けなく男の身体が浮うきあがった。

しかも、男の口から「ぶごっ」とかいう謎なぞの声が飛びだした。

その瞬間を、マリアローズは両腕の隙すき間まから見た。

男はのけぞっていた。何者かが男をのけぞらせたのだ。

そいつはほんの少し黒みをおびている赤い仮面を被かぶっていた。同じ赤の服を着ていた。赤い手て袋ぶくろをつけて、赤いブーツを履はいていた。全身、赤だった。赤ずくめだった。

どこからともなく現れたそいつが、男の顎あごを蹴りあげた。かなりいいキックだったようだ。男の身体は反り返って、浮きあがった。そのまま吹ふっ飛ばされて、仰あお向むけに倒れた。どうやら、蹴られたとき、すでに意識が飛んでいたようだ。男は受け身をとることもできなかった。意思ある生き物というより単なる物みたいな倒れ方をして、あとはもうぴくりともしない。

赤ずくめの馬鹿一号が身を屈かがめて手をさしのべてきた。「大だい丈じよう夫ぶかい、マイスウィーテスト、じゃなかった名も知らぬ愛いとしい人、いや、これからボクと運命の恋こいに落ちる予定の世にも美しい見知らぬ人？　ちなみにボクは、通りすがりの仮面の男〝赤い薔薇ローテローゼ〟という者なのサ」

マリアローズは立ちあがった。もちろん、馬鹿一号の手なんか借りたりしなかった。腕を振ってみると、痛い。でも、骨まではいっていないだろう。打だ撲ぼく傷しようだ。この程度なら、なんてことはない。駆かけだそうとしたら、呼び止められた。

「──マリア！　待ってくれ、マリアローズ……！」

無視して、マリアローズは走った。馬鹿一号はすぐに追いついてきた。簡単に追い越こされて、むかっときた。どうせ僕なんて。僕は一いつ生しよう懸けん命めい走ってるのに、あいつは余よ裕ゆうっぽいし。てゆうか、後ろ向きで走っちゃったりしてるし。僕の前を。そんな走り方で、なんで速いんだよ。

「待って、マリア！　いや、待たなくてもいい！　どうかボクに許

可をくれ！　キミといつ緒しよに行動することを許してほしいんだヨ！　今みたいなことがまた起こるかもしれないし、ボクは心配だし──いや、キミを信じていないわけじゃないヨ!?　そうじゃなくて、キミたちはＳＩＸを追っているみたいだし、キミは仲間からはぐれてしまったようだし、考えなきゃいけないことがあって注意力が散さん漫まんになれば、キミの身が危険にさらされるような事態だって、それは発生しうると思うのサ！　ボクはキミを守りたいんだヨ、ボクはキミを守らなきゃいけないんだ、だから、どうか……！」

「うるさいうるさいうるさい！　ダメ！　ダメって言ったらダメ！　僕はきみに守ってほしくなんかないし！　今だって自分でどうにかできたし！　きみがいるとややこしいことになっちゃうし！　きみには関係ないんだし……！」

「関係はある！」

　マリアローズは下を向いた。そうだった。関係ない、とは言えない。そんなことは言っちゃいけない。少なくとも、僕は。

「ＳＩＸを捜さがしてるんだろう！　頼たのむヨ、マリア！　ボクにも手助けさせてくれ！　キミに迷めい惑わくはかけないから……！」

「──そんなこと言ったって、秩序の番人の人たちは、きみを……！」

「せめて、キミが仲間と合流するまで同行させてくれ！　いや！　それだけはキミが何と言おうと譲ゆずれない！」

　譲れない、なんて断言しても、僕がどこまでも拒こばんだら、結局、諦あきらめるくせに。きっと目の前から消えて、遠くから見守ろうとするんだ。僕だってわかってる。わかってるんだから。それくらい。だから馬鹿一号なんだよ。「──じゃあ、勝手にすればいいだろ！」

「勝手にさせてもらおう！　そうと決まったら、ＳＩＸを──ボクはまだ状じよう況きようを把は握あくしきれていないんだけど、きみたちはヤツの拠きよ点てんを突き止め、そこを攻せめて、ヤツは逃にげた──それを今、きみたちは追つい跡せきしている──そういうことでいいのかい!?」

「まあ、だいたいそんなかんじだけど！」

「ヤツがどこかに逃げこもうとしているとしたら、地下にアジトがあるか──」

「その地下にいたんだよ！　下水道！」

「下水道に……!?」舌打ちをした馬鹿一号は、相変わらず後ろ向きで走っていて、ぜんぜん速度が落ちない。呼吸もほとんど乱れていないようだ。

　一方のマリアローズは、ずっと全力疾しつ走そうしていて、息が切れかけている。ああ、つらい。もうやだ。泣きたい。泣かないけど。「──あのＳＩＸのことだから、ただ逃げてるだけじゃなくて、何か企たくらんでるんじゃないかって、僕は思ってるんだけど……！」

「──そういえば、さっきの男は何者だい!?　わりあい普ふ通つうの恰かつ好こうだったけど……」

「わからないよ！　でも、僕を知ってた！　僕の名前も、当然、顔も、それから、今は秩ちつ序じよの番人だってことも──」

　ＳＩＸのために、と言っていた。あの男は敵だ。指令が下れば、リヴァイス製品を身につけてジェノシドの一員として行動する、にわかの〝世間グリ知らずーン〟。たぶん、そうなのだろう。

　グリーンは大勢いる。大勢。正確な数は不明だ。奇ゲ襲リ劇ラの状況等々から考えて、数百人、多くても千人といったところだろう。作戦本部はそんなふうに考えているが、あくまで予想にすぎない。ようするに、概がい数すうさえもつかめていないのだ。

　気味の悪い話ではある。でも、彼らはたいして脅きよう威いじゃない。彼らはあくまで手足だ。いや、手足ですらない。ＳｍＣの刺青いれずみ組やジェノシドマックスの隊員だった〝古参ベテラン〟こそが手足だ。グリーンどもは、ベテランどもの動きにあわせてあっちへ行ったりこっちへ行ったりする、有う象ぞう無む象ぞうの集まりでしかない。

　頭を潰つぶせば、つまり、ＳＩＸを始末すれば、手足も終わりだ。グリーンどもはいずれ自然消しよう滅めつするだろう。だから、恐おそれるに足りない。ただ、そうかといって、警けい戒かい

する必要がない、ということにはならない。

　グリーンの一人一人は脆ぜい弱じやくだ──僕はそんなやつにやられちゃいそうだったんだけど。まあ、人間、油断するとこんなものだ。手て練だれでも、十人に取り囲まれたら、たとえそれが全員、ずぶの素人しろうとだとしても、簡単に切り抜ぬけられるものじゃない。

　僕は──何を考えてるのかな。

　何を恐れてるんだろう。

　いったい何を。

　そう──僕は、こんなことを考えている。

　もし、とてつもない数の──予想を遥はるかに超こえる大人数のグリーンが一いつ般ぱん市民の中に紛まぎれていて──ＳＩＸが彼らに蜂ほう起きを促うながして、彼らがその命令に従ったとしたら──どうなる？

「マリア……！」

「えっ？」

　二秒か三秒くらい、ぽかんとしていた。そのあとで理解した。

　マリアローズは今、自分の足で走っていない。それどころか、マリアローズの足は地面を踏ふんでさえいない。それなのに、マリアローズの身体からだは移動している。しかも、すごい速さだ。

「え？　え？　えぇぇ!?　えーっ……!?」

「考え事をしているようだったからサ！　だいぶ息も上がっていたしネ！」

「や、たしかに、考えてはいたけど……てゆうか、そういう問題じゃなくて、何!?　何やってるわけ!?」

「ボクの口から言ってもいいのかい……!?」

「言っていいとか、悪いとか──」

「フフッ！　じゃあ、言おう！　包み隠かくさずに！　ボクは今、キミを！　マリア、ああ、マリア、愛するマリア、キミのことを――お姫ひめ様さまだっこしてしまっているのサ……！」

「――お、下ろして！　下ろせ！　下ろせってば……！」

「いや！　ここはキミらしく理性的な判断を下すべきだっ！」

「本能に駆かり立てられまくってるきみが、どんな顔をしてそんなこと言うの!?」

「こんな顔だヨ！」

「見えないよ！　変な仮面のせいで！」

「フッ！　とにかく冷静に考えてみてくれ、マリア！　キミはボクの胸に抱だかれてゆっくり知ち恵えを絞しぼればいい！　その間、ボクはキミを運ぶ足になる！　キミを守る腕うでになる！　必要があれば、キミの翼つばさになることもやぶさかじゃない……！」

「そんなこと言ったって、どこ行けばいいのかもわからないのに……！」

「そのあたりは是ぜ非ひキミに考えてほしい！　ボクはキミの思うままに走る！　飛ぶ！　どこへだってキミを連れてゆくヨ！　とりあえず、この時間でも人が多い場所へ……！」

「な、なんで……!?」

「それはネ！」

「――きゃっ……！」

　マリアローズは思わず目をつぶって、アジアンにしっかりとしがみついてしまった。だって、アジアンのバカってば、馬ば鹿か一号ってば、建物の壁かべめがけて一直線に――でも、ぶつかりはしなかった。身体が下へ、下へと引っぱられる。上へ、上へと移動しているのだ。ぐん、ぐん、ぐんっと。マリアローズは薄うす目めを開けた。アジアンは建物の外がい壁へき――もちろん、垂直の壁を、窓まど枠わくだとか、ちょっとした庇ひさしだとか、そういうものを蹴けって、蹴って、蹴って、駆け登っていた。マリアローズをだっこしたままで。む、無理。こんなの。危ないってば。僕だって、重

くはないけど、めちゃくちゃ軽いってわけじゃないし。怖こわいって。や、やば──やばい、やばいから、こんなの──マリアローズはまた悲鳴をあげてしまった。ふわっ──と浮うきあがる感覚。アジアンは軽かろやかに笑った。「──なぜなら、ＳＩＸは目立ちたがり屋だからサ……！」

　そして、着地。衝しよう撃げきは最小限だった。建物の屋上か。アジアンは突つっ走った。そうかと思ったら、また跳とんだ。瞬しゆん間かんの浮ふ遊ゆう感かん。疾走。こ、こんな状態で考えろって言われても──だけど、ＳＩＸは目立ちたがり屋。それは、そのとおりだろう。もし、逃にげることが目的じゃないとしたら──何か企たくらみがあるんだとしたら──ひとけのないところでこっそり、なんてことはありえない。あの男のこれまでの行動からいうと、絶対、ド派手に何かやらかそうとしている。でも、何を？　やっぱり、一般市民に混じっているグリーンどもの一いつ斉せい蜂ほう起きか。そうして秩序の番人を包囲、殲せん滅めつする。それがＳＩＸの罠わななのか。ＳＩＸはそのための準備をひそかに、着々と進めていた。完かん了りようする前に、こっちが先手を打った。でも、ＳＩＸを取り逃がしてしまった。罠はまだ仕上がっていないかもしれない。完全ではないけれど、罠を作動させることで、秩序の番人に打撃を与あたえることはできるかもしれない。その間に、ＳＩＸは逃げおおせるかもしれない。また潜せん伏ぷくして、次の手を打ってくるかもしれない。仮にこの仮定が正しければ──筋道は違ちがうけれど、奇くしくも馬鹿一号と同じ結論に達することになってしまう。

　人が多い場所だ。ＳＩＸは人が多い場所に秩ちつ序じよの番人を誘さそいこもうとするだろう。

「鉄てつ鎖さの憩いこい場……！」

「そのとおりサ！　まだ九時前だけどネ！　鉄鎖の憩い場の市場なら、朝早くから買い物客で賑にぎわっている！　とうッ……！」

　馬鹿一号はまた（×∞）跳んだ。今度の跳ちよう躍やくは大きかった。マリアローズは「ひうっ」と変な声をもらして、馬鹿一号にいっそう身を寄せた。だって、だって、届かないって。いくらなんでも無理だって。幅はばが。建物と建物の間、広すぎだって。目をつぶってしまいたい。できない。馬鹿一号は左腕一本でマリアローズの身体を支えて、右腕を前に出した。声が聞こえた。アルカーディア、とそれを呼ぶ声が。それは馬鹿一号の右手の手て袋ぶ

くろを突き破ってビシュッと伸のびた。黒い管のようなものだった。それが向こう側の建物の外壁──ほとんど屋上に近い位置に突き刺さって、馬鹿一号はその下方、五メーテルくらいのところに両足で着地──というか激げき突とつした。息がつまった。すぐさま馬鹿一号は上へとジャンプした。くるっと回って──いきなり回らないでよ、だっこされてるんだから──シュシュシュッと黒い管が縮んで、おかげで馬鹿一号の身体は引きよせられ、屋上のへりにすたっと降りたった。黒い管は馬鹿一号の右手に戻もどっていって消えた。「──マリア、もうすぐそこだヨ……！」

　何か言おうと思った。やめておいた。舌を噛かんでしまいそうだ。馬鹿一号はすでに駆けだしていた。マリアローズは黙だまって進行方向に目をやった。本当だ。鉄鎖の憩い場。次の次の建物の先は、鉄鎖の憩い場の西側に面している通りだ。もう次の次じゃない。また跳んで──走って、跳んで──この先は通りだ。右手のほうに、人の動きがちらっと見えた。あれは──てゆうか、それより、この先って何もないんだけど。や、何もないってことないけど、建物とかはないんだけど。下は通りで、その向こうに公園があるだけで、それなのに、馬鹿一号は止まろうとしない。「──ちょ、ちょっと……!?」

「しっかりつかまっていて……！」

「にゃあっ──」

　一瞬、アジアンはあのときの黒い翼を出して、飛ぶつもりなんじゃないかと思った。そういう気配はなかった。アジアンはただ跳躍して、マリアローズをぎゅっと抱だきすくめた。あらがうことなんてできやしなかった。死しに物もの狂ぐるいでしがみついているしかない。だって、ここは空中だ。落下しはじめている。放物線を描えがいて。落ちる。落ちちゃう。でも、死ぬ──とは思わなかった。これっぽっちも。マリアローズは目を閉じた。その直後、ぐるっと上下が逆さまになった。何かに突っこんだ。ぶつかったり、こすれたりした。アジアンは背中を向けて、それらをぜんぶ受け止めていた。この音。枝。葉。木、かな。公園の、木。それからアジアンは左手を伸ばして太めの枝をつかんだらしい。でも、その枝は勢いに負けて折れてしまったようだ。すぐにまた別の枝をつかんだ。一回転したところで、手を離はなして──アジアンはふたたび両腕でマリアローズを抱きしめ、そのまま地面に着地した。間かん髪はつを容いれずマリアローズを下ろそうとしたので、なぜだか妙みように憎にくらしくなった。ぶん殴なぐってやりたいのに、どうい

うわけかマリアローズは両りよう腕うでに力をこめてアジアンの胸に額を押しつけていた。我に返って飛び離れた。顔から火が出そうだ。でも、きっと気づかれていない。大だい丈じよう夫ぶだ。気づかれているはずがない。マリアローズは南のほうに視線を向けた。わけのわからない、わかりたくもない気持ちなんて、いっぺんに吹ふっ飛んだ。「──ＳＩＸ……！」

　マリアローズとアジアンは、鉄鎖の憩い場の南西角に位置する公園の真ん中、やや北寄りの場所にいる。半はん裸らのＳＩＸとボディスーツ姿のＳＩＸモドキが二人、それからジェノシド若じやつ干かん名めいは、公園をかすめるようにして東へ、東へと向かっているようだ。その先には市場がある。マリアローズたちは建物を飛び越こえてきたおかげで、先回りをするような形になった。そういうことか。

　味方は。いる。ＳＩＸらの十五メーテルくらい後方だろうか。先頭はトマトクンだ。カタリもいる。羅叉の姿がある。李童晏に、琺瑠も。隊士の一団がＳＩＸらをしっかり追つい跡せきしている。それだけじゃない。ＳＩＸに横合いから突っこんでいった、あれは──ピンパーネルだ。

　ＳＩＸは、でも、消えた。というか、瞬時に二メーテルくらい真横にずれた。そんなふうに見えた。

　ピンパーネルの短たん剣けんは空を斬きった。そのときにはもう、ＳＩＸは滑すべりこむようにしてピンパーネルの足あし許もとに迫せまっていた。

　何をどうやったらああなるのか。わからない。マリアローズの目ではとらえられなかったけれど、旋せん風ぷうにでも遭あったみたいだった。ピンパーネルの身体からだが宙に巻きあげられた。同時にＳＩＸは跳とんでいた。そうしてピンパーネルを後方に蹴けっ飛ばし、着地すると、何事もなかったかのように走りだした。

「ボクは頭を押さえる……！」

　アジアンは一瞬で赤い風になった。ＳＩＸたちの行く手に立ちふさがるつもりだろう。またかめんどくさいことにならなきゃいいけど。でも、今はそんなこと言ってる場合じゃないし。マリアローズはアジアンを追った。うまくゆけば、アジアンとトマトクンでＳＩＸを挟はさみ撃うちにできる。ＳＩＸがぐるりと首を巡めぐらせ

た。こっちに気づいたか。さあ、どうする━どうもしないのか。ＳＩＸはＳＩＸモドキを押しのけるようにしてまっすぐ突つき進む。市場へと。

　そっちには、でも、アジアンが行っている。もうＳＩＸの前に出ようとしていた。「━ＳＩＸ！　ここで会ったが百年目というやつだネ……！」

「アァァァァァジアン！　今のお前は怖こわくないんだよ……！」

　ＳＩＸは両腕をぐるんぐるん振ふりまわしながらアジアンめがけて突進していった。何だよ、あれ。なんで。腕が。腕から。

「□□ＴＨＵＮＤＥＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲ……！」

　バチバチバッチバチ青白い火花が。

「ＢＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＲＮ……！」

　チリチリヂリヂリ細かい火か炎えんが。

「ＲＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＬＬＩＮＧッ！　ＭＡＡＡＡＡＡＡＮヌッ……！」

　さらにＳＩＸは転がった。でんぐり返しだ。連続だ。ＳＩＸは高速回転して猛もう前進する雷かみなりと火の車輪と化した。や、化した、じゃないから。なんで化しちゃうわけ？　化してるんだからしょうがないけど、アジアンはよけなかった。正面から迎むかえ撃った。雷らい火か車輪ＳＩＸを思いっきり蹴ったのだ。「━でえええぇぇぇやあああああああァァァァァッ……！」

　ＳＩＸは蹴られた。

　蹴りあげられて、そのまま回転しながら空中を進んだ。

　アジアンは振り向いた。その両りよう脇わきをＳＩＸモドキやら若干名のジェノシドやらが通りすぎていった。

　雷火車輪ＳＩＸは地面にうまく着地するなりＳＩＸに戻った。「━我わが輩はいをやっつけたいんならねえ！　本気にならなきゃ

あいけないよ、アァァァァジアン！　本当の姿を露あらわにしてねえ！　お天道様の下だと、シャイなあんちくしょうのお前には、どうしてもそれができやしないのさ！　Ｋｕ□ＨｉＨｙａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」

「くっ……！」アジアンはＳＩＸを追いかけようとした。「──アジアン、貴様！　性しよう懲こりもなく……！」羅叉がアジアンに斬りかかろうとしたら、トマトクンが吼ほえた。「よせ！　今はＳＩＸだ……！」「トマト！」なんだかずいぶん久しぶりのように感じた。マリアローズはトマトクンの横についた。「あいつら、市場にグリーンをたくさん紛まぎれこませてるかも……！」「何!?　グリーンピースがどうしたんだ？」「……や、そうじゃなくて！」「それやったら、その前に止めなあかんやろっ！」「──間に合わないわ……！」琺瑠が叫さけんだ。そのとおりだった。一度は地面に叩たたきつけられたピンパーネルが、そしてアジアンが、ＳＩＸ率いる一団に食くらいつこうとしている。でも、先頭のＳＩＸはもう市場に足を踏ふみ入れようとしていた。入った。入ってしまった。

　ＳＩＸが手振りで何か合図をして、二人のＳＩＸモドキが左右に分かれた。アジアンとピンパーネルが三、四人のジェノシドをあっという間に蹴散らして、ＳＩＸに追いすがろうとした。その寸前だった。ＳＩＸは左手の屋台に突っこんだ。物がひっくり返る音と壊こわれる音と屋台主の悲鳴が交こう錯さくした。アジアンとピンパーネルもＳＩＸを追った。それきり三人の姿は見えなくなった。速すぎるって。舌打ちをした瞬しゅん間かん「──ああ！」と誰だれかが叫んだ。マリアローズは思わず足を止めて声のほうを見た。隊士の一人が右のほうを指さしていた。そっちに目をやると、屋台の上にＳＩＸが立ってこっちを向いていた。いや──「違ちがう！　ＳＩＸじゃない！」あれはモドキだ。上着を脱ぬいだだけだろう。「あっちにも！」と別の隊士が声を張りあげた。左のほうだ。やっぱり半はん裸らのＳＩＸ□□じゃない、ＳＩＸモドキが、屋台の屋根の上をビョンビョン跳んで逃にげてゆく。「惑まどわされるな！」と羅叉が声を張りあげた。それはもっともな話なんだけど、ぱっと見では区別がつかないから、ややこしい。「──こっちだ！」トマトクンが駆かけてゆく。そうか。トマトクンにはＳＩＸの匂いがわかるんだ。マリアローズはトマトクンの背中を追いながら叫んだ。「──みんな、トマトのあとに……！」

　市場はまだ五分の賑にぎわいといったところだ。人通りはそれほどでもないけれど、もともと屋台やら露ろ店てんやらがひしめいて

いて、ひどくごちゃごちゃしている。店と店の合間にできている細い通り道に露店を出して、周囲の商売人や通行人たちに抗こう議ぎされまくっても立ち退のこうとしない、そんな者もいるのだ。屋台というより小屋と呼んだほうがいいような店だってある。二階建ての屋台なんてものまである。見通しはかなり悪い。秩ちつ序じよの番人にとってだけじゃない。買い物客や商売人たちにとっても同様だ。でも、ジェノシドや銀の軍団ザ・シルバリイの姿をちらりとでも目もく撃げきした者は察するだろう。何だ。番人じゃねえのか。あいつら、殺気立ってやがる。やべえ。巻きこまれるぞ。冗じよう談だんじゃねえ。彼らが慌あわてふためいて逃げようと、あるいは身を隠かくそうとすれば、その様子を目にする者がいる。何が原因なのか、何が起こっているのか、彼らは知らない。ただ、何かが起こっている、少なくとも起ころうとしているということは、彼らにもわかるだろう。とりあえず逃げたほうがよさそうだ。そうだ。逃げろ。逃げろ。それか、隠れろ。店の奥に引っこめ。こうして市場は騒そう然ぜんとなる。混乱は見る間に広がってゆく。右往左往しているうちに、秩序の番人の隊列に突っこんでくる者がいる。トマトクンの行く手に飛びだしてきて一いつ喝かつされ、失禁してへたりこむ者もいる。隊士に突き飛ばされる者もいる。「──ええい、邪じや魔まだ……！」羅叉がこらえかねたように叫んだ。「どけい！　道をあけろ！　邪魔する者は叩っ斬きる……！」気持ちはわかる。でも、彼らだって好きこのんで秩序の番人を妨ぼう害がいしているわけじゃない。いや、そうとはかぎらないか。敵が混じっているかもしれないのだ。注意を促うながす前に、それは起こった。

「──ぬあっ……！」後ろのほうで太い悲鳴があがった。マリアローズは振ふり返った。一人の隊士が侵入者クラツカー風の男二人に組みつかれていた。すぐに李童晏が駆けよっていって、男二人を立てつづけに突き殺した。隊士は無事だった。とりあえずは。今までとは違う緊きん迫ぱく感かんが漂ただよった。そうはいっても、進むしかない。マリアローズは何か言おうとした。それより早かった。屋台の屋根の上からだった。男たちが飛びかかってきた。五人、いや、七人か。羅叉が、琺瑠が、他ほかの隊士たちが、その全員を、一人も余さず斬った。「──何なんだ、こいつら！」と一人の隊士が吐はき捨てた。別の隊士があたりを見まわした。「ま、魔ま導どう兵へいは……」「手向かう者は斬る！」羅叉が鋭するどく叫んで走りだした。「──魔導兵だろうと同じだ……！」素す晴ばらしい割り切り方だ。ただ、その言葉が隊士たちを励はげましただろうか。かなり微び妙みようだ。

　マリアローズはまたトマトクンを追いかけはじめた。通り道は狭せまいし、ぐねぐね曲がっている。トマトクンの背中は見えたり見えなかったりだ。見えなくなると不安になる。このまま突つき放されてしまうんじゃないか。それだけじゃない。人だ。隊士はわかる。鎧よろいを着ているから。それ以外の姿が視界に入るたびに、心臓が暴れる。ただでさえ、心しん拍ぱく数すうがとんでもないことになっているのに。もっと大暴れする。あれは敵？　ただの買い物客？　あの露店主はあやしくないか。だって、どうして逃げない？　こんな騒動になっているのに。ダメだ。いけない。考えすぎると足がすくむ。進めなくなる。前を。前だけを見て。トマトクンを追う。それだけを考えて。でも、その後ろ姿が見えなくなる。見つけては見失う。気をとられる。敵。敵かどうかわからない。きっと敵じゃない。敵かもしれない。

　これが狙ねらいなのか。これがＳＩＸの罠わなか。わからない。わからなくなった。

　マリアローズはある光景を目にした。粗そ暴ぼうそうな若い男だ。屋台に押し入って、屋台主を殴なぐりつけていた。めずらしくもない。強ごう盗とうだ。ただ、多数の魔導兵がうろついている鉄てつ鎖さの憩いこい場では、めったに見かけない。皆かい無むではないのかもしれない。だって、あっちでも、そっちでも。この騒さわぎだし、火事場泥どろ棒ぼうみたいなものか。でも、あれはどういうことだ。マリアローズは呆あつ気けにとられ、思わず立ちどまってしまった。男だ。男たちだ。三人がかりで女を押さえつけて、服を引ん剝むこうとしていた。何やっちゃってるわけ……？　こんな昼日中に。てゆうか、まだ朝だけど。市場の真ん中で。いくらエルデンでも、ありえない。

「解き放て……！」という声が響ひびきわたった。ＳＩＸの声に少し似ていた。でも、違う。声の主は十メーテルくらい前方、右手にいた。二階建ての屋台の上だ。足を、腕うでを広げて立っていた。ＳＩＸモドキだ。「──いい、いいよ、それでいい！　奪うばいたければ奪え！　犯おかしたければ犯せ！　むかつくやつは殴り殺せばいい！　そうさ！　お前たちは自由なんだ……！」

　かっとして、マリアローズはベルトのホルダーに手をかけた。中にはハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びんが収められている。爆ばく弾だんは、でも、使えない。こんな場所じゃあ。ＳＩＸモドキは逃げていった。屋根から屋根へと。解き放て、奪え、犯せ、殺せ、と叫びながら。くだらない。本当に馬ば鹿かげている。あれで──あ

んなことで人々を扇せん動どうできると思っているのか。できない。できるわけがない。あれは違う。あの男たちは。きっとグリーンだ。ようするに、やらせだ。そうに決まっている。

　女を救おうとして、隊士たちが三人の男を斬ったり蹴け飛とばしたり突いたりした。即そく死しをまぬがれた二人は情けない悲鳴を発して逃にげだした。屋台主が「助けてくれ！」と叫さけんだ。屋台主を襲おそっていた男が、羅刹に一突きでしとめられた。どこかで女が金切り声をあげた。「やめてくれ！」と叫ぶ男の声がした。「ひい！」「何しやがる……！」「助けて、誰だれか！」「ふざけやがって！　てめえら──」「やめて！」「うわあっ！」「ま、ま、魔導兵だ……！」「逃げろ！」「よこせ！」「金だ、金！」「ぎゃあっ……！」「こら！　店の品物を──」「知るかよ！」「痛いてえ！　頭が……！」「やべえぞ、逃げねえと──」「助けて……！」「ぐわあああぁぁっ……！」「この野や郎ろう……！」「お願いだから、もう……！」

「だいぶわやくちゃなことになってきよったのお……！」カタリは不敵な笑えみを浮うかべようとしたようだ。見事に失敗して、変な半魚顔をさらす羽目になった。

「──行こう！」マリアローズは唇くちびるを噛かみしめて駆かけだした。すぐに口が開いた。呼吸が乱れに乱れている。整えるなんて無理だ。この状じよう況きようと同じで、とても収拾がつかない。すべてがグリーンの仕し業わざだなんてもう思えなかった。最初はもちろん、グリーンだけだったはずだ。でも、煽あおられる者がいた。便乗する者もいた。これからも続出するだろう。そんなことはないと考えるほうが難しい。この国で見知らぬ他人に善意を期待する者は大おお間ま抜ぬけだと見なされる。騙だまされるか、利用されるか、身ぐるみ剝はがされて殺されるのオチだ。

　そんなことは骨身に沁しみていたはずなのに。

　ＺＯＯの皆みなと過ごすうちに、忘れかけていたのかもしれない。はっきりと思いだした。

　ここはエルデンなんだ。これがエルデンなんだ。

　急に恐きよう怖ふや不安が薄うすれた。疲つかれだけが大敵だった。もしかしたら、息が乱れて、喉のどや脇わき腹ばらが痛くて、足が重くて──そのせいで、怖こわいとかどうしようとか感じたり思ったりする余よ裕ゆうがないのかもしれない。目はひたすらトマトクンの姿を捜さがしていた。ぜんぜん見つからなかった。汗あせがひどかった。どれだけ走ってるんだよ、今日。やだ。やだ。もうやだ。それでも、逃げてくる人の群れをかきわけて進んだ。ぶつかりながら進んだ。不意に屋台と屋台の間から男が飛びだしてきた。よけて走った。斜ななめ後ろから迫せまってきた男には肘ひじ鉄てつを食わしてやった。どこかそのへんで火の手が上がったらしい。煙けむりが見えた。カタリ、どこかな。見まわしたら、誰もいなかった。一人だった。嘘うそ。はぐれちゃった。超最低ＳＵＣＫ。止まると、やばそう。移動しつづけないと。走らないと。だけど──ちょっと、疲れた。ちょっとっていうか、かなり。さすがに、やばいかも。休まないと。

　座りこむのはまずい。両手で膝ひざを押さえて、顔だけは上げた。目が回っているわけじゃない。それなのに、目がぐるぐるする。喉が痛い。胸も。裂さけそうだ。脇腹の刺さすような激痛も耐たえがたい。地面にぼたぼたぼたぼた汗が落ちた。それが見えているということは、うつむいてしまっているのだ。顔を上げないと。身体からだを起こさないと。前を向かないと。状況を把は握あくしないと。進まないと。肉体は、いやだ、と言っている。もう無理。動けない。ここから一歩も。だよね。ほんと、僕だって休んでたいよ。ここで一ひと眠ねむりしたいくらいだけど、そんなわけにもゆかなくてさ。

　マリアローズは右手で剣けんを抜きながら腰こしを回して振ふり向いた。質しつ実じつ剛ごう健けんな作りのＡＮＧＲＡロンド09は、見た目に反して最新の非金属ブレードを備えた現代剣モダンソードだ。その刃やいばはマリアローズに飛びかかってこようとしていた男の頬ほお骨ぼねにズズズッと食いこんで、鼻柱のあたりで止まった。間を置かずにマリアローズは左手で短剣を抜いた。片刃のやはり非金属ブレードを持つＡＮＧＲＡレクイエム04は、手入れが楽で、ものすごく頑がん丈じようで、しかも高性能だ。マリアローズはそれを男の脇腹に突つき入れてねじった。男は何か声をもらしてマリアローズを睨にらみつけた。かまわず足あし払ばらいをかけて転てん倒とうさせ、男の首を踏ふんづけて後ろに跳とんだ。別の男が安物のモトロール刀で斬きりかかってきたのだ。間かん一

いつ髪ぱつでこれをかわして、マリアローズはすぐさま逆ぎゃく襲しゅうに転じた。ロンドはやや大振りして、レクイエムは鋭するどく細かく突きだす。メリハリが大事だ。男はすぐに対応しきれなくなった。その足がもつれた。バランスを崩くずしたところを見計らい、一気に懐ふところに入りこもうとして──やめた。マリアローズは横っ跳びした。よくわからない。どうして自分がそんなことをしたのか。でも、何かを感じたのだ。上。左のほう。大きめの屋台。その屋根の上だ。総毛立った。「……なんでまた……！」

　ＳＩＸ。

　上半身裸はだかだ。そんな。てことは──もしかして、本物？　でも、モドキだって──いや。違ちがう。あれは。どう考えてもモドキじゃない。あの目だ。鬼おに火びがゆらめく禍まが々まがしい双そう眼がん。見ている。こっちを。左ひだり肩かたに「６」の刺青いれずみ。周りで歓かん声せいがあがった。「ＳＩＸ！」「ＳＩＸ！」「ＳＩＸだ！」「ＳＩＸ！」「ＳＩＸ！」「ＳＩＸ最高！」「俺たちのＳＩＸ……！」

　逃げないと。僕がどうこうできる相手じゃない。頭ではわかっていた。身体が動かなかった。そうじゃない。間に合わなかった。逃げだす前にＳＩＸは迫ってきた。

　やつは跳ちよう躍やくしたのか。わからない。とにかく、またたく間に肉にく薄はくされた。

　もう目の前にいる。

　ＳＩＸは身を屈かがめてマリアローズの顎あごを右手の人差し指と親指でつまみ、ゆっくりと首を曲げた。「知ってるよ、赤毛レツドちゃんヘアリー。お前のことはよォーく覚えてる。だが、いや待て──」

　ＳＩＸの顔が近づいてくる。マリアローズは身じろぎ一つできない。あれだ。蛇へびに睨まれた蛙かえる。これが、噂うわさの。ダメだ。怖いとか、なんとか。それ以前だ。何も考えられない。どんどん頭の中が真っ白になってゆく。ＳＩＸは、すっ──と目を細めた。「──お前は……そういうことかい。気づかなかったよ。あのときはねえ。まさか……でも、そうか。そういうことなんだね。それで、ディオロットは──」

ディオロット──トマトクン……？　それで、トマトクンは──何……？

ＳＩＸは唇くちびるを横よこ倒だおしにした三日月の形にゆがめた。「──けどねえ。我わが輩はいには関係ないことだ。どうだっていい。あいつらが何を企たくらんでいようと、興味がないんだよ。どうせ我輩は除のけ者ものさ。ひがんでるわけじゃない。こっちから願い下げだよ」

何を──こいつは、何を言って……？　わからない。さっぱり。何がなんだか。

「お前を殺したら、ディオロットはさぞかし怒おこるだろうねえ」

殺し──殺す……？　誰を？　僕、を……？　死ぬ？　ここで？　これで終わり……？

ＳＩＸの右手がひたひたと移動して、その指がマリアローズの首にかかった。

「結局、ディオロットもあいつらと同じってことさ。つまらない男だよ」

二振りの剣が地面に落ちた。息が苦しい。絞しめられている。気が遠くなった。抵てい抗こう。しないと。抵抗。無む駄だだ。でかい、手。その気になれば、一いつ瞬しゅんで頸けい動どう脈みやくの血流を止められる。首の骨を握にぎり潰つぶすように折ることだってできるだろう。

「あるいは、あの男なら──俺の気持ちがわかるかもしれないって、そんなふうに思っていなくもなかったんだがねえ」

もうダメだ。ダメなんだ。信じられない。誰だれに、さよならを。

ああ──あいつの顔が最初に思い浮うかぶなんて……最悪。

「残念だよ」

ふっ──と意識が途と切ぎれた。薄っぺらい紙切れになったマリアローズは、真っ暗な深い井い戸どに落ちて、下から吹ふきつけてきた強風に煽あおられた。舞まいあがって、人の形をとりもどした。

そんなかんじだった。声を聞いた。

「──離りゃぁぁぁぁぁぁっ……！」

　凛り々りしい、でも、可か憐れんな、それでいて凄せい烈れつな声だった。マリアローズは尻しり餅もちをついた。そのすぐ上を極限クライマックス九手棍ナインポールが飛び交かった。いや、極限九手棍は一本だ。飛び交うわけがない。でも、そんなふうにしか見えなかった。マリアローズは一回だけまばたきをして横に転がった。その横をユリカが駆かけ抜ぬけていった。



「マリアに……！」ユリカは小さな身体からだを斜ななめに回転させて極限九手棍を振りまわした。「何を！」突いた。「しゅるの……！」また突いた。「許しゃない！」さらに突いた。「許しゃないわ！」鬼き神しんのごとく突きを繰くりだした。「絶じえつ対たい！　絶対！　絶対に……！」そのすべてを、ＳＩＸは身を翻ひるがえし、横にずれて、後ろに跳び、また横にずれて、わざとらし

く慌あわててみせながら完全にかわした。「──Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ！　ワンダフォーッ！　オーマイリトォーガァール……！」「バカにして……！」ユリカじゃなくたって、あれは頭にくる。でも、熱くなったらＳＩＸの思う壺つぼだ。マリアローズは起きあがりながらユリカに声をかけようとした。必要なかった。ユリカは突とつ然ぜん、手を止めてしゃがんだ。「──サしやフィニア……！」

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　マリアローズは振り向いた。ルーシーが赤い眼めをいっぱいに見開いて立ちつくしている。その隣となりにサフィニアがいる。サフィニアが両手で握りしめている杖つえから幾いく条じようもの稲いな妻ずまが迸ほとばしってＳＩＸに命中した。ＳＩＸの全身が雷らい光こうに包まれた。ビクビクッと震ふるえた。それだけだった。

　マリアローズは呆あつ気けにとられた。「──効いてない……!?」

　ユリカはマリアローズみたいにのんきじゃなかった。すぐさまＳＩＸに躍おどりかかった。その間にサフィニアは次の詠えい唱しようにに入っていた。連続呪法セリエスマグデルだ。

「ＭｅｌｇＺｅｌｇＲｅｖＮａｖ遠炎近火ＫｒｅｙＢｒｅｙ動乱砲危黄回廻ＪｅｎＲｅｎＤ」

　あの呪じゆ文もんは。ユリカが飛びさがった。猛もう火か炎えん葬そう。炎上した。ＳＩＸが。赤い。赤い。緋ひ色いろだ。一瞬のうちに巨きよ大だいな炎ほのおの柱と化した。

　マリアローズは思わずガッツポーズをした。「──やった……！」「お父さん……！」とルーシーが叫さけんだ。まさか、その声に応こたえたというわけじゃないだろう──と思う。よくわからない。なんで？　どうして？　ＳＩＸは燃えている。燃え盛さかっている。それなのに笑った。大笑いした。「Ｕ□Ｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａａａａａａｈｈｈｈｈ……！」あまつさえ、ユリカに襲おそいかかった。燃えたままで。燃えまくっているのに。「炎はァァッ！」蹴けりを。「我輩のォォッ！」回し蹴りを。「友ォォッ！」前蹴りを。「雷かみなりもまたァァッ！」後ろ回し蹴りを連続で。「然しかり！　然り！　然ァァーりＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！　Ｎｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ｈｙａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」「□□くうぅっ……！」ユリカはそのこと

ごとくを紙かみ一ひと重えでかわし、かろうじて極限九手棍で受けた。でも、ＳＩＸは燃えているのだ。緋色の炎がユリカを舐なめた。医術士服が、医術士帽ぼうが焼けた。服や帽子だけじゃない。肌はだや髪かみの毛まで。マリアローズはユリカの名を呼んだ。呼ぶことしかできなかった。だって、僕じゃあ。無理だ。加勢にならない。足手まといにしかならない。でも、何か。だけど、何か。サフィニアの声がした。「──ルーシー……！」

　ルーシー。あのバカ。サフィニアの制止を振ふり切って、ＳＩＸめがけて──叫びながら。大声で、叫びながら。「お父さん！」「ぼくです！　ルーシーです、お父さん！」「やめてください！　こんなこと……！」「お父さん……！」ルーシーはＳＩＸに近づこうとしている。でも、ＳＩＸとユリカの動きは速くて、めまぐるしくて──ルーシーは絶ぜつ叫きようした。「お母さんが死んじゃったんです！　それなのに、あなたは……！」

「Ｚｕ□Ｇａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」ＳＩＸが、右──と見せかけて左の回し蹴りを放った。「──っ……！」ユリカは引っかかった。防戦一方で、きっと限界だったのだ。それでも、とっさに自分から跳とんで威い力りよくを殺そうとした。殺しきれるはずもなかった。ユリカは吹っ飛んだ。くるくるくるっくる回転しながら、すごい勢いで、てゆうか、こっちに──ちょうどいい、好都合だ、さあこい──実際はそんなことを考える余よ裕ゆうもなかった。

　マリアローズの胸から腹あたりに、横向きのユリカが背中から突つっこんできた。息が止まった。地面に腰こしを打った。いやぁーな音がした。なんとかそれだけですんだ。サフィニアが駆けよってきた。「──ユリカ！　マリア……！」「ありがとう、マリア！」ユリカはすぐに起きあがった。あちこちに火傷やけどを負っているけれど、大だい丈じよう夫ぶみたいだ。

　マリアローズも立とうとした。その途と端たん、腰にやばいかんじの重くて鋭するどい痛みが走った。へたりこんでしまいそうになったが、どうにか耐たえて剣けんを拾った。

　ルーシーは座りこんでいた。そのすぐ前にＳＩＸが立っている。

　炎が、ＳＩＸの身体に吸いこまれるように、シュッ──と消えた。

　ＳＩＸは右目だけ見開いて、唇くちびるの端はしを微かすかにつりあげた。「──ルーシー。ルーシーじゃないか。なんでこんなとこ

ろにいるんだい。ＺＯＯのやつらと一いつ緒しよに。お前まさか、そいつらの仲間なのかい」

「ぼくは……」ルーシーはうつむいて、地面を殴なぐった。「そんなことより！　お母さんが死んだんです！　ぼくは、お父さんにそのことを伝えたくて……！」

「そうか。死んだのかい」ＳＩＸは軽く肩かたをすくめた。「──ハドリエラ。あれはいい女だったねえ。義ぎ理り堅がたくてさ。締しまりもなかなかよかったよ。仕し込こんだ技わざを自力で練りあげる情熱も持ちあわせてた。そう。死んだのかい。弱いねえ。お前たちはすぐ死んじまう。だから我わが輩はいは嫌きらいなのさ」

「……え？」ルーシーは顔を上げた。「今……なんて？」

　ＳＩＸは微笑ほほえんだ。「我輩は、お前たちみたいな、弱い、あっさり死んじまう、ちっぽけな、虫けらみたいな生き物どもが、大嫌いなんだ。ルーシー、お前は我輩に似てないから、道具としても使えやしない。そして、どうせすぐ死んじまうんだろう。嫌いだよ、ルーシー。そんなお前が、我輩は大嫌いだ」

　ユリカは膝ひざを曲げて腰を落としている。いつでも飛びだせる体勢だ。でも、動けない。

　動いたら、ルーシーがやられる。

　親子なのに。そんなの関係ない。相手はＳＩＸだ。ルーシーにとっては実の父親でも。

　いや、父親だからか。

「ＦｕｕｕｕｕｕｕｕｕＡａａａａａａａａａｈｈｈ……！」ルーシーはモトロール刀を抜ぬきながら四つ足の獣けものみたいに跳はねあがった。異様な動きだった。速かった。ＳＩＸは、でも、見み越こしていたのかもしれない。ルーシーのモトロール刀はＳＩＸの平手ではたき落とされてしまった。「──ルーシーッ！」そうしてＳＩＸはルーシーの横っ面に肘ひじ打うちを見み舞まった。「お前は悪い子だァッ……！」

　ルーシーは近くの露ろ店てんに突っこんだ。ユリカがそっちめがけて駆かけだし、サフィニアは杖つえを握にぎりしめた。マリアローズも剣を構えた。腰が痛い。痛いっていうか、もげそう。腰が

もげるわけないんだけど。何、この痛み。そんなこと言ってられないんだけど。ＳＩＸがこっちを向いた。その直後、飛び退すさった。逃にげた？　なんで？　上だ。斜ななめ上から、鷹たかみたいに急降下してきた。ピンパーネル。砂色の鷹は、着地するなり方向転てん換かんしてＳＩＸを追った。ＳＩＸは跳とびあがった。一っ飛びで屋台の屋根の上へ。そこにあいつがいた。赤ずくめの男。赤い薔薇ローテローゼ。馬ば鹿か一号は空中で一回転して踵かかと落おとしを放った。「ハァァッ……！」「──Ｎｕｏ……!?」ＳＩＸは両りよう腕うでを交差させてこれを受け止めた──が、屋根が崩くずれた。埃ほこりやら何やらを撒まき散らしながら屋台がぶっ壊こわれた。二人はその中へ。「──アジアン……！」マリアローズは走ろうとした。腰が砕くだけて、ちょっと泣いてしまった。ＳＩＸが、それから馬鹿一号が、崩ほう壊かいした屋台から飛びだしてきた。その向かい側の屋台が、突とつ然ぜん、何の前まえ触ぶれもなく粉々になった。障害物を飛び越こえるのではなく突き破って、一頭の獅し子しが姿を現した。トマトクンは琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大剣を振りおろした。「ぬうううううううううああああああああああああ……！」「──Ｎｎｎ□Ｍｕｅｅａａａｈｈｈｈ……！」ＳＩＸは身をよじった。大剣をかわそうとしたのだろう。かわしきれなかった。その左肩から右の脇わき腹ばらまでがグジャジャジャジャッ──と裂さけた。浅くはない。一刀両断には程ほど遠とおいけれど、ＳＩＸは地面に倒たおれこんだ。仰あお向むけだ。ほとんど無防備だ。トマトクンは大剣を振りおろそうとした。「──忍にん法ぽうッ……！」ＳＩＸは両手両足をぴんと張った。「特大JUMBO！　放出CUMSHOTッッッ……！」

「──ぬあっ……！」トマトクンが吹ふっ飛ばされた。トマトクンだけじゃない。アジアンも。ピンパーネルも。あれは。緋ひ色いろの炎ほのおだ。それから、青白い稲いな妻ずま。炎と雷かみなりが入り交じって猛たけり狂くるっていた。そんなものがＳＩＸの全身から放出されたのだ。マリアローズは知らぬ間に片膝立ちの姿勢になっていた。静電気混じりの熱風がここまで吹きつけてきた。十五メーテル以上離はなれているのに。「──あれは……！」サフィニアが叫さけんだ。「わたしの……魔ま術じゆつ……!?」そんなバカな。でも、言われてみれば。稲妻。爆ばく雷らい索さく。緋色の炎。猛もう火か炎えん葬そう。どっちの魔術も効かなかった。とくに、猛火炎葬による緋色の炎は、ＳＩＸの身体からだに吸いこまれるようにして消えた。そんなふうに見えた。

「よっ──」ＳＩＸは反動をつけて起きあがると、首を曲げて邪じゃ

悪あくな笑えみを浮うかべた。「ディィィィィィィィオロット。ずいぶん会わないうちに、お前はすっかり退化しちまったがねえ。我輩は逆だ。進化してるんだよ。とくに最近は──」「スアッ……！」いつの間に態勢を立てなおしていたのか。アジアンが右からＳＩＸに突っこんでいった。ピンパーネルも左から。ＳＩＸはくわっと双そう眼がんを見開いた。「少しは喋しやべらせろよ、無ぶ粋すいだねえ……！」その先は──よく見えない。目で追いきれない。何なんだよ、あれ。ＳＩＸが消える。ピンパーネルも消える。アジアンも見えなくなる。少し離れた場所にＳＩＸが現れる。そのすぐそばにピンパーネルが。アジアンが。ＳＩＸは、でも、また掻かき消える。ピンパーネルとアジアンもつづいていなくなる──いや、いなくなったわけじゃない。三人は程なく姿を現す。一いつ瞬しゅんだけ。またもや消える。笑いをふくんだＳＩＸの声が聞こえた。「──Ｋｕ！」「Ｈａ！」「Ｈａａｈｈ！」「ＳＨＡＤＯＷ！」「ＤＡＡＡＮＣＥ！」「Ｙｅａｈｈｈｈｈ……！」三人は消えては現れながら、互たがいの距きょ離りを縮めたり広げたりしながら、あっちに、こっちに、そっちに、どっちに？　──とにかく、パパパパパッと移動して、追いかけっこをしているのか。

「ＳＩＸ……！　いつまでも貴様の遊びにつきあってられるか……！」トマトクンが猛もう然ぜんと駆けだした。でも、そっちには誰だれも──いないと思ったのに。そう見えたのに、いた。というよりも、ＳＩＸが現れた。トマトクンは大たい剣けんを振ふりおろした。「むうううううあああああああああああああああああ……！」「──Ｋｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」いった。ＳＩＸはとっさにかわそうとした、でも──斬きれた。左腕。肩口からズッパリいった。トマトクンはそのまま身体を一回転させて大剣を振りまわした。これはよけられた。ＳＩＸは地面に身を投げだし、ぎりぎりのところで──そうして起きあがらずに左腕を拾った。自分の左腕をくわえて、転がった。トマトクンは大剣を細かく素す早ばやく突つき下ろしてＳＩＸを狙ねらった。アジアンとピンパーネルもＳＩＸに殺さつ到とうしようとした。「──たはまらはんッッ！　こほいつふァァァッ……！」ＳＩＸは右手と両足で同時に地面を叩たたいた──次の瞬しゅん間かん、やつは五メーテルばかりも離れた場所に移動していた。そうか。ようやくわかった。あれは。ピンパーネルの手ほどきを受けて、きゅーも身につけていた。あの技わざか。ＳＩＸはそれから射出されたようにビョンッ──と跳んで、そこまではいいとしても、いや、べつによくもないんだけど、空中で獣みたいに食事をした。これにはマリアローズのみならず、トマトクン以下、全員が呆あつ気けにとられたようだった。ＳＩＸは自分

の左腕を食ったのだ。というか、丸のみした。

屋台の屋根に降りたったＳＩＸは、血ち塗まみれの唇くちびるを不気味に細長い舌で舐なめて、胸の傷を右手の指でなぞった。「──我わが輩はいが我輩を食うんだからねえ。相あい性しようバッチシだよ」

アジアンは、フッ、と笑った。「とんだ変態だネ……」

「まずそうだな」トマトクンが火傷やけどした顔にいやそうな表情を浮かべると、ピンパーネルがひっそりとうなずいた。マリアローズは腰こしの痛みを懸けん命めいにこらえて首をひねった。「……そういう問題？」

サフィニアはユリカとルーシーがいるほうにちらちら目をやっている。ルーシーを励はげますユリカの声が聞こえた。大だい丈じようぶ夫ぶなのか。てゆうか、僕もちょっと、やばいかも。この腰。もしかして、骨とかいっちゃってるんじゃない……？　考えるな。動けなくなる。なんでもない。ぜんぜん平気だ。

申しあわせたわけでもないのに、お互いに一息つく恰かつ好こうになった。だけれど、それも終わりだ。トマトクンが、アジアンが、ピンパーネルが、一歩踏ふみだそうとした。その瞬間、それは起こった。ＳＩＸだ。左ひだり肩かただ。血液がごぼごぼ流れだしているその切断面から、何かが飛びだした。それは白かった。血に濡ぬれて赤く汚よごれているが、もともとは白い──まるでＳＩＸの肌はだのように。それは伸のびた。膨ふくれた。太くなって、うねった。あらがう獲え物ものを押さえつけようとしている蛇へびみたいだ。ぐねぐね、うねうねしながら、それは形を整えた。物の数秒だった。ＳＩＸはそれを曲げたり伸ばしたりして、握にぎったり開いたりした。どこからどう見ても、それは左腕であり、左手だった。生えたのだ。

ＳＩＸは右手の指にたっぷりとなすりつけた血と、左手を染めている血で、顔に──額や目の周りや頬ほおに、禍まが々まがしい紋もん様ようのようなものを描えがいた。「──ディィィィィィィィオロット。我輩はねえ。進化してるんだよ。とりわけ最近は、お前たちみたいなサヴィッジでホリボォォな化物どもを相手にしてたもんだからねえ。慎しん重ちような我輩らしくもなく。おかげで、進化のスピードはマッハゴーゴーさ。今の我輩ときたら、ほとんどニンジャだよ……？　Ｋｅ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａａａａａａ

ａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈ」

「何がニンジャだ」トマトクンは唾つばを吐はいた。「貴様こそ化物だろうが」

「ＳＩＸ、キミは──」アジアンの声は少し揺ゆれていた。「いったい何ものなんだ」

「見ろよ」ＳＩＸはアジアンの問いには答えずに両りよう腕うでを広げた。「みィィィーんなフィーバーしてる。しまくってるよ。楽しそうだ。とても、とても、とてもねえ」

「あなたが……！」ユリカは極限クライマツクス九手棍ナインポールの先をＳＩＸに向けた。ルーシーがその足あし許もとでうずくまっている。どうやら生きてはいるようだ。「じぇんぶあなたが仕組んだことでしょう!?　この悪党……！」

「否定はしないよ」ＳＩＸは肩をすくめておどけてみせた。「焚たきつけたのはたしかに我輩さ。だがねえ。我輩や我輩の息むす子こたちが、奪うばえ、犯おかせ、邪じや魔まするやつは殺せと煽あおって、それに応じた者が間ま違ちがいなくいるんだ。我輩の手下どもがハッスルしてるのを見て、自分も加わらなきゃ損だと暴れまわってる者が、今この瞬間も大勢いるんだよ」

「しょれが何だっていうの！」

「お嬢じようちゃん。天使エンジみたいエリーなお嬢ちゃん」ＳＩＸは不意に無表情になった。「逆に我輩が訊きこう。彼らは悪いバツドやつら・ガイズなのかい？」

「あたりまえでしょう！　ふちゅうの人間なら、何があろうとしょんなひどいことをしたりしないわ！　はじゅみで、勢いで、自分の欲よくのために、他人を傷きじゆちゅけるなんて……！」

「普ふ通つう、ねえ……」ＳＩＸは微かすかに口許をゆるめた。「断言してもいい。彼らは普通だよ、お嬢ちゃん。むしろ、彼らこそが普通なのさ。何か理由さえあれば我がために、なくたって何だかんだと理由をつけて、奪い、害し、殺す。普通はそんなものだろう？　お嬢ちゃんには心当たりがないのかい……？」

「──わたし、は……」ユリカの声が震ふるえた。卑ひ怯きようだ。マリアローズは唇を噛かんだ。ＳＩＸの言い種ぐさは卑ひ劣れつ

だ。何も、誰だれ一人ひとりとして傷つけずに生きることなんて、できっこないんだから。とくに、この国では。ユリカだって。正義感が強くて、気高いユリカでも──利己的な、自分勝手な、どうしようもない悪党どもを憎にくんでいるからこそ、その手の連中には容よう赦しやがない。

　理由があるから、傷つけ、殺す。しょうがないじゃないか。人間なんだから。

　普通のことだ。普通──だから、それが──何だっていうんだよ。

「撤てつ回かいするよ、お嬢ちゃん」ＳＩＸは小さな溜ため息いきをついた。「お嬢ちゃんは天使なんかじゃないねえ。天使なんて喩たとえもどうかと思うけど、とにかく──ただ愛らしいだけだよ。見かけ倒だおしさ。でもねえ。それでいいんだよＧｙａＨａＨａ！　それでいい！　お嬢ちゃんはこの世界にふさわしいよＧｙａＨａＨａ！　この卦けつ体た糞くその悪い世界にねえ……！」

「くだらんことを……！」トマトクンが猛もう烈れつな勢いで突とつ進しんしてゆき、ＳＩＸが足場にしていた屋台を大たい剣けんの一いち撃げきで粉ふん砕さいした。ＳＩＸはバランスを崩くずしかけたが、危あやういところで向こう側に逃のがれた。トマトクンはめたくそに壊こわれた屋台を飛び越こえてＳＩＸを追った。ピンパーネルも。アジアンも。マリアローズも駆かけだそうとした。その瞬間、痛みというよりも衝しよう撃げきが腰を襲おそって、目の前が真っ暗になった。口から変な声が飛びだした。「──ひんっ……！」

「マリア……!?」ユリカが走りよってきた──ような気がする。「だ、だ、大丈夫、だから、し、し、ＳＩＸ、を──」というようなことを言ったような気もする。ユリカだけじゃなくて、サフィニアとか、あと、なぜかアジアンもそばにいた。行ったんじゃないの……？　ＳＩＸが。ＳＩＸを。あれなのに。戻もどってきた……？　僕のために。僕のせいで。申し訳なさと焦しよう燥そうと苦痛がない交まぜになって、こらえきれなくて、泣いてしまったような気もする。ユリカに手当てしてもらった。それは間違いない。「──骨こちゆ盤ばんが折れて……！」「折れ？　こつ……？」「ちょっと手間がかかるわ。とりあえじゅ、感覚だけ飛ばしゅわよ！」「か、感覚……」「──我が慢まんして……！」マリアローズは必死にうなずいた。何度も、何回も。そのうち楽になった。

「──大だい丈じよう夫ぶ!?　痛みは？」「……ない。かな。うん。大丈夫」「しょう、でも、動いちゃだめよ！　下半身を麻ま痺ひしゃしぇてるから、動けないと思うけど──」「……わたしが、ついているので、ユリカは……！」「いいや、ダメだヨ！　暴徒もいるし、見たまえ！　火の手も迫せまっている！　ここは危険だ、ボクが運ぼう！」「じゃあ、アジアンさん……マリアを……！」「承知した！　さあ、マリア！」「ちょ、ちょっと、勝手に話を進めないで──」「そんなことを言っている場合じゃないヨ！」「……そうですよ……！」「しょうね！」「そ、それはそう──なんだけど……わっ！」「痛くはないかい、マイスウィーテスト!?」「い、痛くはないけど！　てゆうか、何も感じないし……」「それはよかった！　さあ、しっかりつかまって！　もっとぎゅっと！」「う、うん……」「──ルーシー！　あなたもちゅいてくるのよ！　走れるわね!?」「……は、はいっ！」「みんな、行くわよ！」

　ユリカを先頭にしてトマトクンを追いかけた。といっても、マリアローズはアジアンにしがみついているだけだ。おかげで、いやでも市場の惨さん状じようが目に入った。屋台にしても、露ろ店てんにしても、無事な店はほとんどない。商売人たちの大半は逃にげ去っていて、程度の差こそあれ、大多数の店は壊されて、踏ふみにじられ、金目の物は奪われている。おそらくその過程で撲ぼく殺さつされたのだろう。血。死体。あそこにも死体。ここにも。通り道の真ん中で、下半身だけ裸はだかにされて倒れている女がいる。血ち塗まみれだ。頭を割られて死んでいる。道みち端ばたで横になっている十歳くらいの子供も動かなかった。血だまりの中に立つ魔導兵の姿も見かけた。逃げ惑まどう者たちもいる。座りこんで震えている者もいた。恐きよう怖ふに身をすくませている者や、茫ぼう然ぜん自じ失しつとしている者を見つけると、ユリカは必ず声をかけた。「──逃げて！　早く逃げなしゃい！」従う者もいれば、従わない者もいた。彼らを強制的に避ひ難なんさせるだけの余よ裕ゆうはさすがになかった。ＳＩＸを追わないと。それに、火事が。火と煙けむりは東のほうから西へ西へと向かっているようだ。ＳＩＸも西へと進んでいるのか。その後ろ姿は確かく認にんできない。トマトクンも。ユリカは、でも、迷いを感じさせない足どりでまっすぐ駆けている。

　右を見ても、左を見ても、略りやく奪だつの痕こん跡せきが。破は壊かいの形けい跡せきが。屍しかばねが。これが結果なんだ。

　ぜんぶ失敗だった。何もかも間ま違ちがえた。何もできなかっ

た。何も。敗北感に打ちのめされて、口くち惜おしさにこの胸が引き裂さかれてしまえばいいのに、そうはならない。冷静なわけじゃない。落ちついてなんかいられない。ただ━虚きよ脱だつしている。うまく物を考えられない。感情はどこへいったのか。どこかに置き忘れてしまったかのようだ。

　マリアローズはアジアンにすがりついた。もうすぐ市場が終わる。その向こうは公園だ。

　公園に出た。

　いた。トマトクン。それに、ＳＩＸ。ＳＩＸはトマトクンめがけて何か投げつけた。人間。若い女だ。「━ここからだよ、ディオロット……！　ここからやりなおすんだ……！」「ぬうっ……！」トマトクンは女をよけずに左ひだり腕うで一本で受け止め、地面に寝ねかせた。そのときにはもう、ＳＩＸは子供二人の首根っこを鷲わしづかみにしていた。「我わが輩はいは……！」そうして一人、投げた。「ここから始めることにしたんだよ！」さらにもう一人。「ここに我輩の王国を築いてねえ……！」「━戯ざれ言ごとを……！」トマトクンは一人キャッチしたけれど、あとの一人は無理だった。ＳＩＸはアイスクリームの屋台めがけて突進した。「高みの見物を決めこんでるグッダーの汚きたねえケツを蹴け飛とばして、我輩は見つけるつもりだよ！　否いな！　否！　否ＡＡＡＡＡＡＡＡ……！」何をするつもりなのか。ＳＩＸは一気に━持ちあげた。屋台を。「━生みだすのさ！　我輩の、この手でねえ……！　Ｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈ……！」そして、ぶん投げた。もちろん、標的はトマトクンだ。トマトクンは子供を小こ脇わきに抱かかえたまま、右腕一本で豪ごう快かいに大剣を振ふりまわした。「━があああああああああああああああああああああああああ……！」屋台は真っ二つに━というよりも木こっ端ぱ微み塵じんになった。トマトクンは子供を地面に下ろした。子供はぐったりしていた。息があるのかどうか。そこらに倒たおれ伏ふしていた中年男の足首を引っつかんで持ちあげようとしたＳＩＸに、横合いからピンパーネルが飛びかかっていった。「熱々ホツトな忍にん法ぽう、火か遁とん……」ＳＩＸはピンパーネルに顔を向けて大口を開いた。「━Ｋａ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」その口から火か炎えんが噴ふきだした。炎ほのおのかたまりをまともに浴びたピンパーネルは、火だるまになって地面に転げ落ちた。ＳＩＸはすぐさま中年男をトマトクンに向かって投とう擲てきした。「何もね

え……！　お前たちみたいに回りくどいことをしなくたっていいんだよ……！」「俺を──」トマトクンは中年男をよけて、ＳＩＸに突つっこんでいった。「やつらと一いつ緒しよにするな……！」

　ＳＩＸは逃げなかった。それどころか、トマトクンに向かっていった。両腕を広げて、迎むかえ撃うつつもりなのか。素す手でなのに。まさか──大上段から襲おそいくるトマトクンの大剣を、その両手で。「──ちぇええええええええええええええええええええええええええい……！」

　挟はさんだ。がっちりと。白しら刃は取どりだ。でも、押された。トマトクンの力に。大剣の刃はＳＩＸの額にふれていた。薄うすく斬きり裂いて、血が流れでている。ＳＩＸは双そう眼がんを見開いて、自らの血を舌で舐なめた。「──あんなものを手て許もとに置いてやがるくせに、よくもそんなことが言えたものだねえ……！」

「俺には関係ない……！」

「信じられると思うかい！」

「貴様が信じようと、信じまいと……！」トマトクンはＳＩＸに蹴りを見み舞まおうとした。その前に、ＳＩＸはトマトクンの大たい剣けんから手を離はなして飛び退すさった。トマトクンはＳＩＸを追いかけてゆく。まだ身体からだ中が燃えているピンパーネルも起きあがろうとした。「──ダメよ、ピンパーネル！」ユリカが駆かけだした。「しょこでじっとしていなしゃい……！」サフィニアが、そしてルーシーもユリカにつづいた。でも、アジアンは動かない。僕がこのザマだから。

「──おったでえ！」「ＳＩＸ！」「ＳＩＸだ！」「ＳＩＸ……！」銀色の鎧よろい兜かぶとを身にまとった秩ちつ序じよの番人の隊士たちが市場から続々と出てきた。羅叉隊。珐瑠隊。李童晏の二番親衛隊。等々。カタリもいる。隊士たちの後ろからは、商売人らしい男女や、買い物客とおぼしき女子供も。避難の途と中ちゆうで秩序の番人を見かけて、ついてきたのか。

　ＳＩＸは逃げる。速い。トマトクンも低い姿勢で疾しつ駆くしている。それ以上に速い。ＳＩＸは逃げてゆく。だけど──その方向には。

銀色じゃない。鈍にび色いろの鎧と兜で一分の隙すきもなく全身を覆おおい、巨きよ大だいな斧おののごとき穂ほ先さきを持つ脅威大使メナス・グレイブを手にしている。魔ま導どう兵へいだ。しかも、三体。そのうちの一体は他ほかの二体より大きい。エルデン市民の間では隊長と呼ばれて親しまれている──わけがない、畏い怖ふされている。なんでも、けっこう頭がよくて、他の魔導兵たちに指令を飛ばすこともできる統とう率そつ者らしい。そんなふうにも言われている隊長が一体と、普ふ通つうの魔導兵が二体だ。

ＳＩＸは突っこんでゆく。それも、真ん中の隊長めがけて。魔導兵を利用するつもりなのか。この期ごに及およんで、卑ひ劣れつな──いや、違った。

ＳＩＸは隊長が振りおろした脅威大使メナス・グレイブを例の技わざで──瞬しゆん時じに、横にずれるように移動して、紙かみ一ひと重えでかわした。そして、また消えた。現れたときには、隊長の背後に回っていた。隊長は振り向こうとした。遅おそかった。ＳＩＸは隊長に躍おどりかかって、兜を引きちぎった。魔導兵にとっては兜がすなわち頭部だ。でも、隊長は止まらなかった。ＳＩＸは暴れる隊長の背中にとりついて、首の付け根にあたる場所に──兜がもがれて、黒い繊せん維い状の物体がわさわさっと飛びだしているその場所に、左手を突っこんで──隊長の体内で何かを探さぐりあてたのか。

引っこ抜ぬいた、それは──拳こぶし大だいで、透とう明めいなジェル状のものに包まれていて、赤く明めい滅めつしている、あれは──何だろう……？　とにかく、ＳＩＸがそれをぶっこ抜いた途と端たん、隊長は死んだように動かなくなった。ＳＩＸに脅威大使メナス・グレイブで斬りかかろうとしていた普通の魔導兵二体も瞬間、静止した。間もなく再始動したが、すでにＳＩＸは隊長から脅威大使メナス・グレイブを奪うばっていた。

「ハードコアだよ人生はＡＡＡＡＡＡＡ……！」ＳＩＸは右腕一本で脅威大使メナス・グレイブを振りまわした。そうして普通の魔導兵二体を一挙に両断するなり、あの赤い物体を──食った。口を閉じてングングのみこみながら、ＳＩＸは空いた左手で脅威大使メナス・グレイブを拾いあげた。それはもともと普通の魔導兵が持っていて、ぶった斬られたときに取り落としたものだ。二刀流となったＳＩＸにトマトクンが押しよせた。「──ぬあああ！」「Ｈｙｙｙ！」「ぐぬあああ！」「Ｈｏｏｏｈｈｈ！」「でえああ！」「Ｐｏｏｏｈｈ！」「つうああ……！」「Ｈｙｅｅｅｈｈ……！」

　ＳＩＸは二本の脅威大使メナス・グレイブを操あやつって、トマトクンの大剣をなんとか撥はね返している。でも、防戦一方だ。攻せめには転じられない。じりじりと後退している。羅叉隊以下の秩序の番人がＳＩＸを包囲するべく動きだした。二人は激しく打ちあっているから、簡単に近づけるものではないが、後ろをとれば──

「けえええええあああああああああああああああああああ……！」トマトクンが振りおろした大剣を、交差させた二本の脅威大使メナス・グレイブでＳＩＸが受け止めた。「──Ｋｙ……！」

　膠こう着ちやくは一瞬だった。トマトクンは力を加えて押し切ろうとした。「──ずうううううああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ……！」

　ＳＩＸの膝ひざが曲がった。腰こしが落ちる。これはいける。もうちょっとだ。それなのに──不意にトマトクンは大剣を引いて後ろに倒たおれこんだ。

　よけたのだ。ぎりぎりのところで。

　ＳＩＸだ。

　口を開けて、喉のどの奥から、何かを放った。

　それは光だった。赤い、黒みがかった、禍まが々まがしい、光の線が──線といっても、ＳＩＸの口の大きさくらいはある赤い光線が、まっすぐ、まっすぐ伸のびて、直ちよく撃げきした。いや、直撃、というべきなのか。市場から出てきたはいいものの、どこへ行っていいかわからず、うろうろしていた男女を、そのうちの四、五人ばかりを、赤い光線がザアァッ──と通りすぎていったのだ。あるいは、撃ち抜いた。そう表現したほうが適切かもしれない。

　男女は悲鳴をあげて、もしくは声をあげることもなくバタバタ倒れた。

　その身体に穴があいているように見えた。

　どう考えても、あの赤い光線のせいだ。

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｕｕｕ……！」ＳＩＸは脅威大使メナス・グレイブを車輪みたいにブオンブォン振ふりまわしてトマトクンを牽けん制せいし、バラバラになって倒れて上半身だけがジタバタして

いた二体の魔導兵たちにザザンッと脅威大使メナス・グレイブを叩たたきつけた。胸きよう甲こうだ。胸の装甲をぶち破って、肉にく食しよく獣じゆうみたいにそこに食いついた。目的はあの赤い物体だろう。ＳＩＸは一つ食くらった。二つ目はトマトクンが許さなかった。ＳＩＸはトマトクンの大剣から逃のがれてニタリと笑った。「──我わが輩はいの感覚だがねえ……魔導兵の第五クイン要素石トウラ、たった二個食っただけでも、けっこう撃うてそうだよ？　我輩のラヴ★ビーム、どれだけぶっ放せるか、試ためしてみようか……？」

「全員、伏ふせろ……！」トマトクンは怒ど鳴なりながら地面に身を投げだした。アジアンはすぐさまマリアローズを抱だいたまま体勢を低くした。その直後だった。ＳＩＸがまた口から赤い光線を──ラヴ★ビームとやらを発射した。違う。発射しつづけた。それだけじゃない。発射しつづけながら、クルクルグルグル回転しまくった。「──Ｍｕ□ＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａａａａａａｈｈｈｈｈｈ……！」

　頭上を──たぶん五十サンチか六十サンチ上を、まるで鞭むちのようなラヴ★ビームが何度も何度も通っていった。音がした。空気が熱いものに接して溶とけている。そんなかんじの音だった。マリアローズはアジアンにきつく抱きしめられていた。それでも怖こわかった。

　あれが自分の身体からだに少しでもふれたら、どうなるのか。

　あんなふうになる。

　戦い慣れた隊士たちの大半は、とっさにトマトクンの命令に従って伏せたりしゃがんだりしていた。でも、戦せん闘とうとは無む縁えんか、少なくとも専門家じゃない市民たちの多くは反応できなかった。ラヴ★ビームは長い長い鞭のようだった。でも、鞭よりずっと恐おそろしかった。赤い光線は鋭するどい刃やいばみたいに彼ら、彼女らを手当たり次し第だいに斬きり裂さいた。それでいて、悲ひ惨さんな光景には見えなかった。大勢が胸や首や胴どう体たいのところでスパスパスパスパ真っ二つになっても、不思議と出血が極端に少なかったからだ。

　人々は冗じよう談だんみたいに死んでいった。

　もちろん、冗談なんかじゃない。あたりまえだ。わかっている。

それでも、目に映るその眺ながめは現実味が薄うすく感じられた。だからこそ、むごい。

　ひどいよ、あんな死に方。

「──テイスティィィィＹＹＹＹＹ……！」ＳＩＸは光線の放出をやめると、魔ま導どう兵へいの残ざん骸がいに飛びついて赤い物体を──残りの一つを犬食いした。その口から煙けむりがあがっているけれど、平気なのか。平気なのだろう。何しろ、正しよう真しん正しよう銘めいの化物だ。「──充電チヤージ、充電チヤージ、充電チヤージ。電気じゃあないけどねえ。こんなハイパゥワァーな代しろ物ものを搭とう載さいしてる魔導兵団がゴミみたいに蹴け散ちらされたってのに、お前たちは懲こりない！　見果てぬ夢は我が身を滅ほろぼすだけだってのが、なんでわからないかねえ……！」

「懲りないのは貴様だ……！」トマトクンは大おお股また走ばしりで一歩目から猛もう加速してＳＩＸに迫せまろうとした。そうはさせじとＳＩＸは──口じゃない。鼻だ。二つの鼻び孔こうから細い二条すじのラヴ★ビームを放った。「Ｆｕｕｕｕｕｕｕｎ……！」「□□ぐう……！」トマトクンは、わざとだろう。よけなかった。肩かただ。ラヴ★ビームがトマトクンの右肩を貫つらぬいた。かまわず突つき進んで大たい剣けんを振るったが、ＳＩＸはこれを二本の脅威大使メナス・グレイブで弾はじいた。いや、弾こうとして押し負けた。ＳＩＸは、だが、のけぞりながらまた鼻ビームを出した。「Ｆｕｕｕｕｕｕｕｕｎ……！」「チイッ……！」今度はトマトクンも横っ跳とびしてかわした。人並み外れてタフなトマトクンでも、何発も食らったらやばい、ということだろう。

「──総員……！」羅叉が日輪を振りかざして叫さけんだ。「今こそ怨おん敵てきＳＩＸを殺とる！　死んでみせい……！」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」

　隊士たちが一いつ斉せいに動きはじめた。ＳＩＸへ。ＳＩＸへ。ＳＩＸへ！

　でも、これでいいのか。

　激情に駆かられるのはわかる。

　だけど、これじゃあ。

「Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈ……」

　ＳＩＸが。まただ。口を開けた。くる。赤い光が。光線だ。迸ほとばしった。

「Ｌａ□ＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」

　笑いながら──ＳＩＸは馬ば鹿か笑わらいしながら、回転した。隊士たちはラヴ★ビームの鞭に薙なぎ払はらわれた。間かん一いつ髪ぱつで身を低くして難を逃れた者も、あっという間に一周して戻もどってきた赤い鞭にバッサリやられた。物の数秒で隊士の数は半減した。羅又。珐瑠。李童晏。それから、カタリ。あとは元ヨハン隊で今は珐瑠隊に所属しているコンラッド・アシャーとか、ユキシ・庚コウとか。ざっと見たかんじだと、そのあたりは無事みたいだし、サフィニアも、ルーシーも、ピンパーネルを手当てしているユリカも大だい丈じよう夫ぶだし、トマトクンはＳＩＸに肉にく薄はくしようとしているけれど──でも、これじゃあ。マリアローズは足を動かそうとした。ぴくりともしない。感覚がない。まったく。「──アジアン！　トマトに加勢して！」「いや──」アジアンはマリアローズを一いち瞥べつして、マリアローズを抱く腕うでに力をこめた。「ボクはキミから離はなれない。二度と後こう悔かいしたくないからネ。もう片時も離れるつもりはないヨ」「だけど……！」

「Ｌａ□ＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」

　またきた。ラヴ★ビーム。今ので何人死んだのか。隊士たちだけじゃない。市民も。累るい々るいたる死し屍しは玩具おもちゃみたいだ。血の匂においさえほとんどしない。こんな戦場は悪夢だ。トマトクンの大剣から逃にげるＳＩＸに羅又が突っこんでいって、軽々と脅威大使メナス・グレイブで退けられた。つづいた李童晏は蹴っ飛ばされてひっくり返った。どいつもこいつも頭に血が上ってしまっている。めちゃくちゃだ。こんなの。ダメだ。戦いになっていない。勝敗よりも──死ぬ。

　このままだと、死ぬ。

みんな、死んでしまう。

「我らの義は……！」

それは、場ば違ちがいな──この混こん沌とんとした状じよう況きようにはまるで似つかわしくない、毅き然ぜん、凜りん然ぜんとした、凍いてつく寸前の瀑ばく布ふのような、ありとあらゆる曖あい味まい模も糊こや邪じや気きをいっぺんに吹ふっ飛ばしてしまう、清せい冽れつすぎる声だった。

誰だれも彼もが声の主を捜さがした。すぐに見つけた。

西だ。

銀色の鎧よろい兜かぶとを身にまとった一団がいる。公園の外だ。でも、あれは──違う。本隊じゃない。アサイラム守備隊だ。装備が汚よごれていない、ぴかぴかだから。それだけじゃない。顔ぶれでそれとわかる。なんで。どうしてアサイラム守備隊が。

なぜ、彼が。

彼は銀の鎧兜を身にまとっていなかった。紺こん色いろの平服姿で、座っていた。戸板のような物の上に、片かた膝ひざを立てて腰こしを下ろし、あくまでもすっと、ぴんと背筋を伸のばして、名めい匠しようダグラス・トゥースの手になる「月げつ明みよう」の柄つか頭がしらに右手をかけ──座っているのに、愛刀を杖つえにして、身体を支えているのか。それでも無茶だ。というより無理だ。マリアローズが知っているかぎりでは、彼はその全身に、いたるところに深刻な損傷を負って──その傷はどれもこれも深々と打ちこまれた杭くいのようで、簡単には抜ぬけない。時間をかけて、ゆっくりと、慎しん重ちような再生治ち療りようを施ほどこしてゆかなければ、彼は歩くどころか、起きあがることさえできない。マリアローズはそう聞いていた。そのはずだった。それなのに、どうして。

どうしてもこうしてもない。彼はここにいる。でも、彼はやはり自分の足で移動することはできないのだ。だから、彼は戸板の上にいる。マシュー・シュナイデル副長以下の隊士たちがその戸板を担かついで、ここまで彼を運んできたのだ。

「我ら秩ちつ序じよの番人の義は……！」

　ああして身体を起こしているだけで精せい一いつ杯ぱいだろうに。それどころか、本来は不可能なはずなのに、彼は堂々と、凜としている。

「ただ悪を討うつのみにあらず……！」

　その面おも差ざしはやつれているものの、どこまでもつめたい覇は気きを漲みなぎらせていて、高い場所からあたりを睥へい睨げいする両眼は徹てつ底ていして冷徹だった。

「身を挺ていして無む辜この者らを守らずして、誰たが為ための義か……！」

　隊士たちが彼の名を呟つぶやき、呼んだ。

　ヨハン。

　ヨハン副長。

　副長だ！　ヨハン副長！　副長が……！　ヨハンっち……！　ヨハン副長が……！

　──って、ヨハンっち……？　あいつか。ぽわぽわ髪がみのコンラッド・アシャーだ。

　羅叉は茫ぼう然ぜん自じ失しつの体ていで立ちつくしていた。「き、貴様……」

「ヨハン……！」琺瑠は今にも泣きだしそうだった。

　トマトクンは苦く笑しようとも微び笑しようともつかない笑えみを浮うかべた。「あいつめ」

「ヨハァァン」ＳＩＸがなぜか一番、誰よりも嬉うれしそうだった。「ヨハァァァァァン・サァァァァァンライズＵＵＵＵ……！」

　ヨハンは平然とＳＩＸの視線を受け止めて、月明の鞘さや頭がしらで戸板を叩たたいた。「羅叉……！　琺瑠……！　頭を冷やして、ただちに君らがなすべきことをなせ……！」

「銀の軍団ザ・シルバリイ！」涙なみだ声ごえ気味ではあったが、琺瑠は素す晴ばらしく切り替かえが早かった。「市民を保護しま

す！　各員防ぼう御ぎょ姿勢で市民を誘ゆう導どうしなさい！　避ひ難なん経路はわたしが指示します……！」

　羅叉は動かなかった。動けなかったのだろう。ヨハンが叱しかりつけた。「羅叉！　何をしている！　君が義の剣けんならば、凶きょう刃じんを打ち払うこともできよう！　そもそも君は同どう胞ほうを守るために剣を手にとったはずだ……！」

「──知ったような口を……！」羅叉は死神の面をかなぐり捨てて踵きびすを返した。

　秩序の番人はＳＩＸの周りから退きはじめた。それとは逆に、ヨハン率いる一隊は公園の中まで押しだしてきた。その後ろから医術士たちが飛びだしてきた。アサイラム・チームだ。先頭はベアトリーチェだった。「負傷者はこちらに！　わたしたちが手当てをします！　息がある人は全員、運んできてください！　急いで……！」

　あれだけぐちゃぐちゃだったのに。どうしようもないくらい、しっちゃかめっちゃかだったのに。カタリや、遅おくれて市場から出てきた隊士たちも、琺瑠や羅叉に従って動いた。秩序の番人が規律を、統制を取り戻もどすと、状況は見る間に整理されていった。市民はとにかく逃げる。秩序の番人はそれを援たすける。なんてわかりやすい。あとは各おの々おのが全力を尽つくせばいい。

　ヨハンは戸板の上からＳＩＸを見すえている。その眼まな差ざしはあくまで冷厳だ。あんな目に遭あわされたのに。今、ヨハンが動くこともできないのは、ＳＩＸのせいなのに。恨うらみ骨こつ髄ずいに徹していてもおかしくない。それなのに、ヨハンはまるで観察しているかのようだ。憎ぞう悪おも怨おん念ねんも超ちょう越えつして、ただ取り除く敵としてＳＩＸを見ている。

　ヨハンはＳＩＸから目を離はなさず、少しも表情を変えずに言った。「頼たのみます、トマト殿どの」

「任せろ」トマトクンはむしろ静かにそう答えてＳＩＸに突つっこんでいった。

　ＳＩＸはヨハンに視線をそそいでいた。おかげで後手に回った。トマトクンが繰くりだす大剣を、ＳＩＸは右手の脅威大使メナス・グレイブで弾はじこうとした。反対に弾かれた。トマトクンは大剣

を素早く引きよせてコンパクトに振ふりおろした。ＳＩＸは左手の脅威大使メナス・グレイブでこれを受けようとした。わずかに遅おそかった。押しこまれて、脅威大使メナス・グレイブは地面に突き刺さった。「──ツウゥッ……！」

　ＳＩＸは左手の脅威大使メナス・グレイブを手放し、右手に持っていた脅威大使メナス・グレイブの柄を両手で握にぎった。そうして反はん撃げきに転じようとしたときにはもう、トマトクンは攻せめかかっていた。

「はあっ！」「だあっ！」「ずえあっ！」「でえあっ！」「があっ！」「ぬうあっ……！」

　上から。右から。左から。また上から。さらに上から。そして左から。トマトクンにしてはめずらしい攻め方だ。どれも全力の斬ざん撃げきじゃない。でも、そのぶんやたらと速い。恐おそろしく鋭するどい。ＳＩＸはその場に釘くぎ付づけになっている。いつもみたいに奇き声せいを発する余よ裕ゆうさえないようだ。気を抜かずに、集中して、ただひたすら脅威大使メナス・グレイブで襲おそいくる大剣を防ぎつづけるしかない。できるのなら。無理だ。できっこない。

　あの猛もう攻こう撃げきは怒ど濤とうだ。ＳＩＸの顔がゆがんでいる。体勢が崩くずれかけて、脅威大使メナス・グレイブが次し第だいに遅れ、乱れる。大剣がＳＩＸの身体を傷つけはじめた。もうすぐだ。トマトクンという名の津つ波なみをなんとか防ぎ支えていたＳＩＸという名の堤てい防ぼうは、間もなく決けつ壊かいする。

　ＳＩＸが笑った。「──カマアアアァアァァァァァァァァン・ベイビィィィィ……！」

　ぜんぜん気づかなかった。

　あんなものが迫せまっていたなんて。

　最初、それは影かげだった。上からきた。ＧＩＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥと鳴きながら、トマトクンめがけて急降下してきたのだ。

　全体的に黒っぽくて、赤、緑、青い部分があって──あれは鳥だ。でかい。やたらと。ギニェス大だい亜あ鳥ちようだ。マリアローズ

は吃驚びつくり仰ぎよう天てんしてアジアンにしがみついてしまった。トマトクンは違ちがった。まったく慌あわてず、騒さわがず、ぜんぶ見み越こしていたかのように、無言で大剣を振りあげた。ギニェス大亜鳥は、その逞たくましい足の爪つめで獲え物ものを捕つかまえるか、引き裂さいてしまおうとしていたのだろう。できなかった。ふれることすら。哀あわれな巨きょ鳥ちようは、甲かん高だかい声で鳴いて真っ二つになり、血の雨を大量に降らせながら地面に落ちた。その瞬しゆん間かん、いや、寸前か──ギニェス大亜鳥の背から何かが跳とびあがった。人か。二人。ＳＩＸモドキか。

　トマトクンは怪かい鳥ちようの返り血を全身に浴びながら大剣を振りおろした。

「むううううううあああああああああああああああああああああああああああ……！」

「──きいいいいいいいいえあああああああああああああああああああああァァッ……！」

　ＳＩＸは脅威大使メナス・グレイブを棒みたいに使って大剣を受け止めた。苦しまぎれだった。大剣の刃はが脅威大使メナス・グレイブの柄えに食いこんだ。一瞬で切断した。

　ＳＩＸは脅威大使メナス・グレイブを捨てて飛び退すさった。それでも大剣をかわしきれなかった。その額から鼻から胸にかけて、ズザザザッ──と一直線に斬きれて鮮せん血けつが噴ふきだした。

　トマトクンは滑すべるような足どりで距きよ離りをつめて追い打ちをかけた。ＳＩＸはこれをずれるように移動する例の技わざでよけた。それがどうしたとばかりに、トマトクンはＳＩＸに迫ろうとした。そこに──トマトクンとＳＩＸの間に、やつらが横から割りこんできた。二人のＳＩＸモドキだ。しかも、二人が縦一列に並んで。その結果、ＳＩＸと二人のＳＩＸモドキが──三人が重なった。「──合体忍にん法ぽうッ！」最さい後こう尾びのＳＩＸが叫さけんだ。「分身の術……！」

　バカ……？

　だって、いくら似ているといっても、ＳＩＸは顔に血で彩さい色しきしたり、傷を負ったりしている。見間違えるはずがないのに、二人のＳＩＸモドキが左右に跳んだ。ＳＩＸは……？

いない。嘘うそ。いや──いる。トマトクンは右に跳んだＳＩＸモドキを無造作に叩っ斬って、その一秒後には左に跳んだＳＩＸモドキを斬り伏ふせていた。

ＳＩＸはその後ろにいた。隠かくれていたのだ。身を低くして。それどころか、這はいつくばうように。まるで首をもたげている大おお蜥蜴とかげみたいな姿勢だった。「──食くらうがいいよ、
サー・ディオロット……！　最大出力ゥッ！　ＬＯＶＥ＆ＳＩＸ様
Ｓのエスペ・シャリィＥ□なＸレ・イテッドＸ
ビィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ムッ……！」

「トマト……！」マリアローズは手を伸のばした。届くわけがなかった。

アジアンがマリアローズを両りよう腕うでで抱だきしめたまま地面に身を投げだした。

空が、世界全体が、揺ゆれて、震ふるえ、引き裂かれて、真っ赤に染まった。

赤が膨ふくらんで、炸さく裂れつしたのだ。

そのあまりに強きよう烈れつな、鮮せん烈れつな赤が目に焼きついて、しばらくの間、他ほかには何も見えなかったし、何も聞こえなかった。

耳鳴りがした。目をつぶって頭を振ったら収まった。マリアローズはアジアンの腕の中から抜ぬけだした。下半身が動かないので、這いだした、といったほうが正しいか。何度もまばたきをした。目を凝こらした。ようやく見えるようになった。

ＳＩＸは低い姿勢からトマトクンに狙ねらいをつけて、斜ななめ上に何たらビームを発射したようだ。おかげで、ＳＩＸの前方の地面が融ゆう解かいして抉えぐられ、煙けむりか水蒸気をあげているくらいで、それ以外に被ひ害がいらしい被害は見あたらなかった。

ただ一人だった。

トマトクンだけがあのビームをまともに浴びた。

それでもトマトクンはそこにいた。立っている。変わらず、とは

いえない。トマトクンは変へん貌ぼうを遂とげていた。鎧よろいだ。背中の部分が盛りあがって頭部を覆おおい隠している。それだけじゃない。炎模様フアイヤーパターンがぼんやりと光っているし、あちこちが出っぱったり尖とがったりして、全体的に猛たけ々だけしい印象を受ける。背や頭に角を生やした角つの竜りゆうという竜がいる。それにどこか似ている。

トマトクンは無事だ。マリアローズは歓かん声せいをあげそうになった。その瞬間、トマトクンは大たい剣けんを地面に突つき刺さした。膝ひざをつきそうになって、大剣で身体からだを支えたのだ。歓声どころか悲鳴を発してしまいそうになった。その前に、トマトクンは地面から大剣を引き抜いた。頭部を覆っている装そう甲こうの口にあたる部分が上下に開いて、そこから蒸気が噴きだした。

ＳＩＸは呻うめいた。「──大量のDi死の上にea立つ者lot……ケダモU-Beノめast……！」

トマトクンは大剣を担かつぐように構えた。ここにいても感じる。鳥とり肌はだ物だ。この威い圧あつ感かん。次の一撃で確実に決めるつもりだ。

ＳＩＸは袋ふくろ小路こうじに追いこまれた鼠ねずみみたいだった。シットとかファックとか悪態をつきながら飛び起きて、超ちよう高速で足あし踏ぶみをしつつ回転した。「──セクスィー忍法奥おう義ぎッッ！　ＳＨＡＤＯＷ！　ＴＯＲＮＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＤＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ……！」

猛もう速度の竜たつ巻まきと化したＳＩＸは、捨て身でトマトクンに突とつ撃げきしていった。

そうするだろうとマリアローズは思い、疑わなかった。愚おろかだった。

やつはＳＩＸなのだ。破れかぶれで、玉ぎよく砕さい覚かく悟ごで、敵に向かってゆく。ありえない。そんなわけがなかった。

ＳＩＸは飛んだ。すごい速度で、目で追うことはできなかった。でも、方向くらいはわかった。トマトクンのほうじゃない。反対だ。方角でいえば、西へ。そっちには──ヨハン・サンライズが。ヨハンは戸板の上に座っている。本当はその姿勢を維い持じしている

だけで一いつ杯ぱい一杯だろう。剣を振ふるって身を守ることなんかできないはずだ。そこから動くことさえも。

　マリアローズは西のほうへと目を向けた。ＳＩＸは。ヨハン。違ちがう。無事だ。ヨハンは。戸板を担いでいる隊士たちも。その周りにいる隊士たちも。そっちか。

　ヨハン以下アサイラム守備隊の少し南西だ。いったんヨハンたちの前に出て、そのあと下がったのではない。ヨハンたちが彼らを庇かばうような位置どりをしたのだろう。

　アサイラム・チームだ。

　ＳＩＸは医術士たちの前に降り立った。ベアトリーチェの真ん前に。

　ベアトリーチェは膝を曲げて腰こしを落としながら、モトロール刀の柄に手をかけようとした。その指が柄にふれることはなかった。ＳＩＸはまたたく間にベアトリーチェの背後に回りこみ、右腕で首を、左腕で腹と両腕を押さえた。「──下がれよ、有う象ぞう無む象ぞう」

　アサイラム・チームの医術士たちが、それから近くにいたアサイラム守備隊の隊士たちが、こけつまろびつＳＩＸとベアトリーチェから離はなれた。

　ベアトリーチェの顔面は蒼そう白はくだ。目が見開かれている以外、表情らしきものはない。

　ＳＩＸは細長い舌で唇くちびるの周りの血を舐なめとって、ベアトリーチェに頬ほおずりした。「一別以来だねえ、ニャンプツシーちゃんキヤツト。あのころは番人だったはずだが、この恰かつ好こう──今は医術士の修しゆ業ぎようでもしてるのかい？　悪くないよ、金髪ブロンちゃんデイー。悪くない。我わが輩はいの記き憶おくじゃあ、お前はあんまりいたぶり甲が斐いのない玩具おもちゃだったが──とはいえ今でもねえ。我輩、はっきり覚えてるよ」

　やめろ。

　マリアローズは腕の力だけで這い進んだ。

「お前を引き裂さいて……！」

　なんて──

「お前の中に押し入ったときの……！」

　なんてことを。

「あの感かん触しよくをねえ……！　お前は初めてだったんだろお、かわい子キュートちゃんパイ……？」

　アジアンにつかまえられた。「ダメだ、マリア！　不用意に動けば、あの子が──」

「うるさい……！」マリアローズは振りほどいて進もうとした。

　すぐにまた抱きすくめられた。

「放して……放してよ！」

「いけない。今は。マリア、とりあえず様子を──」

「とりあえず⁉　何だよ、とりあえずって！　とりあえずなんて、そんな……！」

　わかっている。アジアンは正しい。ＳＩＸは深呼吸をするより簡単にベアトリーチェを殺せる。そういう状じよう況きようだ。それに、どうせマリアローズには何もできない。下半身が麻ま痺ひしているのだ。動くこともままならない。

　できないんだ。

　僕には、何も。

　救いだすことができない。大好きな友だちを。

　友だちとしか呼べないことがもどかしいくらい、大事な人を。

「アジアン」

「え？」

「助けてよ」

　口に出してしまうと、止まらなかった。言葉も、涙なみだも。

「リーチェを、助けて。お願いだから！　頼たのむから、リーチェを……！」

「……マリア……」アジアンはベアトリーチェのほうに目をやって、眉み間けんに深い皺しわを刻み、唇を噛かんだ。でも、それだけだった。

　アジアンは動こうとしない。

　方法がないのだ。

　アジアンでさえ、ベアトリーチェを救えない。だとしたら──

　もう不可能なのか。だから、秩ちつ序じよの番人も、トマトクンすらじっとしているのか。認めたくない。でも、マリアローズの頭はそう判断している。とくに、トマトクンが一歩でも足を踏ふみだせば、ＳＩＸはベアトリーチェを殺す。それか、ベアトリーチェを捕とらえたまま逃にげようとするだろう。これがもし、ヨハンだったらどうか。ヨハンが人ひと質じちにとられていたら──自分のことなどかまわずに、ＳＩＸを討うてとヨハンは言い放つだろう。もちろん、ためらう者もいるかもしれない。でも、トマトクンはきっと──ヨハンを見捨てる。一度はその決断を下したのだから、二度目も同じ結論に達するはずだ。ヨハンは人質にならない。ＳＩＸはわかっていたのだ。それで、ベアトリーチェを選んだ。

　こうなったら、選せん択たく肢しは二つしかない。

　ベアトリーチェを見殺しにしてＳＩＸを討つか。

　あくまでベアトリーチェを救出するか。

　後者は、でも、きわめて困難だ。だとしたら、前者を採とるしかない。理り屈くつではそうなる。頭では理解していても、たやすく割り切れるものじゃない。トマトクンだって知っているのだ。ベアトリーチェがマリアローズの大切な友人だということは、よくわかっている。それに、もう秩序の番人の隊士じゃない。今のベアトリーチェは医術士見習いだ。

　犠ぎ牲せいにするなんて。

　たとえ、最終的には、そうせざるをえないとしても──せざるをえない……？

　他ほかに、手はない？

　本当に？

　嘘うそでしょ……？

「お前はあれから何度、我輩のことを思いだしたんだろうねえ……？」ＳＩＸはいやらしい含ふくみ笑いをした。「それは必ずしも美しい思い出じゃあなかったかもしれない」

　あたりまえだ。

「でも、お前は決して我輩を忘れられやしないだろう？」

　くだらないことを。

「あの出来事をなかったことにはできない」

　そんなこと、ない。そんなことは。

「お前は我輩とともに生きてきたようなものだろう？」

　違ちがう。

「我輩はお前の中にいる」

　違う。

「今までも」

　違う。

「これからも」

　違う。

「ずっと」

　違う。

「お前が生きているかぎり、ずっとねえ」

　違う、違う、違う。

「そういったって過言じゃないだろう……？」

　黙だまらせろ。誰だれか。あの鬼き畜ちくの口を塞ふさげ。喋しゃべらせるな。あんなことを。あんな汚けがらわしいことを。許しちゃいけない。目が眩くらむ。血液が沸ふつ騰とうしそうだ。腸はらわたが煮にえくり返る。脳は破は裂れつ寸前だ。リーチェ。ああ、リーチェ。震ふるえている。どんな気持ちでいるのか。とても想像できない。

　ベアトリーチェは目を閉じた。そうして、ゆっくりと開けた。
「たしかに」

「Ｋｙ□Ｈａｈ」ＳＩＸが卑いやしい笑い声をあげた。

「忘れようとしても、そう簡単に忘れられるものじゃない」ベアトリーチェは一言一言区切るように言った。「わたしは傷つけられた。こっぴどく。それに、奪うばわれた。いろいろなものを。立ちなおれないかもしれない。そんなふうに思ったことも正直ある」

「そうだろうともさ」ＳＩＸはベアトリーチェの頬ほおをちろりと舐なめた。死ね。

　本当に死ね。完全に死ね。死にくされ。

　ベアトリーチェは──でも、びくっとしただけだった。

「だけど、わたしには友がいる。母がいる。先せん輩ぱいがいる。仲間がいる。愛すべき者たちが、敬うべき人たちが、わたしには大勢いる。わたしには歩むべき道がある。悪夢にうなされても、嫌けん悪おに身を引き裂さかれそうになっても、わたしはわたしだ。何も変わらない、とは言わない。時が刻まれれば、自おのずとすべてが変わりゆく。傷つくことも、くじけることも、立ち止まることも、後あと戻もどりすることもある。それでも、わたしはわたしだ。ＳＩＸ」

　ベアトリーチェは横目でＳＩＸを見た。まさか名を呼ばれるとは思っていなかったのかもしれない。ＳＩＸは怯ひるんだように少し顔を引いた。

「お前が憎にくくないわけじゃない。でも、わたしはお前に感謝してもいる。お前はわたしから多くを奪ったつもりでいるだろうな。否定はしない。ただ、そのおかげでえたものも、わたしにはたくさ

んあるんだ。お前に奪われなければ、わたしはそれを手に入れられなかっただろう。お前はわたしを前進させてくれた。ありがとう、ＳＩＸ」

「な──」ＳＩＸは絶句して、右みぎ眼めを見開き、唇くちびるをひん曲げて、左眼を細めて頬を引きつらせ、顎あごを震わせた。

　マリアローズは唐とう突とつに気づいた。違う。ベアトリーチェが。何が違うのか。わからない。でも、違う。もしかしたら、それは徐じよ々じよに進行していたのかもしれない。ベアトリーチェは時間稼ぎをしていたのかもしれない。そして準備は整った。そういうことなのかもしれない。

「はっ──」アジアンが息をのんだ。きっとアジアンはその目でとらえることができたのだ。マリアローズには無理だった。ぜんぜん、さっぱり、まったく見えなかった。

　ベアトリーチェがＳＩＸのすぐ前にいる。

　今の今までＳＩＸに捕つかまえられていたのに、どうして。

　抜ぬけだしたのだ。自力で。目にもとまらぬ速さで。そうして振ふり返りざま、刀を抜き放ったのだろう。ＳＩＸも慌あわてて下がろうとしたのかもしれない。でも、下がりきれなかった。

　ＳＩＸの右みぎ腕うでが、肘ひじのところでバッツリ斬きり飛ばされていた。

　ベアトリーチェはすっと刀を引いて上段の構えをとった。「わたしは守る。それがわたしの歩むべき──わたしが選んだ道だ。でも、戦わずしては守れない命もあるだろう。わたしは強さを求めない。ただ、守るためには誰にも負けられない。決して屈くつするわけにはゆかない。それゆえに、わたしは剣けんをとる。生あるかぎり、一人の救護剣士でありつづける。ＳＩＸ。恨うらみを晴らすためにお前を倒たおそうとは思わない。だけど、お前は騒さわがせ傷つけ奪い殺さずにはいられない男だ。守られるべき命のために、わたしはお前を討うつ」

「き、きれいごとを……！」ＳＩＸは明らかに取り乱していた。見苦しいまでに。

　ベアトリーチェは静せい謐ひつだった。それでいて電光石火だっ

た。踏ふみだした━━次の瞬しゅん間かんにはもう、ＳＩＸの後ろにいた。

「ヒ、ヒイイィィッ……!?」ＳＩＸの左腕が、肘と手首の中間くらいのところでスッパリ切断されている。ＳＩＸは泡あわを食って振り向いた。「━━み、見えねえ……!?　なんでだ……!?　この我わが輩はいが、小こ娘むすめごときに……!?」

　ベアトリーチェはまた上段に構えようとした。その途と端たん、全身が妙みような具合に引きつって、耳の穴や鼻び孔こう、目め頭がしらや唇の端はしから血が流れだした。

「リーチェ……！」マリアローズは叫さけんだ。よくわからない。でも、何か無理をしてるんだ。身体からだに負担がかかりまくるような、とんでもないことを。

「Ｈｅ□Ｈｙａ！　そうか……！」ＳＩＸは満面に笑えみをたたえた。「仕組みはわからないが、ドーピングみたいなものだ！　そりゃそうだよ！　たかが人間がねえ！　いきなりそんなに強くなるわきゃァーないんだ……！　よせよ、お姫さまプリンセシー、あんまり無茶したら、自分がくたばる羽目になっちまうよ……！」

「わたしは死なない」リーチェは微笑ほほえんで刀を高々と持ちあげた。「どんなにぼろぼろになっても、母様がわたしを治してくれる。わかるか、ＳＩＸ。わたしを守ってくれる人がいる。ときにその身を投げだして。だから、わたしも誰かを守るために命いのち懸がけで戦えるんだ」

「わ━━」ＳＩＸは何か言おうとしたのだろうか。



　その声は途切れた。

　やっぱり見えなかった。

　それでも、ベアトリーチェが何をしたのか、結果から見れば明らかだ。

　ＳＩＸは四つになって地面に崩くずれ落ちた。すなわち、右みぎ肩かたから先──右腕の残りと、同じく左腕の残り、それから、上半身と下半身だ。

　ベアトリーチェは超ちよう速度で突進し、すれ違ちがいざまにおそらく三度、刀を振ったのだろう。

　そのまま五メーテルばかり進んで足を止め──膝ひざをついた。

「包囲せよ……！」ヨハンが戸板の上から鋭するどく命じると、アサイラム守備隊がわっとＳＩＸに群がっていった。

「ベアトリーチェ……！」ウィルネム・ジャッター医士ら、何人かの医術士がベアトリーチェに駆かけよっていった。

　ベアトリーチェは手をあげて彼らを制した。大だい丈じよう夫ぶだと言いたいのだろう。でも、平気なわけがないじゃないか。

　マリアローズが何か言う必要はなかった。それより早く、アジアンはマリアローズを抱だいて駆けだしていた。ＳＩＸは隊士たちに囲まれて、まだ生きていた。斬られまくったくらいで死ぬやつじゃない。でも、呆ぼう然ぜんと空を見上げている。そんな様子だった。だから何だっていうんだ。どうでもいい。ＳＩＸのことなんか。あんな腐くされ外げ道どうのことなんか、本当は──本当に、どうだっていいんだ。「──リーチェ……！」

　ベアトリーチェは膝をついたままだった。立てないのか。それでも顔を上げて、手で鼻血やら何やらをぬぐいながら、笑ってみせた。

　アジアンがマリアローズを地面に下ろしてくれた。マリアローズはベアトリーチェのすぐそばで腕立て伏ふせをするような恰かつ好こうになった。できることなら、ベアトリーチェを抱きしめたい。今は自分の身体を支えている、この腕で。できないことが、もどかしくて、つらくて、たまらなかった。

「リーチェ、リーチェ……大丈夫？　リーチェ……」

「ああ。ぼろぼろにならずにすんだ。まだ少し余力がある──と思う」

「もう……！」腹を立てるような資格はない。わかってる。だけ

ど。「もう！　何やってるんだよ！　無茶して！　危ないじゃないか！　大おお怪け我がしたらどうするんだよ……！」

「いつも怪我をしているのはお前のほうじゃないか、マリアローズ。今だって」

「そ、それはそうだけど！」

「わたしは平気だ」ベアトリーチェは手を伸のばしてきて、マリアローズの頰ほおに指先をそっとふれさせた。でも、どこかを見て──マリアローズじゃない、斜ななめ上のほうを、ひょっとしたらアジアンを一いち瞥べつして、手を引いた。「──最後は、何か変だったけどな」

「変……？」

「うん。気のせいかもしれないけど、わたしにはＳＩＸが観念したように見えた」

「観念って──あのＳＩＸが……？」マリアローズは振り返った。

　ＳＩＸを取り囲む隊士たちの列に、トマトクンや羅叉、琺瑠、それからヨハンが、さらにカタリやユリカ、サフィニア、ルーシー、ピンパーネルが加わろうとしている。

　ベアトリーチェがそばにいたジャッター医士に「肩を貸してください」と頼たのんだ。マリアローズはアジアンに抱きあげられた。隊士たちはマリアローズやベアトリーチェを通してくれた。トマトクンたちも当然、同じように道を譲ゆずられた。

　数十の刀を突つきつけられて、ＳＩＸは静かに瞑めい目もくしていた。胸がゆったりと上下している。呼吸は穏おだやかだ。肩口や胴どうの傷口からは、おびただしい量の血液が溢あふれだしているけれど、なんだかすべてが作り物めいて見える。そんな印象も、ＳＩＸが目を開けて、鬼おに火びの宿る双そう眼がんが姿を現せば一変するだろう。予想は覆くつがえされた。

　ＳＩＸは硝子ガラス玉みたいな目を動かして何かを探した。

　間もなく見つけたようだ。

　探し物はトマトクンだったらしい。

「……ディオロット。俺の負けだよ。お前に負けたわけじゃあないけどねえ」

「そうらしいな」トマトクンの鎧よろいは元の形に戻もどっている。少しやつれた顔に、苦い笑みが浮うかんだ。「よくわからんやつだ。なんで最後、黙だまって斬きられた」

「なぜかって……」ＳＩＸは目を伏せて溜ため息いきをついた。「お前に言ったところで理解できないだろうさ」

「そうか」

「とにかく、俺の負けだよ。完敗だ。でもねえ。みじめな敗残者として、一つ言っておかなきゃならないことがある」

　隊士たちがざわめいた。羅叉あたりも殺気立っている。彼らにしてみれば、これ以上、ＳＩＸの声なんか聞きたくないだろう。今すぐにでも息の根を止めたい。気持ちはわかる。そんな爆ばく発はつ寸前の彼らを抑おさえたのは、戸板の上からＳＩＸを見下ろしているヨハン・サンライズだった。ヨハンがすっと左手をあげただけで、羅叉以下、秩ちつ序じよの番人は静まった。

　トマトクンは微かすかに首を傾かたむけた。「何だ」

「俺は死ねない」ＳＩＸは自じ嘲ちようするように唇くちびるをゆがめた。「──違うんだよ、ディオロット。俺はねえ。死なないんじゃない。死ねないんだ。じつを言うとさ。俺は何度も死のうとしたんだよ。でも、死ねなかった。たとえ灰になってもね。そりゃあだいぶ時間はかかったけど、俺は必ず再生した。正直、俺にもわからないんだよ。俺ってやつが、いったい何なのか。殺せるものなら、殺してほしい。嘘うそじゃないよ。信じないだろうが、俺は本気でそう思ってるのさ。だけど、おそらく無理だよ。あるものを完全に消し去るってのはねえ。意外と難しい。これから俺を使って実際に試ためしてくれてもかまわないけどね。たぶん時間の無む駄だだよ。そこで一つ、提案がある」



epilogue

“freakshow”

　ジェノシドが振ふりまいた狂きよう騒そうは第五区、第九区を中心に広がり、高まって、老ろう若にやく男なん女によを問わず大勢を巻きこんだ。

　欲よく望ぼうの犠ぎ牲せいになる被ひ害がい者がいた。その場に居あわせたせいで命を落とす不運な者がいた。漁夫の利をえようとする卑ひ劣れつ漢がいた。雰ふん囲い気きに酔よって暴れる痴しれ者ものがいた。復ふく讐しゆう者がいた。団結して身を守る者たちがいた。義を掲かかげて狼ろう藉ぜき者ものを蹴け散ちらす者たちがいた。鉄てつ鎖さの憩いこい場の市場は、最終的に全面積の三分の一ほどが焼け野原となった。すべてが落ちつくべきところに落ちつくには、それ相応の時間がかかった。

　ようやく肩かたの荷が下りて、しばらくは何もしたくなかった。最初はそう思っていたのだけれど、二日もすると黙っていられなくなって、身体からだを動かしはじめた。すぐに庭では飽あきたらなくなって、外に出た。

　とくにあてはなかった。気がつくと、その場所へと足が向いていた。

　エルデンの中心から東門めがけて延びているマーベラス・グッダー・ストリートと環かん状じよう通どおりの広い、広い、交差点だ。

　マーベラス・グッダー・ストリートにしても、環状通にしても、かなり交通量が多いので、人が、あるいは騎き馬ばが、大小の馬車が、ひっきりなしに行き交かっている。それでもなお、ゆとりがあった。かつては。今はそうでもない。

　第十二区から環状通を南下してきたマリアローズは、マーベラス・グッダー・ストリートに足を踏ふみ入れたところで立ち止まった。

　交差点の中央に人だかりができている。彼らが何に群がっているのか、ここからは見えない。でも、マリアローズは知っている。その設置に、マリアローズも立ち会った。それ以来だ。今日まで一度も様子を見にこなかった。気になっていなかったわけじゃない。ただ、何か違ちがう。そんなふうに思っていた。だって、さらし者にして、物笑いの種にして——それで、どうなるっていうんだよ。べつに可お笑かしくなんかない。笑えない。気が晴れるわけでもない。

　群衆は、だけれど、そうでもないのか。彼らは歓かん声せいをあげ、手を叩たたいて、足を踏み鳴らし、跳はねまわったり踊おどったりして、大いに盛りあがっている。楽しんでいるのだ。

　醜みにくい。

　それが正直な感想だった。気持ち悪い。醜しゆう悪あくだ。あの中に加わるなんて、冗じよう談だんじゃない。絶対にいやだ。近寄りたくもない。

　マリアローズはただでさえ目ま深ぶかに被かぶっているフードをさらに引き下ろした。

　踵きびすを返そうとしたけれど、足が動かなくて唇を噛かんだ。

　目をそらしても、直視しても、不快感からは逃のがれられない。これが結果なんだ。

「……受け止めなきゃいけないんだよね。みんな、そうしてるんだから。僕だって」

　少し前から気づいていた。後ろに誰だれかいる。誰か？　そうじゃない。あいつだ。わかるよ。それくらい。

「きみは結局、仲間に相談したの？　それとも、最後まで勝手に──自分一人だけの判断で行動してたの？」

　答えが返ってくるまで、いくらか間があった。「……多数決をネ。採ったんだヨ。秩ちつ序じよの番人に頭を下げて、協力を申し出る案は反対多数で却きやつ下かされた。その代わり、ボクが個人的に動くぶんにはかまわない──というか、黙もく認にんする。そういうことになったのサ」

「ちゃんと話しあったんだ」

「キミに叱しかられたからネ」

「秩序の番人とは仲よくしておいたほうがいいんじゃない。いろいろめんどくさいし」

「新総長の姿勢次し第だいかな。ボクらはべつに争いたいわけじゃない」

「そうだよね。喧けん嘩かなんかしたって、いいことないし──」マリアローズは振り向いた。

　アジアンは二メーテルくらい離はなれた場所に立っていた。

　その気になれば、誰の助けも借りずに、それどころか、百の妨ぼう害がいをやすやすと薙なぎ払はらって、どれほど険しい山の頂にも一人きりで立ちつくしていられるだろう。

　それでいて、不安定で、儚はかなくて、こんなにも心こころ許もとない。

　つい手を差しのべたくなる。

　でも、できない。そんなことは。しちゃいけない。

「どうして」マリアローズは目を伏ふせた。「──どうしてＳＩＸは、あんなことを自分から望んだのかな」

「さあ……」アジアンは溜ため息いきをついた。「わからないネ。いっそ、訊きいてみるかい？」

　マリアローズは首を横に振った。「……や、いいよ。なんていうか、まだ冷静に話せそうにないしさ。そういう状じよう況きようでもないし──」

「一つだけ言えることがあるとしたら」アジアンの声はそこで途と切ぎれた。

　マリアローズはアジアンを見た。アジアンは人だかりに視線を向けていた。

「もし何か知りたければ──」アジアンはほんの少しだけ目を細めた。「問い質ただすことができる。答えがもたらされるかどうかはともかくとして、ネ。それだけは間ま違ちがいないヨ」

　マリアローズはうなずいた。うなずく以外にできることはなかった。「うん」

「その道を、あの男は自ら選んだんだ。歩きつづけるしかないサ。死ねない男の考えることなんて、ボクには想像もつかないけどネ。それすらも、ひょっとしたらこの先、あの男の口から語られる機会

があるのかもしれない」

　途中からアジアンの口調が奇き妙みような熱を帯びはじめたことに、マリアローズは気づいていた。

　ある道を歩きだした男の話をしながら、アジアンもどこかへ行こうとしている。

　引きとめないといけない。早く。

　今すぐに。

　そうしないと、遠くへ行ってしまう。

「ねえ」

「え……？」アジアンはマリアローズに向きなおった。きょとんとしている。こっちだって同じだ。びっくりしている。声をかけたものの、どうすればいいのか。

「ごはんでも、食べに行かない？」

「え」

「あ。う、嘘うそ。い、今のなし」

「え⁉」

「か、かーえろっと」

「え……⁉」

「な、何だよ」

「えーっ……⁉」

「だから、何なんだよ！　そんなに多種多様な『え』を使い分ける生物なんて見たことないし、かなりきもいんだけど！　どっか行っちゃってほしいんだけど！　あ━や、その……どっか行っちゃうことはないけど……」

「い、行かないヨ⁉　行くわけないじゃないか⁉　どこにも！」

「あっそ。じゃ、じゃあ、ここにいれば？　ずっと。永遠に。ね。うん。そうすればいいと思うよ。世のため人のため僕のために」

「行くヨ！　行こうヨ！　ごはんだろう⁉　さあ、行こう！　すぐ行こう！」

「行かないってば！　ごはんなんて！　そんなにおなか、すいてな──」そこまで言ったところで、腹の虫が物の見事に裏切った。ぐうううううう。てゆうか、おなかって、こんなに鳴るもの？　こんなに大きい音、初めて聞いたんだけど？　ありえなくない？　めちゃくちゃ恥はずかしいんだけど？　顔とか熱くて熱すぎるんですけど……？

　マリアローズは両手で顔を覆おおった。

　その右手首を、そっと握にぎる手があった。

「行こう」

　アジアンはマリアローズの手を引いた。決して強ごう引いんじゃない。きっと少しあらがうだけで、たやすく振りほどくことができる。それなのに、できない。違ちがう。しないんだ。

　マリアローズは足を前へと踏ふみだした。

　この道の先に何が待ち受けているのか。そんなことは知らない。わからない。

　そもそも、何もない。そうなのかもしれない。

　彼は彼のためにあつらえられた牢ろう獄ごくの中にいる。

　この牢は狭せまい。彼は大の字になって横たわっている。それで一杯一杯だ。高さも一メーテルほどしかない。広くても意味がないのだ。彼は両手の甲こう、あわせて十本の手指、それから両りよう肘ひじ、両りよう肩かた、腹部、両りよう脚あしの付け根、両りよう膝ひざ、左右の足首に杭くいを打ちこまれ、それ以外にも合計十七の枷かせを嵌はめられている。文字どおり、指一本動かせない。

今やこの牢獄の中だけが彼の世界だ。小さな、小さな世界に、彼は閉じこめられている。

違う。彼が自分自身で決めたことだ。彼が提案して、ディオロットらがそれをのんだ。敗北の果てに、小さな、小さな世界を手に入れるという、小さな勝利。違う。そんなことは考えていない。考えたこともない。考える余よ裕ゆうはない。思ってたより、こいつはきついねえ。

牢獄は鋼鉄の板いた床どこと、同じく鋼鉄の鉄てつ格ごう子しで出来ている。鉄格子の隙すき間まは三サンチくらいだ。ギャラリーたちは牢獄に近づくことができる。さわることさえできる。牢獄の上に乗ることだってできる。彼めがけて液体塗と料りようをぶちまけるくらいならかわいいものだ。小便を引っかける者、糞くそを垂れる者まで、たまにいる。鉄格子の隙間に剣けんだの槍やりだのを差し入れて、彼を傷つける者もいる。当然、嘲ちよう笑しよう、罵ば声せいのたぐいは絶え間なく降りそそぐ。

覚かく悟ごはしていたが、ここまでとは思わなかった。そんなことはない。すべて想定内だ。ただ、この精神はもっと頑がん強きようだと信じていた。余人の想像を絶するだろう苦く杯はいを嘗なめてきた彼だ。どんなことにも耐たえられる。そのつもりだった。勘かん違ちがいだった。こいつは、きついよ。

痛みなんてたいしたことはない。腹は立たない。怒いかりなんて覚えない。

ひたすら悲しい。

そう、悲しいのさ。せつなくて、やりきれない。やるせない。

なんでこんな気分になるのか。それがわからない。わからなくて、ひりひりする。

どうせ誰だれも教えてやくれないんだろう。そう思うたびに、叫さけびたくなる。叫んだって、何にもならない。だって、俺は叫んできたのさ。ずっと叫びつづけてきた。何を？　さあねえ。わからない。とにかく俺は叫んでた。いつだって、わけもわからず叫んでた。いくら叫んでも無む駄だだった。無駄だったんだ。今だって同じさ。無駄なんだろうさ。

だから、俺はこんなにも悲しい。そうなのか……？

俺は死ねない。食わなくても、飲まなくても、死ねない。粉々になっても、死ねない。干ひからびても、死ねない。塵ちりになっても、死ねない。だとしたら、ずっと悲しいままなのか。

日が落ちて、夜がくる。初めのうちは──あれから何日経たったのかなんて覚えちゃいないが、とにかく最初のころは、朝も昼も夜もなく、引きも切らずギャラリーが訪おとずれた。でも、次し第だい次し第だいに──周りに誰もいない、そんな時間帯がぽつぽつできるようになってきた。

牢獄の上に、何者かが跳とびのった。

そいつは杖つえのようなものを鉄格子の隙間に突つき入れ、それで彼の顔面を嬲なぶった。彼は目をつぶっていたのだ。眠ねむっていたわけではないが、目を開けて挨あい拶さつをした。「──やあ……リチャード……ご機き嫌げんはいかがかな」

エルデンの──いや、αアルフア大陸のファッション業界で傑けつ出しゆつした人物といっても過言ではないだろう。リチャード・〝ディック〟・コックは人体改造フェチで、肌はだはラベンダー色だし、髪かみの毛は蛍けい光こうグリーンで、目はホットピンクだ。生まれたときは男で、のちに女になり、また男になって──今はどちらとも言いがたい。その思考形態は複ふく雑ざつ怪かい奇きで、思想は交こう錯さくしてよじれているし、操あやつる言語は独創的すぎて崩ほう壊かい寸前だ。「ＳＩＸ。ユー・マシンファッカー。ガンガンジー・アートレイジ・バカメンチョ・ハイデンメーン？」

「そう……怒おこるなよ……リチャード……」

「ガバガバ・チキンコック・ユーサック・ビチビチコマーン」

「そうかい……さよなら……リチャード……元気で暮らせ……」

「ファックユー」

リチャードは去った。悲しいねえ、と彼は呟つぶやいた。

その三日後か──四日後だった。静かな、静かな牢獄に、ゆっくりと、足音を忍しのばせてそっと、ひっそりと息をひそめて近づいて

くる者があった。

　そいつは牢獄の前にしゃがんで、鉄格子をつかんだ。

「お父さん」と呼ばれて彼は目を開けた。

　もうこのごろは、ほとんど目をつぶっているのだ。彼は何も見たくなかったし、聞きたくなかったが、耳を塞ふさぐことはできない。だから、せめて瞼まぶたを閉とざしていた。

「……ルーシー……か」

「どうして……ですか、お父さん。なんで……」ルーシーはうつむいて、頭を、肩を、指を震ふるわせた。「……教えてください。どうして、お父さんは……ぼくはお父さんに似てなくて、何の役にも立たなかったはずなのに……お父さんは、ぼくやお母さんのことが……嫌きらいだったんでしょう？　それなのに、なんで……」

「ああ……」

　泣いている。泣いているのかい、ルーシー。何を泣くことがあるんだ。なぜ泣くんだ。泣くって、何だ。泣く。わからないな。忘れちまったよ。そんなことは。おそらく、もう千年。それ以上。泣いてないからね。

「どうして、ぼくらのところにきたんですか。何度も、何度も。なんで……」

　ハドリエラ。あれはいい女だった。俺はあの女の全身に口づけした。あの女は俺の身体からだ中に唇くちびるを押しつけた。そんな女は山ほどいた。でも、あれはいい女だったよ。たまに会いたくなった。理由。そんなことは考えなかった。会いたいなら、会いに行けばいい。

　でも、もう死んじまったんだな。

　わかってたさ。どうせ死ぬ。みんな死ぬ。

「……ハドリエラは……なんで……死んだんだい……？」

「病気で」ルーシーは洟はなを啜すすった。「……ぼくたちアシェローンは—だいたい、三分の一くらいの確率で、病気になるんで

す。灰はい死し病びようといって……発病したら、絶対に助からない。お母さんは、嬉うれしいって。お父さんに会えて、だから、ぼくを授さずかって……ぼくに会うことができて、嬉しいって。ぜんぶお父さんのおかげだって。お父さんは強い人だから、その血を引いているぼくは……きっと、三分の二だって。病気にはならないだろうって。ぼくに、生きろって。愛してるって。ぼくのことを。それに、たぶん……お父さんのことを。愛してるって、繰くり返して、そうして……死にました」

「……三分の……一……」

　あの女は知っていたのか。自分の運命を。少なくとも、覚かく悟ごはしていただろう。

「……だからか……ああ……だから……」

　激しい女だった。見かけよりずっと。女は惜おしげもなくすべてを彼に捧ささげた。それでいて、何も捨てない女だった。捨て去るものなど何もないのだろうと彼は思っていた。持たざる者なのだと。たしかにそのとおりだったのだ。その命すら残り少なかった。

　悲しい女だった。どうせ死ぬ。人生は長くない。諦あきらめていたのか。

　俺は死ねない。それなのに、悲しい。

　なんで俺は悲しいのか。

「ルーシー……お前は、きっと……三分の二だよ……」

「そんなこと……！」ルーシーは鉄格子を殴なぐりつけた。「今さら、そんなことを言って！　それで……それで……！」

　言葉を失ったルーシーは、立ちあがってどこかへ行ってしまった。

　彼はルーシーを呼び止めたかった。理由。そんなものは知らない。いずれにしても、できなかった。もう二度とくるんじゃないよ。ここにきちゃいけない。彼はそう思った。理由。そんなものは知らない。

　悲しみってやつは、どこからきて、どこへ行くのだろう。

　彼は考えない。思っただけだ。繰り返し思った。

　また静かな夜がやってきた。

「ひどいな」女の声だった。

　彼は目を開けた。右目しか見えない。左目はいつだったか、ギャラリーのたわいない悪戯いたずらで潰つぶされた。鉄か何かの棒のようなものが突つき刺さったままで、うまく再生されない。女はその棒を引き抜ぬいて、そのへんに捨てた。

　なんできたんだ。彼はそう言おうとした。言えなかった。どうして言えなかったのか。理由。そんなものは知らない。

　女は医術士服でも鎧でもない、暗色の衣い装しようを身につけて、モトロール刀を佩はいていた。くすんだ金きん髪ぱつが月明かりに映はえている。初めて見たときはなんてこともない餓が鬼きだったが、今はそうじゃない。いい女だ。少なくとも、いい女になろうとしている。欲よく望ぼうの機能が十分に働いていれば、むしゃぶりつきたくなるかもしれない。彼には無理だ。

　女は深い青の瞳ひとみで彼を見下ろしていた。「お前に一つ訊ききたい」

　彼はうなずいた。うなずいたつもりだが、そうなっているのかどうか。彼の意図はとりあえず女に通じたようだ。

「なぜ観念した」

「……勝てないと……思ったからだよ……手向かっても……もう無む駄だだと……ね……」

「それだけか」

「……ああ……」

「そうか」

「違ちがう」

　自分が何を言おうとしているのか。彼にはわからなかった。

「何か……何かが……見えた……気がしたんだよ……何かが……それは……俺をねえ……打ちのめした……あなたの中に……俺は、それを……俺は……」

　俺は――目をつぶる。とても正視できない。あなたの姿を。あなた。

　何が、あなた、だ。お笑い種ぐさだ。

「ＳＩＸ」とあなたが俺の名を呼ぶ。

　虚きょ勢せいと虚きょ飾しょくと虚栄に塗まみれた俺の名を。

「わたしはお前を許さないだろう」

「……当然だよ……」

「お前はここで、ずっと一人だぞ」

「一人……か……Ｋｕ□ｋｕ……一人……ねえ……そうかも……しれないな……一人……だったんだよ……俺は……ずっとねえ……」

「それは違う」

　あなたに何がわかるんだ。

「お前にも必ず機会があったはずだ」

　なかったよ。なかった。俺には――

　粉ふん骨こつ砕さい身しんして仕えてくれた二人のジェイは死んだし、まるで友のようだったリチャードも去った。妻たちは壊こわすか殺したし、女たちは捨てた。子供たちは使い捨てにした。ハドリエラは逝いってしまい、ルーシーは帰ってこないだろう。

「お前はその機会を生かさなかった。一人だったんじゃない。お前は一人でいたんだ」

　そうだ。そのとおりだ。

「人は人を求めないかぎり、ずっと一人でいるしかない」

　そうか。

俺があなたの中に見た、もの──

求めていたものを、俺は見つけた。

でも、すべては遅おそすぎる。あまりにも。手て遅おくれだ。

「……俺の」

変だな。

声が震ふるえている。

「俺の、名を……」

何だろう。これは。この感覚は。

「……呼んでくれないか……俺の名を……本当の、名を……」

右目を開けた。

見えない。どうしてだ。何も見えない。液体のようなもので、曇くもって。

「シブヤ・イチル……それが……俺の……名前なんだよ……本当の……」

「わたしはお前を許さないだろう」

そう言い残して、あなたは行ってしまう。見えないが、俺にはそれがわかる。ああ、そうだろうな、と俺は思う。何しろ、何もかもが遅すぎる。俺はあまりにもたくさん殺してきた。生きるために。食うために。そのうち、息をするように。あたりまえのように。みんなそうなればいい。同じように。そうすればわかるだろう。俺の気持ちが。俺を理解するだろう。誰だれも彼もが。しょうがなかったんだ。こうするしかなかった。悔くいたってどうしようもない。取り返しがつかない。こんな世界で、俺は。俺は。俺は──

「シブヤ・イチル」

あなたの声は遠かった。それでも、聞こえた。

はっきりと。

「死ねないのなら、生きるしかない。許されなくても、生きるしかない。お前はもうどこにも行けないだろう。それがお前の選んだ道なら、せめて踏ふみとどまれ、シブヤ・イチル」

　始まりのころ、あなたに出会いたかったよ。

　そうすれば、俺はあなたに恋こいをして、あなたを愛して、あなたのためにすべてを捨てて、もしかしたらまっとうに生きて、死ぬことすらできたかもしれない。

　叶かなわぬことだ。

　悲しみの意味を知って、彼は泣いた。

appendix

“his quest”



-M.T.D. “The Depth of depth”-

天てん井じょうも壁かべも床ゆかもきわめて滑なめらかだ。岩がん盤ばんを掘くつ削さくして磨みがき抜ぬいた通路が縦じゅう横おう無む尽じんに入り組んでいる。まるで迷めい宮きゅうのようだ。いや、完全に迷宮だ。暗くはない。ある場所では天井に、またある場所では壁に、あるいは床に、直線で構成された紋もん様ようのような溝みぞが彫ほられていて、そこに管状の照明が埋うめこまれている。エルデンのアンダーグラウンドＤ13下層ダーナムレーンに火管シユ・ダという照明設備があるが、あれよりも数段精せい巧こうだ。かつてこれとまったく同じ物をオークリッド首長国の古寺院で目にしたことがある。上古エンシエントの門ポータル。密林に埋もれた有史以前の寺院の地下に、その古い装置はあった。苦く心しん惨さん憺たんして作動させると、そこはラハン大陸のエナド砂上宮、地底王墓の中だった。

　その後、亡国の王子リハードを落ち延びさせる計画にひょんなことから荷か担たんして、α大陸へと帰き還かんした。王子は取り巻きどもの反対を押しきり、出家して僧そう侶りょになる道を選んだ。初めてここに足を踏み入れたのはあのときだった。

　聖大地Mother T母神emple's寺院領 Dominion。

　下界から隔かく絶ぜつされたあまねく聖職者たちの聖地。

　だが、その聖職者たちさえ、一部の高こう僧そうをのぞけば、聖山の支配者が人ならざるものだということを知らない。

　Ｍ．Ｔ．Ｄ．総主レインドゥラス・ヴィシュクラトーは、かつて人であり、竜りゅうと化して不死をえた唯ゆい一いつの人竜だ。この深奥ザ・デプス・聖堂オブ・デプスという名の迷宮は、人竜の隠かくれ家がなのだ。

「主様マスター」と従者が後ろから声をかけてきた。

　彼は足を止めずに答えた。「何だ」

「一度しかいらっしゃっていないのに、なぜ道がおわかりになるのですか」

「くだらんことを」彼は頬ほおをゆがめた。「この足でたどった道は決して忘れん。己おれには一度で十分だ」

「申し訳ありません」

　二人は極限まで声をひそめている。それでいて、よく響ひびく。

　彼は鼻を鳴らした。「臆おくしたか、クローディア」

　強ごう情じような従者は返事をしなかった。彼は足をゆるめて従者の手をとった。従者は彼の手を握にぎりかえしてきた。二人は足音を忍しのばせて歩いた。彼にとってこの迷宮は二度目だ。一度目は人竜の栖すみかに入りこんでしまったが、ここには他ほかにも何かある。当時も彼の勘かんがそう告げていたし、ありとあらゆる遺い跡せきや古城、秘境を探たん索さくしてきた彼の経験が、彼をこの場所へと導いた。

　彼は人竜と口をきいた。おそらくＭ．Ｔ．Ｄ．の高僧以外では稀まれな例だろう。人竜は圧あつ倒とう的な存在で、彼は逃とう亡ぼうの隙すきをうかがうために、持てる知識と知ち恵えを総動員して口八丁ぶりを発揮してみせたのだが、その会話の中で高こう慢まんな人竜は、先の大戦で散った同どう胞ほうの竜どもを悼いたみ、定じよう命みようの人間を憐あわれんでみせた。先の大戦と間ま違ちがいなく人竜は言った。彼が先の大戦について知ったのはそれが最初だった。

　彼は世界中で古文書を漁あさったが、その大戦とやらに関する記き載さいは一つも見つからなかった。人間を瞬しゆん時じに移動させる上古の門も、無記Ｎ述のＤ遺物Ｒだった。そうした事物が世界には多数あることを彼は突つき止めた。また、約九百年前──サンランド無統治王国成立以前の文ぶん献けんは、その大半がエルデンの王立中央文書館に集められていることを、ほぼ確かく認にんした。

　歴史が改変されているのではないかと彼は疑っていた。

　彼には知りたいことがあった。真相を知りたかった。

　そのためには、どうしてもここを訪おとずれなければならなかった。構造的にも人竜が棲すんでいるだけにしては広すぎる。彼は確信していた。ここには必ず何か手がかりがあるはずだ。

　元王子のリハードは聖堂デプス内を自由に動きまわることのできる高僧となっていた。その協力をえて、彼は長らく機会をうかがっていた。ついに実行に移したのだ。

記き憶おくしている人竜の栖を避さけて、奥へ。さらに奥へ。人竜の栖を通らなければ最さい奥おう部へと行きつくことができない可能性が懸け念ねんされた。杞き憂ゆうだったのかもしれない。彼は足を止めて壁に指を這はわせた。「見ろ、クローディア」

従者は金色とも銀色ともつかない髪かみの毛を揺ゆらして身を屈かがめ、壁に顔を近づけた。「主様マスター。これは」

彼は壁に浅く浅く刻まれている文字らしきものの羅ら列れつを、人差し指と中指の先でゆっくりとなぞった。「読めるか」

従者は微かすかに首を横に振ふった。「上古ハイロ高位語メオンではありません」

「そうだ。これは現存しているどの種類の上古ハイロ高位語メオンとも異なっている。だが、己おれは同じものを、かつて中央文書館の秘蔵庫で目にしたことがあるのだ」

「秘蔵庫には入れないはずでは」

「忍びこんだ。叩たたきだされたがな。まあ、存外、たいしたものはなかった。書物は一点のみだったな。己おれには読めなかったが、何ページか丸々記憶した。クローディア」彼は従者を抱だきよせて、その頭に口づけをした。従者が身を硬かたくするのがわかった。己おれらしくもない。彼は昂こう揚ようしていた。「──これは上古ハイロ高位語メオンではないが、共通点がないわけでもない。己おれが思うに、これは上古ハイロ高位語メオンの元となった太古の文字だ。さすがに文意までは理解できんが、この部分はわかる。いいか、クローディア、これだ」

彼は四つの文字と小さな記号、さらに二つの文字がつづいてまた記号、そして二つの文字が並んでいる箇か所しょを指さした。「これは数字だ。おそらくは──１９１４、０６、２８だろう。こっちは１９１９、０６、２８だ。そっちは、１９３９、０９、０１。これは２００１、０９、１１。２００３、０３、１９。２０３６、０４、２０。２０５２、１０、０９……」

従者は彼を振り仰あおいだ。「……日付ですか？」

「そうだ。己おれの推測ではな」

彼は声を殺して笑った。見よ。壁かべだけではない。床ゆかに

も。そして、天てん井じょうにも。この通路はどこに繋つながっているのか。彼にもわからないが、とにかくここから先の床、壁、天井には、びっしりと文字が刻まれているのだ。

「これは歴史だ。現在はオーメネイジ８９９年。１９１４年、２００１年、２０５２年。そんなものは存在しない。それでは未来か。違ちがうな。かつてあったのだ。１９１４年も、２００１年も、２０５２年も。失われた──消された歴史が、ここには残されている。己おれはついにそれを見つけたのだ、クローディア」

『薔薇のマリア13．罪と悪よ悲しみに沈め』了

あとがき

　笑ってくださってかまいませんが、僕は自分の小説が大好きです。自分の好きなお話を書いているので、当然のことではあります。ただ、何度となく読みなおす本もあれば、必要がなければ手にとらない本もあります。書いてある内容よりも、書いたときの思い出が蘇よみがえってきて、それがたまらないのです。

　本書は後者です。初めて締しめ切きりを破ってしまいました。申し訳なく、また、恥はずかしく思っています。このようなことは二度とないようにしたいものです。あくまで願望です。保証はできませんというよりしません。

　ここから先は今まで以上に大変なので、頭の中をちゃんと整理しながら、丁てい寧ねいに進めてゆきたいと思っています。夏あたりにお届けする予定の十四巻で、だいたいの準備が整うような気が、今のところはしていますし、そうなるようにがんばってみるつもりです。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、たくさんの感謝と愛をこめつつ、筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

13．罪つみと悪あくよ悲かなしみに沈しずめ

十じゆう文もん字じ　青あお



平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　13．罪と悪よ悲しみに沈め』
平成22年4月1日初版発行

平成22年7月25日再版発行


BOOK☆WALKER